

奇譚クラブ

1953.11



新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

II

定價 百円



縛られた女ばかりの十六態

華
美
アルバム

美 縛 し き 縛 し め

美濃村 晃・構成 塚本鉄三・撮映

頒価 一冊 五百円 (送料六十円)

(内容)

工 實 枷 手 打 虫 寶 吊 物 念 白 緋 綾 台 目
足 高 手 小 腰 芋 蠟 燭 車 の 賢 と の 牲 牲 字 雁 猿 ぐ っ ち わ
床 観 紅 荒 目 猿 雁 猿 ぐ っ ち わ

【全部未発表の特写】

四人のモデルを駆使した縛られた女の集大成、優美さと緊縛感の秀れた代表的責め写真、痺れるような妖しい雰囲気は素晴らしい反響を呼んで瞬く間に限定部数を突破、ここに同好者の為に増刷分の分譲を致します。

(各葉説明入 美術コロタイプ印刷 豪華アルバム)

堺市菅原通四ノ三〇

賣切れぬうちに

曙 書 房

お早く!

代理部へ
(振替大阪第三四九五六番)

本誌に三回に亘り連載した“クリスチーナの受難”キドロドシュトツク・著 吾妻新・訳

全 譯 ク リ ス チ ー ナ

サディズム文学の最高傑作の全訳成る

再版出来!

定価 三二〇円

送料 四〇円

B6判 二二六頁 上製函入
ボール表紙 挿絵 十五葉入

可憐なる美女クリスチーナに対する緊縛と狼ぐつは汚辱と鞭打と凌辱の地獄図絵サディズムの粹をつくしたクリスチーナの全訳、画壇の一方の雄某氏のアブノーマル挿絵と相俟つてここに完全なるサディズム文学の金字塔が打ち建てられた。

本誌愛読者に大好評を拍したクリスチーナの全訳を是非御一読下さるようおすすめいたします。代理部へお申込み下されば早速厳重荷造りの上急送申し上げます。

申込所

曙書房代理部

豪華な責めの色刷画帖が極めて安価に皆様のお手元へ届きます



画帖 時代物責繪卷

従来本誌に寄せられました多数愛読者の要望をとりいれまして時代物の責の画家として定評のある三条春彦氏に委嘱いたしました。ここに八枚の極彩色の責繪巻の完成を見ました。何れも同好者の垂涎おくあたわざる傑作揃いであり、広く本誌読者の愛好の方々に頒布いたします。故何卒一本を御求め下さるよう、お待ちいたします。

凄艶!

○装針

縦六寸横八寸五分

横トチ豪華美本

内 容

三 條 春 彦・画

○各葉説明明文句入り○
○絶対市販は致しません○

- 一、山法師と静御前
- 二、女スリと岡引き
- 三、淀吉と千姫
- 四、犬公方と侍女
- 五、八百屋お七の最後
- 六、新撰組と芸妓
- 七、十郎左エ門と腰元
- 八、小紫と悪旗本連

五百部限定版・限定番号入

特価 三百円

(送料五十円)

極彩色美術オフセット
多色印刷特アート使用
繪の大きさB6版
画帖の大きさB5版

◆碁盤責め◆

キヤビネ版
三枚一組 三百円

◇ビニールの女◇

キヤビネ版
三枚一組 三百円

◆溪流の飛魚◆

キヤビネ版
三枚一組 三百円

灸責の三態
キヤビネ版
三枚一組 三百円
(共)

◎鞭打ち三態◎

キヤビネ判
三枚一組 三百円

川端多奈子嬢
悦虐姿態集

典型的マゾ女性多奈子嬢の好みに従つて強烈きわまりない縛りを敢行して得た貴重なる悦虐姿態集
手札型七枚一組 三百円

制服の女学生

キヤビネ判
三枚一組 三百円

野外全裸の縛り

キヤビネ判
三枚一組 三百円

灼熱の夏の陽の下にびちくとはねる白魚の如き肢態にからみつく縄、野外的傑作中より選り出した快心の作品揃い!

〔急襲〕連続十五枚続き

手札判十五枚一組 五百円

本号口絵の女が縛られるまでの六枚に更に九枚追加して十五枚一組とした女が縛られて完全に自由を奪われるに至るまでの過程を活写した興味溢れる傑作、どこよりも安い価格、鮮明にして恰も自ら手を下す如し。

申込所

大阪府堺区区内菅原通4ノ30

曙書房代理部
振替大阪34956番

分譲

断然卓絶した特写

群を抜く素晴しき傑作

類例のない犠牲的安価

◆女体悦虐寫真集◆

◎緊縛美写真集◎
光沢面焼付 手札型
印画紙焼付
五枚一組(二集分) 二百円
第六篇(五十一―六十一)十集
第七篇(六十一―七十)十集
第八篇(七十一―八十)十集
第九篇(八十一―九十)十集
(本誌九月号口絵参照)
新篇(本号口絵参照)
第十篇(九十一―百) 十集
懇々分譲開始!

大好評! 他に類のない本誌独特の素晴らしい写真集を是非お求め下さい。すべて直接印画紙に焼付けたもので印刷ではありません。今度新しい作品を多数発表いたしますが今後毎月新作を発表の予定です。従来絶讃を拍した信用の歴史を以つて鳴る本誌代理部へ是非お申込み下さい、必ずお気に召す逸品を急送申し上げます。

襲われる女 シリーズ十二態集
十二枚一組

手札型 五百円(送共)

此れは暴漢に襲われる美少女の恐怖の姿態を縄を用いて幻想的に表現して極度の緊縛感を誇張した得難い珍しい作品です。

絶讃! 未見の方は是非

吊り三態特選集 (キヤビネ判)

第一組・第二組・第三組 分譲中

新版第四組分譲開始!

トリックでない本当の吊し責めの姿態必ずや皆様を魅了し尽すでしょう。
各組(キヤビネ)三枚一組五百円(共)

絢爛豪華な口絵集

色刷オフセット 天然色写真 砂にまみれて	塚本鉄三・撮映
図解・棒と柱を用いた縛り方	滝田子・画
絵物語 拷問部屋	行田和子・作画
組写真 溪流に縛られて	辻村隆・構成
風俗画報 私刑五態	杉原虹児 組写真 女が縛られるまで
フォト・セクション	(男性被縛写真、女の切腹、男性ヌード)
瀧麗子画集	〔蛇男の幻想〕
緊縛美のオンパレード	(五) 縛られた女の五十態
アブノーマル・フェアリ	三島俊夫 (56)
白へのノスタルジャ	河村哲夫 (38)
自虐鬼の独白	河真田子路 (28)
倒錯艶書	三富浩生 (34)
縄に憑かれて	時山加代子 (43)

あぶ・まにやの手記

蜘蛛と蝶々

不運なニューフェイス
責めの作家と誤られて 松井香代子 (57)

中共引揚者の記録(二)

虐待の記録 前島芳雄 (66)

女の足の魅力

マソヒスト 金丸壯吉 (70)

木鼠吉五郎の半生

拷問の好きな男 緑猛比古 (74)

責め場の舞台装置法(二)

淫 (みだらび) 伊藤晴雨 (82)

火 (第十一回)

或る被虐性愛者の手記より(三) 松井籟子 (86)

兩棲動物 (男色夜話)

天泥盛栄 岡真史郎 (100)

★呪い 縛く★

西田琴江傷害致死事件調書より 辻村隆 (106)

サテイ小説 感情教育

栗原伸 吾妻新 (112)

現代文藝に現れた責め

村田誠一 富田陽夫 (124)

悦虐の旅役者

青山三枝吉 都築峰子・画 (112)

まぞひすと・さじすと

富田陽夫 寒川緑沢 (130)

甘美なるアリスの降伏

鬼山絢策 方金三・画 (140)

らぶ・すれいぶ (第11回)

女腹切八景 美姫情史 亀岡絃七郎 (154)

あるマソヒストの手帖 (六)

沼正三 司会者 辻村隆 (160)

女を縛った経験を語る

読者座談會 吾妻新 (165)

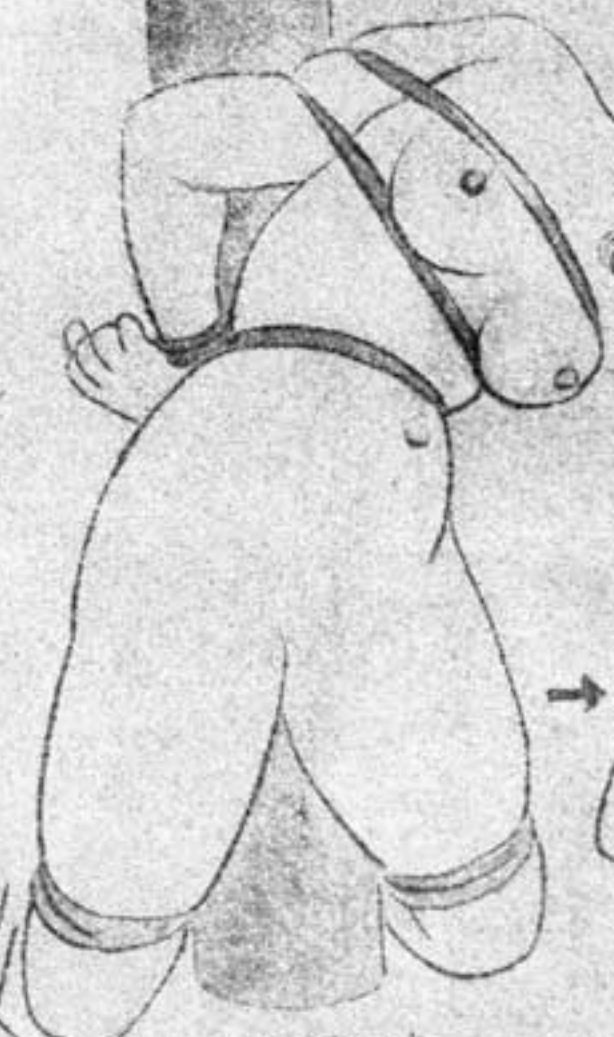
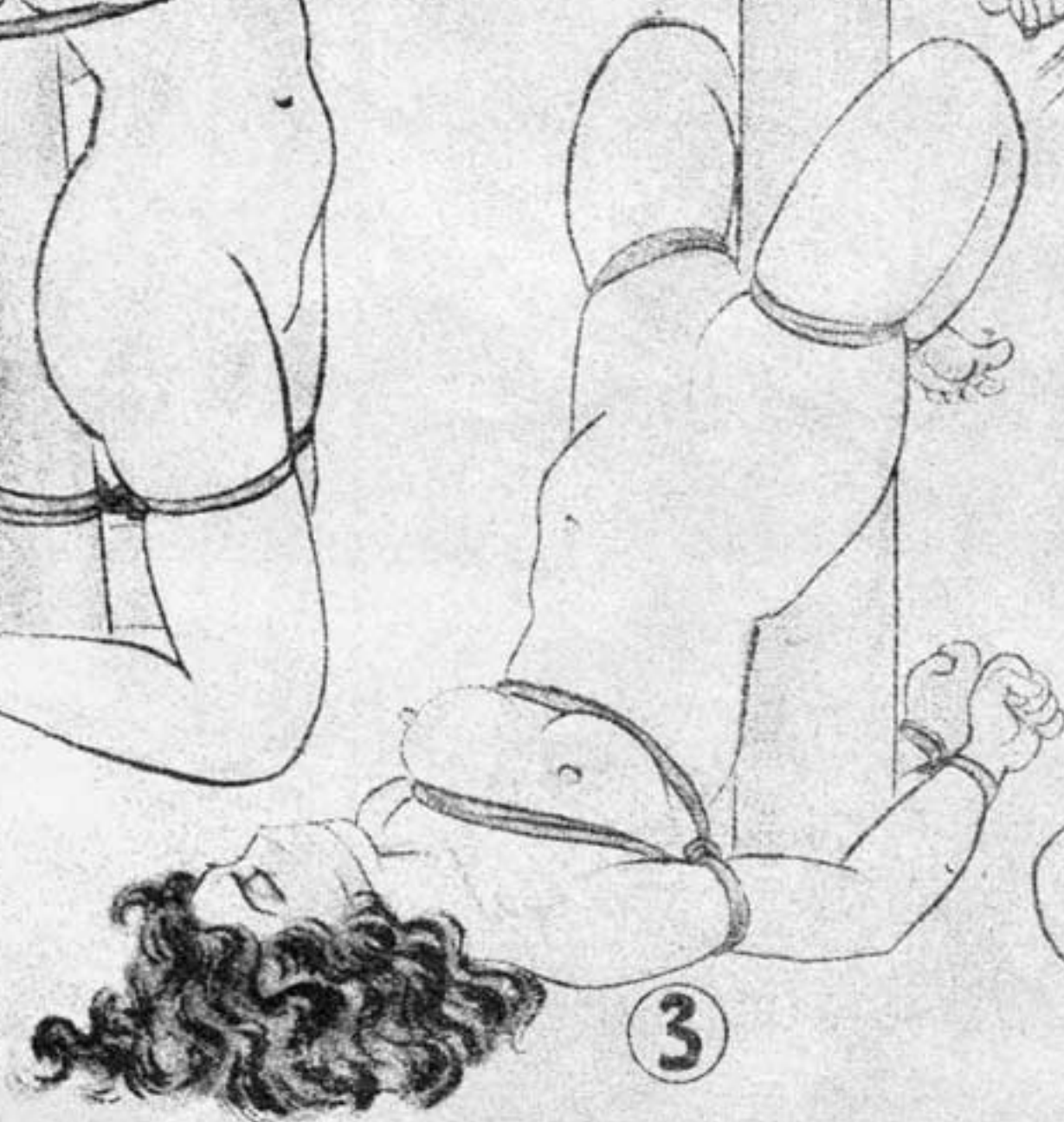
女のズボン (最後の回答)

沼正三氏に 吾妻新 (150)

歡義先生性愛相談欄

歡義先生性愛相談欄 (98)

① 柱と棒を用いた縛り方 瀧 麗子



股から柱にかかる縄は圓の形に
前側から型に
縛りつける

棒は圓の形にX型に組
腕と足を先札に
からませる

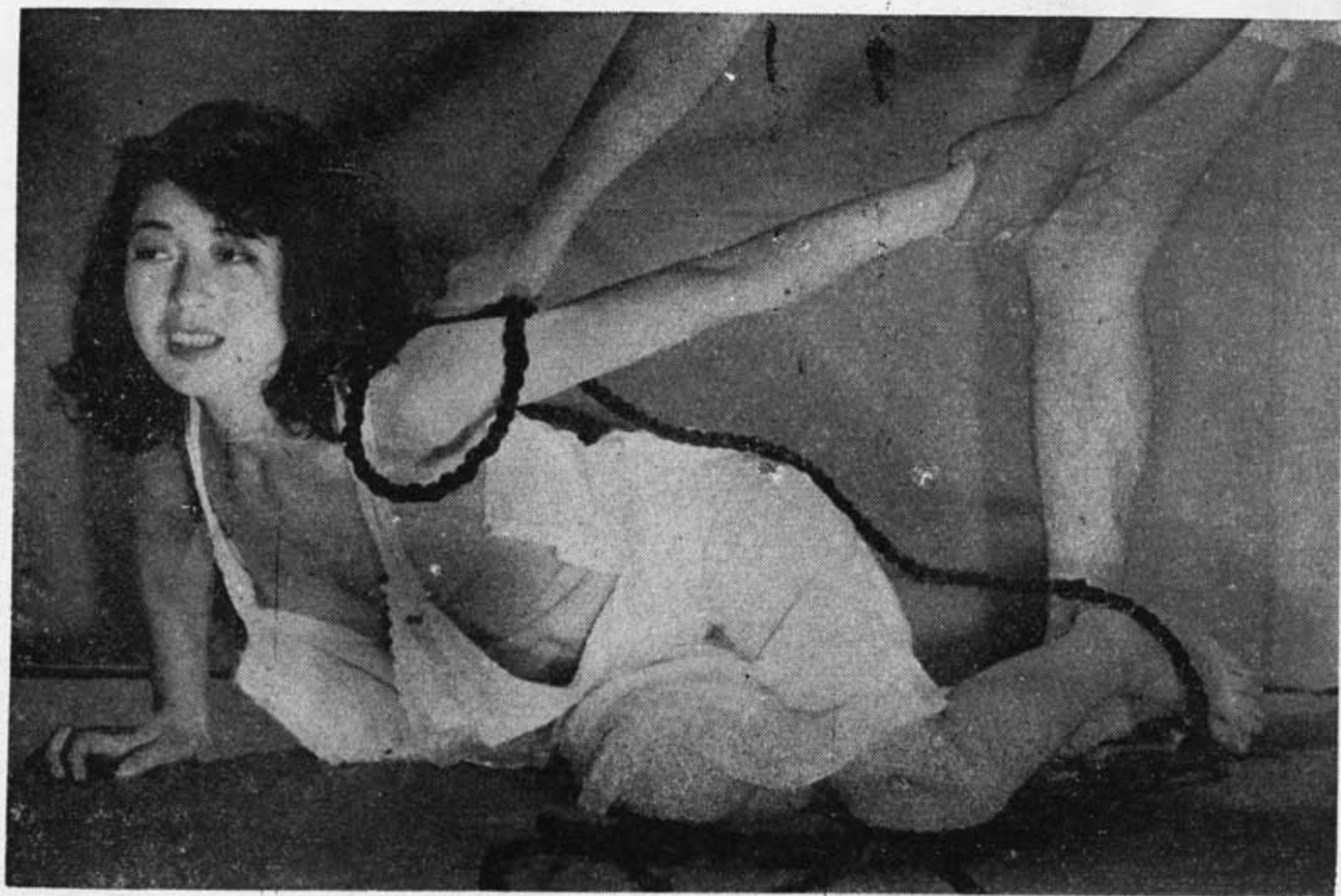
ももの縄は圓の形に後方柱にかけ
もものを開かせる形にする
これは③と同じ形である



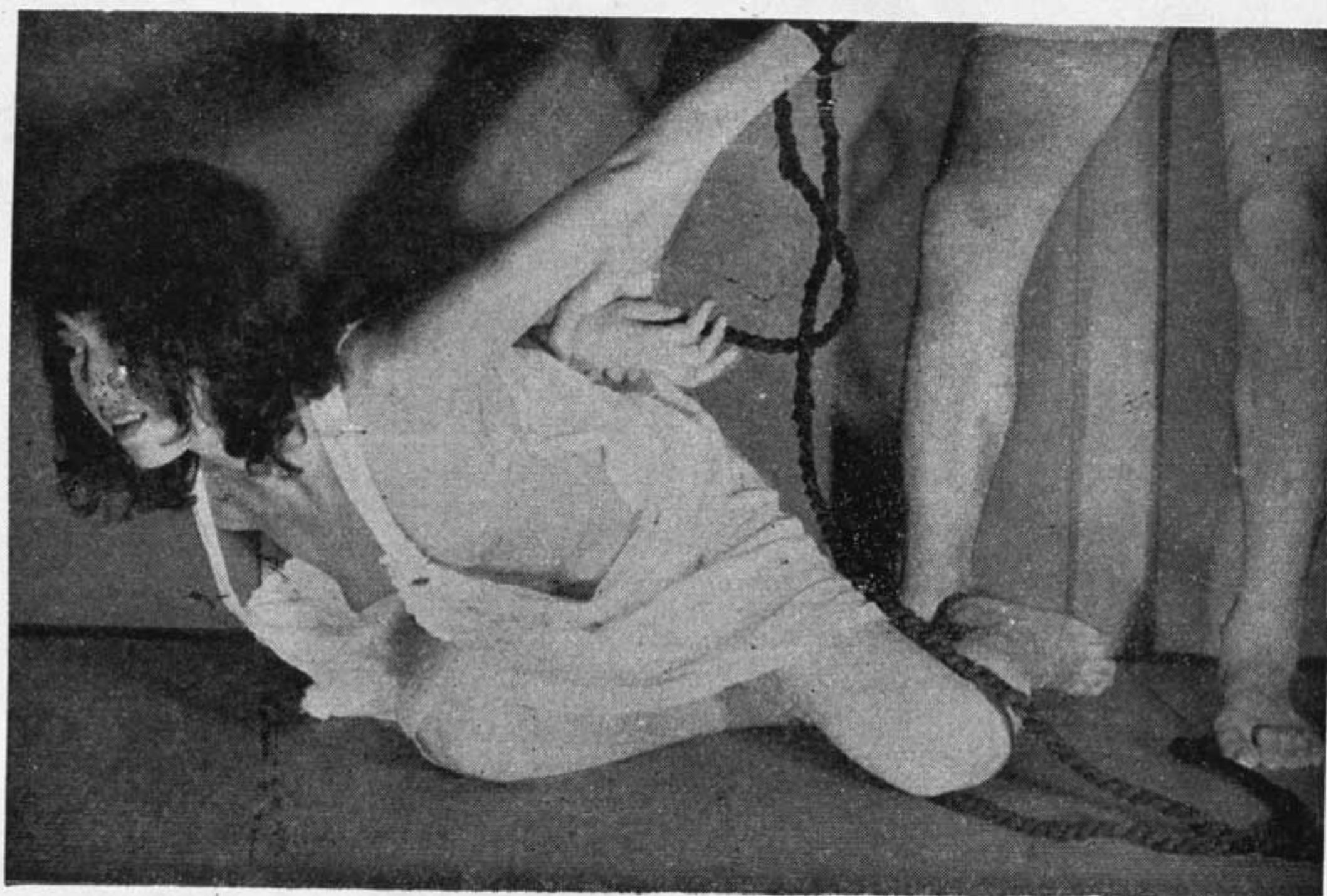
(組 写 真)

女が縛られるまで

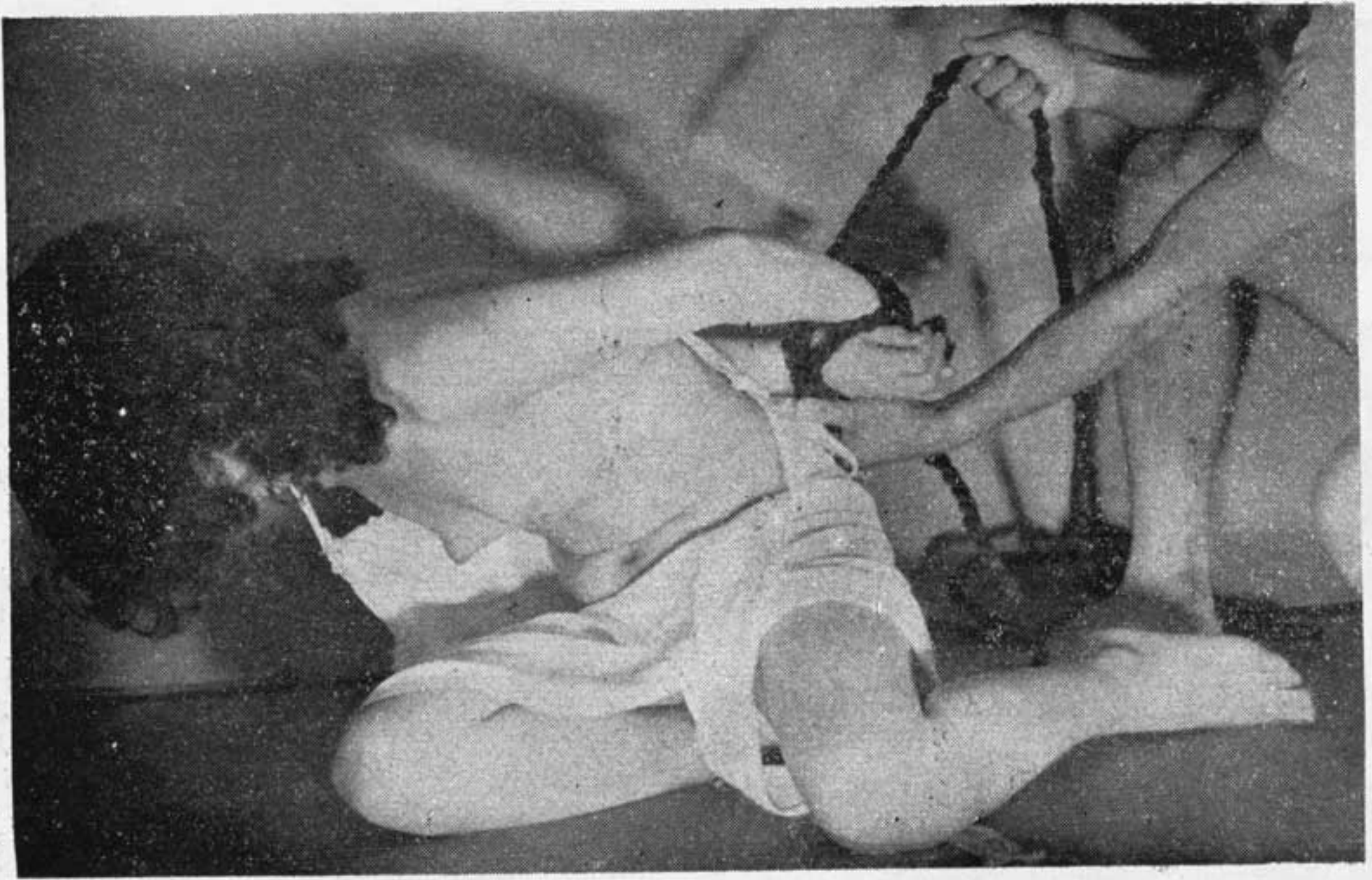
辻村 隆・構成



左手首を握つてねじ上げるとシユミーズのホックがはずれた。



左手首へ縄を巻いて、もがく右手も捕える



両手首をうしろで交叉して縛りつける。もがくので左肩のシユミーズの肩紐がはずれる。

首縄をかけてぐつと締め上げる。上体はうしろへそりかえり、手首は上へ上へ上る。



胸へ二巻き縄を廻して後手でとめ、右手で髪を握つてあお
向かせて布片を口へ詰め込む

猿ぐつわをかませると、これで後手の女の縛りが出来上る



十五枚一組の「強襲」と題した組写真はこゝに所載の
六枚の写真の外に、九枚の未発表の分を加えて連続的な
縛りを説明した写真集を別紙広告に発表の通り、印画紙
に焼付けて代理部に於て分譲中です。

部屋問答

行田和子・作 • 都築峯子・画

(一)

そこは八畳ほどもあろうかと思われるジメ／＼した倉のような部屋で、私のからだはその真中の太い柱に後手に縛りつけられて、口には何か油臭いにおいのする布で猿轡がはめられていました。意識を取り戻したばかりの私には、何故こんなひどい目に逢う理由があるのか直ぐには判らなかつたのですが、やがて自分の前にニタ／＼と笑いを含んで酒を飲んでゐるのが、二十数年前罪を犯して獄に入つたあの安本重造の横しまな復讐に燃える姿であると判つた時の驚きはどうかあつたでしょう。

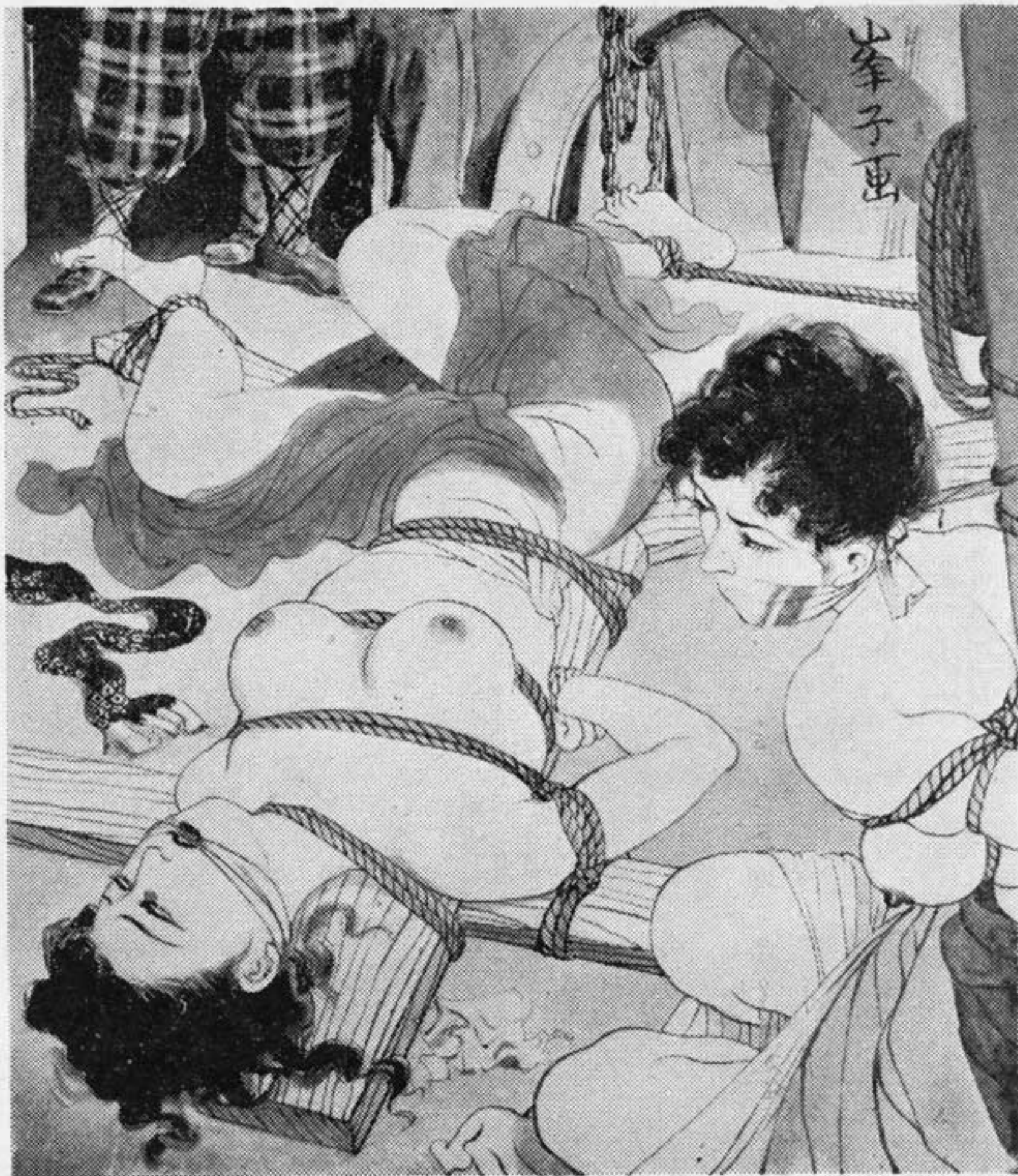
「フフフツ、今夜のことを楽しみに、俺ア、今日まで生きて来たんだぜ、俺ア今日まで……」

重造は酒臭い息を私の顔に吐きかけながら黄色い歯莖を見せていやらしく笑いました。

「お母さま——ツ」

消えいるような悲鳴が聞えたので、私はハツとして、重造の肩越しに見えるドアに眼を向けました。そして二、三人の男

山峯子画



に突つき廻されながら転がり込んで来た喬子の姿を見た時、思わずくらくと眼まいがして気が遠くなる程の驚きに打たれて息をのみました。

(二)

あゝ、なんとした事でしよう喬子は前を掩う布さえ許されず必死に前かがみに

なつて部屋の中へ突き出されると、太股を合せて冷たい床の上にうずくまつてしまいました。両手はむごたらしく後に捻じ上げられて、荒縄が蛇のように乳房や二の腕に喰い込んでゐるのです。声をのんで羞恥と恐怖に泣きぬれる喬子の姿を眼のあたりに見た時、母の私にはどれ程



辛い責苦であつたでしょう。若い娘盛りの喬子の死ぬ程の羞しさがよく判るのです。

私達のそんな苦悩をよそに、やがて木製の大きな拷問椅子が運び込まれて来て喬子のものがき廻る両足は左右に開かれて椅子に縛りつけられてしまつたのです。

「源、水を持つて来い」子分に持つて来させた水を、重造は喬子の口から無理矢理に飲ませるのです。私が堪えかねて眼を開くと真正面に喬子

の椅子に縛られた姿が、苦悶と羞恥に身動き出来ぬ身体を波うたせているのが見えました。

(三)

私はそつと眼を開いて喬子を見ました。喬子は拷問椅子に腰掛けさせられた姿のまゝ、乳房がセイセイと苦し気に息づいて、全身の筋肉が時々ピクピクと反射的に動くのでした水を無理矢理飲まされた為か、なだらかな腹部の曲線は常とは違つて異様にブツクリと盛り上り、全身は雨に濡れ

たように濡れていました。喬子は尿意を催して来たのです。いやという程水を飲まされ、冷たい地下室で裸体にされているのですから無理もありません最初のうちは腰をもじくさせたり、足の指先に力を入れなどしてこらえていたのでしょうかけれど私の眼にもその排泄の苦痛をこらえ

る様子が判る時分は、もうこれ以上辛抱出来ない程の限界に達したのでしよう。

「……お、お願い、御不浄に行かせて、ああ……」

喬子は恥しさも忘れて現在の敵に向つて蚊の鳴くような声で哀願しました。



「え、なんでえ、なんでえ、足の裏
がかゆいのかい、え？」
知っていないならわざと、とぼけた
男の一人が喬子の足の裏を擦るので
す。

「あーッ、アア……ッ」

喬子は縛られた身体を引き締めて
懸命に生理的な苦痛と戦いました。

然しそれも時間の問題でしかありま
せんでした。限界一杯に達した生理
現象は、男達の好奇の眼の前に進り
ました。喬子は消えいる程の恥しさに
差し俯向き泣いていました。

(四)

それから一時間程の間、廻りもの
にされた後、喬子はどこかへ連れて



行かれ、意識を失った私が気の付いた時は、さつきとは違った畳を敷いた部屋に転されていました。
「お母さまッ、お母さま、しつかりしてちょうだい」
どうしているだろうと心配していた末娘の君子の声なのです。私はハツと眼を開き疲れ切ったからだを起

山手子画

しました、その時、襖を開けて重造がニヤ／＼笑いながら近づいて来ました。
「君ちゃんとか云ったなア、エヘヘ大人しく俺の云うことを聞きさえすりや、何もひでえこたあしねえよ、その代り、若し、云った通りにしなきゃ、こうするんだ、いゝか、よく

見ときな」
こう云うと、私の着物の双肌をグイグイと引き脱がせて持っていた煙草の火を胸といわず、背中といわず顔といわず無茶苦茶に押しつけるのです
「ううッ……ムムッ、ヒーツ」
突き刺すような熱さに思わず呻き

声を洩らす私の姿を見て、君子は転げるように私にすがりついて来ました。

(五)

重造はゆらりと立ち上つて君子に近づいて来ました。

「アッ、いや、いやッ」

重造はもかく君子を畳の上に俯伏せに押え込むと、膝で君子の背中を押しつけながら、見守る私の前でゆつくりと、しかも素肌に細引きが喰い込む程、ひし／＼と縛り上げるのです。あゝ、何という無惨な姿でしょう、胸に三巻きも廻された縄は恐らく一本の小指も差し込めぬかと思ふばかりに膚に喰い入つて乳房は大きく細引きの間から盛り上つていたのでした。

(六)

キリ／＼と滑車が鳴り、太いロープが重造の手元に引かれて君子の縛られた後手の縄と結び合されてしまいました。必死に裸身を前にかぶめる君子の悲しい努力も何の効果もありません。一寸、二寸とロープは引かれて吊り上げられてゆくのでした
「アッ！ あーッ……」

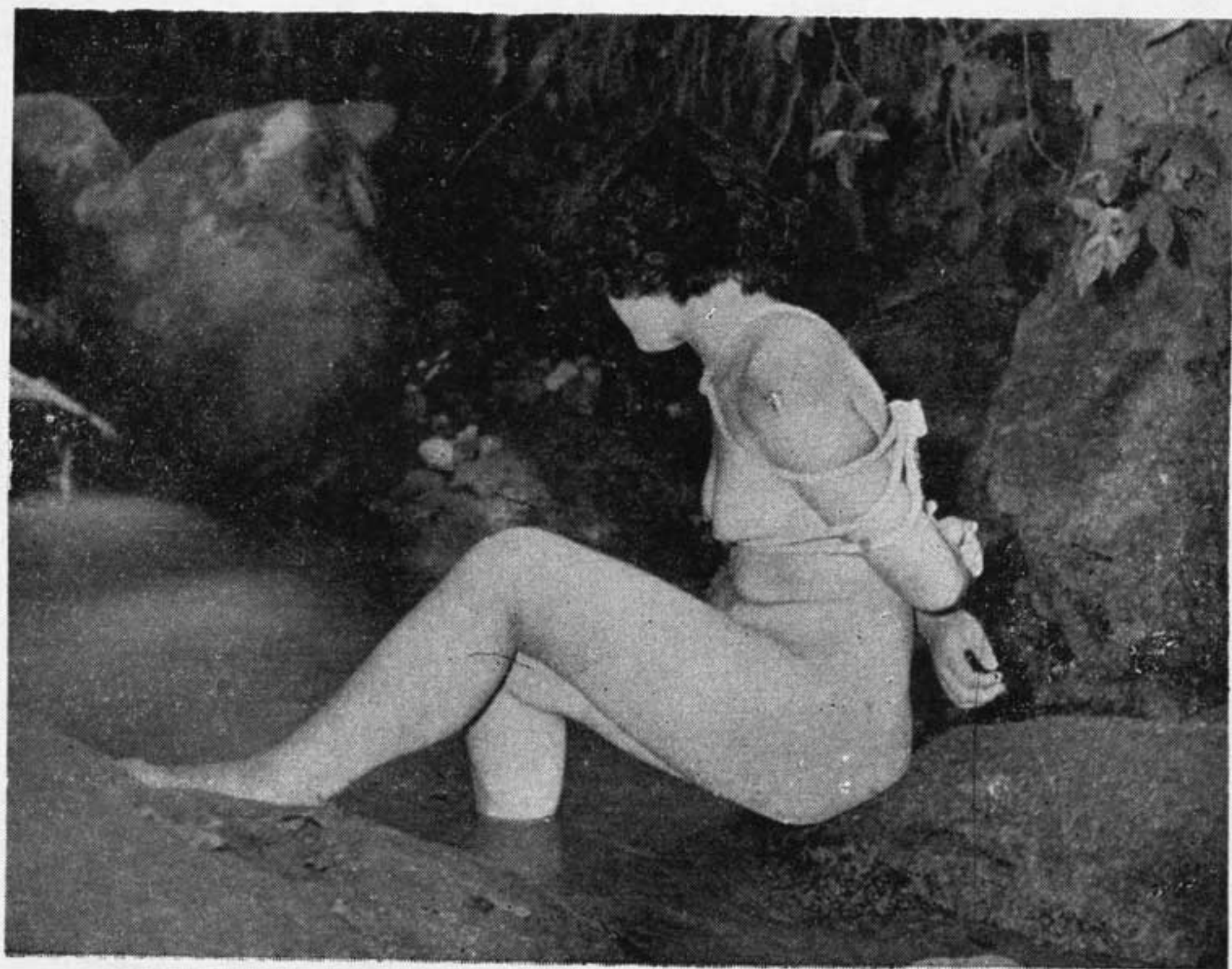
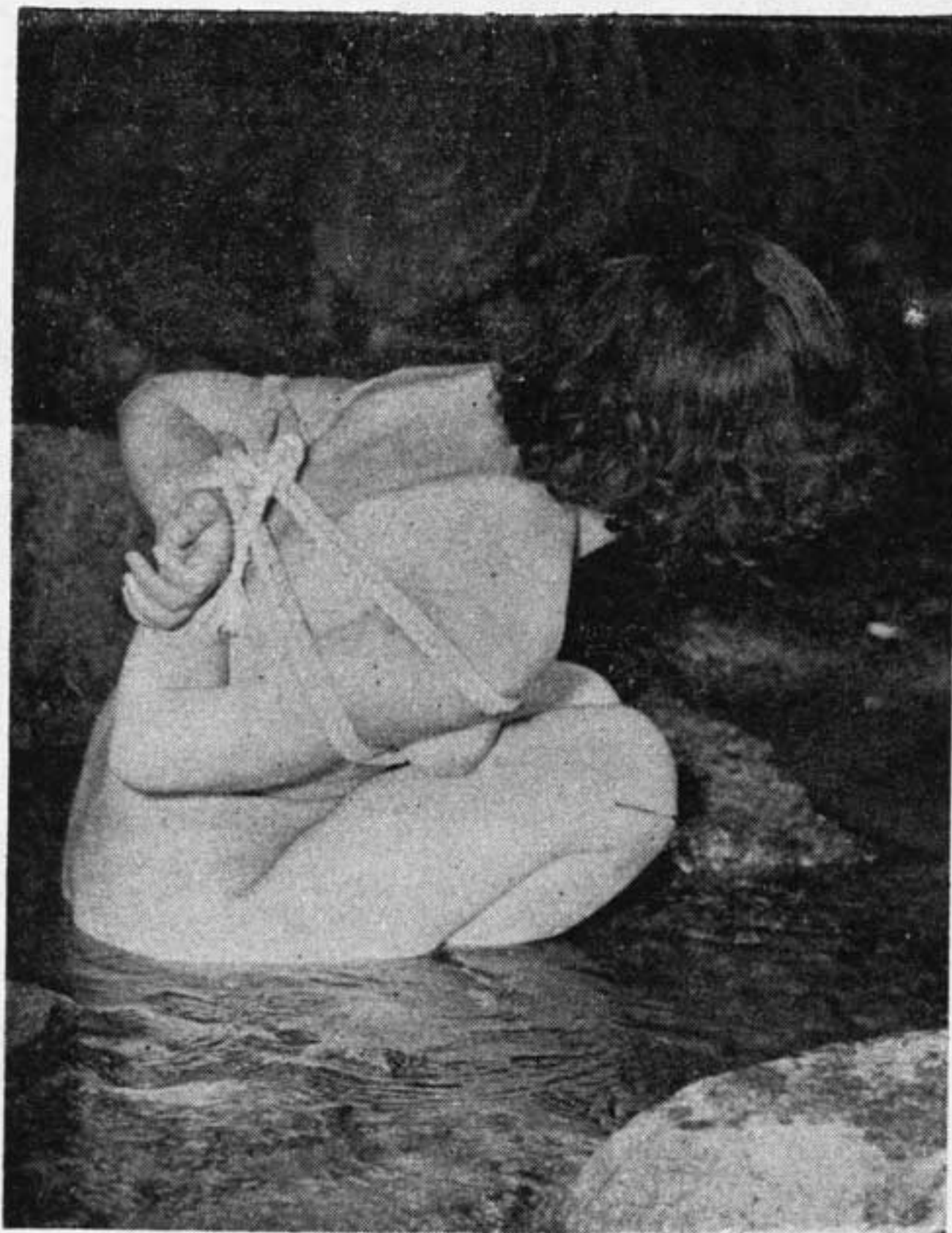
背後に廻された腕のちぎれるような痛みに君子は悲鳴を上げて、縮めていた脚を伸ばして畳に足をつけ少しでも身体の重みを助けようとした。(KK通信連載地獄絵より)

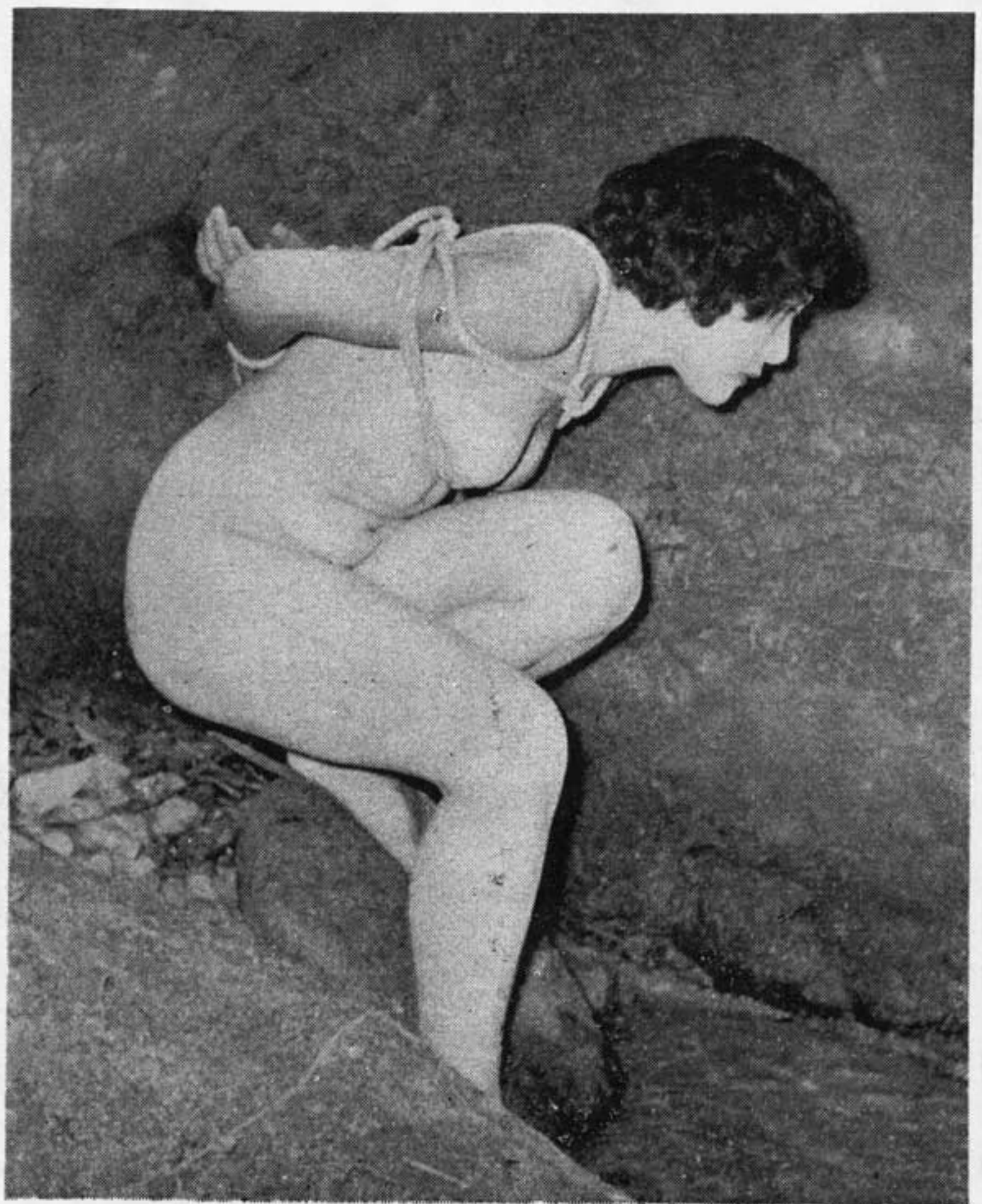


溪流に縛られて

塚本鉄三・撮映

谷間の溪流はまだ八月の下旬だというのに岩を打つ水煙がほのかに漂って、ひんやりとする冷気が炎天下を歩いてきた身にまといつく。生え茂った闊葉樹林の底で木の間を洩れる光が僅かに丸いスポットを





注いでいるだけで開放でも一秒は必要とする暗さ、不本意ながら万一のために持参したフラッシュに頼らざるを得なかったのは残念である。
そのかわり溪流の激しい流れも或る程度実感に近くキヤツチされたが、果して印刷でそれがどの程度出るかは疑問である。



私刑 五態



杉原虹児・習作集

蛇

男

の

幻

想



美木多審・案
滝麗子・画

金もなく力もなく、まして容貌にも自信のない男がその貧弱な体軀にも似ない大それた野望を抱いた。

それは若く美しい女を掠つてきて山の中の荒れ寺の中へ運び込み思うさまに弄び慰さむということである。



平常は物を言う事も出来ない相手であるが、自由を奪われた今はあらゆる凌辱が可能である。併しこれもし

がない無能な男のはかない白昼夢であり幻想であるかも知れない。



切腹の擬態写真について

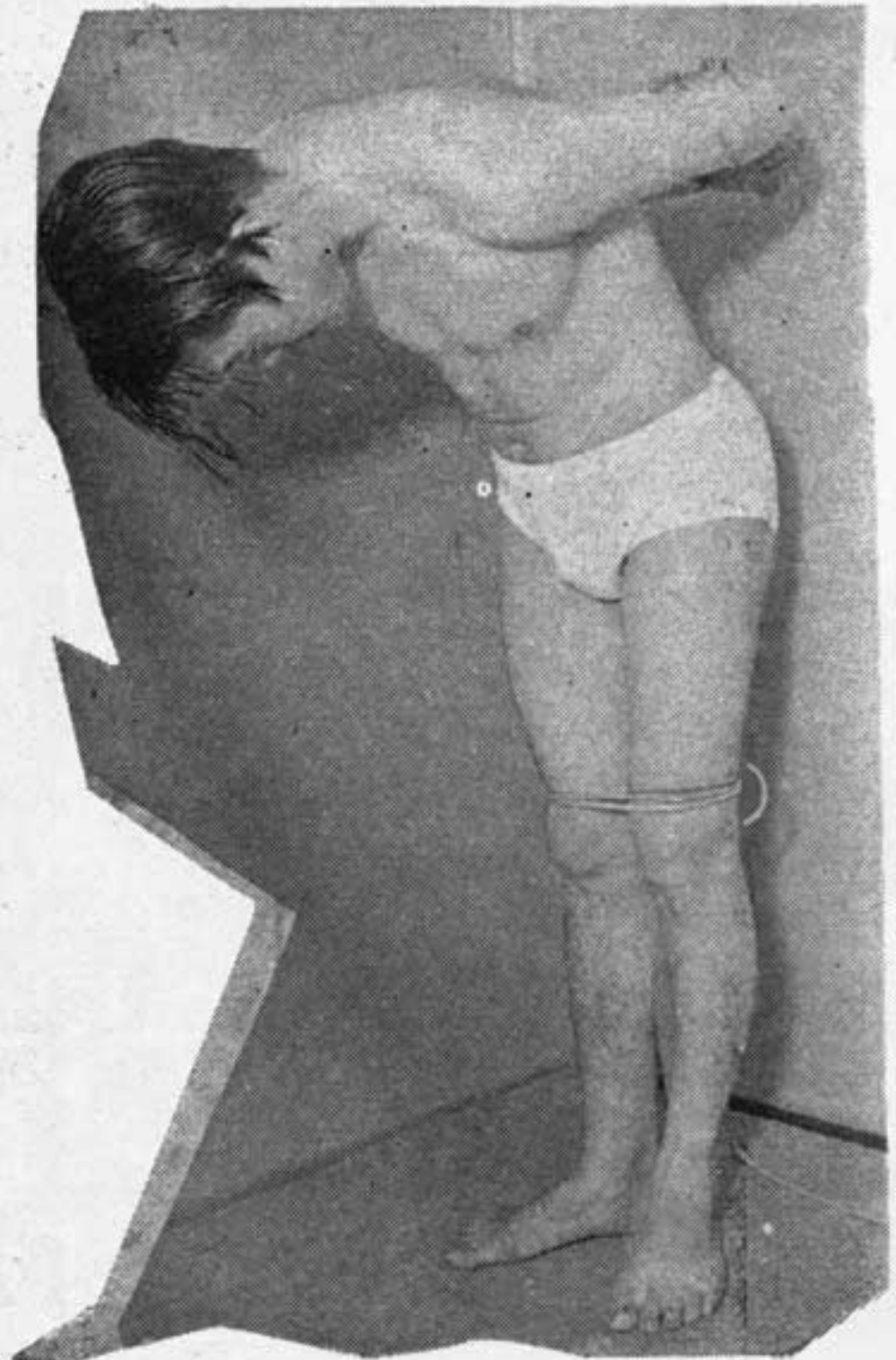
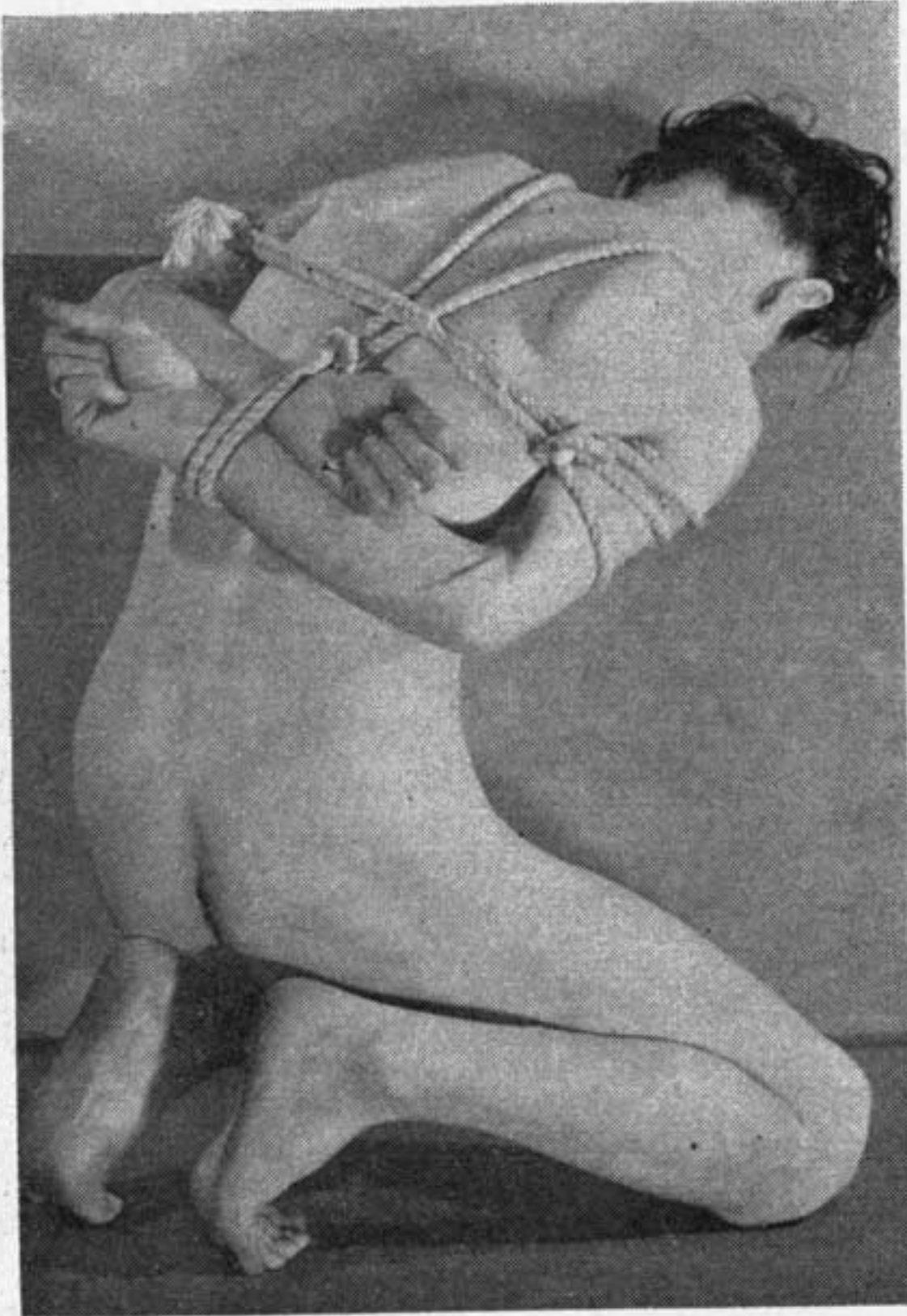
中康弘通先生の懇懇によつて女性切腹の擬態写真を撮映してみました。こゝに掲載しましたのはその中の比較的無難なものを選びました。この写真は試みとして撮映しましたもので至らざるところが多いと思いますが、今後は血紅を用いるとか、刃物の先をすり潰して



実際に腹部へ突立てるとか漸次研究の上緊迫感を持つたものにしてゆきたいと思つております。御気づきの点につきましては御進言下さいますよう御待ちいたします。

男性被縛写真

と男性ヌード





痴人
と
愛妻



新時代の風俗雑誌

奇 | 譚 | ク | ラ | プ

1953年11月号

第七巻 第十一号 通刊第六十一号

淫

(みだらび)

火

(第十一回)

松井 籟子

栗原 伸・畫

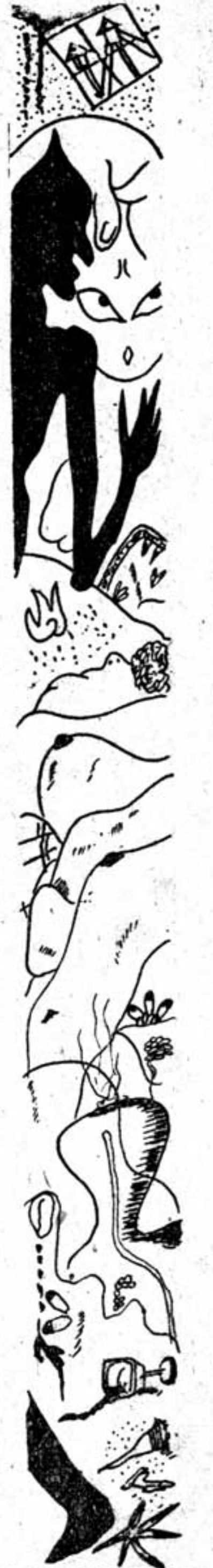
一

何人女中がいても主婦のいない家は、まるで女つ気がないようにうつろだつた。

小百合夫人の行方は杳として知れない。雄作の額の皺が深くなつた。邦彦との関係が知られただけでも、彼女はどんなに自分を汚らわしく思つただろうと雄作は考える。それなのに、そればかりか自分はその上にまだ醜い姿を妻の目に曝してしまつたのではないか。箱根の浴室で、犬の様に這い、犬の様に打たれて呻めいた自分の姿が、妻の目にどんなに浅間しく見えたる



あぶ.まにやの手記



まえがき

最近本誌の形をそっくりそのまま真似たイミテーションが出ていますが、そういった雑誌が告白や手記に名を藉りた編集部の作り物であるのに反して、ここに掲げた四篇は文章や表現に或は生硬な所があるかも知れませんが、すべて真実の告白を殆どそのまま掲載したもので筆者の生活がいきいきと何の技巧や衒いもなく表現されている事はお読み下さった読者の方々が一番よくわかつて下さると思います。



自^じ虐^{ぎやく}鬼^きの独^{せり}白^ふ

河 真 田 子 路

私が常に、臀部を露出したいと欲求することは男色とは関係がないように思います。私は男色の経験はありませんし、そのような、要求を持ったことはありません。昨年の本誌に男色魔の虜という告白記がありましたがこれは、マゾヒストとしての立場から、あの徹底した責と情交のくりかえしの場に、ひどく心を惹かれ、強く印象に残っている

す。然し、単に、男色自体のみを扱った他の読物類には何の感興も覚えないのです。別に嫌忌するという程に、積極的な反撥もありませんので、或いは潜在的には、そういう傾向に進み得る可能性があつたのでしようが、それを自覚に導く、きっかけがないまま、ひっそくしてしまつたとも考えられるでしょうか。私が男としての象徴物に対して



よりも、臀部、殊に肛門部への性感を強く意識するという事実について、自分でも何か素質的なものを否定できないのではないかと思つています。

肛門に異物を挿入する行為も、それを裏書しているようですが、私としては然し、その場合にも、その行為自体は決して、コイトスに代るものとしては行つていません。これはあくまでも被虐感を満足させるための手段として、するのであつて、肛門性交の意識は全然伴つていないと断言できます。

臀部や、肛門などを人前にさらして見せるということとは私にした所で普通の状態では、到底できるものではありませんが、他からの強制によつて、いや応なく露呈しなければならなくなつた場合の屈辱感というものは、マゾヒストである私の異情な欲求を遺憾なく充たしてくれるでしょう。私は、衝動にかられながら、自らの手で露出し、又そこを、いろいろに、フアンブルするわけですが、それは手段上そうするのであつて、私の空想は、常に、圧制、強要又は暴力による屈服の結果として、その相手の懲罰下に服しているものと仮想します。勿論その手は私のものではなくて処罰者の手であります。私を凌辱する行為は彼女の意思によつて、その手がこれを強行していると思ひこむのです。彼女は私が、最も羞しいと感じ、最も醜汚のものとしてひたすら隠蔽しようとする箇所を殊更に露出させた上、私の劣等感を一層強調させるための弄虐を加えて、やがては私から完全に人間感情を奪い取ろうというのが目的であつ

て、そのために私は、彼女の、ほしいままな嗜虐の対象となつてゐるのだと想定しつゝ、我が手で演技するのです。

臀部露出とともに、殊更ら肛門をひろげて見せたり、何かの異物、たとえば指先とか、木片などを、無理押しに挿入したりして見ることも、要するに、肉体の苦痛と、醜汚部を誇張される絶望の快感を求めるからに外ならないのです。

もう一つ、私の相手、すなわち私を支配する位置に立つ者は必ず女性でなければならず、これを男に置きかえて考えたことは一度もありません。男の場合では全く何の刺激もないのですが、反対に女性であつてさえくれれば、その容貌の美醜、年齢、境遇などには余り条件を固持することがないのです。むしろ私は、極度に卑しめられることを欲するためか、顔立や物腰に、下品な魅力を持った人で社会的な地位もなるべく低く、私よりも数等知能の劣つた相手から、逆に馴育され、玩具のように取扱われている自分の思い切り辱しめられた姿を想像することが多いのです。

肛門に何かをインサートする行為については、かつて本誌上で羽村京子氏の秀抜な体験記を読ませて貰いました。これは、その方法の奇抜で、多様なことと、又体験者が女性である御自身のものという点で、なかなかの反響を呼んでいるようです。私も自分の傾向からして、当然深い関心をもつて愛読し、且つその妖美な感覚に陶醉しています。殊に、それが女性の立場で行われたものであるという魅力は決定的で、これを、そつくり男の行為として見た場合は

あぶ. まじやの手記

果して同じような感興を人に与えたかどうか、甚だ疑問です。むしろ真剣であればあるだけ、その要素は多分に戯画めいて来て、逆効果に終ることがあるのではないでしようか。

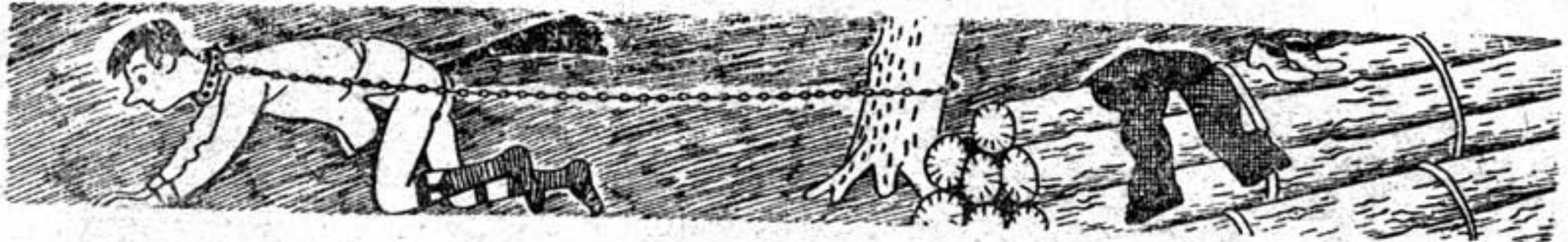
私も今、この記録をつづりながら、実際に余り気乗りがせず、単に嫌悪感を人に与えるのみならば、筆を止めるべきではないかと考えるのです。が反面又少数の人々には共感を得ることも、あり得ると思う期待と、自己暴露は結局私自身の自慰行為であり、うつ積する懊悩を発散させるための手段としては許して貰えるかとも思い、敢えて下らぬ筆をたどっているわけであります。

私は、お腹の中に空気や、液体を注入して見たいとは思いませんが、肛門には、どの程度のもが入るのか、いろいろ試してみたいものです。特にローソクの使用が主で、最初に極く細目のものから実験して、直経約一寸位のもので、充分挿入できることを知りました。肛門を開拡される強圧感と、直腸への圧迫は、確かに責めの感覚に通じて、これが若し、女性の手によつて強制されているものとしたら、この上もない愉悅に浸ることができたでしょう。ローソクに、予め油性の滑剤を塗つて置けば、なる程挿入は容易ですが、同時に又、抜け易い欠点があり、私はむしろ、そのような細工をしないで、強い抵抗を排除しつゝ、無態な力によつて、ぐいぐい押しこめられる、あの、一種征服されていくような気持というものが、何ものにも例えようがない程、私を恍惚境に誘つてくれるのです。

私は、この実験を行う場合に、自分の空想を助けるためその雰囲気になつたため、よく学校や工場などの女子便所に入りこみます。こういう場所は、通常たやすく、はいることはできませんが、運動会とか、バザーとか、いろいろの行事で、外来者のにぎあう日がよくありますから、そんな時は一番よい機会で、少しも人に怪しまれることなく紛れこむことができます。もちろん便所の方も、それらの外来者が出入りして用を足すことは何の不思議もないことで私は何喰わぬ顔をしてその中にはいるのです。便所内は案外清掃されているのが常で、その点共同便所のように始末に困ることはありません。踏板の上に、私はゆつくりと坐りこんで仕度にとりかゝるのです。扉には内部からサルを下ろして置けば、もう中で、どんなことをしていようと、発見されて騒がれる心配はありません。酸敗した糞便の臭いもその元は女性の体内から排泄されたものであるという連想が、私をかえつて楽しませてくれることは、云うまでもないことです。

私は酔つたような気持で、おもむろに衣服を脱ぎはじめます。

全裸体となつた時の妙に不安定な感じを私は好んでいます。まるで防備を失つた、攻撃の正面にさらされたような或いは又、追いつめられた獲物が、その場に射すくんでしまったときのような、それに似た劣敗感を、いや応もなく味わわれて、云うに云われぬ恍惚境を誘い出してくれるのです。



又、場合によつては、全裸体とならず、スポンだけを脱いで、長目のワイシャツ一枚で試みることもあるのです。裾の長いワイシャツは、一応腰下を充分、隠しているわけですが、その裾は、やがて、強制的に捲り上げられ、高々と背部に、たくし込まれるのです。これは全裸の場合よりも、特に露出された部分だけが、印象的に誇張され、尻まくりという滑稽な恰好が、多数の面前に晒されたときのみじめな効果を想像するとき、私の被虐感には充分に強調されてくるのでした。

さて、使所の中には非常に窮屈で、いろいろと態位を作るのには苦勞するわけですが、その窮屈さも、いわば一つの効果をもたらしっていると云えるのです。それはまるで動物が、狭い檻の中に捕獲されている状態にも似ています。自分の身一つを入れるのが精々というくらい、小さな小屋に繋縛された畜犬のように、限られた、極くわずかな自由しか与えられていないという觀念が、私の求める雰囲気を助長させてくれるからです。

私は、丸裸か又はそれに近い珍妙な姿で、先ず固い床の上に仰向けに寝ころびますが、もちろん完全な状態で寝てしまうことはできません。床に接着する部分は、頭と肩の一部分に過ぎず、背から下は、一方の羽目板に添って、逆さまに上へ伸びていきます。それから両脚を壁の巾一杯にひろげ、前方へ落すように折りまげますと、当然クレパスを全開したお尻の位置が、私の身体の最上位に、そびえ立つ火山のような姿勢で浮上つて来るのです。

陶製の便器は丁度肩のあたりを、ゴツゴツと責めて来ますので、長時間そのポーズを保っているためには、その痛苦にも堪えなければなりません。脱ぎ捨てた衣類を丸めて適宜な位置に敷いて置くと、幾分は楽でした。

さて、そんな形に自らを拘束しておいて、例の、ローソクを挿入し且つそれに火を点じるのですが、深々と突きささつたローソクは実に風変りな、その燭台に、キツチリと収まり、安定した直線の先で、静かな焰を上げているのです。時折は、溶けた蠟が、つつと流れ落ちてくることもありましたが、その熱さは、決して堪え難いようなものではなく、むしろ適度の刺戟を、その瞬間軟い皮膚の上に、ぴりツと与えてくれる程の、快い変化があるようでした。

私はそのような恰好を、架空の女性を対象とする強制拷問と心得、まるでその苦痛から救われようと努力する哀れな犠牲者のように藻掻き、のたうつのですが、結局はそれが徒勞に過ぎないものとして、自覺されていく過程を演出しているわけでした。

女学校の便所の中に、このような不埒な男が潜んでいるなどとは、おそらく誰も想像しなかつたでしょう。この便所を使用する人達は、その九割までが女性であることは勿論で、現にその時も、私の入っている便所の右隣も左隣も入れ代り、立ちかわりと云つてよい程女の人がいそがしく用を足していくのです。私のはいつているドアを、ノックする人もおりましたし、前の通路を、連れの女性と声高に話し会つたり、嬌笑をあげて通りすぎる人もあつたりして

あぶ.まにやの手記

私はまるで多数の女性の環視の真ん中で、晒し者にされて
いるような不安な錯覚に、胸をドキドキさせる程昂奮しつ
づけているのでした。

女性達が、何の遠慮も要らない弄り者として私を取り扱
つたり、思い切った加虐の実験に供しようというような時
には、私は当然、自分の意思を否定された、無力で、柔順
で、どんな要求をも充たし得るよう訓練飼育された犠牲獣
れあるべきです。そして彼女達は、私の姿を、どんな醜い
形においても、どんなにみじめな、汚辱の形においてもでも
自由な構想に基いて工作し、観賞と、実用の具に供すで
ことができるのでした。私は人間の地位からけおとるさ、土
の上に四つ這いとなつて、鎖につながれます。冷たい金具
に裝飾された革製の部厚い首輪が、ガツチリと南京錠で頸
にとりつけられている筈です。私は自分の空想を満足させ
るため、便所の中の演技だけでは到底、辛抱するわけには
参りませんので、夜ともなれば街を歩き、私に必要な舞台
のありかをたずね廻ります。疎開跡の、まだ残っている野
菜畑や、太い丸太が山のように並んでいる木場の前を通る
ときには、強い誘惑が私の足を引きとめてしまいます。そ
して私はそつと周囲を見廻しながら、いつの間にか、物か
げに身をひそめ、その場の状況を見極めていく自分に気が
つきます。

私は闇につつまれており、人の往来する通路からは、か
なりの距離にへだてられ、どこからも目撃される心配がな
いと知ると、例によつて、素早く脱ぎ捨ててしまいます。

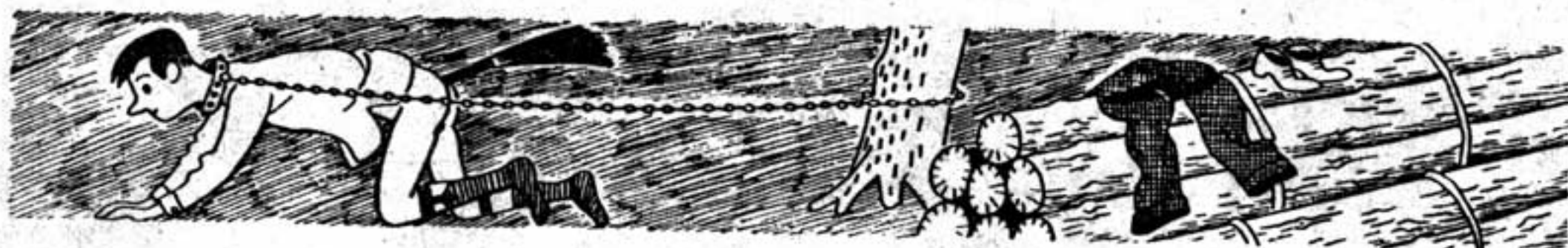
あさましいとも、気狂ざたとも云いようがないですが、
助に衝かれた時の私の行動は、自分ながら、どう喰いと
めよう術もないのです。私は口をあけ、呼吸を切らして、
文字通り、やせ犬のように、そこら中の土の臭いを嗅ぎ廻
ります。膝を伸して四つ足で歩くその姿は、通常の人の想
像する限りでは、どんなに馬鹿げた、滑稽なものだったで
しょう。

然も、その馬鹿げた、滑稽な姿が、彼女達の無遠慮な嘲
弄の的となつて、ますます辱められてゆく結果への道を
私自身が作つていこうとしているのだと知つたなら、遂に
人々は、サジを投げ捨ててしまふでしょうか。

ともあれ、現在の私には、まだ対象となるべき一人の女
性も存在していないのです。私は、独りの世界で、誰から
の目撃も受けることなく、秘かに、そして大胆に、私の欲
する行為を遂行しているのでした。

私は、鎖のついた犬の首輪を用意して来て自分の頸に装
着すると、その鎖の先端を、木材や、雑草の根に、固く繋
の留するのでした。かくして私の意思は抹殺されました。私
は鎖の長さが許す位置まで、右に左に匍い廻りますが、そ
の限度に来る度に強い反撃を頸に感じて、よろめき倒れ、
進もうとする意思を、完全に挫折させられるのです。私の
所有者は、私を必要とする時が来たとき、いつでも、直ち
に使用することができるよう、私をここに、準備して置
くわけです。

次に、私の所有者は、私が自分を犬であると強く自覚さ



せる必要から、私のお臀に尻尾をとりつけねばならないと考えるでしょう。私は、いろいろと工夫しました。結局、ゴム製の適当な太さのホースを、一尺ほどの長さに切りとて、使用しました。ホースの一端には、棕櫚の毛を束ね私に差しこみ、それを尻尾の先と仮定します。他の一端には二寸位のやゝ固い棒状の物を差しこんで、ホースの太さをそこだけ一段と膨らませます。その膨らんだ部分が全部私の肛門内に収つてしまうのですが、それで充分抜け落ちる心配はありません。私は満足して歩いてみてもみごとにピンと伸びた尻尾の先は、地上を匍い廻る時の身体の振つにつれて、ゆらゆらと上下に揺れ、お尻を動かすときは左右にふるえます。

この思いつきは確かに私の気に入ったものの一つでした。自分自身の姿を、傍から見物することはできませんが、私が今、どんなに奇抜で、滑稽極まる恰好に見えているかよくわかります。

私の対象となる、いずれかの女性の眼に、この光景が映じた場合はどうでしょう。私は立派に、弄りものとなる条件を備えているではないでしょうか。彼女は間違いなく私を嘲笑し、或いは、もつと甚だしく私を辱めようと考えるかも知れません。いくら辱めても、どんなに弄つても一向に差し支えないものとして彼女の眼には私の姿が映る筈ですから。

実際に私は、自分で設計して、本物そっくりの犬の尻尾を、ゴム製品工場に依頼しようとさえ考えていました。そ

れを私の肛門に装着して、一層犬らしく振舞つて見たならばと、全く真剣になつて考えたものです。

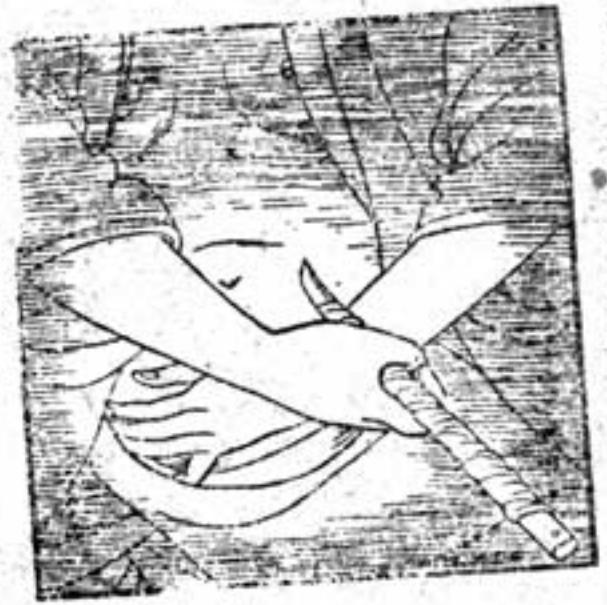
然し、このようにして私の妄動は、ますます異常の進行をつづける一方でしたが、空想はいかに遅しく発展しようとも、結局は独り芝居の虚しい結果を味わうばかりで、現実には、やはり救われる道はとざされているのです。こんなことを現実の世界に期待できるかどうか、期待してよいのかどうかはわかりません。然し私のような異常性格者が救われる方法があるとすれば、やはり異常の世界に、その道を求めるより外はないようです。

私は依然として恥ずべき露出行為をやめようとしなければ、か、一歩、二歩と漸進して空想を現実化しようとする態度に出たようです。特に臀部に集中する私の露出慾は、汚い話ですが便所というものに殊更の魅力を感じています。道を歩いても共同便所のように不潔に汚れたものでさえ強く心を惹かれ、そこに入つて見たい慾望にかられます。そこでは、とも角何を顧慮することもなく、自分を露出することが許されるからですし、それが女子専用のものであつた場合ならば、なおのこと気分を満足させてくれるのです。

そして私は冬の寒さがまだ十分残っている三月の末、小学校の児童便所でそれを実行に移したのです。その経験は私に一つの自信と暗示とを与えてくれました。次の素晴しい全身の血が逆流するような機会が訪れるために。



あぶ. まにやの手記



倒 錯 艶 書

信 太 蓉 子 さ ま へ

三 富 浩 生 より

ふみして恋しくなつかしき蓉子の君に申しまいらせそろ
——と書くと、今宵はふたゝびおん目にかゝり候いぬ、と
書いて来ねば落着かないようですが、お目にかゝつたこと
も無し、たゞ本誌でお書きになつたものを拝見しているだ
けなのですから、こゝは私の思いのたけを、ひたすら述べ
る他は有りますまい。

「開花の契機」(四月号)を読みました時の私の驚き、そし
て憧れとも付かず、ましてお慕いしていると云うでもなし
たゞ人の世に生を受けて、同じ歎びを見付け出した近親感
に切なく胸を締め付けられながら、私は繰り返し貴女の告
白を読み耽るのでした。

何んなに美しい人でも、それが男でも、女でも、決して
心を魅かれない私、むしろ、そういう人と恋愛はおろか、
交際もしない私、そうして私はたゞ一人、貴女のようなお
方を探し求めて来たのです。私自身と嗜好を同じく出来る
女性、お互に理解し合える女性、貴女こそ私の理想の女性
なのです。

セックスのこと、ましてこういう倒錯的な傾向は、たと
え好きな人が有つても自分から訴えることも出来ないし、
他人のそれを見破ることも出来ません。ことに貴女同様、
自己愛着と同時に自己加虐に執着する私は、極めて内気な
のです。こういう告白だつて、貴女に面と向つてなら、貴
女が私と同じ嗜好を持ち、充分理解し合える方だと判つて
いても、私は恐らく一言も云えずに了う位なのです。

ですから「開花の契機」を読んだ日からの私の、苦しい
ばかりの切なさ、何と言ひ現していゝか判りません。

何よりも私は「三宝の上の腹切刀」を前に、目を閉じて
「屠腹せねばならない破目にある」御自分をいとおしむ貴
女のお姿を想像するだけでも、激しい感動に打たれます。
やがて貴女は今は露わになつた。弾力のある柔かいお腹
を撫で下すと、右手の腹切刀をお臍に突つ込むのです。そ
れは何という艶麗且つ哀切極まりない構図でしようか。五
尺三寸十四貫という、貴女のすばらしい肢体が、一層此の
哀婉美を引き立てます。中康氏の所謂「悲愴美」の極致と



云えましょう。

私は我を忘れて貴女へのお手紙を認めました。同じ飲むに胸を震わせたこともあつたという告白の手紙だったのです。でも、悲しいことに貴女は一言もお応え下さいませんでした。或いは編集部の方が、貴女の御迷惑を慮つて、取次いで下さらなかったのかも知れません。そう思うことが私を安らがすのです。

貴女が色々の空想に浸つて楽しんで居られるように、私もまた色々な空想を楽しむことが出来ます。その一つを申し上げます。

物語は今から二百年ほど昔にさかのぼります。

今年二十の春を迎えたお蓉の方は、明るく美しい。まるで芙蓉の花のようなお部屋様です。十九の浩司は、殿の近習を勤めています。

彼はお蓉の方を秘かに慕い申上げているのですが、彼女は少しも彼に関心を持っていないようです。

ところが、すまじき恋に悩む彼は、ふとした素振りから同僚に見抜かれました。

もとより此の藩も、お家騒動は免れません。お国家老派とお江戸家老派とは、日夜激しい暗斗を続けているのです。お蓉の方も浩司も、お国家老の息のかゝつた人達ですから、江戸派は、事有らば彼らを失脚させようと計つています。殊に二人とも殿のお覚えが悪くない方なのですから……

そして、とうとう一夜、浩司が宿直の夜、厠に立つた間に、彼の袴は失くなつていました。

疑惑と懊悩に焦悴した浩司は老女と呼ばれて行きました。お蓉の方のお局の隅に、浩司の袴が脱いであつたと云うのです。一切の申し開きは無駄でした。

うま／＼とお江戸派の奸計に陥入れられて、二人は不義密通の汚名の下に、死罪と決まりました。可愛さ余つて憎さ百倍とは、うまく欺された殿の、無理からぬ心境です。

お蓉の方は、せめて最後の願いにと、切腹仰付けられるよう申し出ました。

——相対死にもよからう。

殿は冷たい嗤いを浮かべました。

やがて刻限が来て、薄化粧のお蓉の方と、やつれ果てた浩司が、白布を敷きつめた大広間の中央に向い合つて着座しました。

二人の間には、三宝の上の腹切刀の、巻き残された刀先が、檜天井に映える灯明りに背いて、冷たい光りを放つています。

自分の不注意から、恋い慕うお蓉の方まで巻き添えにしてしまった申訳なさに、蒼白い顔を俯せる浩司へ、お蓉の方は淋しく微笑してみせます。諦めの色なのです。

——申訳ござりませぬ。

低く呟く彼へ、お蓉さまは頭を振つて、

——はかない縁、せめて最後を共に……

と応えました。あゝ思いは通じていたのかと、彼は一期



あぶ. まにやの手記

の歓びに胸打ち震わすのです。

検使が着座し、罪状が読み上げられました。それは身に覚えの無いものながら、今は心の底から二人の魂は触れ合うのです。

恋い慕うお蓉の方の切腹を見届けつゝ、自分も切腹すること、浩司は深い歓びを感じていました。

二人は同時に肌を押開き、刃を手にしました。眩しいほどのお蓉の方の美しさを、最後の眼に止めようとする浩司の前で、彼女の右手の腹切刀は、早や深々と、最も豊かに肉付いた下腹の左脇に突立っています。遅れじと彼も、刃を突っ込みます。進む血汐、身内を貫く激痛、二人とも最早や死の陶醉に浸つて行くのでした……。

蓉子さま、お笑いにならないで下さいね。

若し私が貴女にお目にかゝれたら、きつと刃引きの刀で斯うした幻想の遊戯にお誘いするでしょう。

私のたゞ一つの気がかりは、被虐の相手も誰にも頼めなから、「不本意ながら自虐の手段——即ち切腹の真似——を選ばざるを得ないのです。」という貴女のお言葉でした。

「悦虐秘帖」(八月号)で、貴女は本当の慾望をはつきりお書きになりました。

醜怪な悪魔に腹を突き刺される幻想、それが貴女の最上の快楽だ、ということ、

それでもいいのです。貴女さえ許して下さるなら、私は

望まぬことですが醜怪な悪魔に扮しましょう。此の世で私の最も愛する貴女の御希望を充たすためですもの。

そして若し、遊戯のみにあき足りず、貴女が真実、貴女のおつしやる「甘美なる桃源境」にとび込んで了われるなら、その時こそ私は生きて甲斐ないのですから、貴女の豊かに麗わしいお腹を割いた刃で、直ぐに私自身の腹を割いて、貴女に折り重つて斃れるでしょう。空想は自由です。

空想は其の限りで楽しいものです。

勿論貴女は、私にそんな特権を与えて下さらないし、また東と西に遠く離れ住む上に、とても内気な私達は、一生お会いする機会は無いですから。

たま／＼同じ号で、陰惨にして華麗な芳年の責め絵を紹介する記事が、私の眼に止まりました。その中の圧巻「安達が原一つ家の図」は私がかつて或る錦絵店で見たことの有るものでした。是れを手に入れよう。そして貴女に差上げよう。きつと喜んで貰えるに違いない。私はそう信じました。

見た、というのは丁度一年ほど前のことです。

その錦絵店の主人は合巻ものの中の版面を繰りながら、——どうです、えゝもんでつせ、

一寸舌足らずに云い切ると、面長な、どこか新派役者のように目鼻立ちの整った顔を私に向けました。

そこには、緋色の腰巻一つの若い妊み女が、逆吊りに吊るされ、肋も露わに老女が、凄まじい形相で包丁を砥いで



いました。藍刷りの背景に女の真白な膨らみ切った腹が印象的で、苦悶の表情の底にも、何か放散な、性慾の匂いと云ったものが覗けていました。

老女の眼は到底逃がしつこない妄執の表情に暗く炎えて女の姿態を捉え淡紙色の肌のたるみが、今將に苛まれて行くこうとする豊満な女体を一層引き立てゝいました。

でも私は其の時、主人の調子に引込まれませんでした。絵そらごと、それは絵そらごとの世界です。そしてその限りで、スリリングな悦びの形象であるかも知れません。無言でいる私に、

——これも取締りがきびしおしてな、まあ是はお伽だ、お伽だすよつてに其の心算で見たらえゝのです。

純粋な上方弁とは云い難い口調で、また云い切ると、主人はしげ／＼と絵を贖っていました。

私が何も買わずに其処を出た時、真夏の日光は、暗い錦絵店の古めかしく沈んだ空気を忘れさせるような強烈さで私の眼を射すくめていました。……

暫らく行かぬ其の店へ、私は芳年の絵を求めに雨の舗道を歩いて行きました。然し絵は売れて了つて、もう無いのでした。

——廉う放しました。惜しいようなもんだ、あん時買うといて貰たらねえ、また心がけときまつさ。

何も彼も変つて行く、ふと、そう思いました。主人も一年ぶりで老けていました。私も貴女という女性を見付け出して、何か楽しいのです。絵も持主を変えて了いました。

真白に膨らみ切った女の腹、腰や脛を蔽う真赤な腰巻、それらが幻影となつて私の眼に浮かびました。

——いや、縁が無かつたんですよ、また寄せて貰います私は雨の舗道へ出ました。是で貴女に私をつなぐ縁の糸が、一つ切れしました。でも、私が、貴女が、生きて行く限り私達は同じ耽美的な世界に呼吸して行くことが出来るのですね。

ね、蓉子さま、そうお思いになりませんか？ 貴女の何時までも若く美しくいて下さることを、私はお祈りしています。

◎告白と手記を募ります◎

皆様の雑誌としての奇クをより真面目で迫力のあるものにしてゆく為、広く読者の皆様の偽らざる真実の告白によつて誌上を飾りたいと思ひますので、文章の巧拙や用紙等に関係なくドシ／＼御遠慮なく御寄せ下さい。投稿者の本名や其の他個人的秘密は厳守の上絶対に他へ洩らすようなことは致しません故どうぞ御安心下さい。誌上の発表は勿論匿名で結構です。掲載の分には謝礼を差し上げます。尚原稿の御送付は開封の上第五種郵便（百瓦まで八円）にて御願ひします。

■責めのアイディアを募る■

責めの写真及び縛り絵について、こういった構図やポーズ或は趣向で作成してほしいという御希望がありましたらその説明と出来れば略画をつけてお寄せ下さい。優秀なる企画並に採用の分には、画稿又は写真を差し上げます。

（編集部）



白へのノスタルジア

河村 哲夫

私は白い物に憧れる。とりわけ女性の肌の白さは哀しいまでに私をうつ。丁度闘牛が、赤い色を見て昂奮するように、長い間私は女性の肉体の白さを病的に近い異常な執着で追求して来た。真白い二の腕、透るような素足の白さ、大理石を磨いたような胸のふくらみ、それ等はどんなにか私の心を狂わせたことだろう。特に、女体の或る部分が、正常であれば当然あるべきものがある筈なのに、白かったような場合、その一事だけで、私は彼女に烈しい愛情を抱いた。そしてもし私がそんな女性に遭遇したとしたら、私のもう一つの異常性慾——サジズム——が頭を擡げて、彼女を思うさま凌辱し、苦しめたい衝動にじつとしていられなくなるだろう。私のこの変つて性癖は、幼少年時代のふとした出来事からうけた強い印象が未だに悩裏から去らないという一事に起因する。いわば白への憧憬は、幸多かつた幼時へのノスタルジアかもしれないのだ。

白へのノスタルジア——そうだ、あれは私がまだ小学一年生の頃だった。私の生家は紀北の田舎町、その田舎町の

中心部から少し離れた町はずれにあつた。玄関は表通り、勝手口は裏町の長屋に面していた。箱入息子に通性で私は生れつき気が弱く、学校へ入つても友達らしい友達もなかったが、それでも長屋の方に男女合わせて三人の友達があつた。父母は表通りの子供と遊ばせようと骨折つたが私はなぜか長屋を好み、お上品な表通りの子と遊びたがらなかった。

裏の長屋の中、十軒余りは私の父の持家だった。そんなわけで、私より一つ年上の高田、高田の妹で私より一つ下の小夜子、私と同年の喜美子、の三人の幼友達に私の事をぼんちゃん（坊ちゃんの意。家主の息子に対する敬称であらうか）と呼んでくれた。或る日、小夜子と私は二人でべつたをして遊んでいた時、小夜子がふいに遊びを止めて「ぼんちゃん、女のおしっこどこから出るか見たことないやろ。見せてやろか。」と大まじめな顔で言つた。私は大して見たくもなかったが、気が弱かつたのでもし嫌だと言つたら小夜子が怒つて遊んでくれないと困ると思つて「う



ん」と生ま返事をした。

二人は長屋の共同便所へゆき、小夜子はサツと着物をまわった。ズロースなどはいっていない女の子の多かった時代で、彼女もその例にもれず、長屋の子にしては白い尻が、ふいに私の目にとびこんで来て、私は一瞬クラ／＼と目まのするような想いだった。まるい白い臀部が烈しい印象を与えたのはこの時以来である。

小学二年生の頃だった。高田が喜美子と小夜子をつれて遊びに来た。丁度母は隣村へ行つて夕方まで帰らず、父はその頃、日夜放蕩に日を送つて家によりつかなくなつたので私たち四人の早熟児が秘密の遊びをするのにもつてこいの条件がそろつていた。長屋の子の特質として例外なく両親の夜の行為を窺視して知つていた。四人の中、知らないのは私だけであつた。

高田が「おい×××××んか」と言い出すと私は恐ろしいような気がしたが、弱虫といわれるのが嫌ですぐ賛成した。高田の提案で彼と喜美子、私と小夜子、とコンビがきまつた。喜美子は腺病質で小夜子の健康的な白さとはまた違った青白い肌をもつていた。

その夜、喜美子がその日した遊びを友達にしやべつたことから長屋中に知れ、私は母にこつびどく叱られ、灸をすえられ、以後長屋の子と遊ぶことを禁ぜられてしまったので、私たちの愉快な試みもその時一回ぎりに終つた。小学校も上級になると共に女の子と遊ぶことはなくなり、私の性向も次第に内攻性をおびて行つた。当時はまだ「男女七

歳にして席を同じうせず」式の格言が幅をきかせていたのである。その頃、私は自分を虐げることに興味を持ちはじめていた。四年生の時父が多年の結核が悪化して死んでから、母は私を甘やかすようになり、それが私を益々アブノーマルな世界へ追いやる結果となつた。

私は閑さえあれば二階へ上り、同年輩の子供たちと遊ばず一人で種々な空想に耽つた。いつの頃からか私は自分で自分を後手に縛ることを覚えた。今ではもうあんな器用なまねはできないが、それでもキユツと緊る紐の感覚が幼い私の心にたまらない自己憐憫の情をおこさせ、鼻の先がジーンと熱くなつたのを、はつきりとおぼえている。又、チリ紙を何枚ももんで丸め、肛門にあてがつて、痛いのを無理しておしこんだりした。

当時私の空想の中に現れたのは、四十がらみの、ブクブクと脂ぎつた醜い顔のおばさんだつた。継子いじめの芝居などの影響だろうか、私は彼女を自分の継母だと夢想したおばさんはいつも私の手足を後で縛り、焼火箸を私の体中におしつけて苦しめたり、天井から吊してホーキで叩いた。時には私を素裸にして自分も裸になり、私の背に馬乗りになつて部屋中をグル／＼歩きまわらせたりした。そんな時私はおばさんの大きなダブ／＼の大きな尻の下でへしやぎそうになり、重苦しさにハア／＼いいながら、それでも苦しみだけではなく何かもつと他の感情が体内の血を逆流させるのをどうすることもできなかった。とう／＼しまいにはおばさんはその巨大な股でやせた私の体を頭か



あぶ。まじやの手記

らギューギューおしつけ、お腹の中へムシヤ／＼喰いこんでしまうのであつた。私はこうして頭から喰われる時が空想の中で一番苦しく、又一番切ない楽しさを味つた。奇妙な事にはそのおばさんは四十すぎにもなつてゐるのに毛がなかつた。これは幼時小夜子や喜美子と遊んだ時の強烈な印象が未だに悩裏にこびりついてゐたのかもしれない。三十歳近い今日でも私は女性の無毛に憧れるが、現実には残念ながら見た事がない。

私がその後五年ぶりで現実に裸体を見たのは高等小学校の頃である。動機は銭湯であつた。私たちの銭湯は場末のそれらしく男女の脱衣場間のしきりは極めてお粗末なもので、ちよつと番台の近くで脱衣すると、その気さえあればいくらでも女湯の方が見えた。私は従兄弟の山本や加藤とよく一緒に銭湯へ行つたが、私に「女湯覗き」をおしえてくれたのは従兄の山本であつた。私は迂闊にも毎夜銭湯へ行きながら、自分でそれに気付かなかつたのであるが、彼がいつも番台の近くで脱衣するのなぜだろうと不思議になり、一度自分もそこへぬいでみて始めてその秘密をしつた。その時の驚きと感激は素晴らしいものだつた。なぜもつと早く気付かなかつたのだらうと後悔してやまなかつた。ほんの目の前、四、五尺のところに、十何人もの種々様々な白い裸体が、パノラマを見るようにうごめいてゐるのだ。私は私の神に感謝し以後どんな事があつても脱衣は番台の近くと決めた。あゝしかし、私はなめるように上から下まで、気に入つた裸体を見まわして行つて或る一点まで行くと屢

々失望して慌てて眼をそらさねばならなかつた。たとえその部分が手拭でかくされていても、その下にあるものを想像せねばならぬのは耐え難い苦痛だつた。勢い、私は同年輩、又はそれ以下の女体を求めねばならなかつた。それもずつとかけ離れた小さい子よりは、もう思春期寸前の、同年輩の女の子をみるとたまらなかつた。もしあのまゝ、ずつとそのまゝで大人になるのだつたらどんなにか美しいだろう。と果てしないロマンチックな空想を描くのだつた。

こうした私の夢を満足させてくれる女の子が一人いた。私と同じ年で、後年長屋小町と騒がれた浅子という美しい顔立ちの娘だつた。彼女は顔だけでなく、肌も私の最もすきなまっ白な大理石のような肌で、それが湯上りで上気してホンノリとうす桃色に色づくのを私はこよなく楽しんだ。しかもおあつらえ向きに彼女は、たいしてかくしもせず、ぬぐ時も着る時も平気で男湯の方をむいてまともなゆつくりと鑑賞させてくれた。ポツチリと、僅かにふくれ上つて彫刻の花びらのように固い乳房、そして問題の場所は、私の好みに、従つて神秘的な美しさをたたえていたのである。その頃、私は自瀆することを覚えはじめたが、その時の空想には、きまつて全裸の浅子が登場した。私はもう以前のようなマゾヒズムの傾向がなくなり、代つてサジズムの兆候が表れはじめていたから、チリ紙をにぎりこぶしぐらいに丸めて、それを私の目の前に無抵抗で横たわつてゐる彼女の白い裸体に向かつてグイ／＼おしこんでいた。彼女は泣いて痛がつたが、それでも私を愛してゐるので、この風



変りな遊戯をやめることができず毎夜私の空想の枕辺に現れ、奴隷のように哀願するのであるが、私が意地悪くチリ紙をもんで丸め出すと、泣く／＼全裸の姿態を横たえるのであつた。だが、私の夢も破れる日が来た。或る日私は、浅子にも予期しなかつたものを発見せねばならなかつた。浅子だけは、という私のロマンチシズムはきびしい現実の前に一ぺんにくずれ、幻滅の悲哀が、私の心中をひしひしとおそつて、失恋の痛手に泣きながら、以後女湯覗きの悪習を止めてしまった。

その後、長ずるに従つて私の白への恋慕は減ずるところか益々募つてゆき、特に無毛に対する強い憧れは年と共に烈しさを加えるばかりだつた。太平洋戦争中は、周囲の環境のせいもあつて、どうすることもできないまゝにすぎたが、終戦と共に性の解放が叫ばれ、巷間に性に関する書物がハンランするや、私は与う限りの力をつくして、ヴァンデベルデから、がり版ずりの春本に至るまで漁りまわつた。しかし、当時旧制M高校の文科生にすぎなかつた私には、いくらか集められず、集つた僅かのくだらない雑誌類の中から、あやしげな裸体写真を探し出しては辛うじて渴を慰めていた。極端に内気な私は、それらの書物を買うくらいがやつとで、当時流行りかけたストリップ小屋など覗く勇氣はなかつた。雑誌のヌード写真も、私の一番見たいところとは、かくしてあるか、さもないければ修正してあつたからとてもあの少年時代の浅子の神秘的な美しさには及ぶべくもなかつた。雑誌の相談欄などに、無毛に悩む女性の深刻

な手記を見るたびに、何度かその女性に手紙をかくことを思つたが、相手が仮名ではどうしようもなかつた。それらの数多い書物の中で、最も私を喜ばしてくれたものに、田村泰次郎の「肉体の門」があつた。責めの描写の多い事も私の趣味に合つたし、何よりも関東小政が、町子という未亡人を裸にして責める場面が、たまたま私を刺激した。小政がカミソリをもつて、柱にしばりつけた町子の裸体につめよる数行は、幾度か私を恍惚境へ誘い込んだことであらう。いつそ真白くしてしまえばよいのにつまらない横槍が出て町子がゆるされるところは、小説としてならいざしらず、私にとつては蛇足も甚だしいものであつた。書物の外に、私は偶然ある機会から、幾枚かの写真の乾板を手に入れた。その殆どは、私にとつて何の興味もなかつたが、たつた一枚だけ、珍味おくあたわざるものがあつた。それは西洋の少年と少女のもので、丁度幼い日の高田と喜美子のあの戯れが今まさに行われようとしているところを撮つたものであつたが、その部分が修正されず、はつきりと出ていた。私は暗夜寮友のねしづまつた寄宿舎の一角で、ずい喜の笑みをたたえながら、ひそかに何枚も／＼焼まししておいたが、惜しくも、他の蒐集物と共に、寄宿舎の火事で灰燼に帰してしまつた。その頃、寮友の中で、近くのD温泉うらの、遊廊へ通うものがあり、私も誘われて二、三度行つたが、正常な行為に興味を持たぬ私は、いつも失敗し、失望して帰るばかりであつた。ところが或る日、〇〇楼の某女はパイパンだ、という噂がとんだ時には、いつも



あぶ.まじやの手記



消極的な私も目の色をかえた。教えられて〇〇楼へ上り、その女と対面するや、私は恥かしさで真赤になりながら「君の……か」。と言つて見た。女は笑いながら「デマよ。うすいだけなの」。といった。私はいたく失望したが、それでも彼女が素直に……くれるので、……私は夢中で……女を驚かせた。それだけ、他に何にもせずに高い料金を払つて私は帰つて来た。その後もう一度行こうと思つたこともあつたが、私が夢中で接吻した時に女が「変態ね、あんた。」と言つて笑つた言葉が忘れられず、又本当の白一色でもなかつたので行きそびれてしまつた。

今の妻と結婚してから私は、始めて正常の行為をおぼえそして一年程は幸福であつた。妻は美しく、私を愛してくれたし、私も過去の悪い夢はすっかり忘れ去つてしまつたかのようにあつた。だが、子供が生れた頃から、私の本来の反逆性が頭を擡げ始め、日毎懊悩が続いた。或る夜、私は遂に妻にすべてを告白し、私の異常性を認めてくれと懇願した。世間なみの典型的な恐妻型であつた妻は一言の下にニべもなく私の願いをしりぞけた。曰く「私はあんたみたいな変態じゃないわ。」私は絶望的に幾度か「剃らしてくれ。縛らせてくれ。むりはいわない。せめてその腋の下だけでも無くしてくれ。」と懇願したが、妻は「あなたはあなた。私は私。あなたの変態趣味に私までまきこまれるなんて、まつ平だわ。」とそつ気なかつた。今、私達は離婚寸前まで来ている。妻は、「あなたがあくまでもそのく

だらな変態をつづけるのなら、私は離婚するよりほかにいわ。責められて私までがマゾになるより、死んだ方がましだし、死ぬよりは離婚する方がもつといいわ」。とはつきり言つた。私も一生に二度とない大きな失敗——無責任な結婚について妻に申しわけなく思い、再出発のつもりで離婚を考えているが、離婚してもこんな醜い、働きの無い私のような男に、果して同じ性癖の妻を迎える事ができるかどうか遅疑逡巡し、未だに腐れ縁を続けている。私の家の塀一つへだてた隣に、私の従姉に当る未亡人が住んでいる。私の妻にくらべると、顔もずつと醜いし、人間としてもはるかに劣る。ところが、たつた一つ、彼女が私をひきつけるものがある。それは、かつて見たD遊廓の某女のように彼女も薄いのだ。私は今、毎日夕方になると塀のすき間から彼女の行水を覗いている。これがせめても私の渴を医してくれるのだ。

以上、私の平凡な告白記を何一つかくさずに記した。この手記が活字になるかどうかは私の知つたことではない。だが、もし活字になるとすればその時こそ、満天下の誌友諸姉よ、私は古川裕子氏のように声を大にして叫びたいのだ。誰か私のような者にでも責められてみようという人は居ないか。私は渴えている。誰か私に白へのノスタルジアを満たしてくれる人は居ないのかと。

(以上)



縄に憑かれて

時山加代子

パジャマなどという気のきいた寝巻きは持合せていない私、勤めに出だして二年目の現在、春秋二回、新調した富士絹地の純白のワンピース一着、秋の訪れにウール地に灰色のツーピース一着に並んで、チヨコ色のハイヒール、これが二年間の私の所産、現在、寝巻きはお嫁に行つた姉さんのお古、枕一つ、二階の六帖一間に姉弟四人と父母と私の五人の雑魚寝、今年は雨が多くて涼しいんだけど、それでも七月ともなれば暑くてやり切れない。

十になる弟の薄汚い足が私のシューミーズの辺りに投げかけられる。それにつれて新制中学三年生の妹の政代、私よりか色白でぬめやかな肌、小高い三角形の肉丘のテントのようにシューミーズを支えた二つの乳房、そのふくらみの尖端にはほんのりと色に染んだ乳首、その他、更に幼い妹弟たちは実に無雑作な姿態の中に寝息を立てゝいる。

むし暑く寝苦しい夜のひととき、私はじつと眼を見開いたまゝ、工場での出来事が次から次へと頭に浮かんできて眠れない。

私は十九の年、家を出てから、ほんこの間国へ帰つてくるまで大阪の毛織工場で寄宿舎へ入つて織姫として勤めていた。突然そこをやめて両親のところへ帰つてきて、まだ半年も経つていない。貯めたお金も少しはあるし、それにあと一月程すれば失業保険金も貰えるから当分遊んでいても困らないんだけど、私の身体にしみついた都会の味はこんな田舎町の場合で駄菓子屋の二階借り暮らしは辛抱出来ない。私が二年間勤めた工場をやめたというのも私が自分の身体に体験した異常なこの青春の思い出の為だとしたら一体どうしたらいいのだろう。女ばかりが目じる押しに喧噪な織機の音の中にひしめいていたこの間までの生活が走馬燈のように私の臉にうかんで消えてゆく。私が若しまだあのまゝ工場に勤めていたとしたら、いくら編集部の方の頼みだつてこんな文章を書く勇氣はない。でもやめてみると、あの当時の事が何事につけてなつかしく思い出されて自分からペンをとつて見る気になった。

高いコンクリートの塀に囲れた殺風景な工場の中を幅一

おふまにやの手記

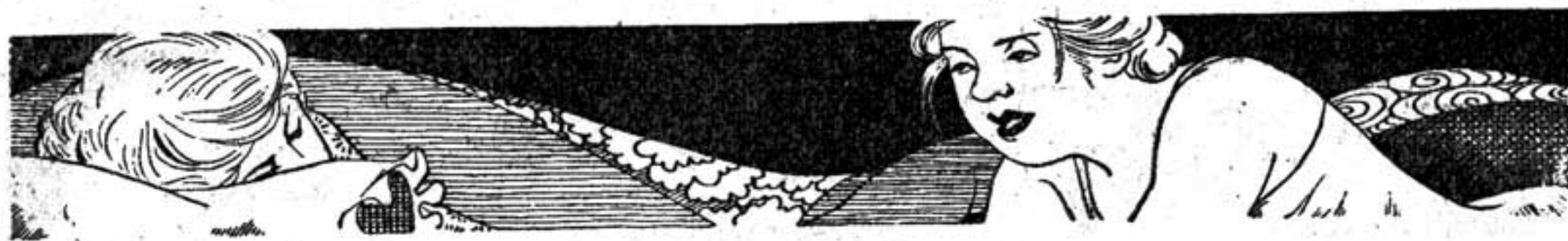
米位の川が流れていて寄宿舎の窓からはシユミーズやズロースの洗濯物が風にはためいているのだけがさすがに女ばかりの世界のなまめかしさを漂している。一棟の工場には数台の織機がずらりと並んでいて各織機毎に「台持ち」という経験四年以上の責任者と、その裏側に「裏廻り」という補助者。それに私達のような二十才迄の「織の子」と呼ばれる素人工が二人。これだけで一台の織機を動かしている。織の子の仕事は切れた毛糸をつなぐのが役目。

早番は朝五時半から午後の二時半迄、晩番は午後一時から十時までの二交替。これが一週間毎に替ることになつてゐる。一日中立つたまゝで織機の廻りをうろ／＼していると足がだるくて夏なんか、どこの部屋で出番でない人達のシユミーズ一枚の大根足の行列。寄宿舎は十五帖の牢屋のように細長い部屋に九人、それこそ見事な程の目じろ押しお昼の一時から二時半迄の一時間半は早出と晩出の両方の女工が重なるので工場の中は急に賑やかになる。真面目な人は台についているのだが、通いの世帯持ちや後家、或はオールミス等の齡のいつた人達が若い織の子を掴まえて男との閨房の経験談を露骨に話すのもこの時間で、私達が恥しがつて顔を赤めたりするのを面白がつてきわどい所まで手ぶりおかしく得意になつて話す。そんな時、「いやだ、いやだ」と言い乍らも一番熱心な聞手に廻るのは色気づいたばかりの私達織の子、そして、そんな話に興がのつて、やんやと囃し立てた挙句、お乳とお尻の特に大きな私を寄つてたかつて無理に抓つたり擦つたりする。

台についている時でも御不浄への行き帰りに、後を通りながら手を伸して私のお尻のむちりした上をぷちんと抓つていく。そんな時挙げる私の頓狂な悲鳴を聞いて、ゲラ／＼と得意そうに笑う。私は裸にされたように恥しくつて真赤になると、附近の人達が卑猥な野次を入れてはやし立てる。「いや、いやらしい事ばつかしして！」と私は云い乍らも、何か皆から注目されている自分の立場に面映ゆさを感じて抓られたあとが痛いながらも快い。もつときつく抓られてみたい。

私の組の台持ちは富さんのいう二十五になる出戻り娘、猥談の名人で勤続六年という人気者、色が浅黒くつて強靱そうな四肢がすばしこい。富さんは特にそんな事が好きなのだろうか、とりわけ執拗に私をからかつたり苛めたりする。私は他人から自分の自体に触られるのが擦つたくて耐らない。自分でもそんな時は全身に鳥肌が立つのがわかるでも富さんには工場に入つた時から世話になつていたので出来るだけ辛抱していたら、擦つたがる私を面白がつて工場の隅へ追いつめて、腋の下を擦つたり、お尻や太股を抓つたり、ハア／＼息をはずませて動けなくなつた私をベニヤ板に押しつけてとんでもない所へ手を差し入れてもがき苦しむ私を見て喜ぶ。そんな事を毎日繰り返している中に、自分の身体を他人から弄れることにほのかな喜びを感じるようになった。

晩番が終つて帰ろうとして、富さんとしめし合せた三人の台持ちさんに追いつめられて材料の倉庫の原毛のフゴの



上へ押えつけられて無理矢理私の秘密の場所をすつかり暴れたときの羞しき。何故彼女たちは私にだけそんなに興味を持つのだろうか、それ以来、もう一度あんな手籠めのように目に合せられないかと、恐ろしい中にも甘酸い期待があつて毎日工場へ出るのが楽しみになつた。今日はどんなにして苛められるんだろうつて。

そんな或る休日の日、ふと町の書店で手にした奇譚クラブという雑誌、その変つた内容にひかれた。こんな雑誌もあつたのか。私の現在の心持をそのまゝ現したような内容特にその中の「縛られた女の写真」には、ぎゅつと身を締めつけられるような衝動を感じた。お小使の中からその写真一組をゆきつけのお好焼屋のおばさんに頼んで取り寄せた。

その写真を見た時の私の驚き、今迄私の知らなかつた未知の世界が急に後光をさして眼前に展開したような気持。何度見かえしてもその時の私の身体の奥底から湧き上つてくるような胸の疼きは忘れられない。私はその写真を御不浄の天井と棟木のすき間にかくして時々秘かに行つては眺めた。私の特に気にいつたのは、胸に二廻りばかりきつく縄が巻かれ、後手が首すじ近く迄高く上つたポーズ、両足は揃えて横に投げ出されお臍の上と下に大きなくびれが二つ、私はそのべこんと凹んだお臍がとても好きで、自分もこんなにして縛られてみたら、どんなにいいだろうなアと空想してそのモデルの人が羨しくなつた。

今迄向い寮だつた富さんが私の部屋の室長になつた時は

本当に驚かされた。その晩から彼女は私の蒲団の横へべつたりと自分の蒲団をくつつけて、消燈時間がくると早速、私の蒲団の中へ身体をすべり込ませてくる。同室の者に「うるさいツ」と叱られるので、暑いのに蒲団をかぶつて、私は富さんからいろいろの知らない事を沢山教えられた。

私が一番最初に噛まされたのは顎だつた。私は肥つていたので、二重顎のようにしやくれているのを、前歯できゅつと思いきり噛まれる。「痛い！」という富さんは掌で私の口を押えて、顎から頬に喰いついて離れない。そして一方の手で私の身体を擦る。「ムムム、ムムム、」私は口を押えられる苦しさ、噛まれる痛み、それに擦つたさ、思わず呻めく。

顎から頬、そして首頸から肩、肩先は力一ぱい噛まれても余り痛くはないが、紅葉のような歯型をお風呂へ行つてかくすのに困つた。白い肌にブツブツと赤く血のにじんだ歯型、お友達に「あなた、これ、どうしたの？」と聞かれた時は、蚊にさされたあとだとごま化したけれど、私はなんだか気が気でなかつた。歯型が肩から胸、乳房、下腹へとだんだん下つてくるにつれて、もう私は単に掌で口を押える位では、洩れる呻めき声をこらえる事が出来なくなつた。同室の人達は昼の疲れでぐつすり眠つているからいゝようなものゝ時折、咳払いや寝返えりを打つ音等がしてドキリとさせられた。そんな時は枕カバーをむしり取つて自分で口の中へ押し込んだ。

こらえる痛みと呻めくに呻めかれない息苦しさ。上下の

おふまにやの手記

犬歯のつたのが肌に喰い込むときの身体中にじんと響く疼き。富さんはさんざん私の身を噛んだり抓ったり擦ったりした挙句、「時ちゃん肌の肉づきがよくて、やわらかくって本当に食べてしまいたい位」そういつて朝まで私を離さない。そんな時は、自分の身体をどうにかして、どうかしてと心の中で悶える。さすがに口に出しては云えないが燃え上った身体はどうしていいかわからない。富さんにつけられた二つの腕と太股の痣は最初は赤くなつて次には青くなり、次第に淡黄色となつて消えてゆく。そんな痣を私がお風呂でかくしきれなくなつた頃、私と富さんの仲が人の噂にぼつ／＼上るようになった。同性愛だと囁やく人もあつた。

しかし富さんにはれつきとした恋人があつたし、私が富さんから受けるものは一般の人達が考えるようなものではなかつた。でも、私は男を愛すると同じ程度に同性も愛せるといふ氣持があつた。何んとはなしにだが。

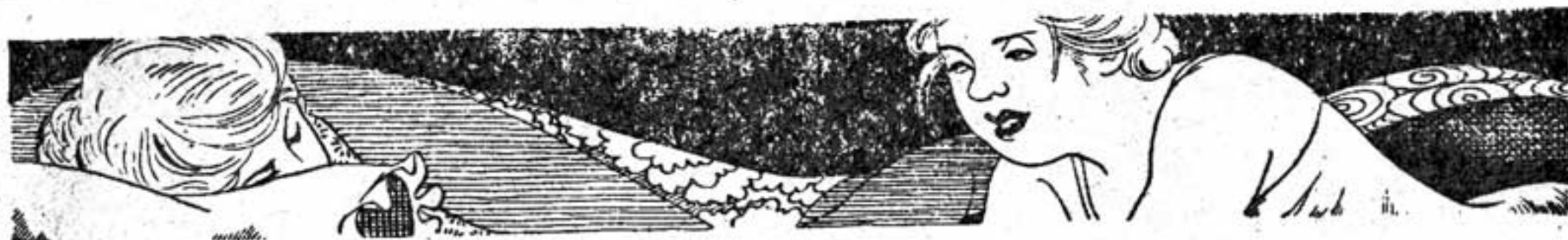
秋になつて奇譚クラブの編集部へ出した私の手紙が二月号の読者通信に載つて、私が生れて初めて手にした沢山の未知の男の人達からの手紙。それは一まとめに厚手の大きな封筒に入れて転送して下さつたからいゝようなものゝ、あれだけの手紙を一通宛送られたとしたら、人の噂に敏感なところだけに人眼について大変だつたらう。不思議と女の人からの一通もなかつた。皆言い合したように縛らせてくれという内容、中には自分の写真や詳しい経歴を書いたものもあつた。若しこれがたつた一通であつたとしたら

或は私はそれからの自分の運命がどのように変化したとしてもその男の人の許へ行つていたかも知れない。でも、こんな沢山のお手紙、こゝへ返事を貰つた時の事を考えると便りを書く勇氣がなかつた。そして日が経つていつた。その手紙の束は大切に行李の底へしまつて、休みの日、同室の者が外出した暇に出しては繰り返えし読んだ。読むだけでもほのかな愉しさがあつた。今でも私の手文庫には手垢に汚れた手紙の束が大事に保管してある。

私は富さんに縛つてほしいと思つて、擦られる時、故意に抵抗して、彼女が怒つたら、そんなら私を動かれないように縛つたらよいのに、と云つて扱帯を出したが彼女は冗談のように笑つて本氣にしなかつた。そして私は淡い失望を感じた。

お嫁入道具にと、簞笥やミシン、ラジオ等を競争で買うことが流行して、只さえ狭い部屋が荷物で一ぱいになつて同室の人眼を盗んでする私達の遊戯も困難になつてきた。私は雑誌を読んだり写真を見たりしているうち、自分も編集部へ頼んで責めのモデルになつてみようかと思つたりした。自分の裸体ががんにがらめに縛り上げられて、男の人達に見られたら、そしてその写真が沢山の男の人達を喜ばせることが出来たとしたらどんなに素晴らしいことだろう。肉体には自信があつた。

時たま、外出して荒物屋の店先に麻縄がぶら下げたのを見てドキリとさせられた。まだ一度も本当に男の人に縛られたことのない私。何故このように縄を見て胸さわぎ



がするのだろう。縄が眼の前へ飛び込んでくる時、私の心をぎゅつと無言の威圧で締めつける。

富さんは気性の強い女だった。私や彼女が工場をやめなければならぬように思っていたときも、一つには彼女の気性の強さからきていると思う。桜が散つてまだ間のない日曜日の事だった。富さんは例のように恋人に逢うために外出した。私は友達と映画を見に行つて夕食迄に帰寮したが、晩くともいつも門限ぎりぎりには帰つてきた彼女が門限の十時半を過ぎても帰つて来なかった。私は心配して表門の近く迄行つてみた。正門の横のくぐり戸は閉められて守衛所にも人影はなく淡い電灯がぼつんと一つついているだけだった。ひよつとしたら？ そう思つて、私は材料倉庫の裏手、川が工場内へ注いでいる塀際迄行つてみた。

と云うのは、富さんは口癖のように若し門限に遅れたら川を潜つて帰つてくる。と言つていたから――。月は雲にかくれてあたりは暗かった。ほんこの間迄花が咲いていた。桜も今は葉ばかりになつて塀に沿つて風は揺られていた。その桜の稍すれすれにコンクリートの塀越しに包みがぼいと向う側からほり込まれた。

ころりと叢の中へ転つてゆくのを私は走り寄つて拾つた。やはり想像した通り富さんのワンピース、ハンドバッグと靴を芯にしてベルトで結んである。暫くして川の注ぎ口から髪までびつしより濡らした富さんが這うようにして川岸へ上つてきた。ズロースがべつたり肌について雫が立ち上つた足下にぽとぽと落ちていく。私は自分のハンカ

チで彼女の背中を拭いてやりながら、自分もこんな激しい恋をしてみたいと思つた。

まだ十分乾ききらない肌にワンピースをつけて濡れたズロースを脱ぎようとしている時だった。「誰だッ、そこにいるのは？」材料倉庫の横から太い男の声がした。「あッ」私が驚いて声を出すのと靴を両手に持つて富さんが塀沿いに走るのと同時だった。

その晩のことは私としては別に大したことでもなかったが、富さんがやめるというし、自治会で根堀り葉堀りいんなことを聞くので私もうるさくなつて、さつさと止めてしまった。会社では人手のない時だったから、といつて引き留めて呉れたが、辞表を友達に預けたまゝ飛び出してしまった。

寝苦しい夏の夜のひととき、私の空想は次から次へと起せて尽きるところを知らない。私は弟妹たちの寝姿に眼をやつて、明日は町へ出てみようかと何んとはなしに考えていた。

代理部案内

只今本誌代理部におきましては、吾妻新氏訳の全訳「クリスチーナ」(送共三六〇円)並に大好評の縛られた女ばかりの十六態豪華アルバム「美しき縛しめ」(送共五六〇円)及び三条春彦画の極彩色八枚の責絵を収めた優雅な和綴画帖「時代物責絵巻」(送共三五〇円)の分譲中でありま。何卒売切れにならない中へ是非コレクションの一部へお加え下さい。外に縛られた女の写真各種分譲中であります。

蜘蛛と蝶々

(二)

—不運なニユーフェイス—

飛田良二
方金三・画

(五)

御川里枝は、たえきれない様な不安におびえ続けました。しかしそれが逃れられない運命、悲しい諦めになつて行つた時、今度は、(早く済ませてしまいたい……)

そんな焦燥の五日間が彼女の煩悶をよそに過ぎてゆくのでした。「あゝ、最初のあの日、あんなにまで、予期出来た、そして避けようとするれば出来た恐ろしさを(どうして土壇場になつてから、又翻

してしまつたのだろうかしら?)」
里枝は、意気地なしの自分が、たまらなく怨しく思われてなりませんでした。

とうとう「フィルム」になつてしまつた、あの夜。帰りのカタクシーで一人になつた里枝は涙に咽んでいました。車の振動とは別のものが、激しく里枝の全身をゆすぶり続けているのです。興奮のさめ切らぬ脳裡に……複雑な心理状態でした。(あんなに……)それでいて、又、それは予期出来た程度の様にも思えたり?……



しました。

こめかみの辺りが、ズキン／＼と鳴りました。とう／＼／＼ファイルム／＼になつてしまつた！

(もう、彼等を信じるより仕方がない……)

黒い雲の様な不安は、後から／＼……ひつきりなしに押し寄せ、重なつて行くばかりでした。アパートに帰り着いた時、全身はジツトリした汗になつていました。そして寝れぬ夜は、何時しか、白々と明けて行つたのでした。

しかし次の日には、気を取り直した里枝は何事もなかつた様に撮影所に出勤しました。しかし……日頃の親しい同室の人達と向い合つているのも苦しく何か？出来てしまつた秘密を探られる様な恐ろしさで、助監督の岩木とは絶対に合いたくない氣持でした。

けれど……(何時までも、くよく／＼してられない) そんな、あきらめが……努めて、明るく考え様と里枝は、自分自身に云いきかせているのでした。(何んだ！こんな事ぐらい……何んでもない事にやない……) 一人になつた時は、口に出して繰返してみるのでした。

撮影所内の空気は、そんなみじめな里枝とは、全く無關係に慌ただしい連日でした。近頃当りが続いている『性典物』の一連の作品が、近づくお盆映画の抱合せに早撮で有名な『Y監督のメガホンで計画され(又『新しい顔』を物色している……) そんな話題は、いち早く、里枝が所属する俳優部屋(大部屋)の人達の猪口をにぎわしていました。

しかし近頃では、もう(もしかしたら？……) そんな希望も、里枝には浮んで来なくなつてしまいました。そして、遂にあの契約金

の『五万円』にも、手をつけてしまつていました。始めて、故郷の母の便りに(妹の『浴衣』でも……)と小替為を入れてやり、次は出入の服屋の払いにも当てゝいました。だから今日の『ニューフェイス』御川里枝は、流行の夏姿で颯爽と見えました。『エバグレイス』の光る白さが、すつかり夏になつた太陽を反射させ、白い『帽子』にレースの手袋、バックもハイヒールも白づくめでした。割合に人数も少ない、此の郊外の国電の駅に降り立つた『ニューフェイス』の美しさは人目を魅かずにはおきませんでした。静かな別荘地区に路がそれると一層往き交う人影も、まばらとなり、里枝の美しさは、足を止めて振り返る人もありました。

けれど里枝の心は、瀬田の家が、近づくにつれて次第に重くなつて行くばかりでした。(今日はどんな事を演るのかしら？……) そんなちよびり創り上げた好奇心も、又々(どんな事になるのだろうか？……) 無氣味な不安に変つて来るのでした。(弱氣を見せては駄目！) 里枝は、思い返して瀬田の家のベルを押していました。

「やあ！お早よう……今日は又、一段と美しいですね……」

瀬田は例の様に、じろ／＼と、心に武装し緊張した里枝の全身を無遠慮に眺め廻すのでした。早速二階の『スタジオ』になつた例の部屋に案内されると、滝尾もはや来ていました。二人の男達は、待ち早く早起きした形で手ぐすね引いて、瞞された可憐な白蝶を、待ちわびていたのです。

「それじゃ一寸行かせて頂きます……」

「あゝいゝとも、今日は久し振りだ、一つ……、ゆつくりしておいで」

瀬田に挨拶に上つて来た、たつた一人の使用人であるあの中年の

女中は、滝尾や、里枝の方にも一寸会釈をすると、いそ／＼と出て行きました。近くの小都市に預けてある子供の顔を見に帰ったというのです。——これは瀬田の計い……（さあ！今日はゆつくりと愉しめるぞ……）そんな快心の笑みを、瀬田も滝尾も、抑えることが出来ない思いであつたのです。

「先生！今日は、どんな所を撮るんですか？……今日一日で済むんでしょう？……」

里枝は務めて快活を粧い、何んでもないかの様に云いながら、心にぴいんと張つた緊張を示して見ました。

「そう、簡単に打合せしましょう。今の処はもう助演の人達は必要ないんでね……この前の人達は来ません。」

先日の調子で、大体見当はついていると思うんですがね……一寸この映画は……その多分に変態的と云いますか……「サジスト」な男と貴女の演じる新進スターが、その犠牲者になる訳です。「サジスト」……解るでしょう。撮りませんがこの映画のストーリーは前掲がある訳です。即ち、その女優と或る男、……「サジスト」マン……ですか？……ハハ。……その二人は前置きがあつたのです。女優の方がまだ有名な「スター」になる前の話でね、そして怨みを持つていたその男が、その復讐をすると云う、まあ、云つてしまえば、極く簡単で、又、あきたりなものですが……そこで、この映画の云わんとする処はですね」

瀬田が引き継いで説明した。

「その責められ女の美しさ、女体の美ですな、それを現わさんとする「ねらい」です。そこで、その「責め場」と云うんですが……そこが、この映画の山ですから……」

今度は滝尾が云つた。

「色々と工夫を凝らして、まあ、充分にその効果が上る様に努力したいと思うのです。たかゞ三巻程度ですが、迫力のあるやつを作りたいですな……。少々変つた処、演つてもらわんといかんですが……「スタンドイン」の人も使いますが、何んと云つても、貴女が主役だ！思い切り大胆な処、頼みますよ、ハハ……」

「最初はアツプで表情だけまともにやりましょう。縛られたり、鞭打たれたり、擦られたりする処、いや心配せんでも大丈夫、ハハハハ」

里枝はそんな説明を聞くだけで、もう恐しく。そしてたまらない羞しさに赤く染つてしまふのでした。その新鮮な果物の様な味を、ゆつくり愉しもうと、彼等は綿密に順序を立て、次々と加える破廉恥な試みの効果を期待してゐるのでした。

「前回のカットの続きははぶきます。あの楽器のケースに入れられて運び込まれた場所が即ち、この部屋になる訳、それからもう一つ音（録音）は全部あとから入れますから、適当で結構、もつとも、セリフと云う程のことはありませんがね」

それから、相手役の男は色々と物色したんですが、結局私が、最も信用出来て、それに適役だろうと云う処に落着きましたよ、ハハ……」

滝尾は、愉快そうに大声で笑い、その方が貴女も安心で又、気も軽いでしようと、ぬけ／＼とつけ加えるのでした。

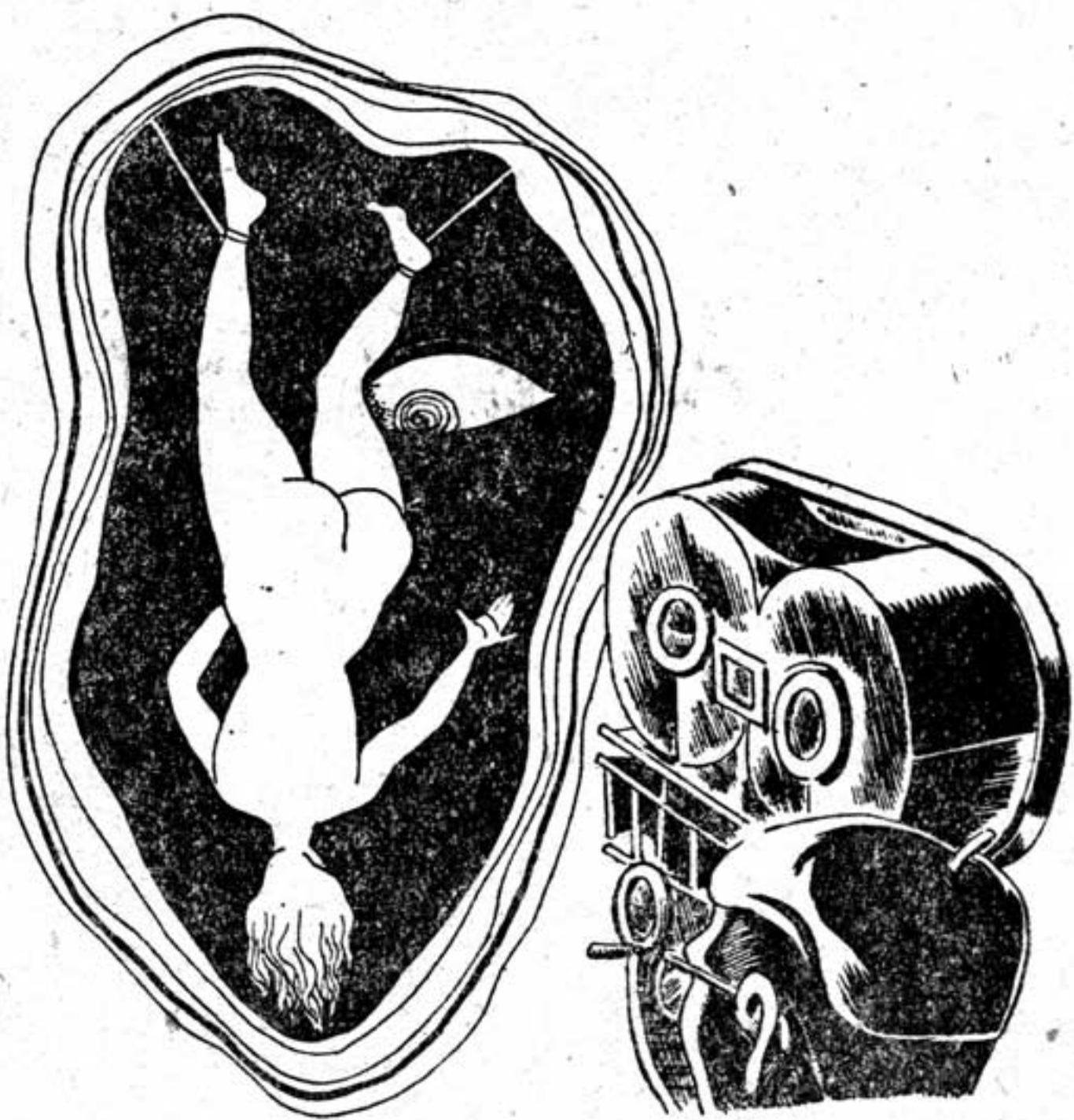
(六)

「さあ、始めますよ！準備して下さい」

瀬田は、里枝をせき立てながら、滝尾の説明した一種異様な部屋を、この横型の様なスタジオに作り上げて、其処には前回の女優の私室とは異つた感じの家具類の外に、妙な器具が、用意されていました。先ず、一隅には、あの昔、予科練生が体操に使つた円形の巨大な輪、それは二本の直径六尺もあろうか二本のパイプが平行に向い合つて居り、四ヶ所が簡単な横木の様なパイプで熔接してあつて、そこへ四肢をあげてぐる／＼廻転さし乍ら、体を鍛え上げる為の器械です。又、五尺程と、八尺程の鉄棒もあれば、鉄製の高さも変えられる上部は、小さな皮張りになつた、跳台もあり、パイプ製や木製の椅子も又梯子も準備され、天井からは、数本のロープも下げられてありました。里枝にはまるで体操用具の納屋とごつちやになつた様なこのセット、そしてそれらの道具が何んの為に使意されているのかは、到底想像も出来ませんでした。しかし、今は観念した様に、例の羞しいナイロン製の衣裳をつけるのでした。滝尾は、派手なアロハシャツ姿になつて、里枝を待っています。

「ハイ！スタート」

瀬田の声でカメラが、低く鳴り出しました。……一たん、縄を解



つゝ、しかも、その姿を正確なフィルムの上の記録に残して、永久に此の小羊も似たこの映画スターの卵を、彼等の足下に踏みにじろうとするのでした。

「さあ始めますから、此処へ腰掛けて……そう／＼……足は自由にブラ／＼させて……そう、両手は最初は先ずその縁金を、しっかりとつかまえていて下さいよ……」

滝尾は、奇妙な形の椅子をカメラを前に運ぶと、そう説明しまし

かれた里枝の扮する女優がこの異様な道具立ての部屋を、追い詰められ逃げ廻つて、そして遂に押えつけられ縛り上げられる処。そこまでは簡単に終わりました。縄もすぐ解かれましたが、里枝は早鐘を打つ様な胸の動悸が仲々おさまりませんでした。しかし、彼等は容赦なく次の行動に移るのです。滝尾は自らそのスリルを味いながら、演技と称して、だまされた哀れな里枝を、汚辱のどん底まで引づり込んで愉しもうと云うのです。

瀬田は、カメラを両手にその二人を追い乍ら無残な遊戯——哀れ悲しい犠牲者が次々と加えられる淫虐の限りを——その豪華な実演を享樂し

た。里枝はそんな椅子にチヨコンと腰掛けされ、ぐるりと肘の高さに一本の円いパイプの輪が廻らされた姿はとてまたまりませんでした。小さな盛り上つた様に皮が張れた椅子は、里枝が腰掛けるとその長くのびて形の良い足も、床から一尺程も離れてしまふ高さに作られていて、二尺丸位の手摺の様な肘掛けの様なものが、丁度昔流行つた乳母車の様で（まるで大きな赤坊）だから、それだけで里枝は羞しくなつてしまふのでした。

そんな恰好におさまつたナイロンパジャマ姿の里枝は、これから始めようとする彼等の指先の弄りものには一寸変つた面白さがあつたのです。

「アツプで表情を撮りますからね、縛られて手足の自由を奪われた上、その男からさんざん弄られ苦められる。その気持を出して見て下さい！ 鞭で打たれる処は、実際に打ちたいんだが……、その代りに一寸抓りますから気分を出して下さいよ、いゝですか？……」

滝尾はこみ上げてくる猥らな笑いを、噛み殺し乍ら説明するのでした。瀬田がカメラを正面から据えつけると、愈々「スタート」

あゝそれから、そこに作り出され撮し取られた光景……

それは、猫がとらえた鼠をもてあそぶそれよりも遙かにむごたらしい姿でした。

里枝の両手は、必死にその廻らされたパイプを握りしめ、僅か二尺丸の空間の中を、その魅力的な上半身をくねらし、滝尾のツボを得た指先の執拗ないたづらを耐え忍ばねばならなかつたので。

「さあ！ 演技だ、存分に苦しんで……」

滝尾は加虐の興奮に、声も震えていた。

（あゝ……これでも演技だろうか？……）

里枝は極度の羞恥、その苦しさに喘ぎ続けました……全身に脂汗をにじませて……

「どうも調子が出ない……」

彼等は交互にダメを出しては神妙に、カメラの位置を変えてみたりしながら、間を置いては、こんな愉しみを繰返して、ゆつくりと味うのでした。

遂に、パジャマの胸元を押し拡げられることになり、その代りにと黒い布がつと乳房がかくれる程も、かぶせられた。その布はこれ又、妙な形で寸法もわずか。しかもすつぽりと頭からかぶると丁度胸の一番高くなつた処で落ちつく仕組……申訳の様なものであり一段と彼等の官能を刺戟する効果しかないのです。そして遂に形が出ないと云つて、両手首が後に廻され又、滑り落ちない様にと、両足も椅子の脚と一緒に縛り付けられもう里枝にはどうしても、我慢していられない羞しさ恐しさに息もつまりそうでした。所が彼等は「もう一息！ 演技だ！ がんばれ！」などと先廻りするので、齒を喰いしばつて又、この上ない苦業を繰返さねばならなかつたのです。高い椅子にチヨンと腰掛け……両手足の自由も今は奪われ、あらわになつた姿。ナイロンパジャマの薄い紫が、恰も大輪の花弁の様で……そんな豪華な花弁を拡げた白いめしべは、むせる様な処女の芳香を閉め切つたスタジオにたゞよわし、その美しく、あてやかなめしべの胸には、黒いわずかな布が激しく息づき一層この二匹の淫獣共の情欲をかきたてるのでした。

こんなにまで踏みにじられた行為を押しつけられ、目も眩む苦しさに喘ぎ乍らも純な里枝は……そして、その云草が如何に無意味ないや、如何に里枝を侮辱しているものであるかを思い知らされつゝ

も、（演技だ！）と先廻りされては、拒む事も出来ない……そんな一途な愚かさがあり又、一面かたくな、処もある里枝の性質は、憐みを乞う様な……、そんなことがたまらなかつたのです。

しかし、不幸にもそんな里枝は、一層彼等の望んでいる処であつたのです、だから仲々悲鳴をあげない里枝は、彼等をしてはたつぷりと愉しませる結果になつてしまつたのです（これでもか……）

滝尾の行為は一層激しくなつて行きました。何時か、廻らされた円い輪も取り除かれると落ちまいとして、里枝は必死になつて体の安定をとらねばならなくなつてきました。足首をしつかりと縛りつけられているから落ちれば危険でした。

「邪魔だ！」

と叫んで、滝尾はナイロンの花弁を荒々しく剥ぎとつてしまうと彼は里枝の精神的な苦痛を一層はげしいものにしようと試みるのでした、むき出しになつた下半身は安定を保つためには、固く閉ざした両膝を、その太股まで広げなければならぬのです、薄いナイロンパンティだけの羞しさ、遂に申訳の様な黒い乳当も、する／＼と持ち上げられて除かれてしまつた時、とう／＼里枝は声を上げてしまいました。

「あゝ、……もう止めて下さい！もう駄目ですゆるして下さい……」
堰を切つた叫びが悲鳴になつても、滝尾は一層面白そうに、ゆるめようとしな……

「ゆ……、ゆるして、……苦しい……」

里枝の血の叫びも、スタジオの防音壁に吸い込まれ、二匹の毒蜘蛛の倒錯した神経を、快く攪るだけでした。

（七）

責めあぐんだ様に滝尾が一息入れた時、疲れ切つたかよわい里枝の肉体は、凭りかゝるすべもなく高い椅子の上で、その上体を支えているのがやつとでした、早く縄をほどいて元の姿にして欲しかつた、さんざんいびり弄り続けられ身も心もない里枝でありましたが全裸と変らない姿で何もされずに眺められているのも又、新しい苦痛でした、セツトして来たばかりのパーマも、崩れはて、全身は毒を流す様な汗が光り、可愛いイチゴの様な赤い乳首は固くそり上つた様な、見事な胸に大きく揺れています、その整つた蒼白な顔は、その羞しさ。受けた、余りにも大きい打撃にゆがんで、長い眉毛の下からは、又新たな悲しみが、大粒の真珠になつてこぼれるのでした。

そんな見事な眺めを味い乍ら、滝尾も瀬田も同じ様な事を考えていました。

（さて！今度は猿轡か？……、もう嫌だと云うだろう……、フフ……、しかし、こつちはこれからさ！存分に愉しむのは……、猿轡はやはり無理矢理かます処に味がある……、そうして、いよいよ／＼引導を渡してやる？……）

「休ませて下さい」

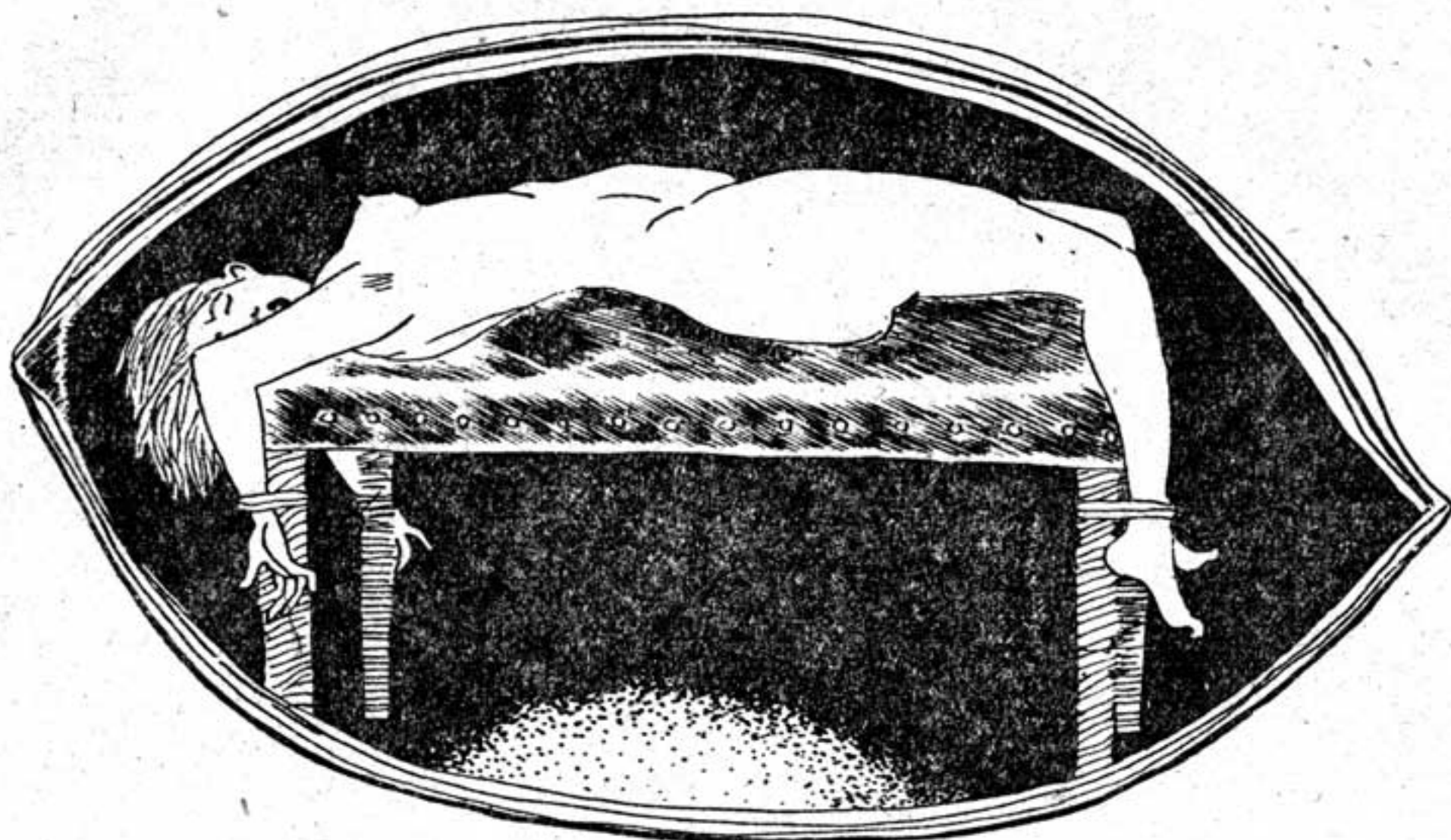
里枝は無駄と思ひながらも、小さな声で頼んでみました。

「うん！休ませてあげるよ、ベットへね……、但しもう少しあとだ！その前に教えてあげにやらん事があつてね……」

滝尾は、意地悪く云い付けるのです。

「今度はこれだろう？ホレ！」

瀬田が、黒い布を滝尾に投げてよこした時又、この淫獣は、ニヤツ！と笑いながら立ち上つていました。



「アツ！」

里枝は、思わず叫ばずにはおられませんでした、た、（猿轡をさる！）新たな一層大きな恐怖でした、（声も出せなくされる！）最後の抵抗のすべでも、無残に奪われてしまふのです、（それは今までより、又、以上の苦痛と侮辱を与えられる！）そんな戦慄が背筋を走りました。大声をあげて抗った口を、今度は必死になつて閉じて、押し

込められる布切れを防いで見ましたが、滝尾は、さも面白そうに、そんな里枝の形の良い鼻をふさいで、わずかなすきの出来るのを待っていました、それはなれた手つきであつたし、完全に声も出なくなつてしまふのには、いくらも時間が掛りませんでした。

「フン！すつかり観念したようだね、可愛いニューフェースさん、君はやつと瞞されたのが、解つた様だね、ハハ……、この映画はね、まさに地で行く処さ、僕等が欲していた映画を、自分で掲りながら愉しもうという寸法さ！但し、一寸違う処があるね、と云うのは、そのモデルさんがまだ有名になつてない女優さんだと云う処だけ……、しかし、スターの卵さん！君は自分では不運のつもりだろうが、ニューフェースに合格したと云うだけでも大したものさ！少くとも、君の様な身分になりたい世の娘ツ子さん方は多勢あるんですからね、しかも、少くとも、こうして我々の御眼鏡にもかなつたことは、なんと素晴らしい資格の持主というわけですからね、……ハハ……、心配せんでも、これからいくらでも有名な大女優になれる人ですよ！なに、一寸遅れただけよ、……ところで我々は君が、恰好のモデルだつたんですよ、すべての条件がね我々は、君の様な素敵な人をたつぷりと我々の趣味で愉しもうと思つて、企てた計画が見事成功したと云う訳、お気毒ながら星の運めと諦めが肝心……」

滝尾は、さも嬉しくてたまらない様に笑い瀬田が今度は説明するのでした

「しかしお嬢さん！心配せんでもよろしい。僕は少々、異つた趣味を持つていと云うだけで、別に何も君を殺してしまおうと云うのではないよ、それに君がつまらん気を起して僕達に抗らう様なことをしでかさなければ、別に毎日此処に閉じ込めて置こうと云う訳でも

ないさ、君は今まで通り自由にしていって結構！君も人気稼業！世間態と云う事を考えれば、そんな無茶な事はしないだろうが。その為にも僕達は充分準備が出来ている、それに此のフィルムは自由に君を放し飼いにしておくにも必要なんでね……、でなきや来い」と云つた時も、君は来たがらんと困るからね……、ハハ、……まあ、今日一日ゆつくりと愉しませてあげるよ、我々にもこの映画を作り上げてしまわん事にや、商売にもならんし……」

里枝は、危く失神する処でした、縛られている足を忘れて、里枝の体は椅子の上から崩れ落ちました。

「オット！足が折れたらそれこそ大変々々……」

滝尾は、素早く落ちかけた里枝の裸身を抱き止めると、暫らくその感触を愉しむのでした。

「さて、一通り道具立てを廻つていたゞくかね？」

瀬田の声も愈々淫らな響きを帯び生唾を、咽喉を鳴らして飲み込むのでした。

(絶望のどん底……)

観念し切つている里枝の足首の縄が一旦ほどかれると、滝尾はその効果を驗めす様に云いました。

「いや、待てよ、その前に大変邪魔の様だから、パンティを脱がしてあげようかね？」

床に抱き下ろされた里枝は自由になつた両足を懸命に動かし、わずかに残つた全身の力で、滝尾の無遠慮な動作を拒もうと努力するのでしたが、滝尾はそんな抵抗を愉しみ乍らたつた一枚残されたナイロンのパンティを少しづつ徐々にはがしてしまふと、足首を再びそれも僅かな間を残して縛り、その残つた縄で無理矢理膝から下を

曲げさして、後手にされている手首と一つにし、ごろ／＼と床の上に転がしてしまつたのです。

遂に、黒い無残な猿轡の布切れと、痛々しい縄目だけが、里枝の全身に残されたすべてでありました、もはや流す涙も枯れ果てた里枝は、跪けば跪く程喰い込む手足の縄の苦痛に呻吟しなければならませんでした、又新たな滝尾のあくなき攻撃が加えられ始めたからです、再び玉の汗をふき出し、羞恥と苦悶に猿轡の下から断続的な、呻きがもれ、転がり反り返えり、又転がつて少しでもその苦痛から逃がれようとする本能的な努力も、そう長くは続きませんでした、里枝の肉体がもはや疲れ切り、しびれ切つて動かないのです、すると彼等は一息入れて、又次の新しい責め方に移つて行くのです。

さて、今度は天井から下げられた、二本のロープに足首を別々に縛りつけられ、羞しい形に拡げられましたが、そんな恰好にもあきると、滝尾は、今度は跳び箱の皮製の馬の上に、里枝を仰向けに寝かし付け手足を一ぱいに拡げて、夫々の四本の足に括り付けると、瀬田は、滝尾のあくなき攻撃に身動きも出来ず弓なりに反り返つた姿で、苦悶する里枝を又、カメラにおさめて行きました。

次は、肉体的にも一層苦しい責めを里枝は味わされたのです。それは、二組の鉄棒器機が利用されたのです、五尺と八尺の異つた高さの水平になつた鉄棒に、或は逆さに或は反り返えり、跨がされた姿でその手足の先だけで縛り付けられ責め通され、その全身の重さに更に力を加えるため椅子を乗せられたりして、喰い込む縄目に手も足も、ひきちぎられる思いをさせられました、しかも彼等は、その猿轡を今度は取り除いてしまひ、その血を吐く様な悲鳴を聞いては愉しむのでした、次はパイプ製の椅子の番でした、里枝は、羞し

くも、その可愛い二つの半球を白々と突き出した形に、押し曲げられて縛りつけられました。

しかし、まだ彼等の手は弛められないどころか、一層残忍な責めへと移行して行くのでした、木製の箱の様な椅子にはめ込まれ、滑車で上下するロープに又、縛り付けられ組の様な白木のベツトへそして梯子へ。……

最後が例の予科練の使った巨大なリングでした、全裸の四肢をいっぱい伸ばして広げても尚寸法が少し不足でした、そこで一旦皮のベルトで縛られた四肢を、別々にその四ヶ所の金具に固定して、三六〇度、好みの角度にするのはぐりと廻せばこと足りる便利な責め道具は、一番長く利用されました。

凡そ、彼等の考えられるあらゆる責め道具が用意されたこのスタジオで、哀れな白蝶はそのすべての誇を踏みにじられ、そしてその

虐げられたすべての姿が正確にカメラにおさめられてしまったのです、しかもこの悪魔の様な二匹の毒蜘蛛は、その獲えた犠牲をじつくりと愉しむ為に、その次々と加える責苦に里枝がなれて反応がなくなる様なヘマをやらないのでした。

彼等是一个の道具にあきれば、そこに休息の時間を忘れませんでした。だから、遂に里枝がその積み重ねられた、余りにも深くそして大きな精神的な打撃と、肉体的疲労で、動けなくなり、意識もかすれ、どろの様な無残な沈黙が来るまで、彼等は昼食も夕食も忘れて、只責めの醍醐味に酔いしれていました。

そして、今や死んだ様になつてしまつた全裸の里枝を中に挟んでこの地獄のスタジオは、その高い明り窓に漸く黄昏の色をみせていました。

(未完)

アブノーマル

フェアリー

Adnormal Fairy

三島俊夫

人間の生活は肉と霊との調和的結合によつて始めて完全なのである。故に精神生活にのみ偏する事は本来の人間生活にとつて奇形であり変態である

〇 // 女を縛らない男など興味ないわ // こんな事を公言する娘もある

〇 女が特定の男に対して抱く犠牲本能の力は想像以上に強いものである。これは彼女の羞恥を以て制することが出来ない。

〇 気心の分つた男の人にしてしたら女は何でもさすわ、反対に嫌な男だつたら物言うのも嫌ですの、女つてそんなものなのよ。

〇 娼妓は客から裸体を強要されても絶対に見せない。彼女達にも羞恥心はある。然し馴染の客から写真をとらしてくれと頼まれれば、いさぎよく裸になる。

〇 概して男よりも女の方にマゾヒズムの傾向が強い。女のマゾヒズムは分娩の回数を重ねるに従つて自分の(お腹を痛める度に)強まつてゆく。

〇 万引の現場を刑事に捕えられた時に異様な性的興奮を覚えた女があるという。

〇 商売女にどうして処女を失つたか?ときいてみると、強姦されたの無理矢理に、と答えるのが案外多い。女の被虐心理か、はたまた見栄か、そのところは不明。

〇 モデル女が下着を脱ぐ瞬間を人に見られるのは非常に羞恥を感じずる。然しそんな時強い性感を覚えるという女がある。

責めの作家と誤られて

松井香代子

松井先生……とおよびするより、お姉様とおよびすることをお許し下さいませ。

お姉様

私はお詫びしなければならぬのです。

松井籟子というお姉様のお名前を、たつた一度ある女が偽つて使つたとしたら、お怒りになりますでしょうねでも、松井というのは、本当に私が親から受けついでた姓なのです。もしかしたら、お姉様には他のお名前がおりになつて、松井籟子というのはペンネームかしらと思ひます。だつたら、私の方こそ、この姓を堂々と使つていいはずなのです。でも、籟子という名まで使つたらやつぱりいけないことでしょうね。だけど、私は、その

人に、私が松井籟子ですといったわけではありません。

「松井さんですか？」と聞くのに「そうです」と言つただけですもの。私はべつに正直ではなかつたわけですから。

お姉様、もう一度はじめからお話ししましょう。私は話下手なのに、まして、文章に書くなんてこと、慣れて居りませんし、こんなに最初からしどろもどろで、さぞお読みにくいことと思ひます。

お姉様はよく小説に大阪や神戸のことをお書きになりますが、どこにおすまいなのか私は知りません。この手紙も奇巧の編集部から本当にお姉様の手に渡していただけるのかどうかわかりません。

でも、私がこれから書くと思うことはきつと小説の



材料になると思います。お姉様に美しい文章で小説に書き直していただけたら本当に嬉しいのですけど、もし、もしもこのまゝ奇クにのせていたゞけたら。でもそんなこと夢でしようね。私のへたくそな文章で、奇クの誌上にさし絵を入れてのせていただくことを考えるなんて、大それた夢なのかもしれません。私も一度でいいからお姉様のように小説を書いてみたいのですけれど。会社でも、会社の中で皆で作っている雑誌の編集をやっているのです。文学少女という程乳くさい少女ではありませんけれど、まだオールドミスには間があると思います。文学女性とでもいうのでしようか？

私がお姉様と間違えられたのも、実は私が買いたての原稿用紙をかかえていたからなのです。そうです。間違えられたのです。たゞその間違いを知つていながら「ええ」と答えたのはやつぱり私が悪いのでしようか。でも「ええ」と答えたばかりに、私は今、この暑いのに手首まであるブラウスを着ていなければならなくなつてしまつたのです。

私の両方の腕の白桃のようにピチピチと張切つた皮膚が、赤紫に一面に絞り模様のように痣になつてゐるのです。痛みはもうありませんけれど、そんな腕をあらわに出して、どうして歩けるでしよう。ましてその絞り模様の真中に、赤く、くつきりと二本の線が残つてゐるのを縄目のあとと言わなくてもまさか腕輪のあとだと思つてくれる人はいでしよう。

ちようど三日ほど前のことでした。

会社の帰えりに私は友達と神戸の新開地を歩いていました。

「今日はこの手でいこう、明日はあの手でいこう、夫婦和合の四十八手は裏おもて……えーおひとりさん、はい六十円お返し……さあさあ、今が丁度いいところ……」

ラウドスピーカーから声高に流れ出してくるのに、私は足をとめました。雑な小屋がけの羽目板に、奇クの口絵や写真がはつてゐるのです。奥のつき当りには青い電気がついていて、笹やぶが見えます。私は思わず近づつてみました。花模様の着物の裾がおしひろげられて、白い足を長くのばした女の人形が、地面に転がされてゐるのです。血の通つていないその白い足が、妙に無気味で人形というよりは、死人に白粉を塗つたような、ぞつとするものを感じました。そのわきに、男の人形が手に荒縄を持つて立つてゐるのです。私は肌が粟たつような気がしました。

「松井さん、これ書いたらいいのに……」

そばにいた友達がそう言いました。それは私が会社の雑誌に「新開地ひとり歩記」というのを書くことになつていたのでした。

「そうね」

私は生返事しながら、人形のそばからはなれて、お仕置きにされている女の絵を見ていました。その時私は私の片頬に射すような視線をふと見ると、髪をアツブスタ



イルに結つた木暮実千代のような感じの中年の女の人が口元に微笑をうかべて私をみているのです。その視線をまともに受けると、私は美しい男の人に会つたような恥しさを感じて目を伏せました。でも、そのまゝ、さつさと外へ出てしまうのも、かえつて何だか変だつたので、むしろ知らん顔して、次々に絵や写真を見ていました。

「ねえ、松井さん、入つてみないの？」

友達がそういうのです。実はその友達と私はいつもどきどきしながら奇クを読み合つていたのですが、二人とも恥しくて縛られてみたいと思ひながら、何となくどつちかが言い出すのを待つてゐるみたいな間だつたのです。「松井さんなんか、きつと参考になるわ」

友達は会社の雑誌のことを言つてゐるのですが、友達が「松井さん」と呼ぶ度に、その木暮実千代に似た人の目が私に微笑みかけるのが、その方を見ないでもよくわかるのです。私はその目から逃れるような思いで、入場料の四十円は一寸いたいなと思つたのですが、友達の分と八十円払つて、竹やぶのお人形のわきから、中へ入りました。奇クで読むようなことを、本当に芝居かなんかで見せてくれるのかと思つたのです。

ところが中は床几の様な長い椅子が並べてあつて、正面にスクリーンがあつて、映画をうつしてゐました。入つた時は性病予防の映画で、それが終つて、いまいよ何か面白いものやるのかしらと思つたら、その次に写し出されたのは古い外国の無声映画なのです。私は退屈して

まわりを見廻しました。やつと暗さに目が慣れてくるとまわりの羽目にポスター位の大きさの絵が沢山かけてあるのが見えました。

——寝室で乱れるのは、むしろ奥様のエチケツト——
そんな文章が書いてあつて、長襦袢から乳をのぞかせているような女の絵が書いてあつたり

——奥様の寝化粧、顔ばかりでなく全身を——そんな文章の下でなまめかしく肌を出している絵もありましたけれど、一つも私の期待したような絵も写真もないのです。もつと中の方へ行つたらあるのかもしれないが、男の人が大勢ゐるのに、いち／＼その絵を見て廻るのは恥しかつたので、入口近い所だけ、僅かな光線をたよりに、書いてある言葉を読んでゐました。そのうち、ふつと気がつくとも友達の姿が見えませんでした。映画を見ないで一緒に絵を見て歩いてゐたと思つてゐたのですが、絵につられて観客席の前の方へ入つて行つてしまつたのかもしれない。私はしばらく入口近い所に立つて待つてゐたのですが、出て来ないしそこにひとりで立つてゐるのは何だか不安な感じがしたので、出て来てしまひました。外へ出る時に、見るともなく、もう一度私の目にとびこんできた人形の白い足と、男の人形の持つてゐる縄が私の体の奥底をゆすぶるような、変な気持がしました。そのまゝ、ひとりで神戸新聞の方へ歩いて行く私を「あ、失礼ですが……」と、

後からよびとめたのは、さつきの小暮実千代に似た人



でした。

「本当に失礼ですけど、あのう、奇譚クラブという雑誌御存知ではないでしょうか……」

というのです。

「ええ」

と、私はうなずきました。だって、知っているんですもの。するとその人は

「やつぱり……」

と微笑んで

「私のカンが当たりましたわ。おつれの方が松井さんて仰言つたのでピンとききましたの。場所があんな所でしようフフ、」

と意味あり気に笑つたのは、大方、同好の士よという意味だつたのかもしれませんが。

「私、松井さんのものみんな読ましていただいていますのよ。ねえ、そこで冷たいものでも召上りませんか？」という女の人に、私は私が松井籟子さんと間違えられたのだとわかつたのです。

私がどうしようかと思つてゐるのに、その人は並んで歩き出すと

「女のくせにあんな見世物を見ていて、私、何だか気が引けていましたの。そしたら、あんな達も同じように見てらしたでしょう？ ああ、やつぱり女の方でも私と同じようにあつたものに興味もつ方もあるんやな思いましたん。原稿用紙持つてはるでしょう？、変やな、何か小

説でも書きはんのと違うかいな思うてそれとなくお話し聞いているうちに、ははんと氣いづきましたの。松井さんやつたら、うち、フアンやさかい、一度お話ししてみたい、でも、もし違つてたらけつたいやし……。」

その人はだんだん大阪弁になり、そうかと思うと、きれいな江戸ツ子でしゃべりたてるのです。私はもう、「実は松井は松井ですけど、違うんです」と、よう言えなくなつてしまいました。

喫茶店へ入ると、メニューを見ながら

「松井さん、ようお酒のこと書いてはるけど、お好きなんでしよう？」

と、大阪弁と江戸ツ子とまぜた言葉で聞くのです。

お姉様はお酒好きかどうか知りませんが、私はビールならのめるのです。父がノンベンなので相手をしているうちに強くなつたらしいのですが、会社の宴会でびつくりされる位で、まさかひとり、のむようなこともありません。でもその日は何だか妙に興奮していたのでしよう冷たいビールがのんでみたいように思いました。

それからその女の人とそこでビールをのんで、出てから又もう一軒行つて、三軒目に行つたお店で電話を借りて、今日はお友達の家へ泊ると近所の魚屋さんからうちへことづけてもらつた頃は、いつぱしの小説家きどりでそんなじだらくさをたのしむ氣持で一杯でした。

前おきが随分長くなりましたが、折角私の本当に経験したことを、作りあげたことのように思われると癪なの



で、だらだらと書いてしまいました。でも、私の書いたことは本当はこれからさきなのです。

タクシーに乗せられて、どこをどう走ったのかよくわかりません。止った所は大きなお家ばかり並んでいて、草の匂いが夜気の中に漂っていました、(こういう文章はお姉様おとくだから、あまりまねしていると笑われそう……)

「どうぞ」

と女の人が促したので、大きな門の横の小さなくぐり戸を入って玄関の前に立ちました。ベルを押すと中の鍵をはずしてあけてくれたのは男の人でした。

「お帰り」

静かにそういう人は女の人の弟のようによく似て美しい人でした。お小姓の姿をさせたらよく似合いそうな感じ、私は何となくまぶしいような気がしました。

女の人といい、その男の人といい、美しかったので私はつい気をゆるしてしまつたのだと思います。もつと恐いような大男や、お姉様の「淫火」の中の松枝のような女の人だつたら、私もまさか一緒にビールをのんだりしなかつたでしょうし、その家へ上りもしないで逃げ帰えたことでしょう。誰でも美しい人には惹かれます。その美しい女の人や、お小姓のような華奢な人が、あんなにも惨酷なことをしようとは、誰が思うでしょう。

お庭のわりには小さな家でしたが、お縁側も広く廻り縁になつていて、風雅な建て方をしてあるのが、私のよ

うな俗人にもわかりました。女中さんもないのか、ひとつそりとして、虫がしきりに鳴いていました。

庭に面したお座敷で又その人は冷たいビールを持つて来てすすめてくれましたが、私はもう飲めませんでしたすると、甘い口あたりのいいカクテルのようなものを出してくれました。それが反つてビールよりは酔うようでした。

「松井さんはいつたいマゾなの？ サジなの？……」

その人は聞きました。

「さあ？……」

私はあいまいに微笑をすると

「やつぱり縛られてみないと、本当の感じ書けないでしょう？ 誰に縛つてもらいはるの？」

と聞くので、私は又

「そうね……」

と、言葉を洩りました。だつて、私は松井籟子さんと違うんですもの、どう答えたらいいのでしょうか。

するとその人は

「ねえ、私に縛らせてよ。いいでしょう？ 今度書くのにきつと参考になるわ。ねえ、一寸だけ……」

そういうのです。私も酔っていましたし、前にも書いたように、そんな美しい人がひどいことをするなんて思えなかつたので、

「あんまり痛くしちやいやよ」

そういつて、手を自分から後に廻しました。



その人は私の後に立つて来て

「皺にするといけないから、これおぬぎなさいね」

と、ブラウスのボタンをはずしました。そして短い紐で手首だけ後手に縛ったのです。乳首のさきが、絹のスリップからポツンととび出しているのが何だか恥しくて私は自然うなだれて目を伏せていました。

すると、いつの間に用意したのか、細い真田紐がぐつと胸をしめるのです。そして手首は思いきり上へ押しあげられ、紐は手首にからませて、のどへ廻わされましたそれから又別の紐を二の腕に廻わして後へ引っぱられたので、私の上半身は背中の中へ固定されたように動けなくなつてしまいました。

「さあ、これもぬぐのよ」

その人はスカートまでとろうとします。

「もういや、ほどいて」

私は言いましたが

「まだこれからよ」

そう平然という

「一寸手を貸して」

と、奥へ向つて呼びました。

男の人は冷たい無表情な顔で私の足を押さえました。

二人がかりではかないません。スカートも下ばきもとられてしまったのです。

「さあ、あなたは私の囚人よ。囚人が座敷にいるのは変よ、下へおりなさい」

と、私の縄尻をもつて引立てようとするのです。

「何故そんなひどいことなされるの、ほどいてよ。さもないと大きな声出すわよ」

と、私は言いました。

「出してもいいわよ。誰も助けに来ないわよ。それが私達の遊びだつてこと、近所の人は知ってるわ。はじめは驚いたらしいけど……。それに、聞えるつたつて僅かよここは庭が広いし、お隣も庭が広いから、少し位大きな声を出しても大丈夫……」

女の人は笑いながら言う

「今日は松井さんをたつぷり苛めてあげるわ。いい小説が書けたら私に感謝なさいね、さあ、庭へおりなさい」私は椽側から突とばされて、地面に這うように転んでしまいました。そのまゝ起き上ることも出来ません。

「起きられないの？起きないと水をかけるわよ」

女の人はバケツで水をくんでくると、私の背中へざあつとあけました。

「痛いことは徐々にしてあげるわね、水なら痛くないでしょう？」

そう言うのですが、縛った紐がよけいきつくなつて胸や腕をしめつけます。

「さあ、起きなさい。起きられないの？」

今度は竹の棒を私の胸に入れて起すのですが、上半身が起きててもまだその棒で突きつけるので、私は今度仰向けに転んでしまいました。絹のスリップが水にぬれて、



乳首が黒く透け、おへその穴がへこみ、その下でもりあがつている体の線がそのままあらわになるのが、裸体にされたと同じように羞しく、私は何とかして起き上ろうとしました。足はまだ縛られていませんでしたから、二本の足を真直のぼして上へあげて、腰ではずみをつけて私は上半身をおこすことが出来ました。

「もうかんにんして頂だい。お願いだからほどこいて頂だい」

私は言いましたが、

「フフ、、あなたはマゾじやないの？サジなの？さあどつちななの？白状しなさい」

と、竹の棒で、やつと起した私の首を、私の足の上へぎゅう／＼と押しつけるのです。

「どつちでもないわ」

私がいうと

「嘘おつしやい」

いきなりピシツとそれで背中を打たれました。

「あつ！」

と、私はもう言葉も出ません。

「さあ、言いなさい、どつちななの？こうされるといい気持でしょう？え？どう？」

言いながら、ピシツ、ピシツとふりおろす竹の下で、私は顔を地面にすりつけるように転つてしまいました。口の中へ土が入って、ジャリジャリと口の中にひろがります。転つたら転つたなり、ただ僅かに自由な足で地面

をこするようにして逃げようとしたが、竹の棒は容赦をしてくれません。よし、又ふりおろされない間があつたとしても、逃げるよりは、ハア、ハアと荒い息を吐く方がさきでした。

水で濡れている上に、地面の上を転げまわつたので、顔といわず体といわず泥まみれで、それにすりむいた血がにじんで、私は乞食の様な姿でした。

でも不思議なことには、そんなにされながら、私はもう大きな声をたてようとは思いませんでした。それよりも、何だかしびれるような喜びがひたひたと波のよせるように私の体中を流れていきました。

「手が痛くなつたわ。少し代つてよ」

女の人は男の人に言いました。

それまで縁側でだまつて見ていた男の人は

「もう疲れたの？いくじがないな」

と笑つて庭へおりてくると、荒縄で、今まで僅かに自由だつた足を、足首を合わせてくくつてしまいました。

そして、足首の縄と、後手に縛つた縄を一つに結んでその縄尻をとると

「さあ、あの松の木の上まで行きなさい」

というのです。

けれど、足と手と一つに縛られて、どうして歩くことが出来るでしょう。

「膝で歩いて行くんだよ」

片手で縄尻をとり、片手で竹の棒を持つて、やつと、



よろ／＼と動いている私の背を打つたり、突いたりするのは、前へのめるのは縄尻を引いて支えてくれますが、膝の下に石を踏んだ痛さに、体の重心を失うと、横ざまに倒れてしまいます。それを引き起すと、膝の下石よりもつと痛い竹の鞭が、肩や背中にとぶのです。乞食の様に泥まみれの私は足のないなりんぼの様な姿で、松の木までやつと歩いて行きました。いいえ、それは歩くというより、動いたという方が適切です。

「御苦労さま、少し静かにさせてあげるよ」

男はからかうようにいうと、足の縄をほどいてくれましたが、今度はそこに置いてある竹の縁台へまたがらせると、縁台の脚へ私の足を片足つつ結えてしまいました。そして、別の長い縄を輪にして私の首にかけると、松の枝にその縄を投つて、枝をくぐらせて、ぐんと引張りました。私は首を吊られて上半身をのびしましたが、足は縁台の脚に縛りつけられているのです。亀の子が首だけ吊らされたように、のどの皮が破れるかと思う程のぼして、目を白黒させました。

男の人は今度はその縄を、私の後手にくぐられた手の間にかけて、もう一度逆に松の枝を通して引張りました。肩から二の腕へかけて、筋が攀つたようにピンと張つてその痛さは息が止る程でした。身動きのしようもありません。何という奇妙な恰好でしょう。

「どう？どんな気持？いいさまね」

男はそういうと、まだそれでも足りないのか。スリッ

プの裾をたくし上げました。私のお尻は皮をむかれた果物の様に、くるつととび出したことでしょう。私にはそれは見られようありません。男はビシャツと平手でそのお尻をたたいて、

「いい音がする」

と笑うのです。

たたかれて、ピクツと私は動きましたが、お尻の痛みより、のどや手の痛さの方がたえられない位で、私は又亀のようにじつとしていたより仕方がありませんでした。「フフ、とうとう静かになつたわね」

さつきの女の人が近づいてくると、

「少しいい気持にしてあげるわね」

そう言つて、私の乳首をいじり出したのです。何ともいえない電気の様なのが、体中を走り出しました。

しかし、それはすぐ呻めき声に変わりました。何故なら丸裸になつている私のお尻を、男の人が羽根のようなものでくすぐり出したからです。

前からは女の人が乳首を両手ぐでてあそんでいるのです。私は泣くような、笑うような声で呻めきました。呻めくだけで身動きも出きません。ただ

「うーっ！、ヒーツ！、ウフフツツ！、ああっ！うっうっ！ ヒーツ！」

笛を吹くような、自分の声とも思えない奇妙な声で、私は呻めきました。

いつか男の人の手は羽根を捨てて、おかしな動きをし



出しました。私は手足を縛られ、首まで吊るされたみじめな恰好のまゝ、男の指に最後の喜びの悲鳴をあげなければならなかったのです。

松井籟子様

それから私がどうされたか、もうあまり長くなるからやめにします。私はあくまで一日綿のように疲れはてた体で眠りをむさぼりました。

夜になつてから、又自動車でおくられて神戸まで帰えたのです。

新しいスリッパと、新しい白いデシンの長袖のブラウスを私はその女の人の人から貰いました。幸、父は出張中であつたので、何とかと

【読者通信】

(投稿歓迎)

私は昨年九月に床屋で貴誌六月号を拝見してから世の中で私が今迄求めていた最も価値ある本が既に発行されているのに歓喜したものでした。それまで私がひそかに独りて妄想して自ら慰めていた悦びの歓喜と懊惱が貴誌によつて余す処なく尽され同じ経験と更に違つた経験による悦びの境地に狂喜する多くの男女の姿に只もう言葉もない位私の官能は刺戟されたのでした。それ以来ずっと毎号貴誌を読んでいます。貴誌の発行がも

う待ち遠しくてたまらず手に入ると数日間には繰返して読んで独り秘かに楽しんで居ります。最近号では十月号口絵、南川和子さんの「針に刺された女」の緊縛の姿態と表情が特に私の官能を刺戟しました。同じく十月号の都築峯子描く「瀕死の白鳥」は文章面共に私の好みにかない、特に薄いタイツ一枚の緊縛はその縄の掛け方が面の迫力と共に極めて感興をそゝられました。殊に股間のつけ根の縄と腰縄に付いた股間の縦縄の誘惑はこのパレリーナの被縛感を考えただけでも効果的で好きです。生の絵は実に魅力的で好きです。

りつくろふことが出来ましたが、腕やのどに残つた縄のあとは、いつたいいつ消えてくれるのでしょうか。籟子様、あなたのお名を借りたばかりにこんなめに会つた私を自業自得とおわらになりますか？でも私は今になつて、もしかしたら、私を苛めたあの方が、籟子様、あなたではないのかとふと考えています。わざと私を間違えて、私がそれを訂さないのをお腹の中で笑いながら、あんなことをなさつたのではないでしようか。

籟子お姉様、もしそうだったら、私は一寸もお恨みに思つていないということ、申上げて、この長い手紙を終わります。

(おわり)

「体操倉庫」の映画シナリオはアイデア絵共に誰でも妄想で考えることをよくとらえています。とにかく女学生の制服姿は責めの対象としては絶好のもので、男生徒を配した場面は効果的で絵の中にセーラー服を脱がされているのが特によろしい。更に裸体写真を種に初心な女学生を強迫するアイデアは現代の新しい責め方の一つの方法として精神的に貴重なものでしょう。村田誠一さんの「発花杖」は面白かつた。その他淫火、マダム紅鶴、私の想い出等好きな場面が沢山あつた。

東京、KU生



中共引揚者の手記 (二)

虐待の記録

前島芳雄

長くもない獄中生活だったがその間にすっかり私の生の中の性、そして夢にも考えなかつた変態的な享樂を楽しむ人間に変わり果ててしまつていた。そして入獄当時考えて居た死んでも良い、元々自分はある敗戦の時死に損こなつた人間なんだから、と云う考え方に百八十度の転換が来て、何とかして生きたい。もう一度娑婆へ出てあの痺れるような性の喜びを味わいたいと云う。異常な生への執着心が心の底から湧き上つて来た。そして如何な

る取調べにも頑として一言の自白をも拒み続け、遂に約一年を経過した翌年の即ち一九四八年七月二十日釈放された。あのじめ／＼した暗い部屋から出されて青空の下で煙草を腹の底まで吸い込んだ時の嬉しさ、噫、それは私にとつて一生忘れ得ぬ歓喜の瞬間だつた。しかし喜んだのも束の間、私は直ぐ其処から牡丹江市の西端にある国营農場に連れて行かれ、其処で再び格子の入つた部屋を見た時、私は絶望の思いをどうする事も出来なかつた。しかしそれはあとで私の思い違いである事に気が付いた。

私は第四隊の第十二班に入る様に命ぜられ部屋に行つた時その部屋は格子の嵌つた棟とは別だつた。しかし結局はそれも五十歩百歩の違いでしかなかった。班長の指示によると私はこれから一班員として毎日この農場で労働に従事し、外出は許されず、早い話が体裁の良い監獄だつた。勿論話に聞くと、この農場の殆んど全員が囚人あがりで、特に私の見た別棟の格子の嵌つた部屋は、やせ衰えた受刑者達が絶望の中にうごめいていた。班員は皆三十才前後から四十才迄の陽に焼けた黒い顔の楽天的な人間ばかりの中へ来たと云う事だけで、自分自身を慰めた。しかし相変らず日本人は私一人だつた。

その翌日から私の労働は始まつた。朝五時起床、五時半食事、六時から作業開始そして夕方五時迄、毎日々々規則正しい日課が続けられた。この農場全員三百人位だつたが、みんな一緒に働くという事は殆んど無く、大抵は一つの班単位だつたから他の班の者と顔を合すことはなかつた。そんな日課が続いた或る日の夕方、ピシ／＼と裏庭の辺で激しく鞭の鳴る音がした。私はビクツと身体中に

電気がかかったような衝動を受けて熱い血はかけめぐる。

「畜生、また殴り出しやがつたな」

私の前で食後の休みで新聞を読んでいた満人がつぶやいた。

「一体どうしたんだい？」

私が尋ねると、

「あれか、あんな事は時々あるんだよ、仕事に鈍いとか何んとか云つて殴るんだ、そして喜んでるんさ」

「ふーん、そして殴られているのは一体誰だい？」

「恐らく李だろう、十中の八九そうだよ、あいつは殴られるのをかえつて喜んでる変つた奴さ、何なら見て来たら良いよ」

「うん、じゃあんたも一緒に行こうよ」

「いや俺は行かない、あんな事はもう飽き／＼したよ」

私は絶え間なく続く鞭の音にいても立つてもいらなくなりフラ／＼と裏庭へ行く、秋の夕暮は美しい。今しがた太陽の沈んだ地平線は黄金色に輝きわたつて静かに赤い雲が流れている。

私は塀伝いに裏の軒の所まで行つた。ピシ／＼と鳴る音の合い間に人間の声とも何と

も形容のつかないヒーツ／＼と云う悲鳴が聞える。凡そ十人ばかりの人ばかりで真中に倒れて蛙のようにのびた男の背中へ盛んに鞭が喰い込む、私は暫くじつと軒下から眺めていたが、身体中をかけめぐる興奮の血をどうすることも出来ず憑かれたようにその人垣の中へ頭を突込んでいた。

「アツ！」

私は倒れている男の横顔を見て思わず声を出した、幸に殴る事に懸命な彼等は気が付かない、何と後手に縛り上げられ泥んこになつて地面をのたうち廻っているのはあの李だ。私の頭の中を走馬燈の如く走る縛られた李の姿、私の腕に拘かれた李、そして火のような息を吐きながら私に挑んでいた李がグル／＼と駆け廻る。懐しさ、そして地獄で仏に会つたような嬉しさ、

李は十人の看守達の足の下で苦しそうに悶えている。私は足の先から頭の先迄じ／＼と昇つて行く熱い血をどうする事も出来なかつた。その時の私の表情を若し彼等が見たとしたら驚いたに違いない。眼球はとび出さんばかりに只じつと李の苦しんでいる肉体を見つめ、手は小刻みに震えている。彼等十人もサディストなのか、がんにがら



めに縛つた李に容赦なき鞭をピシピシと加えている。そしてその顔にはかすかな笑みさえ浮べ、うつすらと紅潮している。じつと見ていた私の心はもうどうすることも出来ない、前後を考えないとはこんな事なのか、私はい

きなりパツと彼等の中に飛び込んだ。彼等はびつくりしてサツと両方に別れる。皆の手にした鞭、いきなり私はその一人に飛びついて鞭をもぎ取った。呆然としている彼等を尻目に、

「李！判るか俺が」

云うのと腕の上のどピューと気持の良い鞭の鳴るのが同時だった。

「ウーン」

李はチラツと私の顔を見た。そして眼の端にほんの一瞬チラツと嬉しそうな微笑の流れしかしそれがすぐ物凄いい形相に変わった。血走った眼、餓えたような眼、ピシーピシー鞭は鳴り続くあゝ何と云う胸のすくような快感の極致、みる／＼李の身体に紫色のみみずのよ／＼な腫れ、苦悶に歪む顔、眼の端が所々破れて血が飛ぶ私は只もうあの殴りたい／＼と思ひ続けた一年に亘る獄中生活の結晶のはけ口に、無茶苦茶、腕を振り続けた。

「おい、一寸待て、もう良いだろう」

「おい、止める／＼」

グツと両方から私の腕を太い腕が掴んだ。それでも尚殴ろうとする私を

「おい、もうやめると云うのがわからんか」

私はハツと我に返った。彼等はグルツと取

巻いている、私の顔は真赤だ。

「おい、お前は四五日前来た日本人じゃないか？」

「一体どうしたんだ、お前、前にこの男から何かされた事があるんかい？」

彼等は今先の私の動作と言葉からして前に私が、李の為に何かされて復讐していると感違ひしているのだ。

「いや、別に、只この男あんまり悪い事ばかりすると皆に聞かされたもんですからついでに私はしどろもどろになつて妙な云い訳をした。

「そうか、いや別にかくさなくても良いよ、若し恨みがあるんならもつと／＼別な方法で仕返しをゆつくりすれば良い。元々こいつは死刑にする価値があるんだからなあ」

「いえ、別に……」

私は極力何気無いように見せようとした。うつかり口を滑らして変な事になれば僕迄命が危い、男色行為は死刑に価する事はよく知つてゐる。そして又李を殺されては困る。お互いに心の底まで知り合つた李。私は長々と伸びている李を抱き起して思い切り強く抱き締めてやりたくてたまらない。そして私も李に殴つて貰いたい、そして又あの獄中で味わ

つたあの変態的享樂に浸りたい。

私はじつと愛の光に輝く眼で李を見つめてゐる。十人の幹部は何かこそ／＼囁いてゐる。私は此所に長居する非を知つた。危い、秘密をあばかれるかも知れない。未だしつかり握つていた鞭をポンと投げ出して歩き出した。誰も何も云わないが二十の眼が鋭く後に注がれてゐるのがはつきり感じられる。後で長くのびている李にも気が惹かれる思い。私はしかし黙つて部屋の方へ歩いて行つた。あたりは早や夕焼も薄くなり街の灯が点々と美しく輝いてゐた。

三

その夜の寝苦しい事、私は転々として眠れなかつた。ウト／＼とするとすぐ現実の李の顔が私に迫つて来る。がんじがらめに縛られて身体中ミミズばれのした李、さも嬉しそうにニコ／＼笑つてゐる顔、

「おい、李！」

私は思わず両腕を拡げて彼に抱き付こうとして、フツと眼を覚した。命迄かけた恋とはこんなだろうか、とう／＼夜が明けるまで私は、李の姿を追い続け、何とかしてもう一度彼と一つ床に寝たいと色々考え続けた。し

かし此所では人も多く、又憑に聞くとあの格子入りの別棟は重罪犯人ばかりで彼との交渉も仲々容易で無いとの事であつた。

一夜寝なかつたにもかゝらず妙にさえた頭、眼だけは充血して外の人は形相の変つた私を変に思っているだろう。一日の

労働が終つて夕方休みの一刻私はどうする事も出来ない心でフラトと又裏庭へ出た。昨日彼が殴られていた所は只その當時を思い起させる如く、一面に踏みつけられた草、四囲は只静か、私は眼をつむり手を胸に当てゝじつと李の昨日の姿を追つていった。と、

「おい、日本人は居ないか、場長が呼んでるよ」

部屋の方で声がした。私はハツと我にかえつて足早に部屋迄帰ると、入口で出合い頭に憑が

「おい、場長がすぐ来いと云つてた

ぜ、早く行けよ、あいつはうるさいからな」

「うん……」

私は幹部室へ一步足を踏み入れてビクツとした。何だか重苦しい妙な雰囲気、室の中には四五人の幹部が思い／＼の姿で椅子に坐つ

ている。昨日いた者の顔も見える。椅子に坐つた私に場長が云う。

「どうだい前島、身体はきつくないか」

「ええ、別に……」

場長の眼は鋭く光る。私の顔から何かを読

「おい前島、お前李とどういふ関係があるんだ」

いきなり場長が私に云つた。頃のとび出た細長い顔、眼だけは心の底迄見透すようにじつと冷たく光っている。

「別に何も……」

「何、何も無い、嘘を云つても駄目だ、絶対にわし眼は誤魔化せるもんじやない。おいッ、全部はつきりと云つてしまえ」

「しかし」

「何がしかしだ、お前が秘密にしたような事なら秘密にしてやる。又恨みがあるなら晴らしてやる」

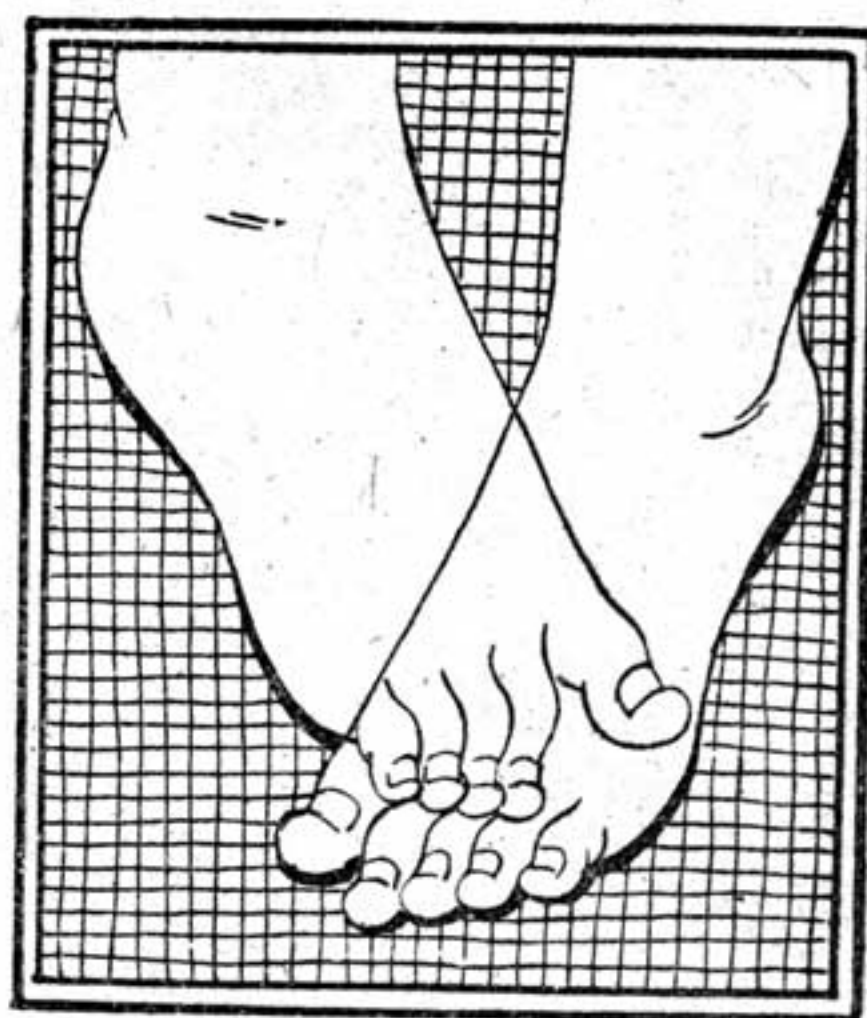
この場長も私が昨日李を殴つたのを、何か恨みがあつてやつたように思っているらしい。

「いえ、本当に何も無いのです。只私が殴られている李を見てみると、彼は少しも痛そうな顔をせず、かえ

つて嬉しそうですね、だからついふら／＼と」

「嘘をつけ嘘を、どうしても云わないのか、よしそんならお前の身体に云わせてやろう」場長は傍に立つてた丸坊主にした男に眼く





女の

足の

魅力

金丸 壯吉

馬族保氏の「祭壇に君臨する脚」(七月

号)をよんで女性の足の魅力の記事を小生の見た本のうちから二三書いて見ます。

りべらる三月号銀座回春室の内より――

「ほんとに好きなの、だからボクお姉さんが喜ぶんだつたらどんなことでもするよ、犬みたいになつて……」

榎子はうつとり臉を閉じて後から抱きかかえる少年に身体をもたせていた。情慾がたけり肩ではげしく呼吸をして囁き続ける少年の声がもえひろがつて官能の火に油をそゝいだ。

「見せて、見せてお姉さんの身体……」

伊達巻がとられ腰紐が一、二本蛇のよう

に畳の上にくねつた。

「いやよ、そんなことジローちゃんたら」

素早く動く少年の手をつかむ榎子の腕にはもう力がぬけていた。白く光る丸い肩がすべり落ちる緋色の下からあらわれた羞恥がおしよせる肉のもだえにかき消えされた両手で胸をかくしたゆつとり脂ののつた裸身が少年の手に抱えられおず／＼と部屋の真中に立ち上つた。

「お姉さん……」

うめくように少年はいつてパンティを引き下し、そのまゝ足元にかがみこんだ。彼の手で脱ぎとられた足袋が彼の身についている最後のものだった小さい足はほんのり

ばせした。その男は机の傍の箱の蓋を開けると大きな鉄の環を取り出した。私は無神経の人間のように只それを呆然と眺めていた。

「どうだ云わねえか、痛い目を見るぞ」

場長は又駄目を押した。私は只黙つて返事もしなかつた。鉄の環それは手錠だった。六分鉄筋を曲げて作つた重さ五六百匁もあるだろうか、私は黙つて両手を差し出した。それは本当に無意識な動作だった。私は今手錠を嵌められる。そして必ずその後にくる殴打、それをうつとりと夢見て居たのだ。恐怖心と歡喜の入り混つたそれはたとえようのない心情、

「何んだ、貴様、自分から手錠をはめてほしいのか」

はつと吾にかえつた時にはガチツと手錠が両手首に喰い込んでいた。

「よし面白い、小日本の鬼つ子が、一つ呻らしてやるぞ」

場長は立ち上つた。私はフツと軽い後悔を覚えた。こんな所を見せてしまつて彼等は一切何んと思うだろう……。

しかし私の心、精神は知らず／＼の間に何かしら云いようのない安らかさになつて来ていた。ずつしりと重い鉄がひんやりと手首に

桃色の肉が柔そうにもり上り、土踏ますが痛々しように畳をふんで立つていた。少年はピタットその足の甲に唇をつけた足元から細かい戦慄が電流のように貫いた。膝をかがめてゆら／＼ながら、やつと立つている模子の裸身がもろい陶器のように白く崩れた――。

艶本「トウル・ラブ」中淫らな女神より（人間探究）ふるえる手先で少年の上着やチヨツキのボタンをはずしズボンもワイシャツも脱して雪のような、シユミーズやズロースをはかせてくれるその度に身体中の敏感な所へ天使の翼のような手ざわりがする。パートンは気が遠くなりそうだった。彼は女のスリツパのリボンを結ぶときは、思わず踵のところへ唇を当てしまったのである――。

西洋のことわざに天国は乙女のひざと馬の背にあり、というのがあります。

映画にも馬は一役買った立派な三枚目です。私が今までに見たマゾ的な女性、乗馬の二三をかいてみます。大正六年頃、大阪中央公会堂で映画祭の催しがありました。各社映画スターの挨拶。その中に夏川静江も顔を見せました。

それに前の松竹、日活の作品の上映がありました。今も尚、印象に残るのは当時同社のドルバコとうたわれた酒井米子の乗馬です。筋は金持の遺産を受けた米子の扮する未亡人、或日彼女は乗馬服で出て来ます。

書生は馬をひいて来て女主人の長靴の前に身をかがめて拍車をつけ主人がアブミに片足掛けて乗るのを書生が片方の靴に手をかき、助けて乗せるとたん主人は馬よりずり下りて書生の手にした鞭ではげしくうつのでした。その時の足の美しい線……今も忘れることが出来ません。昭和の初年に米国映画で「フーピー」という天然色映画でした。インディアンの娘と白人の青年の悲恋と云った物の中におどりをおりこみ、男の肩に女がのつてかかっただけ、男の足を足で踏んまえて縄をかける動作をしたり小高い丘で裸女が馬乗りで現れ小走りに下手の両側に別れて片膝を立て両手を前後にすると今度は美しい女が次々と出て来ます。孔雀が羽をひろげたように最後に馬乗の女が皆パンティだけでそれに色々な石が光つて居ります。先頭の女は頭にインディアンの長になぞらえて白い羽根をつけて二人の男が棒をもち又一人の男は馬の口を取って出

気持がよい。

「おい、服を脱がしてしまえ、服を」

鞭を手に取った場長が大声で怒鳴った、もう傍の男はすぐ私の手錠をはずして服をむしり取った、私は別に抵抗をせず彼のなすまゝにしていた。

「ズボンも」

とう／＼私はパンツ一つの裸にされ再び手錠をかけられた。

「どうだ、前島、みんな云つてしまふか、それとも可愛がつて貰うか」

私はその時もうどうする事も出来ない自己妄想に陥入つていた、只鞭が今鳴るか、今身体に当るか、とそればかりを期待して外の事は頭になかった、彼の言葉に返事なんかすると私の夢が破れてしまいそうで惜しくたまらないといった気持だった。

「ふん、しぶとい奴め」

云うのと一緒に私の背へ鞭がうなつた、当たった所の筋肉がピリツと痙攣する、一つ二つ三つ、私は不思議と痛い感じが全然なく、電気にかゝつていような一瞬又一瞬、むず痒いような、疼くような一瞬、それでもだんだんと私の我慢して坐つていた身体が前に崩れて来る、当る度にウツ／＼と口をついて出る

て来ます。次々と出る女も裸で馬上手綱をあやつりながらゆら／＼と馬の背にゆられながら三人、四人と坂を下つてまいります馬腹にたれたのび／＼した美しい足——「フーピー」と呼びたいような魅力のある一刻でした。

今の新世界グランドがいろは座といつていた頃、帝キネ映画「大熊小熊」というのがありました。杉村千恵子という子役が巡礼姿で淋しい山中で父が急死し後に残されて途方にくれて泣いていました。そこへ山賊の頭、大熊がでて来て娘を山家につれ帰り親切にいたわります。或る日その大熊は馬になつて娘を喜ばせます。娘は彼の背中にまたがりそれに続いて乾分も四ツ這になつてあるきます。その中に小熊という副頭も人質となつた十八位の娘に己の背を向けてのれと云います。年頃の娘の事で恥しく顔を赤くして小熊の背に横乗りしに腰をおろします。そしてハイドウ／＼の場面がしばらく続くカメラの焦点は巡礼娘の膝のあたりにピント合せて居りました。次には地面から五尺高くした床の上に大熊と小熊と二人の娘が居ります。手下共は又地面にむしろを敷いて雑然として居る場面、床の

上の娘二人が下におりるのには手下共の人間階段の上を渡つて行くのです——。

次は新世界座でサーカス映画、それは馬にまたがった娘をカメラは後から見せますサーカス娘は手綱を片手に足を開いて馬をけり鞭をうつ、すると馬は前に出よう／＼とする。とたん手綱をしぼつた娘、馬は彼女の腰下にあがきながら後へ下ります。又ムチが尻に強く当られる出鼻を足で馬腰を止める進退きわまつてついに尻を地につけるのでした。

絵画的に美しい「春の調べ」というチエツコからの映画、大分カットがあつたようですが高い立木の並ぶ道を馬上の乙女がかけて来ます。彼女はどこへ行くのでしょうか身にシュミーズ一枚の下半身と馬のあがきがうつる馬上にたれた美しいつま先——やがて山中の静かな湖水に泳ぐ娘、岸に乗り捨てた馬は彼女のシュミーズをくらにつけたまゝそれをなびかせて何処かへ馳け去ります。後で気のついた娘は困つて居ると一方馬は牧場の馬と顔をよせている。遠くの方でそれを見ていた青年が馬を引いて娘の所にやつてくる。彼女は岸の草に身を伏せています。やがて馬は帰つてきました。

声、次第に弱つてとう／＼私はその場にくずれるように倒れてしまつた、目の前に黒い幕がかゝつたやうで、只かすかにビュービューと鳴る音だけが身体の奥で聞えるだけだつた。そしていつの間にか私は、子供の頃味わつたあの揺籃の中で母の子守唄を聞くやうな恍惚境に入つて行つた、恐らく見ている者や殴っている者の眼には苦痛に歪んだ私の顔が映り呻き声が聞えた事だろうが、私にはそんなその場の光景は全然判らなかつた。

翌日眼を覚したのは自分の布団の中だつた身体中焼けたやうな寝返りする事も出来ない痛さ、外の班の者は皆起きて顔を洗っている、私も無理にも起き上ろうと柱につかまつた。

「ウーン、痛ッ」

自分の身体でありながらまるで云う事をきかない棒のやうにこわばつた身体、私は思わす声を立てた。

「どうだ、大分殴られたな、痛いだろう」

憑が云う、その眼は可哀そうにと云つていゝ、しかしどうにもならない起きなければそれこそどうなるか、私は少しづつ、徐々に身体を起しかけた、気は逸つても身体は駄目だつた、筋肉はこり固まり、骨はバラ／＼にな

娘はいそいで衣を身につけ手綱をとつて草の上を小走りに――。

昭和二十六年の「アマトリア」誌に「奴隸市の帰り」という絵がありました中世期の夫人が白いブラウスを着てスカートから出た足には、ひざまでの靴下をはいて大きな馬の背に右足を平着にかけて横乗りにして後から二人の奴隸の子供が一糸もまとわぬ姿でついてくると云う構図です。この

女主人は市場衆人監視中、足下に膝まづかせた奴隸の肩に足掛けて踏台として馬上の人となつたこのたくましい馬にアブミもない手綱丈の裸馬から想像され更にこの時代にはパンティなどない素足を開いて素股の見える誠にマゾ的な画です。以上雑文で恐れ入りますが（君臨する脚）を続んで感激のあまり私の見たものを書いてみました。

りそうだ、三回も起き上ろうと試みたが、そのまゝバツタリと三回共布団の中に転つて、身動きも出来なくなつた。

「仕方が無い、病気だと云つて寝ろ、誰か幹部が来て何か云うだろう、しかしあんまりだこれじゃ誰だつて参つてしまふよ」

憑はそう云つて飯上げに行つてしまつた。

私はそり／＼と身体中を撫でて見た、所々血の塊りが出来ている、夕は相当ひどく殴られたのだろう、生れて初めての経験だつた。獄中だつてこんな事は一度も無かつたのだ。しかし私は全然悔ゆる気持は起つて来なかつた、むしろ昨夜の恍惚たる苦しみを思い出して独りでに微笑が浮び上つて来るのを押え切れなかつた、それにしても李はどうなつただ

ろう、恐らく彼も私と同じような目に会つたに違いない、しかし私には彼が絶対に私達の秘密をばらすなんてことは無いと確信していた、その後も度々幹部室に連れて行かれ、或る時は縛られて天井に吊り下げられ、又或る時は瓶を粉々に割つた上に坐らされて、李との関係を白状せよと強要された、私の身体中に喰い込んだ縄のあと、鞭のあと、生傷は一日として絶えなかつた。しかしとう／＼私は一言も口を割らずに通した、私が幹部室よりフラフラとよろけながら出て来る時、入り違いに入つて来る李と顔を合せる事も二、三度あつた、そんな時自ずと押え切れない微笑が眼の端に上つて来るのだつた、李もやはり同じだつたのだろう、必ず幹部達にわからな

いようにニコツと笑つて入つて行くのだつたあゝ、何と変つた私達の運命だつたらう、満二十一才、私と李はこのような生活に一種不可解な楽しみを覚えていたのだ。後でわかつた話だが、その時調べている方では私は特務嫌疑、李は窃盗罪だつたがやはり昔特務の手下をしていたような噂があつて二人は必ず何か深い関係があると睨んでいたのだつた。

このような取り調べが約二ヶ月に亘つて続けられた末、私は牡丹江から東安市へ移されたのは早や夏も過ぎ五穀の美しく実つた一九四八年の九月の末だつた。

東安市へ移されてからの私は身体中の傷跡を眺め擦り、李の事、そして縛つて吊された拷問の事、あの鞭の音等がどうしても忘れることが出来なかつた、それは丁度甘い初恋の女を思い出すように、やるせなくいつも心の隅で吐息をついていた、そして東安へ行つてからものゝ二ヶ月も経たない或る日、私はもつともつと悪戯を楽しむ人間になり下る事件に逢着していた。

（未完）

木鼠吉五郎の半生

緑 猛 比 古

三 條 春 彦 画

拷問の好きな男

一

鼠小僧次郎吉の梟されたのが、天保三年の八月土用の事で、強盗乍らも俠氣に富んでいた。義賊と巷間には噂されて、十一代將軍家齊治下の、華美淫蕩に流れた大名、旗本侍等を恐怖の底に陥し入れた。反面封建政治に圧迫された町民のレジスタンスが、鼠小僧の行為を支持し、彼の人気を煽らせる結果となつて、その曝された獄門首に、秘かに香華の絶えなかつたのは、既に講談等で御存知の通りである。

それから二年経つて、今度は播州無宿入墨定蔵事、通称木鼠の吉五郎が縛に就いた。

吉五郎は、鼠小僧亡き後、専ら独り舞台で江戸の巷に跳梁したが、同じ様に義賊と謂われ乍らも鼠小僧程の人気がなかつたのは、彼自身よりも、彼を親分として取巻く無頼の乾分達、即ち、疾風の利吉、見返りの万吉、因幡の清七、入墨の勝五郎の主だった四人の者を始め、十数人の一団が悪徳の限りを尽した為、義賊木鼠吉五郎の美名？は、三門博の浪花節に紹介された「唄入り観音経」位のもので、他には余り残つてはいない。

彼は兵庫縣播磨の某地に生れ、無頼になつてからは、大阪で強盗を働らいて捕り、入墨重敵のお仕置を受けて追放された。其の後江

戸に出て、相変らず悪事を働らいていたが、その度胸と腕のよさに、いつしか乾分も出来て、その頃町民の反抗的であつた旗本や、倉差し、幕府御用商人等を主として侵し、時にはそれによつて得た財物の何%かを貧民にバラ卷いて、人気獲得に努めた事もあつた。彼等一味が、江戸町奉行配下の組廻りの者に召捕られた動機となる犯罪は、その頃一代で富を築いたと云われる。それだけに多少は因業な面もあつた遠州屋忠蔵方で旅人に扮した乾分数人と共に、鼈甲櫛四枚を騙りとり、それを四両で叩き売つたのが発覚したもので、この程度の事件なら重くて遠島か重敵ですん

なのであるが、運の悪いことに、吉五郎始め、同類の万吉、清七、勝五郎が何れも入墨者の所謂前科者であつた為、取調べにつれてその一人から余罪が暴露し、之等の一味が江戸を騒がした盗賊の一団と判明して遂には何れも死罪になつたもので、彼等はこの時、取調べの進むにつれて、相当手酷い拷問をうけたらしい。吉五郎を除く三名は、両三度の縛敵と、石抱きで音をあげて罪状を白状し、あつさり片附いたが、肝心の首領と目される吉五郎だけは、粘りに粘り、足掛け三年、前後二十八回に亘る凄惨な拷問をも甘受して、遂に白状せず、流石峻烈な町奉行取調べの者もほと／＼手を焼いて、この不死身の男を、記録にも稀なる察斗詰めと称する方法で裁許をうけ、彼に死罪を申し渡して処分した。

私は茲で、講談的な吉五郎の活躍より、彼が度重なる苛酷な拷問に打克つた、悪人乍らも、その強固な意力の強さと、彼が何故死罪を覚悟し乍らも最後まで拷問をうけ続けしてきたかに興味を覚え、彼が典型的マゾヒストであつた事を立証する幕府のお伺書と、その拷問の顛末を詳しく茲に紹介して見たいと思う。



二

木鼠吉五郎の召捕られたのは天保五年六月中旬頃でその年二月江戸に大火があつて、大半が灰燼に帰した為、三月から老中となつた水野忠邦は、今の戒厳令の様なものを敷いて江戸市中の取締りは特に厳しくした。彼は又

天保の改革を目指し、文武を奨励した為に、当時奢侈に流れた江戸市民から煙たがられ、市中には、

「世の中にか(蚊)はどうるさいものはなし
ぶんぶ(文武)／＼で夜もねられず」

と云つた落首さえ貼られた程で、吉五郎外三名の無頼は、この厳しい改革の取締りの網に引つ掛り、普通なら軽くて済んだ罪科が、峻烈なる責問に、遂に余罪暴露し、茲に幕府の拷問実記にも記録に残る、空前絶後の吉五郎拷問録が生み出されたのである。

天保五年七月二十一日。北町奉行榊原主計頭エノカミの掛りの下に吉五郎の拷問の幕はきつて落された。

その日、御徒目付によつて、白衣に手鎖の姿で、白洲に曳き出された彼は、厳しく奉行に罪状の自白を迫られたが、遂に白状せず、寧ろ太々しく、拷問恐るゝに足らずと云つた面構えで、髭面に眼許り炯々と光らせて、奉行をにらんでいた。

気の弱い者なら、白州板塀際におかれてある抱石、真木ソコバシ(又は十露盤板とも云う、)太縄、箒尻のたぐいなどを見たゞけで胆を潰してしまふが、――又そうした効果を狙つての示威でもあるが――吉五郎流石、一流の悪人

だけあつて、おいそれとは脅かされない。

そこで先ず、拷問の手始めに縛敵となつたこれは白州で行われるもので、打役は直ちに吉五郎の手鎖を外し、諸肌を脱がせて、下男と共に太縄で彼を本縄に縛り直す。両手を後手に縛つて吊り上げる様に肩まで締め上げ縄の端を体の前後に振分けて、下男二人が両方から之を引き絞つて、彼を動く事の出来ぬ様に押さえつける。この縛つた縄の太さ一寸五分と云うから、井戸縄以上の太いしろもので、これでギリ／＼締め上げられると、縛られただけでも相当耐える。与力吟味掛りの合図で、打役は竹二本を觀世捻りで巻いた二尺許りの拷問杖（通称箒尻）で、吉五郎の肩を目掛けて力任せに発止と打つた。

「ウム——」と呻いた彼の肩に、巨大なみみず腫れが忽ち一条二条と走る。そのうち皮肉が破れてタラ／＼と鮮血が迸る。血が出ると下男は白洲の砂を素早く疵口にこすりつけて血止めをし打役は尚も容赦なく打続けた。吉五郎は体軀強靱、剛胆非凡の奴だから、仲々それくらいでは参らない。口を堅く閉じ、敵かれ乍ら觀音經を殊勝にも誦えていたと云うから、悪党でもその態度はちよつと見上げたものだ。常法に従つて、百五六十回の打擲

で一応白状せずとも中止したが、大抵の者はこの答打拷問で音を上げてしまう。

彼が白状しないので、奉行は吟味役に、直ちに第二段の拷問を命じた、答打で白状しないと、直ちに石抱きにかゝるのが責めの定跡で、吉五郎は答打で全身腫れ上つた体を、白洲の底受けの柱の処まで下男による／＼と引きづられて来て、そこに据えられた貫木に五本の三角木を打ち並べたそろばん木の上へ囚衣の尻を捲くられて、むき出しにして坐らされた。体は柱に身動き出来ぬ様、後手に縛りつけられて、合図と共に、彼の膝の上に、一枚の目方十三貫（長三尺、巾一尺厚二寸）の伊豆石を順々に五枚、都合六十五貫の石がのせられた。丁度彼の顎の下迄届く程に、膝に積み重ねられた。伊豆石の重圧に、彼は最初は必死と脂汗を流してこらえていたが、やがて口から泡を吹き始め、鼻水を垂らして苦悶を始めた。石は落ちぬ様五枚揃えて太縄で縛り、柱に括つてある。どんなにもがいてもビクともしない。最初の者に五枚以上石を抱す事はないが、そのうち、吉五郎の強情我慢振りに業を煮やしたか、下男二人が命ぜられて左右より力をこめて石を動かし、「さあどうだ／＼」と苛酷極まる責め方に吉五郎の脛の

肉はみり／＼とそろばん木に喰い込み、骨も砕けん許りの激痛に、彼は遂にその場に悶絶してしまつた。それでその日は、遂に決せず仕舞で、凸凹に歪んだ哀れな彼の肉体は、牢屋に運ばれて戻つたのである。

三

吉五郎は娑婆で、相当顔が売っていたから入牢勿々に牢名主を凌ぐ勢いで、それに悪党は悪党仲間の仁義もあつて、今日辺り吉五郎が拷問にかけられるのを知つていて、予め牢内の古顔が彼に拷問の心得を教えてやる。白状しないと云う事が彼等の鉄則であり誇りであつた。だから拷問に堪えかねて白状した奴には、彼等は鼻も引つかけない。どころか反つて様々にいじめつける。白状した者は恐らく死罪は免れまいと云う氣持が、その者の存在を無にしてしまうからだ。

頑張り通した吉五郎は、英雄の様に彼等に迎えられる。拷問中、咽喉の渴きを助け、呼吸を補う梅干肉を口中に含んで行つたから、拷問が済んで牢内に帰り、一同の懸命の努力で、彼は間もなく正氣づいた。

手を廻して潜かに貯えておいた焼酎を惜しげもなく素つ裸にした彼の体一面に吹つけ、手取り足取りしてもみ柔げて、綿の様にクタ

くにしてしまった。この荒療治は、疵口に焼酎が泌み込み、且つ節々が千切れる様に痛んで、七転八倒の苦痛であるが、こうすると反つて肉体の恢復は早く、寧ろ以前よりも頑健になるので、拷問数度に及ぶも耐えられるだけの強い不死身の肉体に変じて行くのである。唯この荒療治を我慢する事は、相当豪の者でなければ到底辛抱出来ぬ程拷問に近い様な治療法である。

凱旋將軍の様に迎えられた吉五郎、日頃の体力にも云わせて、数日ならずして元通り以上の強健な体に立歸つた。

次いで八月十一日、前回の答打ちと、石抱き五枚の拷問を受けたが決せず、更に一ヶ月して九月十六日、再び答打ちと石抱一枚をふやした六枚の拷問を受けたが、之にも頑として白状しなかつた。併し、引続いて三日後、再び拷問をうけ、答打ちの後七枚（九十一貫）の石を抱かせられるに及んで、総身は悉く蒼黒く変じ、脛の肉はめり／＼音を立て、喰い込み、四時間に亘る長時間の石抱きの責めに、如何に強情の吉五郎も遂に仮死の状態に陥つた。未だすつかり前回の拷問に対する、肉体の還元が出来ていなかつた為、その時の吉五郎の肉体のコンディションは極度に悪かつた

結局この時も白状せずに終つたが、彼はこの拷問の後、度重なる残酷なる責めに耐えかねて、体の恢復を待つて脱牢を企てんと秘かにその時機を窺う様になつた。脱牢の腹だから、一ヶ月後の十月二十一日の白州で吉五郎は、既に縛られないうち、最早観念したもの如く、いとも簡単に、すら／＼と罪状を白状している。

そしてそれから、三日目の十月二十四日の嵐の夜、同牢の囚人等の暗黙の援けを借りて、彼は見事脱牢に成功した。

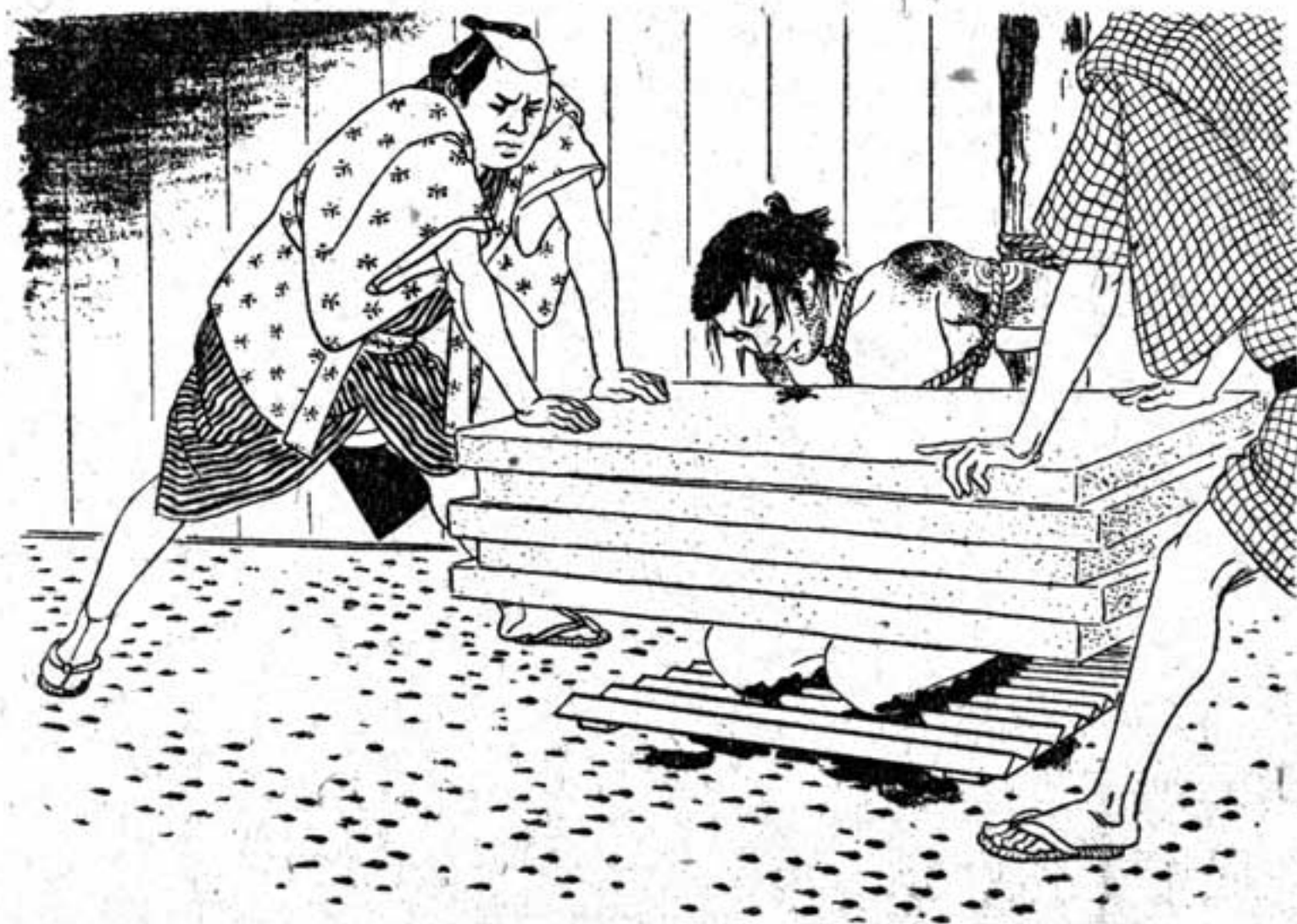
四

木鼠吉五郎脱牢のニュースに江戸は震撼した。

数人の奸商、悪旗本が次々と襲われ、その都度、罪滅ぼしの様に貧民の頭上に小判小粒が乱舞して、一喜一憂のうちに、天保五年も暮れて六年を迎えた。

吉五郎の神出鬼没の暗躍が浅春の三月まで続いて、再び縛に就いたのは四月三日の子の刻。情婦おりんと同衾中の隠れ家の寝込みを襲われて、真夜中の江戸を御用提灯に埋めた捕方相手に、彼は魔王の如く荒れに暴れ尽したが遂におりんと共に召捕られた。

四月九日、以前も増した苛酷極まる拷問が



再び彼の身に襲いかゝつて来た。彼もその時既に己れの寿命を観念したらしい。彼は度々の牢問いで、常に可愛い女、おりんの無実を叫んだ。彼女がどうやら微罪の輕追放で済んだ事を知ると、肩の荷を降した様な氣になつて、茲に於て拷問を甘受する事に腹をきめ

た。既に再三再四の拷問によつて、彼の肉体に胚胎したマゾヒストの血が拷問による白状を潔よしとせず、肉体の根限り、一滴の血の枯れる迄も、頑張り通さんとの悲壮なる覚悟からか、今となつて本人の真情を忖度出来ないが、何れにしても並大抵の者では出来得ない覚悟を定めた。

四月九日、白洲に曳き出された彼は、莞爾として拷問を待ち受けた。答打、石抱八枚（百四貫）のむごたらしい責苦にも持ち耐えて、百貫の石を膝に乗せた儘、一向に屈した様子もなかった。

ついで四月十一日、矢継早やに拷問は続き同様答打、石抱八枚にも頑張り通し、更に追いかける様に同月十三日、同様の責めが繰り返された。一週間のうちに前後三回も、この様な苛酷な拷問を行つたのは、幕府としても珍らしい事で奉行所の面々も躍起となつて、根くらべをしていた態が見受けられる。

彼の全身は一分のすき間もなく腫れ上つて



数十個所から血が迸り、脛の肉は無惨にも抉りとられて骨が露出し、そろばん木にじかに骨がガリ／＼と音を立てて喰い込む眼を蔽う凄まじさに、流石の拷問役も寒気立ち、漸く連続拷問を一応打切ることにした。

しかも彼は、この連続の三度の拷問に絶命の一步手前を彷徨し乍らも、尚且つ白状しなかつたのである。石抱きに於て、足先より徐々に色が変じ、追々と股、腰に到り、腹部が

蒼黒くなるに及んで死の寸前なりとして立会の医者は注意をうながすのであるが、実に身の毛のよだつ恐しさではないか。

この時、北町奉行与力吟味掛東条八太郎より、彼のこの拷問に対し次の様に老中へ御伺書を立てゝいる。

播州無宿大阪入墨吉五郎儀再拷問にも相決し申さず候得共、尚此上追々拷問仕り候はゞ、終には責問の為死に及び候より外御座なく、止む事を得ざる儀には候得共、数十度牢問の上、拷問両度にも及候儀に付、例書の趣により、何とか上への御内慮御座あるべく候哉：（以下略）

とある様に、吟味掛りでも吉五郎の強情さにホト／＼手を焼いて、何とか形をつけてほしいと、老中に頼み込んでいる始末で、始めにも書いた通り、察斗詰と称する、所謂詰問づめで処分するやり方で、今でいうさしづめ確固たる証拠不十分ではあるが、状況判断によつて処分する方法である。吉五郎も随分と

頑強に黙否権を行使したもので幕府でも、拷問で白状しなかつたと云う者は実に稀で（それだけに、拷問がいかに苛酷、無惨であつたかと云う例証にもなるが——）

斯る例、士分には更に見えず、平民には、享保以後一、二あり……

といった稀有の現象として、正直に驚いている。悪党の方が、士分即ち侍などより、その意志強固だつたから、皮肉な話で老中でも彼を察斗詰にするについては、幕府の威信もあり、相当慎重に考えたに違いない。その為か東条八太郎や、同吟味役松浦作十郎の御伺書にも有耶無耶のうちに返答なく、吉五郎はその後も続く受難に、名実共に骨身を削るのである。

五月十八日、吉五郎の拷問は冷徹無比をもつてなる吟味役、谷村源左エ門と代つて、再び続行された。

縛敵、石九枚（百十七貫）で泰然自若決せず、源左エ門カン／＼になつて七月一日から十八日迄の間に八回の多きに亘つて拷問にかけ勿論その都度、一寸五分の太縄でギリ／＼に縛り上げて、力の限り笞打ちを加え、石を九枚抱かせ続けたが吉五郎はその努力を嘲笑う如く、不死身の肉体は度重なる拷問によつ

て拷問だこが出来、恐るべき強靱さで之に對抗した。

責めあぐんで、七月二十七日、吟味役は、例の加く笞打ちの上、石七枚に減じて拷問を加えたが、吉五郎の態度は、さながら責められて悦ぶ恍惚状態で、更に石の加重を請求されるに及んで、如何な源左エ門も呆れて、遂に匙を投げてしまった。

恐らく吉五郎はこの時、強烈なるマゾの悦びに浸つていたのではなからうか。度重なる拷問が苦痛の悦楽、被虐の惑溺へといつしか彼をかり立てていたのではあるまいか——。

でないとする、既に死を決し乍ら、それ程迄に苦しみに苦しんで、最後まで拷問を甘受した彼の意図が、単なる悪党の矜持のみとはどうしても受けとれないからである。

谷村源左エ門は次の様に御伺書を出している。

吉五郎儀、牢問の節理害申し聞け候得共、たとい責問にて死に及び候共、白状の上御仕置に相成候儀は難渋仕候旨申し、心を定め居り候様子に之有り、自体丈夫の生立ちに相見え、度々責問いにも逢い、次第に馴れ固まり候て、此上牢問致候共、其時は絶え入る程に御座候ても、間もなく復し候容

体にて、容易に白状致す間敷く、外に白状致させ申すべき手段も御座なく、右様稀なる骨柄にて、殊に先達て牢抜け相企て候儀も之有り、此上は自然牢内にも不良を生じ申すべくやも計り難く……（以下略）と判つきり手を焼き匙を投げているさまがあり／＼と窺われている。この御伺書から見ても、拷問の暴力が、吉五郎の肉体にマゾの性質を植えつけ、責められる事に愉悅を感じていた事は明らかである。

五

谷村源左エ門が匙を投げて、吟味役は、峻烈苛酷で通つた中島嘉右エ門に代つた。

九月二十二日、吉五郎は二十回目の拷問を彼によつてうける事になつた。彼は石抱きを手温いを見て直ちに容赦することなく、吉五郎を白洲へは出さず、その儘拷問蔵へと連れ込んだ。

縛敵、石抱きは白洲にて行なうが、海老責釣責、其他特種な責めは拷問蔵で行なうことになつてゐる。それはこの種の責めが残酷、無惨を極め、その凄絶さは、到底普通人の見るに耐えぬものであるからだ。

激しい鞭撻の後、吉五郎はその日始めて、海老責めの苦痛を味わつた。



吉五郎は蒼白になる直前まで、無
我の境地をさ迷つ
ていたが、氣付い
た時は牢内で囚人
一同に肉体を揉み
ほぐしてもらつて
いた。

青細引の縄跡は
肉に五六分も喰い
入り、両脚は全然
自由がきかなかつ
た。奉行所の記録
によると、彼はこ

海老責めは盗賊奉行中山勘解由の創始で、
(拙作、怪異海老責め縁起参照) 縛り縄は縛
敵に使用する一寸五分の太縄ではなく、肉に
喰込む青細引を使用し、後手に縛して体を前
にかぶめさせ、両脚を並べて縛つて、その
脛が顎にくつつく迄密着して括りつけるので
ある。

半刻も経つと、全身が真赤になつて冷汗が
流れ、呼吸困難の為、暫くすると次第に肉体
は紫色に変じ、臙て暗蒼色になり、死が近づ
くと蒼白になる。

の海老責めに、何と四時間も耐えている。普
通の者なら、とうの昔に死んでいるに違いな
い。マゾヒスト吉五郎も流石にこたえたのか
死んだ様になつて数日を過した。

十一月十一日嘉右衛門は、太縄で彼を、変
化の妙を見せた凡ゆる方法で縛り上げて、答
が折れる程に打躰し、最後にがんにがらめに
縛り上げて、血液の交流が止まつたのか、既
に紫色に変じた彼の肉体に、石八枚を抱かせ
て、下男に石を揺さぶらせ続けたが、そろば
ん木にめり込んで行く己れの肉体を意識し乍

ら、彼は恍惚の境地をさ迷つていた。

師走も迫つた十二月二日、全裸にして海老
責めをかけ、だるまの様に転がして、所嫌わ
ず鞭を振つたが、所詮、吉五郎のマゾを満足
させるだけに終つた。

茲に於て、苛酷をもつてなる中島嘉右衛門
も、彼にかぶとを脱いで、御伺書を出さざる
を得なくなる。

此者何度拷問に仰せ付けられ候とも、相
決すべくとの見込御座なく……(以下略)

中島に代つた吟味役は三好三次郎。年の改
まつた天保七年二月、白洲の石も凍る極寒の
十三日、型通り縛敵きの上、石九枚にて責め
たが決せず、更に三月二日、遂に石抱最高の
十枚(百三十貫)を抱かせた。吉五郎の姿は
すっかり石に隠れて見え、どす黝くなつた
両膝だけが、無限の抵抗を物語る様に、じり
じりとめり込んで行つた。十枚でも決せぬの
で、三好三次郎はあつさりと見切りをつけ、
御伺書を出して、吟味役を米倉作次郎と更迭
した。

数々の責苦がこたえぬのか、世の中に不死
身の人間がおるとすれば、こんな男だろうと
三好三次郎半ば感嘆して、吉五郎を超人扱い
にした様な御伺書を出している。

是迄拷問の節、私儀も度々立会罷り越し見請け罷り在り候処、一体同人儀は、責問にての死を決しおり候様子に付、此上引続き何度厳しく痛問仰せつけられ候とも相決し申す間敷……（以下略）

右にても判る通り、死を決し乍ら、尚且拷問をうける吉五郎の心理は、正しくマゾの極致を希うものである事を如実に示している。

現代、嘗つて特高よりうけた拷問を、今更になつかしむ者のある事実より見て、決して吉五郎が、マゾに陥つたのは不合理ではないと思う。

吟味役米倉作次郎に代つた四月四日、縛敵の上、石九枚を抱かされた拷問も、彼はマゾの愉悦に、秘かに浸つていたかも知れない。

石抱きも、海老責めも効果なしと見た米倉作次郎は、遂に意を決して、拷問最高の釣責めをする事にした。

四月十一日、拷問蔵に曳き出された吉五郎は、手鎖を外されると、二の腕を紙で巻かれ後手に青細引で確つかと縛られて、スルスルと梁に引揚げられた。梁の環を通した青細引が、向柱の環から環を通つて、地面より三寸六分釣り上げられる。細引は次第に腕から手首に喰込み、肩の附根が折れそうに吊り上

つて、聞きしに勝るその苦痛に、半刻許りするうち、爪先より血がしたゝり始め、汚物がドロドロと彼の足先からたれ出した。緊縛の激痛が、彼の両腕の感覚を失なわせ、ガクリと関節が外れて、だらり体が伸びて、後手が彼の頭上を越えた時、漸く彼は降され、その場に失神した。そして白状しなかつた。白状が拷問の終局を意味する事を百も承知で、彼は生ある限り黙否権を行使する腹であつたに違いない。いや寧ろ、拷問に明け暮れた一年九ヶ月になん／＼とする日数の経過のうちに彼は何を白状してゐるのか、何を云うべきかそれすらも忘却の彼方へ置き忘れた極端なるマゾヒストになり果てゝいたに相違ない。

四月二十一日、再び釣責め——。下帯一本の全裸に、細引のぎり／＼と喰い込む疼痛を彼はどの様な気持で味わつた事だろう。

この日、彼は、幕府の定めによる釣責めの限度（普通二時間）を遙かに越えて、五時間の長きに亘り、釣された儘、拷問蔵に掛けておかれた。悪党乍らも、その我慢強さには、全く敬服の外はない。

七

釣責め五時間を最後に、之を最大限度として、奉行所の拷問は終りを告げた。その間都

合二十八回、鞭打たれ、石抱きに悶絶し、海老責めにのたうち、釣責めにあがいて、それでも彼は生き続けて来た。併し米倉作次郎の御伺書が、遂に幕府の意向をきめ、察斗詰めの判決が下つたのである。

播州無宿吉五郎儀、拷問の節も申し候は此上何様責問之有り候とも、白状致す間敷きに由にて当人死を極め罷り在り候様子にて既に両度も拷問（筆者註こゝでは釣責めを指す）仰せ付られ候ても、決しがたく儀にも候故、御察斗詰の積りを以て、御仕置御内慮御伺い相成候ても、然るべきやに存じ奉候……（以下略）

この米倉作次郎の御伺書に依つて、一代の梟兇木鼠吉五郎の運命は定まり、嘗つて何人もなし得なかつた、拷問に打克つて、マゾヒストの慾望を十二分に堪能した挙句、天保七年五月二十三日、死罪申し渡され、従容として刑場の露と消え、その苦難と、波瀾に富んだ半生を終えたのであつた。（了）

×

×

×

×

其の頃を語る (六)

責め場の舞台装置法 (二)

伊藤晴雨

女の責め場の舞台で家庭内に作るには、先ず六畳一間位を舞台とする横長の六畳であれば理想的で、前日大教授で坪内博士の女婿であつた飯塚与一郎氏が、戦争前牛込呉松町の邸宅で「火焙り」老生をモデルにした故鈴木泉三郎作（大正十年十月、早稲田大学十月号記載）を私演した舞台は、六畳一間で立派な効果を揚げていた。

奇クの読者諸君の中に、同好の人々が集つて（或は女性同志でもいゝ）思い切つた責め場の芝居を試み、之を奇クの誌上に発表するなどは確かに一方法だと思ふから、そうした試みをする人々の為に老生大いに若返つて青春の血を張らして此の装置法と劇の描画法を説く事にする。若し幸に読者の中でそうした

試みをして、責めの研究に資することを望まれる方はお尋ねがあれば半専門的に御指導の勞をとりたいと思います。

切、先ず第一に責め方の脚本を作る、脚本は本誌の読者は残らず文筆の達者な方々で、自己の体験を土台にして書けばいゝし、松井簀子女史などの作品を劇化するのもいゝと思います。脚本が出来上つたら次は稽古に掛るのが順序であるが、装置を後廻しにすると、開演間際になつて手順が狂つたり、開演日を遅らせたりすることがあるから脚本が決つたら直ちに舞台装置に取掛る方がいゝのである。群集相手の仕事は駄目になる事が多いし、やり直しが多いし又、初めての試みとしてはよい良い物にしたいという欲望から、やり直し

くを繰り返すものであるから、脚本が出来たらすぐ装置に取掛るのが至当である事を老生の経験からお勧めしたいと思います。

舞台装置法

舞台回つて右を上手（カミテ）左を下手（シモテ）と云ふことは周知のことであるが花道は余り必要では無い、殊に現代劇などは全く無用に近いもので、殊に素人芝居（失礼な申し分であるが）の場合などは無い方がいゝ。

引幕は最初から用意して掛るべきで、幕を切るといふ事が芝居の上で如何に重要な事であるかは今更説明するにも及ぶまい。幕の開閉のコツに依つてどんなに芝居其の物が引き立つか、失敗するかの岐路に立つているのだから、幕の開閉は全く画竜点睛の使命を以つていゝので、幕は是非用意しなければならぬ。幕が出来たら、先ず正面に吊る背景製作に取掛るのである。

背景製作に要する絵の具は、水彩絵の具は高価なるを以つて使用に堪えず、矢張り在来の大道具背景用の泥絵の具を使うのが便利である。

背景用絵の具（泥絵の具という名は本絵の具に対しての名称か）

洋紅 赤
 洋朱 (英吉朱) 黄勝ちの赤
 弁柄 (ベンガラ) タイシヤ色
 黄土 エローオーカー
 朱土 茶
 パリスグリーン 緑
 丹 (光明丹) 黄勝ちの朱レモンエ
 ローに近し

群青

コバルト

ツヤラ

浅黄

キンペロ (洋藍)

濃藍

ローズマダー (紅桜染料)

水又は湯に容易に溶解す

松烟墨 (油烟墨)

墨

オーエン (黄、赤口二種)

黄

台胡粉 (白又は亜鉛華)

白

膠 (三千本又は黒膠)

刷毛

筋違刷毛、大中小各一二本宛

打違定規一二本、二間物一本、六尺物一本

三尺物一本宛、外に洋画用の筆数本

絵の具の溶き方

泥絵の具の溶き方は、一見容易なるが如くにして六ヶ敷ものである。元来が粗い分子の絵の具であるから絵面用の乳鉢 (ニューパチ

Ⅱ薬種や又は陶器店にある) にてよく擦つて用うるのがいゝのだが、一々そんな事をしていては間に合わねから多量使用の場合は、摺り鉢へ入れてよく摺り合わせ膠の汁を入れて練り合わせ順次薄く溶かせるのであるが、絵の具の溶解法は各自に伝があつて、一々誌上に説明し得ないものもあるから、各自の実験にまつか専門家に問うことが一番よろしいと思う。但し黄土の如き質の粗い絵の具は、木綿の袋で漉して之に台胡粉の少量を交ぜ合せて用いなければ使用し難きものである。又黄土は背景の全部の土台になる塗料であるから、これを十分に溶かして分子を細かにしておかないと全体の画面が汚れて收拾し難き場合もあるから、急がば廻れの譬の通りよくよく摺り鉢で摺り之を木綿の袋に入れて漉したものに膠を加えて段々に薄めて使用する事が安全である。黄土の原料は赤土であるから粗いので余程の手腕の者でなければ刷毛目にムラを生ずるから、手練を要する。建築物の柱などにはこの黄土でなければならぬから、特に「ウラゴシ」を必要とするものである。

油烟墨は軽く安価なものであるから、特に溶き方に秘伝があつて、矢鱈に膠を入れて一時にかき廻せば、油烟は水の表面にのみ浮び上つて容易に膠水と交らぬものであるから、最初に焼酎少量を入れて餅の如くに練り、それから追々に少量の膠水を加えて気永に混合することが必要であつて、絵の具中最も至難なものであるが、これは各部分を引き締める使命を持つてゐるものであるから、缺く事の出来ないもので、人に依つて墨汁を使用する者もあるが、墨汁はどんな良質のものでも容易に乾かぬものであるから、背景には使用しない方がよろしい。

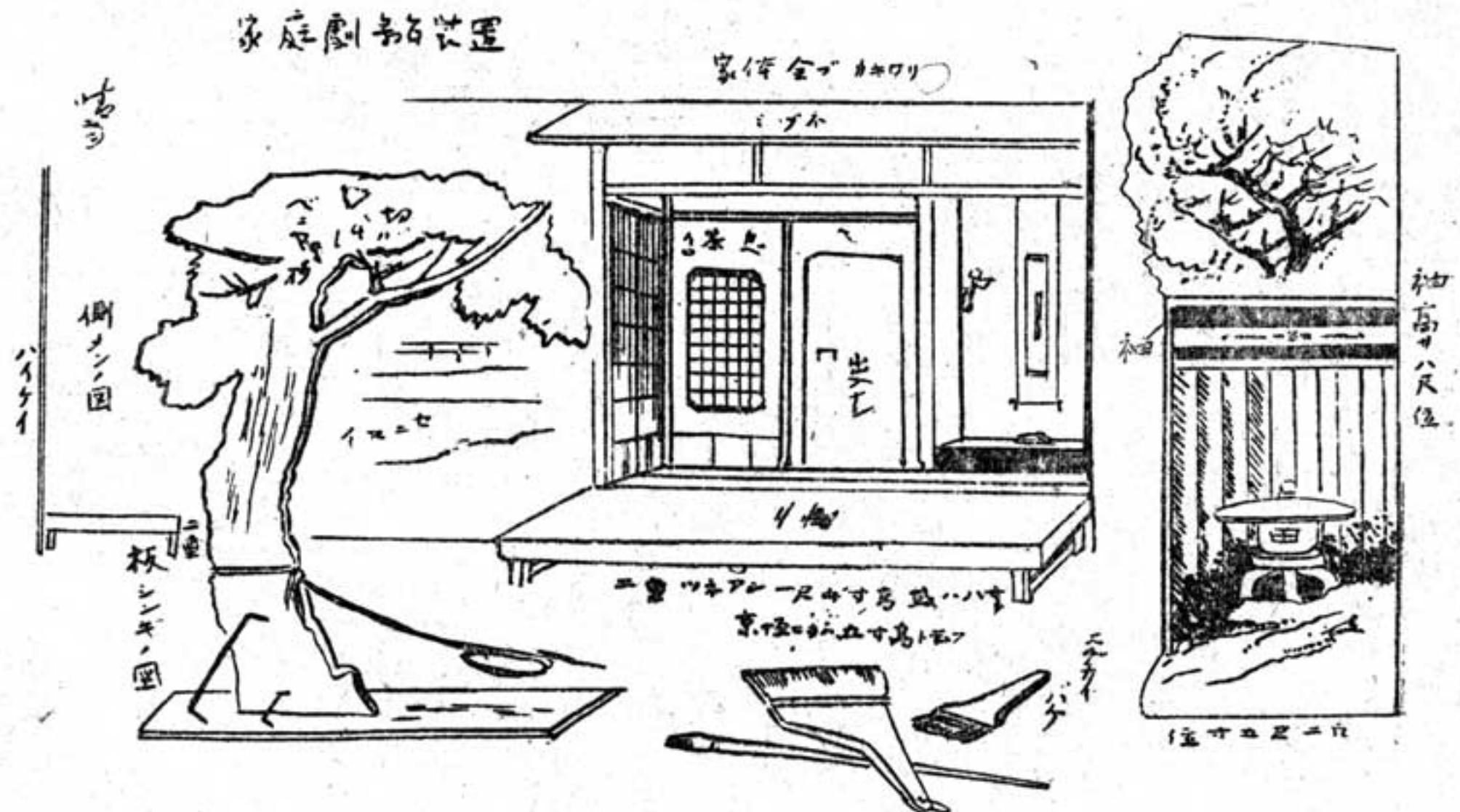
キンペロは一名をベレンスと云い、洋藍の一種であるがこれは容易に湯水に溶け易いが同時に又、剥げ落ち易いので濃く使えば剥落するという欠点がある。併し背景には無くてはならぬ顔料であるから使用しない訳にはいかない。膠と交ぜ合わせる事が出来ない性質があるのでこの溶き方は秘伝とされている。

塗料店にあるエーテル (発火の虞あり、揮発性) 少量を加えて固形の絵の具が全部水になつた時を見計らい膠汁を加えれば容易に膠と交るものである。又これを少量に紙等の彩色に用うる場合、又はエーテルの手に入らぬ場合はエーテルの代用品として番茶の煎じ汁を加えてもいい、斯くして溶解したキンペロは

多く陰影に用いられ、容易に使用し易くなるものでこの方法は古来より画家の秘事として伝えられていなかったものである（このキンペロに就いては江戸時代に絵画史の上に悲惨な挿話があるが茲には略す）朱土は黄土と同じく礦物性のもので、洗い朱に似ている色であるから強いて必要はないから使用せざるも差支はない。ローズマダーは元来が染料であるから、刷毛に染ると落ちないから、刷毛を別々にしておかなければならぬが、桜の色などには絶体必要であるから使用の際、他の色と混合しない方がよい。この外に金（真鍮粉）と銀（アルミ）を使用することもあるが、輕演劇には左のみ必要でないから求めるには及ぶまいと思う。

定規は大工の使用する間尺でもいいが、背景に線を引くのは一寸手練を要するから、打ち違定規を使用するのは六ヶ敷いであろうから体験に待つより外口伝によるの外はない。亜鉛華は白粉の原粉で胡粉より強い白色をもっている。ポスターカラのホワイトは、亜鉛華であるから軟らかな感じをとる時に用いて胡粉とは違った色になるものであるから、胡粉と併用するがよいと思う。

以上を以つて一通りの使用法を説いたつも



りである。

背景の描き方

背景は一定の寸法凡縦八尺、横九尺乃至十二尺位のもの、中へ実感を誘うような構図を造らねばならぬ、ましてマチスやゴーガンの手法をとり入れては駄目である。日本の芝居の背景は日本人に依つて発見されたものであるから、東洋独得のものでなくてはならない戦前のドイツの劇場では、東洋趣味を加えた広重風の装置を試みていたのを、写真を通じて見たがうまく消化し切れなかつたように思われる。縦に長い外国の建築と、横に長い絵巻物風の日本の舞台とは根本に於て、その性質を異にしているのであるから、女の責め場で西洋の舞台を模倣しない限り、日本式の横に長い舞台を標準にして記すことにした。

別図に示すように、先ず背景全部の中心点を求めてから水平線を求めて、これに景色をあてはめて行くのである。アタク（仮線）はチヨークを使用するのが安全である。背景はその全部が色で成り立っているものであるが構図のデザインは十中の七迄仕上げに大関係があり、デザインを好い加減にして彩色すると、途中で締りがつかなくなる場合が多いから、最初から十分にデッサンをつけておく事

が必要である。

先ず空の色を塗り、次に地の色を塗り、乾くのを待つて遠景から順次近景に及ぼし、最後に仕上げをするのであるが揮毫に際しては極めて虚心坦懐「大きな絵を描く」という背景通念を一応捨て、掛らなければ、所謂大きさに吞まれてしまうのである。これも経験に俟つより外に方法は無いのである。正面の背景が出来上つたら、左右の切り出しに取掛るのである。普通の家庭劇ならばベニヤ板の三×六（三尺の六尺）（一枚百五十円位）の板へ二尺程の足しまえを付けて見切りにするがよい。この見切りは案外多くの数を要するものであるが、普通は上手と下手に各二枚宛位あれば良いかと思われる。

女を縛る立木は前記の如くベニヤ板の切り出しで沢山であろう。これだけの準備が出来たら稽古に掛るのであるが、科白をみんなが覚えたら惣ざらい、職業的に云えばツケ惣という（ツケ立て惣ざらいの畧称である）。此の稽古の楽しさは女の責め場の劇に限つてやつてゐる人達の方が、恐らく開演当初の見物より面白いのではなからうか。女優の腕を敲役に廻つた役者（？）が本当に転る責め場の感じを出す為、女優を本当に擲るなどい

う喜劇も生じて来るだろうし、責めている内に或る種のスリルを満喫する場合もあるうし稽古が終つて帰る途中に或は、舞台以外の男女関係が生じる場合も時にはあるかも知れない。否出来るかも知れない。それは別問題としてすつたもんだの揚句の果に無事に幕が開いたら、初めての出演者の必ず心得ておかねばならぬことは「芝居をしている間は、決して見物の方を見るな」ということである。時として初心の人が見物席の方を見ると上つてしまつて科白をとつちたり、約束の仕草を忘れてしまつて折角のやまを打ち壊してしまつた例が沢山あるから、舞台では各自の顔を見るか、決して見物の顔を見てはならないのである。

芝居の責め場の女形の心得

現代劇であれ旧劇（時代劇）であれ劇の中心となる女優は、責められるポーズが第一である。必ずしも衣裳の華美なることを必要としない。或は粗末な汚れた長襦袢などの方が反つて効果を生む場合もあるかも知れない。責め場の芝居に限つて、責める俳優（この場合俳優といつておく）が責められる俳優より至難である（と云つたら馬鹿をいへと叱られるかも知れないが、それが事実である）責め

られる女の六ヶ敷い点は、打たれて発する悲鳴である。これが責めの芝居の生きるか死ぬかの境目であるから、女の悲鳴を十分に研究する必要である。その研究材料は種々あろうけれども、常にそうした機会を心掛けて、研究を怠らなければ或る程度迄は真実に近い発声法は体得出来ると思う。或は急稽古等の場合ならば、専門家の女優に就いて泣き声を口授して貰うのもよい。

泣き落しが上手く出来れば、女形は一人前である。それから責められる人は、決して見物に正面を見せないことと、自分の顔を成る可く俯向き加減にすることが、責め場の女形の秘伝である。時に松葉いぶしなどに遇う女が上向きになる場合には決して正面を向かないことである。共同墓地で見る女をいつも美しく感じる。私は女の責め場に出て来る女形の正面向きを未だ曾て見たことがない、期せずして然るか否や。

責められる女の足

舞台で責められる女の足の裏は、嘘でも綺麗でありたい。実際は泥の上を歩いているのだから、足の裏に泥がついているのだが、それでは色気がなくなつてしまふであらう。色気とエロ味とは天地月露の差も只ならぬものであるから、女の色気はヌードの一步手前にあると、私は密かに考えているものである

淫

(みだらび)

火

(第十一回)

松井 籟子

栗原 伸・畫

一

何人女中がいても主婦のいない家は、まるで女つ気がないようにうつろだつた。

小百合夫人の行方は杳として知れない。雄作の額の皺が深くなつた。邦彦との関係が知られただけでも、彼女はどんなに自分を汚らわしく思つただろうと雄作は考える。それなのに、そればかりか自分はその上にまだ醜い姿を妻の目に曝してしまつたのではないか。箱根の浴室で、犬の様に這い、犬の様に打たれて呻めいた自分の姿が、妻の目にどんなに浅間しく見えたる



う。その時は夢中だった。そうされるより他に、その時の自分の気持は救いようがなかったのだ。しかし、今になつて考えると、それは恥の上塗りをしたように悔やまれてならないことだった。夫人はそのことに対して何にも云わなかった。むしろ自分を苛めて喜んでいのようにさえた。夫婦の垣がはずされたような気さえたのにすべてには自分のひとり合点だったのかと思うと、雄作は自分の頭を壁にぶつけて、打ち碎いてしまいたいような気がするのだった。

「あれつきり来ないんですつて？ 貴船一郎……」

邦彦が案内も待たずに部屋へ入つてくるといきなり言つた。

「いくら私にしたら奥さんいい方がいっていつたつて、全然行衛不明というのは何だか無気味ね、どうするつもり雄ちゃん」

雄作は小百合夫人の失踪の原因がそもそも邦彦にあると思うのでどうしても邦彦に対して前の様にうちとけるわけにはいかなかった。しかし邦彦をのぞいては今その話をする相手もない、ひとりでも多くの人に小百合夫人の行衛不明を伝えたら誰か、消息をもたらしてくれるのではないかと思ひながら、ひとりでも多くの人にそれを知られることをおそれる矛盾した心でいるのだった。

「私は貴船が知つていようような気がしてしようがないんですが……」

「あれつきり此処へ来ないつていうのも不思議でしようあんなに毎日の様にたずねていたつていうのに。……お君さんなんか……」

と言いかけてそこでピタツと邦彦は言葉をのんでしまった。そして、

「そうだ」

と、手を打つた。

「お君さんで思い出した。雄ちゃん、とに角家にいたつて奥さんの

行衛はわかりやしないわ。私と一緒に行きましょう。」

手をとらんばかりに邦彦に云われ、

「どこへ？」

雄作はやつと重い口を開いた。

お宅の女中さんと同じ名の男がいたのを思い出したんですよ。

君ちゃんという。……旧悪露見するけど、まあいいわ、どうせ雄ちゃん此の頃冷たくつて、私なんぞ相手にしてくれないんですもの」

邦彦は皮肉つぱい微笑を口もとに浮かべた。

「その男に聞いたたら、貴船のこと何か知つていられるかもしれないから

……」

雄作は邦彦の言葉をあてにする気持はなかった。しかし、たしかに家にとじこもつて、妻の面影を追つてみていても仕方のないことだった。街を歩いたら、どこかで偶然小百合夫人の姿をみかけないものでもないと思つた。

背広に着かえようとする雄作を邦彦はとどめて

「皆が開衿シャツで歩いているのにきちんとネクタイをして白麻の背広では目立つていけないわ。もつと雑な姿つて出来ないの」

と言う。

「さあ……」

と雄作が考えていると、

「じゃあ、着物の着流しの方がいいかもしれない。今時、着物の布地のよしあしがわかる人少ないから。……雄ちゃんが何千円か出して買った手織本織と五六百円の本綿地と区別出来るのは此の辺の人だけよ。」

そういう邦彦の言葉に従つて黒っぽい和服を着てみた。着てみる

と和服はかえつて彼の氣品を匂わせて新世界を歩いて目立たないという身なりにはならなかった。

「私が好きになつてゐるだけでも御迷惑な惚れ方さうだ。フフム……」

邦彦は笑つて言つた。

二

男が男を買いに行く街があることを雄作は新聞や雑誌では読んでいた。しかし実際に行つてみたことはなかった。彼の性癖は邦彦を相手にしてのみ異常だつたが、それ以上に色を漁ることはなかつた。だから霞町附近の立派な幅広い舗装道路の片側を歩いていて、邦彦によつて並ぶようによりそつて来た女が自分と同性だとは気がつかなかつた。

「そんな女にかまうなよ」

もう少しでそう言う所だつた、酒場の女給が客引きに出ているのだと思つた。映画なんかでみるパンパンの様などぎつい化粧もしていなかつたしパーマントをかけた髪は肩までたれる程の長さで、白いブラウスに細いひだのある黒いスカートをはいていた。

「君ちゃんいないの?」

邦彦がささやくように聞いた。

その女は無言ですぐそばの電氣の消えている二間口ほどの家の前へ案内すると板戸のような三尺程の扉をあけて、二人を中へ入るようにながした。

中は細長い土間になつていて、そのさきに急な梯子が二階へ突つ立つようにみえていたが、電氣は二階からぼんやりさしているだけ

で階下の構造もさだかには見えなかつた。

「君ちゃんはこの頃ここへ来ていないけど、家へ行けばいるわ。あんな随分しばらくね、君ちゃん恨んでいたわよ」

彼はしやがれたような声で邦彦に言つた。それでもまだ雄作は女だと思つていたのだ、花柳界の女にはよくそんな風に声帯をつぶしてしまつたような声を出す妓がいた。

「君ちゃんの家は前の処?」

そうよ、という答えに、

「有難う」

邦彦は云つてコーヒー代……。

「少しだけど」

いくらかの金をその女の手の中に押しこんだ。

「あら、いいわよ、それより、二人で君ちゃんとおそふてないわ。

ねえいいでしょう?私とおそふでよ」

「今日は一寸ヤボ用なの、悪く思わないでね」

邦彦がいうと女はあつさりと引き下つて

「じゃあ、又出直して、きつと来てちようだいよ」

そういうと

「どうぞね」

雄作に向つて花柳界の妓のするような額と目だけの挨拶をすると二人を押し出すように自分も又舗道に出て来た。そして外へ出ると二人に背を向けて二三步小走りにかけ出すと、それつきり知らん顔して立ち止つていた。

「どう雄ちゃん、浮気してみる?」

邦彦はからかうように雄作に言つた。

「あの声はサルバルサンでつぶしたんじゃないのかい、よくそんなこというじゃないか」

雄作が言つたので邦彦は声をたてて笑つた。

「雄ちゃん、女だと思つていたの？あの人達には性病はないのよ。」

だから性病予防の意味では取締りようがないつて話よ」

「え？」

と雄作は邦彦の言葉が聞いた瞬間にはのみこめなかつたが、言葉の余韻で納得出来る位ののろさでやつとその意味がわかつた。

「男か……」

そう思つて振返えつたが白いブラウスと黒いスカートは闇の中で夕顔の花の様にうつすらとして、淫らな感じもなく、影の様におぼろに遠くなつていた。

三

幾つかの細い横町を、よく間違えずに曲つて行くと思ひながら、

雄作は邦彦の後について行つた。自分の生活とは、およそ遠い感じの街だつた。こんな所へ来て、妻の行衛を知る何かの手がかりが得られるのだろうかと思つた。しかし不思議に、何か得られそうだという氣持が強くなつていた。緑の樹木で囲れた芦屋附近の高級住宅地にはない匂いが漂つていた。それは犯罪の匂いかもしれなかつた。そしてそれは小百合夫人の行衛不明に多少縁がありそうだった。雄作は今日まで夫人の失踪を、夫人自身の心の中に原因をおいて考えていた、しかし今、邦彦に伴なわれて、はじめて訪れたその街の汚濁の中に、小百合夫人の失踪の裏に黒い雲が湧くような別の不安を感じたのだ。

犯罪。……それがどういう形で表われるのか漠然としていたが、雄作の頭にその言葉が浮かんだのは、なじみのない世界に対する自己防衛の変形なのだろうか。それともカンというようなものだつたらうか。

君ちゃんという男の住いは、旅館というよりは旅人宿といった方がいい、もう一つ言いかえれば木賃宿の一室だつた。

しかし、殺風景な他の部屋に比べて、その部屋だけは、鏡台も簞笥も水屋も、一通りきちんと並べられて、男ひとりの住いというよりは、水商売の女の部屋の様に、あだめいていた。

その男は白地に蝙蝠の粋な浴衣を着ていたが、髪は衿もとまでの長さでいわゆる男装の麗人の様な髪型にしていた。男とも女ともつかない嬉しい色気をもっているのが、着ている浴衣の蝙蝠に似て無気味でもあつた。

「さあ、貴船さんには一寸も会わないんですけどね」

男は二人の問いに答えて言つた。

「私もたまには会いたいと思うんだけど……フフム……」

とあとはふくみ笑いにごまかしたが、

「貴船さんといやあ、いいもの手に入れたのよ、見せましょうか、でも、こちら……」

と、雄作に気がねするのを

「どうせ君ちゃんのいいものなら、見ないでもわかつているけれどこの人に遠慮することないわ、見てあげるから出してごらんよ」

邦彦がうながした。

「見てあげるからなんて、恩にきせて……。尤もあんたはあんまりこんな好きじゃないかもしれないけれど……」

言いながら男が手箱からとり出したのは数葉の写真だった。
見るなり

「あつ！」

と、邦彦は言う、なおよく見ようとするように目に近づけたがその顔が引き締つてきた。

「ねえ、これ……」

邦彦はその一枚を雄作に渡した。

雄作は何の気なしにとりあげたが、一目その写真を見ると、思わずぐつと息をのむようにして、電気の光にかざすようにしてみた。

「すばらしいでしょう？」

二人の様子に、君ちゃんという男は自慢するように言った。

その声にはつとしたように雄作はのり出すと、

「どこで、どこで此の写真を……」

と、せきこむように聞いた。

それこそ小百合夫人の全裸の写真だったのだ。そればかりではない、豊かな乳房が奇妙にゆがむ程かたくかけられた縄は細い胴をしめつけ、長い脚に蛇の様にからみついて、体中を手拭をしぼるように犄々と締め上げているのだ。縄のかゝつていないのは、僅かに顔だけだった。その顔には唇へ深くかませるように猿ぐつわがかかれ、まるで口がさけたように、頬がくびれて段がついた。しかし、その形のいい鼻と、見開いた瞳と、額から生えぎわにかけて小百合夫人に間違いなかった。

一枚はみじめにも、両脚を無理に開かして、夫の目にさえはつきり見せたことのない大切な場所をあらわにされていた。そして、それを撮られる時、どんなにか抵抗したろうことは、足首をひつぱり

膝をひつぱり、腿にまで幾重にもまわされた不自然な縄のかけ方に表われていた。上半身は柱に縛りつけられ二の腕は、まるで瘤のようにつくれ上つて、締めつける縄の強さが思われた。

一枚はそのまゝの形で、更に柱と背中の方に竹棒を通して、こじりあげられている形だった。開いた足の指の一本一本が、苦痛を訴え、縄と縄との間の筋肉が、今にも血を吹き出すかと思う程緊張して、「ヒーッ！」という悲鳴が聞えてくるような気さえた。

雄作はともあとの二枚をつぶさに見ることは出来なかった。しかし、見ないで返すことも出来ない。その写真が魔力を持つように雄作に見ることをうながした。

それは小百合夫人だけではなく、男まで一緒に縛られていた。そして一本の棟木から左右に分けて、両側に吊り下げられているのだ。小百合夫人の口にはやつぱりかたく猿ぐつわがかまされている。よく衿あしを美しく見せてアップスタイルにしていた長い髪は前へ垂れて顔を半分かくしていた。その髪の毛のさきが、縄と縄との間から引張り出されたようにとび出している、乳房のぐみのような乳首をくすぐるように乱れて波打っていた。片方の男もやつぱり素裸にされている。そして、鞭の痕らしい醜い疵が、幾条も裸の体に這つていた。小百合夫人は、まるで振分け荷物の様に後手に縛つた縄でその男と結び合わされている。男の方が体重が重いのを、平均させようしたのか、小百合夫人の足にはアイロンがぶらさげられていた。長い脚は畳につきそうにたれていながら、畳からはまだ一尺程上にあつた。後手に縛られ、吊り上げられ、まだその上に足首にアイロンまでぶら下げられなければならないようなことを、小百合夫人がしたというのだろうか。それはまるで姦通の私刑のよ

うだった。しかし、もし小百合夫人が私刑を受けなければならぬようなことをしたとしても、雄作以外に、誰にその権利があるだろうその男の妻が情人にその権利があるだろうか。

それにしても、雄作はまさか小百合夫人と一緒に吊り下げられている男と姦通したとは思えなかった。野獣と一つにぶら下げられているとは思えない。すべては彼女を羞しめ、さいなむ道具なのだ。「この男どこかで見たような顔だ」

邦彦が言った。芦屋の茶室から一茶の軸を盗もうとしていた男だとは気がつかなかった。ただ、見たことのある顔だと思つたのだ。

「あんたはいつか私が貴船さんのモデルになるつて嫉んでいたことがあつたわね。その人も貴船さんがよくモデルに使つていたわ、村山とかいう名だつたわよ」

「じゃあ、貴船が此の写真とつたの？」

「そんなこと知らないわ、でも、今までにないいい写真でしょう？」

君ちちゃんという男は、惚れ／＼と見直すようにもう一枚の写真にみ入つていた。

「やつぱり貴船のしわざよ」

邦彦が言った。

「奥さんは貴船に誘拐されたのよ。わざと知らばつくて、芦屋へたずねて来たんだわ。雄ちちゃん、警察へ届けた方がよくはない？」

「何言つているのよ。あんた。いつからサツの犬になつたの？そんならこれ見せるんじやなかった」

警察という言葉だけピンと耳に入つたのか、男は横から写真をひつたくつた。

「帰えつて頂だい。誰が渡すもんですか」

男はいきまいた。

「いや警察なんかへは届けやしない。しかし、いくらでも出すからその写真、僕にゆずつてくれませんか」

雄作がおだやかに言つたが、男は警戒して渡そうとしなかった。

「じゃあ、どこで手に入れたのか、それだけでも……」

重ねて頼んだが無駄だった。

写真の出所さえわかれば、小百合の居所はわかるのだ。しかし、雄作はそれを警察の手を借りてたずねたくはなかった。その写真のモデルが自分の妻であることが公にされることをおそれたと、妻の恥しい姿を、自分の目の前で何人かの警官に、順ぐりに写真をまわされて見られることを考えただけでも顔が赤くなつた。何とかして、出来るだけ早く秘密に妻を助け出すより道がないのだ。

「知らん顔して貴船を呼び出してみましょうよ」

邦彦は言つた。

警察という言葉聞きかじつた君ちちゃんという男は、二人を追いつ出すように帰えりをうながす。その男に「実はそのモデルは僕の妻で……」というの、雄作には何となくためられた。雄作の地位と名誉が邪魔をするのだ。妻の危難に対しても、一つの殻の中でなければ行動の出来ない自分を不甲斐なく思いながら、雄作にはどうにも出来ないのだ。ぎつくばらんに、男娼を相手に自分の家庭の秘密を話すことがどうして出来よう。悲しい見栄だつた。その見栄の為に今妻が死んでしまふとしてもやつぱり雄作は、女の恥しい所を露わにした写真の主が自分の妻だとは言えないだろう。

それにしても、誰が妻をこんな姿に……。

そう思うと、雄作は新しい憤りで身がふるえるような気がした。「ねえ、たしか貴船は雄ちやんの所で住所を書いていつたでしょう？、そこへ行つてみるか、呼び出して聞か、どつちかしてみましよう」

邦彦は云う。

妻を苦しめているのが、もし、あの貴船一郎という男なら、雄作は、貴船をもつてもつと苦しめてやりたいと思つた。とに角貴船に会うことだ。

漠然としていた小百合夫人の失踪に、ある一つの手がかりが出来ただけでも、邦彦の今日の誘いは成功だつた。雄作はふと、邦彦に対するわだかまりが少しとけたように思つた。

「君のいうように貴船という人をたずねてみよう。僕に力を貸してくれよ、たのむ」

雄作は邦彦の肩に手をおいた。

邦彦はその手の上に自分の手を重ねて

「雄ちやん、やつと雄ちやんが雄ちやんらしくなつた」

と、満足そうに云うのだつた。

四

貴船の新しい住所をたずねると、折あしく貴船はいなかつた。彼もまた、毎日足を棒にして小百合夫人の行衛を探していたのだ。ただ、貴船一郎は順子に会ふのをさけていた。今、順子につかまつたら、小百合夫人を探すという行動がさまたげられそうな気がしたからだ。へたすると、新聞種にあるような硫酸の一つもかくし持つて順子が自分を探しているかもしれない。どうかすると激しいマ

ゾヒストが全然逆の行為をする時がある。それは更に強い力で虐げられたいと思う誘いかけなのかもしれないし、縄が鞭になり、鞭が焼け火箸や剃刀にすすんで、刺戟を求めるようになってくると、人に対して、常人が思う程、兇器は恐ろしい道具ではなくなるのかもしれない。順子の様に、愛情の表現を激しく求める女は、愛が憎しみに変つて硫酸を持つのではなく、硫酸にやけただれた醜い男なら、自分だけのものに出来るだろうと思つて、そうした薬品をかくし持つことがあるかもしれない。憎しみよりも、やつぱりあるものは激しい愛情なのだ。しかし、愛というものは、おだやかであつてこそ長続きする。貴船一郎は順子と愛情の火花を散らすのはもうごめんなのだ。

彼は順子をさけると共に、彼に会つたということを順子に告げるような相手には出来るだけ会わないように気をつかつた。村山や松枝はさけなければならぬ相手だつた。

小百合夫人に最も近い人々をさけている以上、貴船はなかなか夫人の行衛を尋ね出すことは出来なかつた。

その日も疲れはてて、借りている自分の部屋へ帰えると、置手紙がしてあつた。

——御相談したいことがあるので、芦屋まで御足労願いたい。

邦彦——

ただそれだけの文面だつたが、貴船は胸のときめくのを押さえられなかつた。何か小百合夫人の消息がわかつたのかもしれない。

彼は疲れた体にもう一度生気が吹きこまれたように、急いで芦屋を訪れたのだつた。

いつもの様にベルを押すと、取次に走つて来た顔見知りの女中を

さえぎるように邦彦が出て来て、応接間へ案内した。

雄作はこわばった顔にしていって微笑をうかべて彼を迎えた。誰かが口を切るのを待つように三人共、しばらく無言で向い合っていた。ただ扇風機の音が、遠い飛行機の爆音の様にひびいていた。

「奥さまはお歸えりになりましたか？」

たまりかねて貴船一郎が聞いた。

瞬間、邦彦と雄作が目で信号し合った。

「貴船さん、あんた知っているんでしよう？」

邦彦が言った。

「貴船さん、失礼だが、金がいるなら、お望みだけ出します。小百合を帰えしてよこしてくれませんか」

雄作が言う。

一郎はむつとした。何か誤解されているらしいことはわかる。しかし、金と言われたので腹が立つた。自分がどんなに一生懸命、彼女の行衛を探していることか、その為、仕事も出来ず、布団まで金にかえていた。それをこの人達は自分が何か小百合夫人をかくして金をゆするうとしているようにでも思っているらしい。

「いくら出すというのです？」

精一杯の皮肉のつもりでそう言った。

雄作と邦彦は又、視線をぶつかり合わせたが

「暑いわね」

邦彦は急に他の話の様に言い出した。

「雄ちゃん、御自慢の涼しい酒場へ行つて、ゆつくり話しましょうよ。いくら出すかはそれからにすればいいわ」

一郎は唇のはしで苦笑した。「いくら出すというのです」といつ

た皮肉を、そのまゝ本氣にしているらしい。金持というものは、何でも金をもとに考えるのだろうか。妻の失踪をすぐ金と結びつけるそれも金がありすぎるからなのかと思うとおかしかった。そして又小百合夫人がこの家に帰っていないことは不安であると同時に、一郎にとつては、希望が残されていることになる。雄作の金力と、自分の愛情と争う日が来ないものでもないという希望が、小百合夫人の行衛にかけられるのだ。自分が小百合夫人の夫と、この芦屋の家で一緒に盃を手にしたことがあるという思い出を、いつか笑つて夫人に話す日がありはしないかというが、一郎の心をふつと溶かした警戒する心は全くなかった。

涼しい酒場というのは、庭の築山から地下へおりるようになっていた。金にあかして造った防空壕が、そのまゝ夏は涼しく、冬は温かいのを利用して、主人自慢の酒場に変造していた。

雄作の後から貴船がつづき、その後から邦彦が入ると、扉はかたく閉ざされた。静かな地下室は別世界の感じがあつた。

デヨニウオーカーの黒いレベル、オールドパー、チンザーのベルモット、ヘネリーのグラランデー、レヤオールド、コアントロ……。

貴船一郎はそこに並べられた酒瓶の一つ一つを順にみているうちに、妙にたのしくなってきた。彼が落魄しない昔、お酒の味を知りはじめた好奇心で、洋酒の味を一つ一つ吟味したことがあつた。ふと同じ酒場で並んでのんでいた見ず知らずの芸者上りらしい女が、そんな一郎を面白がつて、自分のやつていっているという旅館へつれて行つてくれた。客に出すのではない、あるじの好みだという洋酒の類がその女の部屋に並んでいた。女は一郎の姓も名も聞かず、ただ「お兄さん」と、花柳界の女の呼びようで呼んでいた。一郎も「オバサ



ン」と呼ぶだけで名も知らなかった。金をとらない客として、一郎はよく飲ましてもらった。そのかわり、盆、暮には一本や二本ごまかしてもわからない程数多く彼の家へくる贈物の中から、こつそりオバサンの畳敷の酒場へ酒瓶をかかえていくこともあった。一郎はオバサンの部屋の洋酒がふえていくのが、自分のことの様にたのしかつた。それは一郎がそこで偶然、オバサンの「あるじ」に出会うまでつづけられたのだつた。

今、一郎は雄作の地下の酒場で、郷愁の様な思いでオバサンとオバサンの「あるじ」を思い出した。その「あるじ」が死んでから、オバサン名儀のその旅館は今でも道頓堀に再建築されて、多分オバ

サンは達者だろう。しかし、同じ「あるじ」を「あるじ」としていた一郎の家に残つたのは借金だけだつた。

貴船一郎が小百合夫人を紹介した道頓堀の旅館は一郎の死んだ父が、その愛人に残した財産だつたのだ。

洋酒の瓶からつながる思い出は又しても小百合夫人にきてとまつた。

ここでこうして酒をのんでいる時ではない。一刻も早く、彼等の誤解をといて、一応夫人の行衛を探すことに力を貸し合わなければいけない。

貴船一郎は邦彦がシェークしたジンフイズをひと息にぐつとあはつた。レモンの匂がきつく、にがみがあるように思つたが、国産のレモンには時々にかいがある。洋酒ばかり本物をそろえて、何故サンキストのレモンを使わないのだろうと苦笑する口もとがふつとゆるんできた。何だか妙にけだるい。今日は一日歩き廻つて疲れていたせいかもしれない。

「とに角、僕は小百合さんとおつしやる奥さんに会つたのが、頂度……」

と、一郎が指を折つて数えながら、話を白紙に戻して説明しようとした。しかし、彼の頭は谷底へ落ちこむように暗い眠りの底へ引かれていった。

——疲れているのだ、疲れているのだ……

……一郎は思いながら「失礼します。一寸……」

そう言いかけて、卓にうつ伏すと、それつきり死んだように動かなかつた。

を縛つてその写真を売つたりするのか、はつきりしたことを聞く為にはそうするのもやむをえないと思いました。君はいくら出すと聞きましたね。金は出せといえませんが、いつたい、どうして小百合をあんな姿にしなければならぬのか、妻をあんなめにあわされた夫の怒りはどうすればおさまるのか、金では済まない問題です言つて下さい。何の恨みがあるのです？どうして小百合をあんなめにあわせるんです？」

「あんなめ？」

一郎は反問した。雄作の顔を振り仰ぐとしたがそれも出来なかつた。シャツもズボンも濡れねずみの様に体にピタツとくつついて水をふくんだ縄は針金の様にきつく肉にくい入つていた。

「いつたい小百合さんがどうしたんです？」

一郎は叫んだ。

「まだそんなことをいう。君はこんなにされて、まだ知らばくれるのか、君という人間は……」

雄作の足が一郎の背中をギシギシと踏んだ。

「これでも言わないか、これでも……」

雄作は体全体の重味を片足にかけて、一郎の背中に靴が埋るように踏みにじつた。

「ううつ！」

一郎は思わず呻いて齒をくいしばつた。

「こうしてやる方がいいわ」

邦彦は一郎の顔へ自分の足をのせて、頬を足の裏でふみつけた。

「あつ！ううつ！」

と、一郎はふみつけられた頬の肉を内側で齒の間に噛んで、その

まゝ齒をくいしばらねばならなかつた。酸いような血の味が口一杯にひろがつた。

やつと邦彦が足をはなしたので

「僕は、僕は本当に知らないんだ」そういうことが出来た。一郎の片頬にはふまれた痕が泥と血とまじつて残つていた。

「嘘つけ。村山とかいう男と、小百合さんを一緒に縛るなんてお前でなくて誰が出来るんだ」

邦彦は言つた。

雄作の目に、小百合夫人のみじめに縛られた姿が、再びはつきりとうつし出された。

「よくも、僕の妻を……」

雄作は小百合夫人の行衛を聞きただすことを忘れて、ただ憤りに体が燃えてきた。

「こうしてやる、こうしてやる」

叫びながら、貴船の背中の上で、子供が地団太をふむように、激しく彼を踏みつけた。そして右から左から交互に横腹を蹴り、無抵抗に転がされている一郎の体を、靴の先で玩具にするように苛んだ。一郎の白いシャツも薄ねずみ色のズボンも、泥にまみれて、ぼろ屑のように、一郎は床に呻いた。

「言う、言うから待つてくれ！」

やつと一郎は声をふりしばつて言つた。

「待つてくれ！」

理不尽な雄作達の行為に、湧き上る憤りを押さえるのに彼は骨折つていたのだ。しかし肉体的な苦しみの中で、彼等の言葉を反響して、みるこゝろが出来たのは、小百合夫人に対する彼の泉のような愛情

からだつた。とに角、何か誤解しているにせよ、自分よりは彼等の方が小百合夫人の其後の消息を多少探りあてているようだった。自分の身の痛さに呻めいている時ではないのだ。

「待つて下さい。冷静になつてくれ、僕はこうして、縛られているんだ。どんなめに合わされようと、今晚一晩中でも責められてもあげよう。その前に僕のいうこともきいてくれ！」

貴船一郎はとぎれとぎれにやつとそれだけいうことが出来た。雄作が彼の体から足をはなしても、こづかれたり、蹴られたりした痛みは、そのまゝ消えようとはしなかつた。口をきくより、呻いていたら、少しはらくかと思われた。

一郎は床に長くのびて、両手は椅子の脚に縛られたまゝ、僅かに顔をあげて言葉をつづけた。

「小百合さんが、村山と縛られていたということはこういうことなのだ？、僕は決して白ぼつてくれているのではない。何ならその村山の家も教えてやる。何か手がかりになるかもしれない……」

「本当に知らないの？」

邦彦が念を押した。

「疑うなら、いつまでもこうして縛つておけばいいじゃないか、どうせ、僕は君達の俘虜だ。嘘なら嘘で、又蹴るなり打つなりすりやあいじゃないか」

「本当かしら？……」

邦彦は尚も疑いながら、それでも、君ちゃんという男の家で、小百合夫人の縛られた写真を見たことを説明した。

一郎ははじめて、順子の嫉妬が小百合夫人の行衛不明に何か関係があるのではないかと思ひ至つた。村山が一緒に縛られていたとし

たら、松枝のわざしかもしれない。多分、その写真を買つて、一ともうけたくらんでいるのかもしれない。もしかしたら、写真だけでは済まないだろう。そうした責めをテーマとした裸体のシヨウで順子が稼いでいたことのあるのを思い出した。小百合夫人はそのモデルにされているかもしれない。

貴船一郎は自分が今まで、全然そうした方面に小百合夫人がつかまつていることを考えてみなかつたことをくやしがつた。しかし、それと知れば、夫人の行衛にやつと目鼻がつく思いだつた。

「そんなら僕に心当りがある。明日にでも小百合さんを此処へつれて来られると思う」

しかし、邦彦は

「その手にはのらないわ。あんたを逃したらそのまゝ帰えつてくるもんですか。心当りがあるなら、言いなさい。嘘か本当か、それがわかつてから縄をほどいてあげるわ。本当なら、あんたが私達のしたことを訴えないですむ位のイロはつけるわ、ねえ、雄ちゃん」

貴船一郎はぼろのような恰好で、まだ縛られていなければならなかつた。あせつてみてもどうにもならない。とに角二人をさきを探しにやつて、あとから此処を逃げる方法を考えよう。一郎はそう思つた。

一郎は村山の家と、順子のいるもとの自分の家と、責めのシヨウをやる秘密倶楽部を教えてやつた。

雄作と邦彦は一郎を床からおこすと、もう一度彼の手を後手に縛り直して、椅子に腰かけさせ、彼の口に猿ぐつわをはめた。

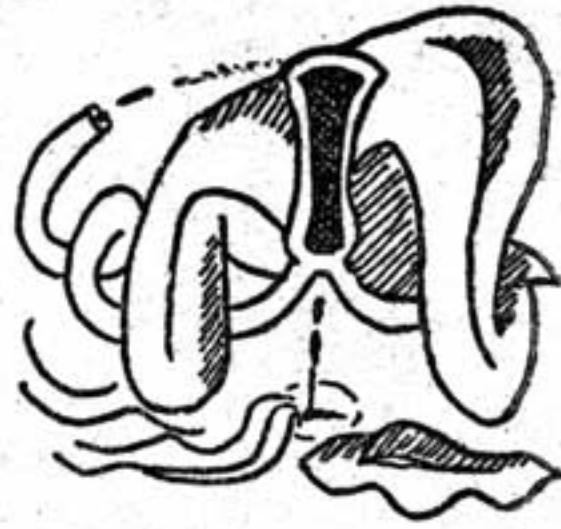
「少しの間おとなしくしていなさい。あんたはよくひとをそんなめにあわしたから、自分の番だと思えば済むでしょう？」

邦彦は憎まれ口を残して出て行つた。

まだ睡眠剤の残りがあつたのか、踏まれたり蹴られたりした体の疲れなのか、貴船一郎はそのまゝ又、意識がうすれていく。

——しつかりしろ しつかりしろ——

そう自分に言いかけさせたが、縄は彼の手をしびれさせて、指さえる思うようには動かない。そして、頭はたえず、深い淵へ落ちこんで



歡義先生

性愛相談欄

解答者 歡義先生

第一問

○女臭に魅かれて○

私は今年二十三才になる東京に住む大学生ですが、最近特にフェチシズムの傾向が強くて、勉強も頭へ入らない有様です。ガールフレンドの友達を下宿に訪ねても、いつも妄想にとりつかれるのはズロースの汚れたところでは。普通の人達のやかましく云う顔にはあまり関心がありません。どちらか

と云えば肥つた肉感的な人に引かれますが、それもやはり、太股いっぱいにはちきれそうなズロースのゴム紐の肌への喰い込みの連想からくるものです。フェチシズムといつても、私のは視覚の外に嗅覚も大いに影響してしまつて、若い女特有の生臭い臭いには頭が痺れるような強烈な刺激をうけます。こういった衝動から一度今年の春親しい女友達に恐る／＼頼んでみたのですが、彼女は最初は冗談の

いこうとする。

——小百合さん——

恋しい人の名を呼びながら、その人と同じように、猿ぐつわをはめられ、後手に縛られた姿のまゝ、一部は荷物の様に動かなくなつていつた。

(次号完結)

ように馬鹿馬鹿しいといった態度でしたが、私が真剣に強要しますと「しつこい人ね」と云つて、それ以来私を避けるようになっていきました。彼女は肉体的には私の好みの人でした。それ以来、私は意中の女を後手に縛つて、ズロースを十分眺めたり嗅いだりしたいという夢想にとりつかれることがありま

(東京H・H)

「解答」

此の大学生の質問はフェチシズムと関係が、あるでしょうかと云う点にある様ですがその質問とは離れて、もう少し根本的な方面に触れてみたいと思います。一体に若い人々の苦惱は何れも精神的な

ものが多い様です。若い時代には自己の智脳経験を唯一の物と思ひ込み、之がそのまゝ直接行動に現れる時若げの至り／＼を生ずる結果となります。若い時にはそれで宜しいのです。だが其所にも自然に逸脱してはならない範囲があります。一番大切な事は自己の内面に起つて来る事象を全て「斯う言う事もある」として経験の一つに加え一生の何行かに蔵つて置くと言つた態度が必要です。一体人間には誰でも多少共変質的なと表現される性格があるもので特にそれが性愛とか思索とか云つた方面には外に現れるか現れないかの差だけであつて全くの所千差万別止る所を知らないと思つても過言ではないでしょう。此の大学生の一面に現れた夢想なり妄想は少しも否定すべきものではないのです。但しそれを直ちに現実の世界



或る被虐性愛者

の手記より (三)

天 泥 盛 榮

第三章 秘密倶楽部

翌る日、此処某市の空は飽迄もすみわたりその限らない碧空の中に、私達の最も尊重する証明が在りました。

朝から私は主人と共に最後の調教を続けました。やがて夜が近づくと、此の市の最も大きな集会所であるAホールに集合しなければなりません。CIRQUEと書かれた大きな看板が稍広い会場の中で一際目立って見えます。私は主人を乗せて、控室らしい部屋へと這入りました。こゝには各々その催し物の秘密を守るために一つ／＼楽屋や控室が独立して設計されていました。方々でゴソ／＼とい

う物音、女達の厳しく叱りつける声、そうして時々鋭い革鞭の響き、談笑する声、細い長靴を無理に穿くときの特有の皮革の軌る音等が聞えます。私の聞いた限りでは相当大勢の人々、恐らくは四十人位の人々がこの小さな一隅でひしめいているようでした。

私はこの健全な娯楽——曲馬団は私達にとつても亦一つの想い出、殊に幼年時代を想い出させるものです——について、余り何も期待しませんでした。恐らくは一部隊の為に特に、仕つくられた一つの慰安会だつたのでしよう。そうして、猿や象や或は大達の可憐な曲芸が皆を喜ばせ今や馬に化かされた私も一頭の馬として登場し、一同の拍手をうけるのだ

ろうと、私はそのように思つて居りました。時間が迫つてきました。幕開きというものが常に付加するあの特殊な感情と期待とに満ちた空気が、何か稀薄なような気がしている中に開幕のベルがけたゝましく鳴りひびいたと思ひました。

私は特に付加しておきたいのですが、この日私の女主人は、真黒なシルクハット、真白いマフラーをつけ、黒い上衣と白皮の手袋、そうしてクリーム色の乗馬ズボンに濃い茶色の乗馬靴、拍車は銀色のをつけ、鞭はよくしなう革を編んだ一米のものを持っています。彼女は、私の手綱をとり、背に跨つて広間の方へと歩かせます。

さて、広間へついて驚いたことに、そこには二十人程の、サーカス用の美しくも残酷な感じのする衣裳をつけた女士官達と同数の全裸にされた白、黒、黄の各色の男達が夫々、女主人の手に持つ鎖や革紐に繋がれていました。初物は私一人なのです。その上、観客は一人もなく彼等がすべてなのです。余り複雑になるので、主なだし物だけを御説明致しますよう。

黒人の一人は私と同じように馬にされて（といつても形は人間なのですが）彼の口には頑丈なくつわがかまされ、重い鞍を背に置かれて、その女主人はカウボーイの姿をして跨ります。そうして、円筒形の樽が二個廻転するように横に半分埋めてある上で、女騎手を疲労の余り投げ出すまで走らされました。女騎手は実に巧妙に彼女の半長靴の踵につけた大きな鋭い拍車を用いました。馬の愚鈍な皮膚に対して極く軽く用いても即時に、従順さを要求する烈しき責め道具は、黒人の軟かい皮膚に対してその威力を発揮しました。

女騎手はその武装した靴でいさゝかの情容赦もなく、早く走ることを要求しました。遂には拍車は黒人の脇腹に喰い込んだ儘でぐい／＼と抉りました。それでも拍車が黒人の力

を絞り得なくなると、彼女は尻や背に飛び切り烈しい革鞭を振りました。しかも驚くべきは黒人の男の……力一杯に張り切り、騎手を振り落してぐつたりと床の上に倒れても、それだけは一向衰えませんでした。女騎手は血まみれの拍車を取ると、仰向けに倒れている黒人……をその半長靴で踏み始めました。今迄自分の腹に対して苛酷な拍車を当て、いたその脚に対して黒人は我を忘れて叫びました「もつと／＼叩いて、死ぬ程打つて下さいそうしてその靴を！」

と、彼女は男の口の中へ半長靴の爪先を押し込み、革鞭を振りました。男は遂に……：……その……：……はたしかに上りました。半死半生の黒人が、再び女騎手に革鞭で打たれ、尻を蹴とばされ乍ら退場しました。そのすぐ後にとう／＼私の番がやってきました。

私はじつと、私の女主人の服装に目を配りました。その軟らかい華奢な乗馬靴が、私の脇腹にじかに触れるのだ。そうして、女主人は私に彼女の意志を伝える為に、刺のついた拍車で私の腹を抱き上げるだろう。彼女にとつてそのようなことはつまらない、一動作なのだが、私にとつては絶対服従を強制するの

だ。それにあの革鞭は何としなやかなのだろう。——等と考える中に、私は自ら……：……のを感じました。途端に「馬鹿者！まだ早いよ！もう鞭が欲しいのかい！」

という声、そして次の瞬間、私の……：……がまきつききました。彼女は余程怒つたと見えて、牛追い鞭を取り上げ、私の四本の脚を杭に縛つて気の済むまで打ち続けました。長い皮が空気を切るビューという音、私の背や尻が折檻される、バシツという音が聞えました。

彼女は私に二本足で立つて歩くことを要求しました。彼女を背に乗せて（その拍車と鞭とに追い立て乍ら、私は歩きました。皆は大喝采で喜びました。（後の小さな出し物は省略）そうして、夜更けてこの集りが終ると、彼女は

「どう？まだ馬になりたいか？」

そうして、最後の革鞭を私の背中に打ち込みました。これが私の友人の話の全部です。彼は今日日本へ帰つて来ました。しかし彼の見た夢のようなこの世界（彼の記憶力や推理力は大変衰えていたので、第三章等は特に読みづらいのですが）は実在するのだろうか。

私はこの疑問に対しては、はつきりと申し上げます。催眠術は私達をして、夢の世界へ引き入れる。私達、幸にして異常な性格を有したるものは、この夢を實在のものに置き替えるよう努力しなければなりません。

私も亦、貴婦人に馬として仕えたい男の一人ですが、現在の世界にこのようなゲ

ウ(趣味)の存在することも、面白いことだと思いませんか。

靴フエティツシュ、マゾヒズム、馬化狂、等はその頭腦の低劣さではなく、その感覚の高尚にして、幻想的なことの証左ではありませんか。

私を馬にして思う存分乗つて見たいと思

又、全裸の男を乗馬服をつけて、愛して見た貴婦人は存在しないのか。かつて、ルードルフ・シュリヒテルの描いた空想は実現しないのか。私は声を大にして、この事を叫びたいのです。

(完)



兩棲動物

(三)

|| 男 色 夜 話 ||

岡 真史郎

木内恒司・画



第一信(写真同封)

突然に見ず知らずの者よりお手紙差上げましてお許し下さい。……その素晴らしさにす

っかり先生のフアンになつてしまいました。

リアルな描写が迫真力をもつて私を引ずって行きました。……先生の御好物も菓子類など

伺えれば大そう嬉しく存じます、私は目下ある種の画を業としている者ですが誰も扱わなかつた様な面白い実話の種を持っています。

そのヒントの一端にあやしげな写真を一葉同封しました、けれどももし御不愉快になられましたら御詫び致します。……………

それは髪を長くのばした女のような美しい若々しい顔で目のぱつちりした色白のハンサムな若者かそれとも娘の肖像だった。

「一体あなたは男なのでしょいか女なのでしょいか、御同封の美しい人の写真はあなたですか、もしあなたで、あなたが男性なら私は一目惚れです、男色に興味をお持ちなのでしょいかおよろしければ御交際下さい」と書いてやつた、第二信は次のようであつた。

お察しの通り私は男色に關心と探究心を持つて居る者です、同性愛の体験と云えば凡そきまつて居りまして先生のような詳しい方には最早珍しいことも無いと存じます。……………

先生のお手紙に接したからです、御注意をひきたいあまりに同封しました写真は私です。

五年前のものでアウトラインに変わりありませんが大変修正してありまして実物は見る影もなくお世辞を申されますと本当に困ります、ところで私は男と申上げたいのですが中性なのでしょいか細身長軀で軟弱ながら男性です態度も男らしくつとめていますが他人には女性的に映るらしいのです、幼少より同性だけ

が好きでした、学校は商業だけですが逃げてばかりいて同性関係は二十二才頃まで少しも知りませんでした、毎日父母と共に家にいましたので友達を作るチャンスもなかつたのですが病後の静養に芝公園に通ううち始めてこの世界を知りました、それで日比谷、浅草、上野、横浜と一応身を投げ出して探訪して歩きました、でもそこへ集る人達は毎日相手をかえているようなこの世界のすれた人達であると知るといやになり戦争と同時にすつかり縁を切つてしまいました、それから心の愛人を探すべくやつと両親のそばから離れシンガポールへ軍属として従軍しました。(外地での経験は長々と書いてあるが略す)

終戦直前私だけ内地に帰されてしまい総ては夢の様に消え去りました、それから青春も失つた様に孤独でしたが何んとしても自分の生れが呪わしくなりません、一人取り残されそうです、ところがふと少年が誘惑されやすいのを知るとどうせ女にとられてしまうものならその前にこちらで自分のものにしてやろうと考え、今度は自分から童貞魔と名のり極秘のうちに少しでも好きな少年をみると千姫さながら独り住いの家に呼びよせ次々と青春の芽生えを刈りとつて悲願の犠牲にして

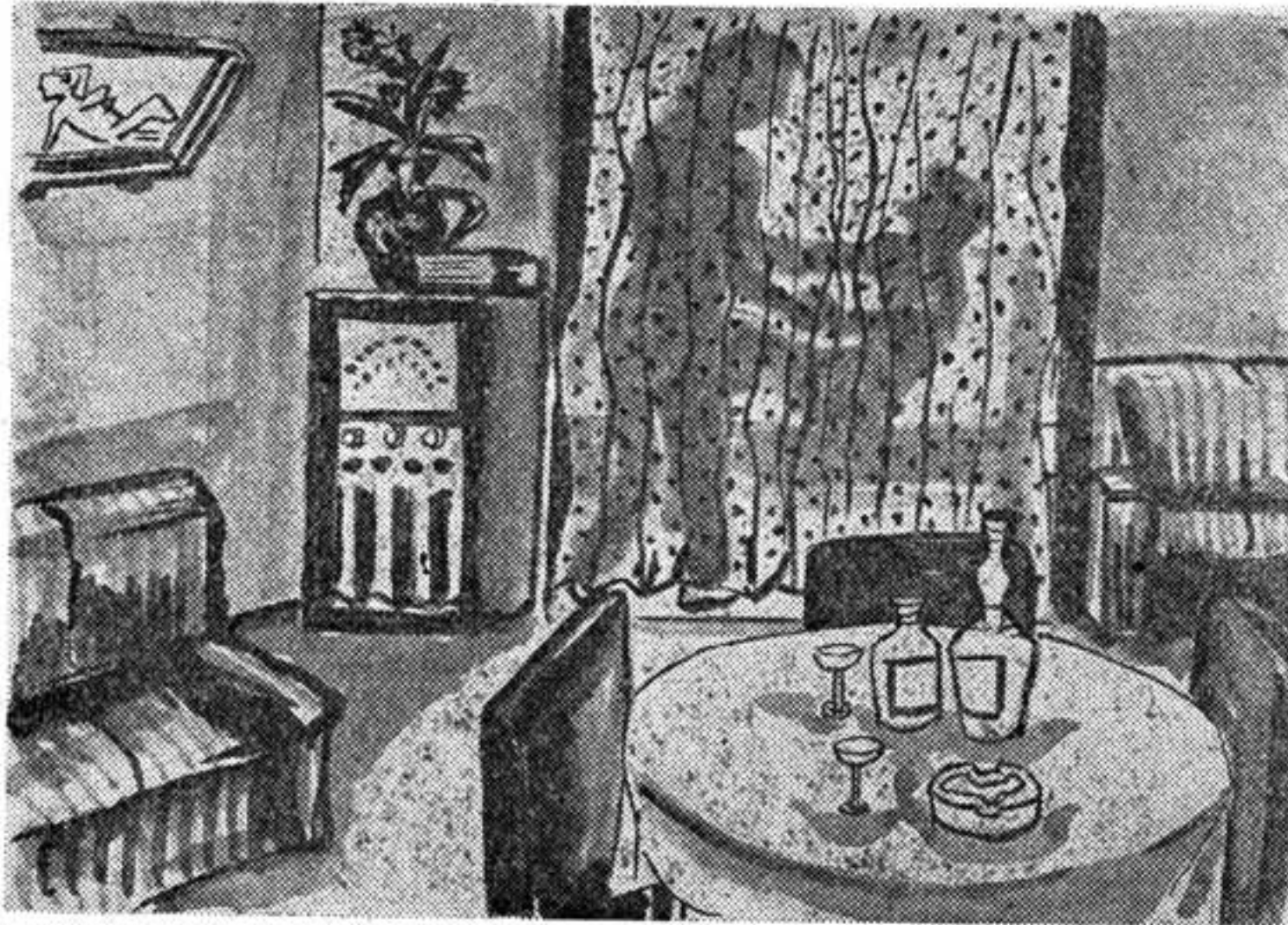
きました、そのうちどうしても少年達の鉢合せが避けられなくなり結局今はA一名だけに落着き私も浮気を止めて現在に至っています私も若い頃はいろ／＼悩みましたがもうすっかり馬鹿になつてしまいました、やはり私の行為は悪いのでしょいか、最後の愛人Aは今二十二才ですけれど四年間悩み続けながら毎日の様に私の所に通つております、私が現れなかつたらAはノーマルな青年だったのでしょいか、けれど私もいつまでもこのまゝ続けられるとは思つて居りません、年をとつたら結局又浅草の飲屋へさまよい出るかと思うと暗澹となります、先生のようなインテリの方には今日までお目にも掛つた事がありませんので何か途でも開かれる様な気がして憶えています……………ずんぐりした人が対象ですけれどももし先生がその人でしたら私の様な大年増はすぐ嫌われてしまいます、ですから全然色気ぬきだと安心なのです。……………

それからこの心臆した相手は様々に心をくだいて向山の写真を懇願してきた、自分の写真は向山が一番嫌いであつた、写真と云えば会社の園遊会などでカメラ好きがうつすと云うのをおつき合ひで皆と一緒に撮つてもらおう位だつた、第一向山は自分の様な男のぢぢ臭

さを露骨に現したような平凡な顔に自信を持つてもないのだった、しかしそうしたものに悩む年配でもなかつたから彼は何年振りかで写真を撮り失望しないでくれと書いて岡田テルに送つてやつた、先方は何かブラトニツクなよりどころが欲しいようだった。

第六信

先生、只今待望のお写真とお便り拝見しましたありがとうございます、今までは何となく先生のイメージも漠然としてびつたりした感じも持てませんでしたでしたがこうしてお顔がはつきりしますと急に近親感も増して懐しくなりました。それがそれと同時にあまり御立派だったので益々自信がなくなつてしまひ果ては嫉妬まで覚えました……目はインテリらしく悩みをたゞえておられる様に感じられました。それにお体もがっちりしておられますね、あの手で若い子を喜ばすのかと思うと嫌になります、奥様だけにしてみてもあまり浮気はなさらないで下さいませ先生はうそをおつしやいました、おねえばかり多いあの世界では先生の様なおたちがどれだけでもてゐるか私は知っています、先生は買手だとおつしやいますが売買は意味がありませんね、それにしても私は色も白くなく目もぱつちりせず髪も濃くなく



肉体美でも若くもなく先生の好まれる様なタイプではありません、でも私は先生が好きです。お逢いする時は真暗な所で逢いたい。私と会つた時の先生の困つた立場の方がより小説的です、椿姫が若いアルマンに会う夜自分のしわを隠すため照明に苦心する姿や欲望と云う名の電車の狂女の深刻な姿はとて

も身につまされます、先生の中年というお言葉淋しく聞きました、肉の市場に身を投げることはうら悲しい、私はぜいたくなのでしうか……本当はいどまれる方が好きです、少年の頃は中年の人に強姦される夢ばかり見ていました、A以外の子はまるで人形の様で面白味はありません、先生の様な方に久し振りで抱いてもらえるのはとても楽しみです、でもお互が知らずに公園の事務所などで見知つた方が良かったように思えます。………

この手紙の頃に向山は啓ちゃんとの一件を報せてやつたのであつた、向山と岡田テルとの交際は世にも奇妙なものだつた彼等は同じ東京に住み半年以上も心の奥底をさらけ出して手紙をやり取りしてゐながら互に会おうともしなかつた、もはや肉体は彼等には興味がなかつた。彼等はホモの世界において互にその心を暖め合いたいのだつたそれは愛慾ともちがつていた。

第十信

……社会的地位のあるお方が研究だなんて公園をうろつかれるのはいけませんね、あんまりオープンだと知られたりしてまずいじゃないですか、やきもちでなく心から心配するのです、ところで何も持たない私の様な者な

らたつた十五分しか離れない日比谷公園に姿を現したとて何の不思議はないでしょう、それでとうとうそこで先生に逢つちまつたのです、お手紙によると先生はやはり気がついてはいらつしやらないようです無理ありません、私は先生のお顔は間違いつこありませんが私の素顔は写真と違うんですもの御存知ない筈です、でも先生が思い返されるのでしたらなる程似た奴がいたとなづかれるでしょう、最初はあの上手ですれ違つたのですが私は先生を見た瞬間思わず場所柄だけにかくれ様としたのですがそのひまはありません、しかし先生は私を見ても何の反応も現さないで私も知らん顔して行き過ぎました、こんな場合気があればふり向くのですが先生は前を向れたまゝだつたのでがっかりしました、きつと私と気がつかないのでしようと思つて存じなれならと今度は先生の後をつけました、先生は便所へ入られましたので私も勇気をおこして近くに並びそれとなくモーションをかけましたが通じないらしいのです。あまり永くはいられないので入口へ出て待つておりましたら先生は反対の方から出て行かれました。これは一体どう云うわけなのでしょう、考えるまでもなく実物の私は先生から完全にふられ

たのです、仕方ありません、他にハンサムなのが沢山居たので私など眼中になかつたのでしよう。でも淋しいです。……

向山より岡田へ

テルちゃん、君は何と云う水臭い人なので、僕達にとつてふる、ふらないなんて問題でない筈、どうして云つてくれなかつたの、しかし僕は全然思ひ出せません、テルちゃんのようなハンサムな人がいたなら気がついた筈です実におかしい、一体いつの晩なのか全く驚きました、しかし僕が行つたのは純粹の探訪の為で浮気で行つたのでありませんからその誰彼にモーションかけて歩いたわけでもないから御安心下さい。

第十一信

……こみ上げてくる微笑をどうすることも出来ません、とんだ御心配をおかけして申訳ありません深くお詫び致します、茶目氣から架空のコントを書いてお送りしたので、小説を書かれる位の先生ですからきつとお笑いになるでしょう、水臭いとお怒りになつたのは先生の精神的愛情の方だつたのでしよう。当の私はなる程日比谷は近いですがあそこは行つても意味はなくそれにとてもそんな暇はありません、でも日比谷での先生の浮気は研

究心からと知り安心しました、そう云う暇が羨しいです、たとえば表面がどれだけ好きでもそれが商売だつたらとても嫌です、私は戦前の日比谷しか知りませんがあの頃は一人だつて商売する者はいませんでした、人肉の市なので、私の望むところでもありませんが年とつて普通の人から見離されたらやつぱりあそこへ行く様になるでしょうね、そういう時の相談にも先生はのつて下さいますね。……今や索漠たるものがあつた公園のベチニアの花ももう散つたであろう、向山の足は次第に日比谷から遠のいて行つた。(完)

【読者通信】

(投稿歓迎)

KK通信第十三号のホモセクシヨンの中矢田真一郎さんの「憩いの場所」で河長という小さなスタンドで男色者の集りがあるという記事は面白く拝見しました。昔といつても戦前ですが、難波駅の裏手のゆうれん橋の袂に時雨茶店という喫茶店があつてそこのお女将さんからコッキー給仕に至るまで全部女装の男子でそういった好みのお客の溜りになつていました。客はすべて有名人ばかりで私も交際上二三度足を踏み入れたことがありました。

(神戸 赤井 生)

西田琴江傷害致死事件調書より

『呪

縛』

辻

村

隆

西田鋭二 第二回供述調書

一、×月×日のお取調べによる、私の前回の供述は、虚偽の申立てでありましたので、本日茲に事実をありの儘申述べます。

二、第一回供述による、第一項より第三項まで、前述と相違ありません。

三、妻西田琴江を殺害するに到りました、動機及経過をありの儘申し上げます。

其の後のお調べによります通り、私は嗜虐的性癖の持主でありまして、妻には被虐的性癖の何ら無かつた事を申し上げます。私のこの性癖は幼少よりの潜在的なるものでありまし

たが、私が中支へ出征中、憲兵分遣隊にありまして、中国人の捕虜等の取調べを致します頃より、徐々に行爲の上に現われてまいり、捕虜を緊縛して責めたり、拷問にかけたりする様になりましたから、其の行爲自体に、快楽と愉悅を覚える様になりました。

私は復員後、西田家へ入籍致し、妻琴江と夫婦生活を営む様になりましたから、この性癖は改まらず、何時か機会があれば、妻を存分に縛り上げて、心行く迄虐めて見たいと思ひ、衝動に駆られた事も一再ならずありましたが、妻及び養母カメは、私を非常に真面目な者であると、信頼しておりましたので、

こうした異常な行爲によつて、純真なる妻の感情を傷つけるが恐ろしくて、私は辛うじてその慾望を自制しておりました。

妻琴江が妊娠した事を知りました時、私は驚愕致しました。妻には憚かつて内密に致しておりましたが、私は中支に於て、慰安婦の爲、激しい性病を患ひ、その爲副睪丸炎となりました、軍医から判つきりと、子供は得られぬと宣告されていたからであります。

私は妻の人並すぐれた容貌と、若さに溢れた肉体に、限りなき、歎びと愛情を感じており、美しき妻に、夫としての誇りを感じて自己満足に陶醉していたのであります。然るに

思いもよらぬ妻の妊娠の事実、私は始めて妻の不貞を知り、それからは日夜懊悩と苦悶にさいなまれました。私は秘かに探索致しました結果、妻には私が西田家へ入籍する以前から、愛情を交した男のあつた事を知つたのであります。

その男は、妻の従兄弟で、山村一計と申しまして、私より二才下でありまして、その当時、U商事に勤めておりました。

大学出の山村と、尋常小学校のみの私のその学歴の相違に、相当教養の開きのある事は私も認めますが、一旦承知の上、私の妻となつた琴江が、いかに私が無教養とは云え、夫の眼を窺んで、山村と密通致しました事は道徳的に考えても、又私個人の感情と致しましても、それは到底我慢出来なかつたのであります。私が町内の積立旅行で、下呂温泉に二泊致しました留守中に、妻は山村一計と密通した事実を、探查の結果知りました。

私はこの事実をすぐ様申し立て、妻を責めれば、妻は必ずや山村一計の許に走るに違いないと考えましたので、妻に去られるのが

恐ろしく、且つ妻には当時恋情を激しく覚えておりましたので、心中の苦悩を隠して、その後も素知らぬ体にて、生活を続けておりました。唯私の心の奥には、妻と山村一計に対して、折あらば報讐致し度い決心を持ちました事は事実であります。そうした気持が反映しまして、妻に接する態度は、警戒的になり、粗暴に走りがちになつて行きました。長男鉄之が出生致し、その容貌が追々山村一計の血をうけて似て来るにつれ、私は妻に対して次第に冷めなくなり、私が何事も気付かぬと思つて、それをいふことに鉄之に只管愛情を捧げる妻に、私は激しい愛情の念と、胸を掻きむしられる様な嫉妬にかられました。鉄之が仇し男の片割れかと思うと私は長男が憎くてたまらず、それ故私は鉄之に対し、愛情の一片すら持ちえませんでした。その為か、妻はむしろ反動的に鉄之を溺愛した様に思われます。

鉄之が出生して半年程終つた、それは丁度九月中旬の頃でしたが、私達三人は、奥座敷の六帳の間で、川の字に就寝しておりました

が、暑さの為か、又は何か虫に刺されてもしたのか、鉄之が急に泣き出しましたので、私はうるさく思い、妻琴江になだめる様声をかけました処、妻は昼間の疲れで、ぐつすり寝込んで居りまして一向に眼覚める気配もありませんでしたので、私は腹立たしくなり、鬱憤も手伝つて、いきなり泣く鉄之の両脚を掴んで寝床の外へ放り出し、尚も数度鉄之を打擲致しました。その物音に気付いた妻は、がばと起き上つて、私のこの行為をなじりましたので、私はいら／＼していた時でもあり、尚更腹が立つて、つめよつた妻の頬を平手で殴つて、その場に押倒しました。私はすっかり今迄の自制心をなくし、その時まで眠つていた私の嗜虐癖がムラ／＼と起りまして、打倒れた妻の上に馬乗りになると、素早く、妻の寝巻の腰紐を解いて、それで妻を後手に縛りました。

私のこの態度の豹変に、妻は驚きまして、しきりに詫びを乞いましたが、一旦誘発された私の性癖は、反つて油をそゝいだ様に湧き立ちました。月経中……………

.....

数年振りで、嗜虐癖を満足させた私は、その夜は朝まで、妻を縛つた儘にしておこうと尚も、さらに、手許にあつた紐で、妻の足を縛り、声の立てられぬ様、口中に風呂敷を押し込んで、その上から手拭できつく、口を塞ぎました。その時迄泣き続けていた鉄之を、妻の傍らへ添わせ、乳房を含ませてやりました。

数日の間、妻は私を怖れる様にして、余りものを云いませんでした。

私は其の後、酔つ払つたり、又氣に入らない事があると、暗に山村一計との秘密を匂わせた嫌味を云つては、妻を縛り、特に鉄之が泣くと、私はそれを妻のせいにして、子供を寝かしつけたあと、きまつて妻を緊縛し、時には鞭打ちを試みたりしました。

それでも私は、養子の立場と、養母かめの存在を考えて、余りひどい事は差し控えており、妻の不貞も深く立入つてせんさくしませんでした。併し妻はその頃、私が既に二人の關係に気付いていた事を知つていた様に思わ

れます。

四、養母西田かめが前述の通り心臓病で亡くなつてからは、私は唯憚かる者もなくなり、それから、隔夜ぐらいに妻を縛る様になりその方法も、単なる緊縛だけではなく、時には、鴨居に吊したり、梯子に縛りつけて、頭を下にして立てかけたり、長男の歩行器を、すつぽり腰まではめて、その四方の脚に、太腿から脚首まで縄をまきつけて縛り、首に手袋の枷をはめて、いざりの様に這わせたりしました。妻は、私のこの行為に対しても、半ば諦め、観念していたのか、従順に意の儘にされておりました。

私は氣が向くと、白昼でも仕事場から戻つてきて、矢庭に妻を縛つたりする事もありました。今迄の紐や帯に代つて、私はよく諦まる、麻縄や、太いロープや、刑事の使う細引などを次々と買求めて来ては、妻のタンスの抽出に、まるで宝物のように保存しておりました。

手錠の恰好をした自転車用の錠前に大鎖りをつないだものや、ねじを外すと二つに割れ

る真鍮の牛の鼻輪は、絶えず、妻の手に、足にはまる様になり、麻縄の二重に燃り合した鞭が、妻の肉体をさいなみました。

私は妻に出来得る限りの屈辱感を与える事によつて、サジストの欲びを感じました。その為責める時はいつも妻を全裸にし、又普段でも、衣類の下に、下着やパンティの着用を許しませんでした。既に妻の心はすつかり私より離れ、私の行為に対しても、まるで魂の脱殻の如く、黙々と意に従がつているのみの様に思われました。私は愈々激しい愛憎の念に捉われ、妻に対してさながら悪鬼の様に振舞いました。

その様な状態のある日、山村一計が、何喰わぬ顔で立寄りまして、妻とひそ／＼話をしておるのを、製粉場から眺めました私は、激しい憤怒にかられ、その夜妻を全裸にして、例の枷を、首と手にはめると、縄尻をとつて製粉場へと引つ立て、第一回供述の如き、車軸にゴムホースで妻を緊縛して、モーターを入れ、妻を空中でこまの様に廻転せしめたのであります。

この時、私は始めてそこで、山村一計との密通を責め、私が生殖機能の欠如している事実を打明けて、妻自身の口から、姦通の事実を白状させました。

私は妻を下に降し、手の自由を与えて、山村一計との密通の赤裸々なる、その時の行為を紙に書かせ、妻が云い渋つたり、無言を続ける、私は容赦なくゴムホースで、水を浴



せました。妻と山村一計との交情のさまを、わざと卑猥極まる言句で書かせ、最後に、私の妻に対する行為には一切文句を云わず、服従すると云う一札をとつてその夜は許しました。

其の後も、私の妻に対する虐待は勝る許りで、雨の夜、庭先の松の木へ縛りつけて、数時間も放置したり、丸一日手足に枷をはめ、土間にむしろを敷いて裸でそこへ曝し、缺茶碗で飯をやり、放尿もその場に犬の様に片足を挙げさせたりしました。

鉄之の世話も自然滞りがちで、追々に蒼褪め、痩せ衰えて参りました。こうした狂的な状態の為、私も仕事を手につかず、殆んど休業に近い有様でした。

そうした中にも、妻はいつの間にか、山村一計と連絡をとり、妻を殺害致しました夜、秘かに、私の許を脱け出さんとしていた事をその二日前に知りました。二人は玄関の牛乳箱を内密の連絡場所に使っていたのでありまして、私が二日前の朝、何気なく牛乳箱の蓋を開くと、一枚の小さい紙片が入つておりまし

て、それには、「八日、夜十一時、R 駅、かず」と認められてありました。私は読み終るとそれを元のところへ残しておきました。

五月八日の朝、即ち妻を殺害致しました当日の朝であります。妻は例になく私に柔らかな言葉をかけ、御気嫌をとる様に、あれこれと、私に逆らわぬ様、懸命に気を配っている様子でした。午後になりますと、胃腸をこわした鉄之を〇〇医院へ連れて行くと申しまして、長男を連れ出し、一時間許り致しましてから、鉄之を入院させたからと云つて、単独で戻つて参り、そして今夜は鉄之の附添いに行かせてくれと申ししておりました。それに対しては判つきり返事をせず、私は何事も気付かぬ振りで、反つて日頃になく優しい言葉をかけてやり、妻の顔にチラリとかすめた苦渋の色を突嗟に見とり、いよいよ鉄之を連れて、山村一計と駈落ちするに相違ないと判つきりさとりしました。

私はその夜、いつもより早く床に入り、絶えて味つた事のない夫婦らしい歓びに浸りました。それから私はさも疲れた様に、寝入つ

た振りをして妻の様子を窺つておりました。

私の寝顔を何度か覗き込んだ挙句、遂に意を決した様に、妻は静かに床を脱けると、素早く、外出着に着換え、何時の間に纏めておいたのか、押入れから二つのトランクをとり出すと、足音を忍ばせて、部屋を出ようとなりました。その刹那、私の右腕は延びて、妻の裾をしつかりと握つてぐつと引戻しました。

あつと小さく叫んで、妻は身を翻えし、私の手を力一杯はねのけて逃れ様としましたが私の方が突嗟に早く、袂を掴んで、妻の口を声を立てられぬ様力任せに蔽うと、もがく妻を横抱きにして、製粉場へと運びました。月明りを頼りに、床に散在している荒縄や、しめていた帯で滅多矢鱈に縛り上げると、ビリリと袂をさいて口に押しこみ猿轡をかませた上製粉場の入口の扉を、しつかり内側から施錠し、窓のカーテンを降して、内部が窺えぬ様注意し、ローソクを点じました。

改めてローソクの灯の下に、妻を裸にむいて両手首をしつかり太いロープで縛りますともがく妻をする／＼引ずつて、天井を伝うシ

ヤフトの下まで連れて行き、ロープの縄尻を天井に投げて、何回目かにシヤフトを越えさせました。私はロープを掴んで、こんしんの力をこめて引きました。一寸二寸と妻の体はコンクリートの床を離れ、爪先も宙にういて吊り上つて行き、どうやらシヤフトに達しました。モーターは停電の為廻らなかつたからです。柱にロープを縛つてから、私は梯子をかけてシヤフトの上に昇りました。憎悪の感情を両眼にこめて、妻は私をにらみつけておりました。私は用意の麻縄でシヤフトに犄々と妻の両手を更に縛りつけました。別の麻縄で、妻の宙に泳ぐ両脚をしつかりと縛り、その縄の端を握つて、梯子を反対側の屋根裏の物置にかけ、縄の端を物置の床板のすき間に通して引きしほりました。

妻の体が、さながらハンモックの様に、腹部を下に弓なりに反つて、宙に長々と浮きましました。妻は苦悶をこらえて、肩であえいでいました。私はいつも脳裡に描いていた、サドの極致を今、妻の肉体に、実行に移したのであります。

ギリ／＼と麻縄が肉に喰い込み、夜目にも白く伸び切った妻の肢態が、苦痛に揺れ、手足の縛った先が紫色に変じて行くのを、私はローソクをかかげて、冷然と見凝めておりました。不貞の罰だ——。償いだ。苦しむがよいと、事実私はそう思つて、妻の苦悶に歪む肢態を見つめていました。死の一步手前迄追いやり乍らも、しかし私は妻を殺す気はありませんでした。憎いが可愛い妻、いや極言すれば今の私の嗜虐癖を満足させてくれる唯一の女であつたからです。

この時、何処か遠くで午前零時のサイレンが、物悲しく寂としたしじまを破つて鳴り響き始めました。と思うとパツと電燈がともり瞬間ブーンと云うベルトの廻転音と共に、妻の肉体は一瞬ピレシと一線に張つて、それも束の間、ブチリと足首を縛った縄が、緊張度を越して千切れ、私が夢中でモーターに飛びついてスイッチをきつた時、妻は半ば上半身をシャフトにのし上げて、両脚はだらりと宙に垂れていました。

五、私が昼間作業中停電の為、うつかりスイ

ツチをきり忘れ、その儘にしておきました為此の様な惨事を惹き起した事は誠に申訳ありません。計画的なる殺人ではありませんが、私の意志によつて妻を縛り、それが虐殺への一段階となりました事実は認めます。

以上妻を殺害するに到つた、事実を申述べました。先にその動機及経過を偽つて申述べお手数をおかけ致しました事は誠に申訳ありません。尚、殺害直後、直ちに自首致さず、逃亡を計りましたのは、事ここゝに到りました上は、せめて山村一計を道連れに致し、彼を殺害の上、私も自殺致す決心であつたからであり、それは遂に果しませんでした。

六、逃亡の経過について有りの儘申述べます
(以下省略・終)

ヨハンネス・エル・ビルリング博士
蒐集分析の
女性に於ける性心理学上及び病理学上の
諸資料に拠る

「残虐なる女性達」

(全229頁 1巻 1928年版)

森本愛造・譯

“Das Graßsame Weib”
Sexualpsychologische und pathologische
Dokumente von der graßsamerkeit und
Dämonie der Frau von Dr. Johannes R.
Birlinger.

(第1章) 支配者としての女性

Die Frau Als Herrscherin.

(第2章) 奴隷所有者としての女性

Die Frau Als Sklavenhalterin

(第3章) 教育者としての女性

Die Frau Als Erzieherin.

(第4章)

Die Frau und Das gesinde.

(第5章) 男性的支配を行つた女性達

Weibliche Herrschaft.

(第6章) 女性の想像の世界に於ける残忍性

Illusionäre graßsamerkeit des Weibes.

(第7章) 革命家としての女性

Die Frau als Revolutionarin.

(第8章) 女性の職業上の残忍性

Die Berufliche graßsamerkeit der Frau.

<次号より本誌上に掲載>

悦 虐 の 旅 役 者

青 山 三 枝 吉

都 築 峯 子 ・ 画



(1)

春風座は、もともと軽演劇の一座であるが、客の色合いをみて、時には剣劇もやればストリツプもやる。女剣劇が流行しだすと、一座の若い花形女優に刀をもたせて立ち廻りをやらせ、客の求めに応じて肌ぬぎになると、たつぷり大見得もきらせるはだけた襟もとから豊かな白い乳房がムツクリと顔をだすと、農村のあんちゃん等が、奇声をあげて感嘆の野次をとばすのである。

春風座は、男女あわせて二十人ばかりの旅まわりの劇団であるが、俳優は浅草育ちの腕達者が揃っていた。

浅草の劇場がストリップと女剣劇に占拠されて、ひと頃隆盛をきわめた軽演劇はしめだされ、当然多くの軽演劇俳優は失職した。

それら喰うに追われた俳優たちが、三々五々集つて一座を組織すると、次々に田舎まわりとなつて散つていった。春風座が、そんな時流に押されて、やはり旅まわりの一座を結成したのは四年ばかり前のことである。

その頃私は下谷稲荷町の安アパートに一人売れない小説を書いたり、浅草のエロ芝居の脚本を書いたりして生活していた。

そんな私を、或る夜、春風座の座長である谷村が訪ねてきて、一緒に旅に出ないか、という。

「まあ、旅の劇団で文芸部を連れてゆくほどのことはないんだけど、そうかといつてまるきりのデタラメもできないからね。君なら若いし、まだひとり者だしするから、給料のといつたつて、どうせ沢山はだせないが、喰う心配のない位の面倒はできると思うが、どうだい一緒に旅に出る気はないかね？」

谷村には私の書く脚本をよく買つてもらつたり、いろいろ世話になつていた。

私は谷村の誘いをすぐ受け入れた。東京の裏街に巢喰い、ひと通りの悪い遊びも経験してきて、むせるような都会の脂粉と塵埃にまみれながら、青春の日々を過してきた私である。虚無と頹廢の空気が、新しい文学を志望する私の若い血にとつて、ようやく耐え難いものとなつた。しばらく東京を離れてみよう……。私は谷村に意気込んで云つた。

「連れていつて下さい、谷村さん、実はぼくも東京にアキアキしちやつたんです。」

(2)

茨城県のH市をふり出しに、春風座は東北地方を順調に興行を続けた。

が、順調に客が入つて、景気のよい興行が続けられたのは、はじめの三ヶ月程だけであつた。東京を離れたのは、春の遅い北国にもチラホラ桜の咲き初める頃であつたが、陰鬱な梅雨が、旅の空いっぱいひろがりはじめの頃になると、客足が眼にみえて減つてきた。ガラ空きの客席の前で芝居する程、俳優にとつて味気ないものはない。いや、それどころか、日々の飯に直接影響するのだ。

「どうしたつていうんだらな。ここへ来て急に……」

谷村は暗い顔で、腕をこまねいて云つた。

「梅雨時は、百姓が忙がしいから、どうしても客足は落ちるでしよう。」

私はとりなし顔に云つたが、客の来ない決定的な原因は矢張り、芝居そのものにもあつたのだ。

都会からはみ出した、ストリップや女剣劇が潮の寄せるように地方の町々や農村に浸透して今では既に、田舎の人々にも珍らしくなくなつていたのだ。

梅雨が烈しくしぶいて、田舎の古い小屋の楽屋は雨洩りがひどいベトベトした畳に寝転んでいると、身体にもカビが生えてきそうな錯覚におそわれる。一座の男女たちはポタリポタリ小止みなく落ちてくる雨洩りの音をききながら、ワタのはみ出した畳にゴロ寝である。もう、旅館に泊る余裕すらなくなつていた。

煙草もとうに切れて、所在なさに膝を抱えてぼんやりしている私

の前に、谷村がこれも元気な足どりやつて来た。

「青山君、どうも弱つたね。何しろ二十人の座員の口を預っているんだからね。ここでなんとか奮起一番、大入りをとらなくちや、春風座は解散するより他にテはないよ。なにか客を、あつと云わせる趣向はないものかね。」

額にシワを寄せて、弱り切つた様子の谷村の顔をみつめているうちに、私の頭にひらめいたものがあつた。

「座長。実はこの間、一寸風の便りにきいたんですが、今、東京じや解散寸前の空客座が起死回生の一打に、田村泰次郎の肉体の門を舞台にかけて、それが大へんな評判になつてゐるそうですよ。くわしいことは何しろ遠く離れてゐるんでわかりませんが、とに角、あそここの女優の捨身の演技が成功したらしいです。つまり芝居の中で女同志のリンチがあるんですが、その演出がバカに刺戟的ですが、の都会人もあつと驚いたそうですよ。興行的にヒットしたというのは、いろいろ問題もあるでしょうが、ぼくは、その女同志のリアルで残酷なリンチの場面が客を呼んだんじゃないかと睨んでゐるんです。」

「うゝむ。」

と、谷村の沈思黙考という形で空間をみつめていたが、やがて私をじつとみた。

「で、青山君、君は……」

私は一膝のりだして云つた。

「以前、何かの雑誌で読んだ記憶があるんですが、芝居の入りが悪くなつたら、女の責めの芝居をやれば必ず当る。ということなんです。つまり、縛られた女の異状な美しさが、必ず客に喜ばれるとい

うことなんですが……」

組んでいた腕をほどくと、谷村が静かに云つた。

「よし、それをやつてみよう。うまくいくかどうかはわからないが皆にも張り切つてもらつて、思い切つてすさまじい芝居をやつてみようじゃないか。」

谷村は眼を輝かして、次第に意気込んできた。

「じゃ、君はこれからすぐ台本にとりかゝつてくれ。マゲモノがいな。マリに主演させて、時代物で裸はあまり出さず、日本的な色氣で押していって、最後の見せ場で、マリを縛るんだ。客をうならせる場面をつみ重ねてくれ。」

座長の熱に押されて、私もつよくうなずいた。

その夜、カビ臭い楽屋布団の中に腹這いになつて、私は妖しい構想に胸をときめかせながら、ペンを走らせた。

——その頃、江戸八百八町にひんびんとして若い女ばかりをねらう「まぼろし」と呼ばれる誘拐団が横行した。美しい娘とみれば、コッ然として、その行手をふさぎ、声を立てるひまもなく、娘はいずこへか連れ去られてしまうのである。

町方役人の必死の探索も空しく、美しい犠牲者は日を追つて増えるばかりである。嚴重な警戒網をくぐつて、「まぼろし」の一味は黄昏の江戸の町を跳梁する。

ここに、神田は鎌倉河岸に住む、十手捕縄を預る花屋常五郎、その娘で名はお美津。十九才。先年父親の常五郎が中風で倒れた後、健気にも花屋を切り廻している。

ところが最近、花屋の縄ばり内に、つづけて三人の犠牲者を出し

ているので、お美津としては、黙つて傍観しているわけにはいかなくなつた。

そこで、南町奉行所与力、桂新十郎へ特別に願ひ出て、病氣の父親の代りに十手捕縄を持つことを許された。お美津と新十郎はかねてからの恋仲である。

こちらは、その「まぼろし」の本拠。河岸に建てられた古寺に、さらつてきた娘たちを閉じこめてある。彼らは、この古寺のすぐ裏を流れている大川から船で海へ出て、水路、娘たちを長崎に送り、異人相手の淫売窟へ売り飛ばそうというのだ。

荒れ果てた本堂の柱には、娘たちが様々の姿態で縛られている。

辛苦の果に、ようやく一味の本拠を突きとめて忍びこんで来たお美津は、この状景をみて少しも早く、与力桂新十郎に知らせようとした。が、既に敵中深く入つているので脱出に困難。ついに一味の者に発見され、多勢の荒くれ男を相手に奮闘するが、力およばず捕われてしまう。野卑な男たちの拷問に、齒を喰ひ縛つて耐えるお美津。

この時、お美津が道々残してきた目印を手掛りをたぐつて新十郎が救いの手をのべに、サツソウと現われる。かくて、大剣戦の果てに、大江戸を騒がせた「まぼろし」の一味はほろび、新十郎とお美津はめでたく結ばれる。――

私がこの脚本の最後の一枚を書き終え、ほつとして頭をあげるとつぎはぎだらけの楽屋窓にも、朝陽がまぶしくいつぱいに射しこんでいた。

既に幾通りにも書き尽くされた捕物小説の焼き直しで、創作というのもオコがましい話だが、とう／＼徹夜で四十枚の原稿を書き上げてしまつたのである。疲労と気のゆるみで私は急に眠気におそわれ、布団に突伏した。

二時間ばかり、ウトウトとすると、足音たてて、谷村がやつてきた。

「できたかい、青山君？」

私は、はつと眼をさまし、

「ああ、座長。どうやらまとめました。読んで下さい。」

谷村は一気に読み終えると、

「短かい時間に、よくこれだけまとめてくれた。次の初日に合うよう、すぐにとりかかろう。肝心の責め場の演出には、君も手伝つてくれ給え。」

と私の肩を強くゆすた。

(3)

主演の花屋お美津は、一座の花形女優、春木マリに最初からあてはめて書いた役だつた。お美津の危機を救う二枚目、桂木新十郎は当然座長の谷村にまわつた。

春木マリは、二十三才の成長の頂点に達した女優で、肌の色がネツトリ白く、小肥りで上背も立派な、まず主演級としてどこへ出しても恥しくない貫録であつた。

一座の者を一室に集めて座長の涙も溢れんばかりの訴えと激励に全員、今度の興行の成功を祈り、奮起を誓つた。

そして、舞台げいこが始つた。

第一場。夜の大川端。番頭を供に連れした商家の娘が通りかゝる突如柳の蔭から躍り出た「まぼろし」の一団。娘をかばう番頭を斬り倒し、娘に素早く猿ぐつわをかませる、手足をかついで逃走する。

第二場。花屋松五郎の家。松五郎が病気で臥している。娘のお美津と共に、今、江戸中を騒がせている「まぼろし」の噂をしていると。そこへ、与力、桂木新十郎がやつてくる。父親の代りに、十手捕縄を持たせてくれと、新十郎に取り縋つて頼むお美津。

第三場。柳原の土堤。お美津が町娘に化けて立つている。木かげにかくれている新十郎。四とは知らず襲いかかる「まぼろし」。お美津と新十郎の十手がきらめき、捕縄がとぶ。しかし、船に乗つて逃げて行く「まぼろし」。

第四場。古寺の本堂。この場で、はじめて女の縛られるシーンが展開される。さらわれてきた娘四人が柱に縛られているのだ。高手小手に縛られたまゝ床に転がされている娘。その娘の肉体の上に、どつかりと腰を下ろして酒を飲んでいる「まぼろし」の手下。天井の梁から両手首を結ばれて吊されている女。見張りの男たちは酒に酔い痴れている。

手下のA「おかしらは、この女たちは大切な商売物だから、決して手を出しちやいけねえというけれど、こんなベツピン揃いが眼の前に、こうチラチラしちや、手をださねえわけにやいくものけえ。」
手下のB「おい／＼じよう談じやねえぜ。この女たちに手をつけてみねえ。おめえの首は胴についちやいねえぜ。何しろうちのかしらときちや、自分じやさんざんいいことをやつておきながら、俺たちにやまつたくケチなんだからなあ。」

手下のC「そうともよ。こうして酒を飲んでも、野郎同志の木の根

っこみてえな汚ねえ指で、さしつさゝれつじや、酔いたくつたつて酔えるもんけえ。」

手下A「いいことを考えた。こうして朝から晩まで縛つたまゝじやいくら逃げるからといつたて、ちつとは可哀想というものじやねえか。一寸の間、縛つた縄をほどいてやつて、俺達の酒の酌をさせちやあどうだい？」

手下B「そいつはいい。切角あぶない綱を渡つて連れてきた娘だ。俺達だつて、その位の楽しみはあつてもいい筈だぜ。」

手下C「成程そいつはうめえ。よし、善はいそげだ。」

手下C、よろよると立ち上つて、柱に縛られている娘のそばに寄り酒臭い息をフウツと吹きかける。娘は怖しがつて身をよじり、避けようとする。

手下C「なんでえ。なんにも怖がることはねえじやねえか。切角、身体を楽にさせてやろうというんだ。こつちをむいたらどうだい？」
娘「いやです。そばへ寄らないで下さい。」

手下C「なにを云やがる。（背後へ廻つて縄をほどいてやる）ずい分また固く縛つたもんだなあ。真白い腕が、赤くなつてらあ。へへへへ、痛かつたらう、ねえちやん？」

と、ほどいてやると、娘立ち上つて逃げようとする。

手下C「おつとどつこい。そうはさせないよ。」

手下ABもフラフラ立ち上つて娘の逃げ道をふさぐ。娘、必死に逃げようとするが帯をつかまれて引き戻される。ズルズルと帯が解け前がはだける。

手下A「こいつはどうも、おあつらえ向きだぜ。」

と、いいながら、逃げる娘の着物を強引に剥いでいく。

手下A「てへへへへへ……。もうガマンがならねえ。」

手下Aは娘を抱えて、舞台上手の次の部屋に姿を消す。手下B Cも、あわてて後を追う。

——というような場面があつてから、やがてお美津が忍び込んでくる。捕われている娘達の縄をほどこいて、さて逃げ出そうとする時、〃まぼろし〃の首領が現われて行く手をふさぐ。やがて周囲をまぼろし一味にとりかこまれてしまう

ここで悪漢を相手にお美津の立廻りがはじまる。春木マリ得意の女劔戟である。だが、多勢に無勢、十手をもぎとられてお美津は押さえつけられてしまう。一度助けた娘たちも再び捕われる。手を後ろにねじり上げられたお美津は首領の前に引きすえられる。首領は憎々し気に、お美津の顎を刀のこじりでグイと小突いて、「女だてらに、このまぼろし様に刃向うなどは笑上千万。おい野郎共、この女を縛りあげてみせしめの為に叩きすえろ。」

そして、第五場は、古寺の奥室で、暗い部屋にくくりつけられたお美津を中心に、クライマックスの責め場が始まるわけである。

かくして、最後の新十郎の登場で、再び大剣戦が起り、お美津は無事に救われ、まぼろし一味も御用となつて、この「娘捕物、江戸のまぼろし」は、幕となる次第である。



けいこは火を吐くような激しさで行われた。春木は、自分が縛られる段になると、流石にたじろいで後ずさりして「どうしたんだい、続けてくれよ。」

と、つい荒口調になる私の顔を恨めし気に睨んだ。

「君だつて役者なんじゃないか。少し位乱暴に縛られて、役の為なら仕方がないよ。初日が迫つてゐるんだ。けいこは真剣にやつてくれ。」

私は、まぼろしの手下になる俳優を励まし、一緒になつて、春木マリの肉づきのよい白い腕を背中からねじり上げた。マリは、「ムムウ……」とうめくと、

「アツ痛い、痛い。」

と、悲鳴をあげた。縄をかける芝居は他に数多あるし、経験もしているのだが、大抵の場合、本当には縛らず、たゞ縄をグルリと身体に捲きつけて、縛られた役者自身が、背中でその縄を握つていただけである。だから自然と迫真力も殺がれるわけで私はそんな生ヌルイことをせず、背中にねじ上げたマリの手首を重ねると、細引でギリギリと縛つた。マリの紅い唇は苦痛にゆがみ、本能的に身体をよじつて少しでも、腕に喰いこむ縄目から抜けようともがいた。私はそんなことにお構いなしに、余つた縄を背中から前へ廻し、豊かな乳房の上から、二重三重と力をこめて縛りあげた。小道具の黒く汚れた細引は、マリのやわらかい肉体にグイグイとからみつき喰ひこんだ。

「アアツ、アアツ」

マリの白い歯の間から言葉にならいうめきが洩れ、マリの縛られた身体は前に折れて、顔は舞台をなめんばかりに下つた。

「青山君、大丈夫かい？」

谷村が見かねて云つた。私は、

「大丈夫ですよ。この位真剣になつてやらなけりや、折角の企画が

なんにもなりませんよ。人間いくら縛つたつて、縛つただけじゃ死ぬもんじやありませんからね。」

と、云い放つと、マリに向つて、

「さ、マリちゃん、ワガママしてないで、次のセリフを云つてくれよ。」

マリは、齒を喰ひ縛るとムツクリ顔をあげ、いつそもうヤケクソのような態度で、

「いつたい、こんなに縛つて何をしようというんだい。はどかりながら花屋のお美津、お前達に捕つたつて、ネをあげるような女じゃないんだ。」

マリの髪の毛は、額から、片眼をかくす程、たれ下り、黒眼勝ちの大きな眼が、きつぱりと相手を睨んだ。私は、思わず心の中で（素晴らしい！）と叫んだ。縄にまかれたマリの凄艶な姿態に、私はしびれる程の陶醉感が全身を襲つた。

(4)

田舎まわりの一座にしては、真剣すぎる程のけいこだつた。今度失敗したら一座は解散、自分達は着のみ着のまゝ、東京へ敗残の身をさらさねばならない。いや、その東京へ帰る汽車賃さえ、どうなるかわからないのだ。

こうして、春風座が初日を開けたのは、青森県のK町で、梅雨もそろそろ明けようという六月の末であつた。

その前に私は、谷村に相談して、今度の公演のポスターを、とくに私が描いて印刷させることにした。私は東京の或る小さな画会に所属していて絵も描く。ポスターは、うしろ手に縛られ、天井から吊

されたお美津が、悪漢のムチの下で身体をのけぞらせ、髪はバラバラ、襟もとはずれて乳房がムツチリとのぞき、もがいた足はフトモモまで露出しているセン情的な絵で、しかも極彩色で描いたので一見して人眼をうばうこと必定であつた。早急に印刷させると、K町の人眼につく所は、ところ構わずベタベタ貼りまくつた。警察から文句を云つてくるかも知れないと思つたが、えい、かまうものか、と捨鉢な勢いで町中を貼つて歩いた。この宣伝は確かに効果があつたと思う。貼つたあと、極彩色のポスターの前には、必ず三、四人が立止り、好奇心に溢れた眼で、じつと見つめていた。

興行は昼夜二回で、昼の部は一時から、夜は七時から始まる。地方の客は殆ど夜しか観に来ないので、私は昼の部はアテにして居なかつた。が、初日、開場して三十分も経つと、町の人々がゾロゾロと劇場の入口をくぐり始めた。私は引き幕の間から首を出して、客足を数えていたのだが(しめた)と思つた。開幕までにまだ大分間があるのに、これだけの足が揃えば、幕が開く頃には椅子席が満員になる可能性は充分ある。私は舞台裏を思わず駆け出して、谷村の部屋にとびこんだ。

「座長、もう大分客が詰めて居ますよ。この調子なら、初日第一回は先ず上々です。」

谷村も、思わず化粧の手を止め、満面の笑みを浮べた。

「みんな、君のおかげだよ。だがこれからが本当の勝負だからな。座員達に張り切つてくれと言つてくれ。」

私は楽屋中を、「がんばつてくれよ。」と激励して走りまわつた

第一場、第二場、第三場と芝居は順調にすすんで、第四場、古寺

の本堂。私は進行の世話で汗びつしよりになつて動きまわつた。

「大道具さん。今度の幕は柱をしつかり打つておいてくれよ。何しろ重たい女の子が三人も四人も縛られて、寄りかゝつたり吊られたりするんだからね。途中で柱が倒れちやつたりなんかしたら、芝居はメチャクチャになつてしまうからな。」

私は、そんな細かい所まで気を使わねばならない。

「おいきた。せいぜいガチャを効かせておくよ。」

人の好きそうな道具方は、ガチャと俗に呼んでいる大きなカスガイを舞台の柱にうちこむ。

「イタつき(幕の開く前に舞台に出ている役のこと)はみんな出てくれよう。」

私は大声で怒鳴る。この幕は男女優合せて七人がイタつきである女四人を幕の開く前に縛つて置くのが、私の役目である。旅の劇団なので裏方の人間は極度に制限されていて、私の役は非常に忙しい。

小道具の縄をあるだけ腰にぶら下げた私は、女優たちを一人一人縛つていく。まだ馴れて居ないので、思うように縄がさばけない。

私は連続の多忙と疲労で気がイライラしてくる。

「ホラ、ちゃんと大人しく手を背中に廻すんだよ。じれつたいなあんまり世話をやかすなよ。」

「いたい、痛い。もう少しゆるめてよ、手首のところ。」

「オツパイのところ、ぎゅつと締めつけられて苦しいのよう。」

「いやよ、首なんか縄かけちゃ。」

「こんなにきつく縛られて、大きな地震がきたら、あたしどうしよう。」

「どうせお芝居なんだから、そんなに夢中になつて縛らなくたっていいじゃないの？ええ青山さん？」

「ア—ア、おなかをきつく縛られたら、急にオシツコがしたくなつちやつたア。」

女達は、いろいろうさく文句を云うが、その表情は、口ほど辛そうではない。一通り縛る終えりと、今度は片端しから、猿ぐつわをかけていく。これは、口の中へ何か押しこむというようなことは

しない。しかし、やはり、頭のうしろでギユツと結ぶと、相当にこたえるらしく、身体をもがいて訴える。

が私は知らん顔で四人を次々に黙らせてしまう。その中に、手下の男優達も位置について、いよいよ幕が開く。

私は、舞台の袖幕から観客の様子をじつとみつめる。幕が開くと、観客席がサツとどよめいた。肌もあらわな四人の娘が、それぞれ違つた型で縛られている。その、もがく姿態には、芝居という形式を越えた真実性がこもっている。私はホソク笑んだ。観客達は眼を異様に血走らせて緊張した表情で吸いつけられたように、凝然と舞台を見つめている。天井から両手を結ばれて吊されている



る娘の長襦袢の帯は身体のゆれる度に生き物のようにスルスルとほどけ、燃えるような真紅の腰巻と、雪のように白い脚との妖しいまでに美しい対照が魔物のように観つめるものの眼を射る。〃まぼろし〃の手下達の手が、指が、純白の肌をなぶる度に、わずかばかりの衣は次第に皮膚をすべり落ちていく……。

観客の讃辞は、その陶醉に溢れた溜息と吐息で、私にはつきりとわかつた。私は再び座長のもとに走つた。

「谷村さん、喜んで下さい。成功です。だいたい客に受けているようです。あの調子じゃ成功間違いないです。」

「そうか、そいつは有難い。じゃ、最後の幕でマリと一緒に張り切つてやるぞ。」

(5)

初日の夜の部が終つてから久し張りに大入りの酒宴が開かれた。春風座の初日を観たT町の興行師が向う十日間、一座を買つてくれたのである。「責め」の芝居は成功した。評判が評判を伝えて大入りが続き、春風座にとつて生きかえつたような明るい旅がつづいた。町によつては、警察が干渉して、肝心の場面がカツ

トされたというような事件もあつたが、大体は、そこが御時勢の有難さで、そうしたトラブルもめつたに起らなかった。

縛虐の芝居は、馴れるに従つて巧妙に、いよいよ迫真力を加え、凄惨の美を発揮していった。と同時に、幼少時より責めの美しさに惹かれていた私にとつて、この旅は強烈な成長を遂げさせずにはおかなかつた。そして、マリとの関係も、云いかえれば、一本の縄が、文字通り結びつけた結果になつてしまつたのである。最後の幕。古寺の奥室の場があく

と、舞台には暗闇の中にお美津が一人縛られている。はじめは暗黒で、それからお美津に青白いスポットライトがあたつて、だん／＼明るくなるという効果なのだが、例によつて、そのマリをあらかじめ縛つておくのは私の仕事である。

暗い舞台で私はマリを床に坐らせる。着物の乱れ方が足りないとい私は襟をわざとくずし、胸もとをひろげる。それから、マリの両手を後ろにまわしてキリキリと縛りあげる。私のこの手際も、かなりあざやかになつてきている。旅行先々の古本屋で、縛られた女の絵や写真をあさつて参考にし、私なりの研究も進んでいた。

ちよつと変つた縛り方をすると、マリはすぐ気づいて、「アラ、今日は違う縛り方ね。青山さんもうい分研究しているの



が……」

と、云いかけるとマリは、うつとりした表情で、私を意味あり気な、媚をふくんだ眼でチラとみた。私は瞬間ハツとした。あれ程縛られるのをいやがつたマリが、緊縛に快感を覚えはじめている！私は縛つたマリの肩を思わず強くつかんだ。

「マリちゃん！」

マリは、いぶかし気に、しかし身体の抵抗はなく、つかんだ私の腕の中に身をまかせると、

「なアに？」

と、私の眼をのぞきこむように見て、艶然と微笑んだ。

（この女に、マゾを覚えさせてしまつた！）マリは、こうした環境

ね。」

などと云う。そのうちに、或る日のこと、

「今日の縛り方より、昨日の縛り方のほうが、いいんじゃないかしら？」

「どうして？」

「どうしてつて云われても困るけどなんだか、そのほりが、お客さんに喜ばれるような気がするの……」

「しかし、昨日の縛り方は相当に本式に縛つたんで、君には苦しかつた筈だよ。」

「でも、この頃あたしには苦しい位

の女に似ず、まだ多くの純真さを残している娘であつた。一座の男達の露骨な誘惑にも負けずに、いつかは、まじめな芝居に魂を打ちこむ日の来るのを夢みていた。そのマリに、縛られる快感を覚えさせてしまったのは私だ。その責任は厳密に云えば私ではない。しかし私の胸には、罪悪感に似た後悔が去来した。

私は、マリの眼を見つめたまゝ、念を押すように、

「マリちゃん、君、もう縛られても痛くないの？怖くないの？」

マリは、ゆるやかに首を横にふつた。私の胸を、云いようのない感情が急激にゆすぶつた。私はマリの身体を抱いた。固い縄目の中の、やわらかいマリの肉体。マリは転げるように私の胸にその乳房を寄せた。私は眼の前のマリの紅い唇に、はげしく自分の唇を押していた。

切り出しの大きな柱のかげで、私達は、はじめての接吻を交した。その夜遅く、芝居が閉ねてから、私とマリは、宿を脱け出て、暗い田舎の町を歩いた。私達は愛を誓い合つた。

町はずれの林の中。生い茂つた草むらに、夏の虫がはげしく鳴いていた。私達は腰を下すと、再び抱き合つて唇を吸い合つた。マリは、しばらくの間私の首に手を廻して居たが、それをそつと離すと

「私を縛つて……」

と、かわいた声で云つた。

「こんな所で？」

私は、思わず聞きかえすと、

「この、露に濡れた草の上で縛られたいの……」

「でも、縄がないよ。」

「あなたの、その浴衣の帯でいいわ。」

私は、宿の浴衣の帯を手早く解くと、これも浴衣を着ているマリの手をねじ上げた。ビリツと浴衣の破れる音がした。八ツ口からぞいたマリの白い二の腕に私は口を寄せるとガブリと噛んだ。

「ああッ……」

マリのうめき。私はマリの白く豊かな腕を噛み、その歯型をペロペロとなめ、そして息のとまる程つよく吸い上げた。

「縛つてエ、早く縛つてエ……」

私はパツと離れると、狂気のようにマリを草の中に突き倒し、全身の力をこめて両腕を背中にねじ上げ、膝で押さえつけると、

「こうか、こうか、これでよいのか！」

と、縛り上げた。はだけた乳房に喰いこんだ帯は露に濡れて光つた。私はハアハア息をはずませながら、マリを仰向きにさせ、馬乗りになつて、尚も押さえつけた。月光に照らされたマリの顔は恍惚として、陶酔の極致に、眼を半開きにしたまゝ、死んだように動かなかつた。（愛情か！愛情か！これが愛情というものか！）露に濡れた私の顔に、ゆえ知れぬ涙がにじんで解け合い、私はかすかな鳴咽をあげながら、マリの………臥していた

(6)

舞台ではマリが縛られている。

胸乳と腰のまわりを残して、あとは全裸の肌にきびしく縄がからみついている。舞台の中央、一段高い床の柱に石膏像のように白く均勢のとれたマリの裸体は、青白く炎のように燃えていた。足首、膝、モモ、モモの付け根、腹、乳房の下、上、首、そして口には猿ぐつわと、見るも無残に緊縛されたマリ。腹にまきついた縄は、

脂肪にふくれた肉の中に、ギリギリと縄が没する程喰いこんでいる。ぐるりと取り囲んだ悪漢共は手に手に棒や竹ぎれを持つて、代る代るマリを責めるのだ。牛乳のように白くヌメヌメとしたマリの肌から汗がにじみ、それが玉になつて流れる。青白いスポットライトに照らされて、肌から縄へ、縄から肌へ、キラキラ光りながら流れる汗。そのスポットライトをあてているのは私である。薄暗い客席を見下す照明ボックスで、私は妖しい興奮に胸をときめかせ、唇を噛みながら、ライトをマリにあてている。マリが打たれ、突かれてうめき、のぞける度に私は力をこめて、赤、青、黄、と色板をまわすのだ。プリプリした豊満なモモとモモの間に棒をねじ込んだ悪漢の一人が、グイグイとその棒をこじる。猿ぐつわの下で、うめきにならないうめき声が、低くにぶく観客の耳に響く。身をふるわせたマリの責苦を耐える表情は、しかし、苦痛の表情ではなく、恍惚とした夢みるような半開きの眼なのだ。少くともマリにとつて、この折檻の場は、俳優を忘れて鞭うたれる喜びに陶醉し、そして、縛られた自分の肉体を多くの人眼にさらさず歓喜に、思う存分浸ることのできる貴重な時であつたに違いない。

悪漢に扮した男優達が、ボール紙を巻いて色を塗つた桎梏で、マリの肉体をわが物顔に叩くのを、俳優でない私は嫉妬に苛まれながら、青白い光線を、願いをこめ、力をこめて、マリに放射するのだ。冷たい光りは、無数の針となつてマリの皮膚に突きささり、細かく傷だらけになつた白い肌から真赤な血の玉が吹き出す。そんな幻想が私の脳裏に熱く燃え、暗いせまい照明ボックスの中で、愛しいマリの責められる姿態を、私は喰い入るようにみつめるのである。

夏も過ぎ、旅する身に秋風が吹き初める頃、春風座は一旦、東京

に引き揚げることになつた。東京で一ヶ月程骨休みしたあと、私達の一座はまた新しい悦虐の芝居をもつて旅に出た。春風座にとつて私はもう欠けることのできない座員になつていた。私も又、離れようとしても離れられない宿命の鎖に引きずられていつた。マリとの凄惨な情痴。日夜、享樂に狂い溺れた私とマリ。そこにはなんの希望も発展もみられなかつた。虚無と頹廃から逃れる為に出た旅は、私にとつて尚更、悪魔の道に深入させる結果になつてしまつた。だが、なんという甘美な、悪魔の美酒であろうか。私達は東海道を順に下つて、楽しい悦虐の旅を続けた。私は俳優を志願し、マリと一緒に強烈な刺激に酔い痴れた。

その時のことを、私は是非また、書きたいと思う。(おわり)

○第五回読者座談会○

『マゾヒスチックな境地について』

出席希望者を募る

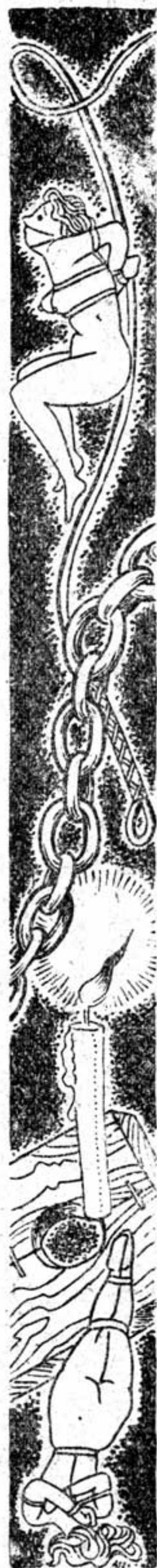
司会者 染田 玄

従来KK通信誌上にて特別会員からのみ出席者を募つていましたが、今回は広く一般の愛読者から希望者を募ります。但しマゾ的傾向を持つ男性に限ります。簡単な体験を記入の上、染田氏宛御申込下さい。

(寄稿家への連絡)

川合伊都子さんへお手紙並に原稿拝受いたしました。続稿御願いたします。誌上に発表しませんから、貴女の切腹の写真是非お見せ下さい。今後撮影する切腹写真の参考に。

長谷川洋氏へコンビネーションは目下編集部にて整理中です。沼田扶二世様色街の私刑二題拝受、前の原稿と共に公開の許される限界について検討中です。KK通信はお近くの局留でお送りしますから御連絡下さい。



現代文芸に現われた責め

村田 誠 一

〇一つの小石として

読者諸兄姉！ 是非あなたの方の御力を貸して下さい。と先ず冒頭に――。

この現代文芸に現われた責めの企画編集は実に容易な事でないのである。本誌編集部プランにもあるそうだし、読者からの要望の声もあるそうだが、誰か手をつけなければ、いつになつても集大成は出来ない

曩に畏友伊藤竹醉氏が「小説に現われた責めの代表名作選」を大成され上梓されたが、その時私はまことに並々ならぬ御努力だった

水の中に投じた石は、小石一つでも波紋を起す。一石又一石。波紋は段々とひろがつて行く。あれだ私は先ず小石一つを水の中へ投げよう。諸彦のつゞく一石、一石の御協力によつて、他日奇々編集部編纂「現代文芸に現われた責め」の出版されるのをたのしみに、是非この計画に参加をして戴き度いと悲願如斯。

と敬意を表した、氏はその自序に「しかしこれは易しいようで中々困難な仕事ですというのは、何の本にどんな「責め」があるかを探

すのが容易でない、又探すには全部よまなければならぬのです……拾いよみなんて横着は許されないので」といつて居られるが、実に御尤である。

同書は主として文化年間の小説から（十篇）と明治、大正年間から（三篇）採録し収めてある。

優曇華物語 山東 京伝（文化元年）
椿説弓張月 曲亭 馬琴（文化二年）
桜姫全伝曙草紙 山東 京伝（文化二年）
千代曩媛七変化物語振鷺亭主人（文化四年）
浮牡丹全伝 山東 京伝（文化五年）



本朝酔菩堤 同 (文化六年)
 長柄長者黄鳥墳 栗杖亭鬼卵 (文化八年)
 絲桜春蝶奇談 曲亭 馬琴 (文化九年)

皿皿郷談 同

(文化十年)

南総里見八犬伝 同

(文化十一年)

片輪車 洛陽山人(明治二十二年)

山椒太夫森 鷗外(大正四年)

風流線泉 鏡花(明治三十八年)

私の企劃するのは、明治、大正、昭和の三代に亘つての文芸作品の中から、之れを求めようとするのである、戦後版の猥文学や、雑文学には、筆がのびるか否か、今の処未定。

先ず大御所谷崎潤一郎氏の作品からというのが、定石かも知れないが、趣を変えて珍しい作品から紹介しよう。

◎解説

林 礼子「男」

B 6 版三二〇頁

昭和廿三年十二月、白鯨社発行
 序文、木村毅 装禎、木村莊八

この作者は、文壇にも読書界にも全くの無名の人である、昭和三年ごろ？木村毅氏の処へ友人の紹介で訪れた一女性があつた、新橋の待合の女中とかで、その女性が持参した

原稿が即ちこの「男」。木村氏は一読三嘆され、二三の作家批評家に批判をしてもらつた上改造社へ紹介をした、無名新人の作品だつたが、改造社編集局の鑑査に美事パスして、出版される事となつた。(相当伏字の厄に遭い)出版と共に或る故障がおきて広く発表されなかつた、作者はそれを悲しんで、此の書の発売に骨を折り、木村氏等も助力をしたがそれ等の努力も空しく終つてしまつた、それから二十年の歲月は流れた、当時さしきわりのあつた人々は殆んど物故したし、時勢も一変して、かつての出版の支障となつていたものも、みな除かれたので、昭和二十三年もう一度この作品に、陽の目を見せたいという作者の念願を叶えようとしたら、今度は作者自身の消息が絶えてしまつた。川崎辺に住んでいたので爆撃でもあつたのではないかともしられている、出生地も本名もわからない儘。しかし作中のモデルの一人が、木村氏の知人だつたので、この作品が実在の通りであるといつてもいゝ程描けている事文わけわかつた。

これは、女子医専の学生から、放縦な愛慾生活をはじめ、芸者となり、妾となり、女記者となり、最後は横浜のチャブ屋の女となつた一女性の生活記録ともいふべきものである

木村毅氏は「芸術的によく瀟洒されて、ある程度まで気品のある文学作品となつてゐる」といわれている、一読オクダウ・ミルボウの「或る小間使の日記」を連想させるものがある、最初改造社出版当時の伏字は、戦後白鯨社で出版するに際し、斎藤昌三氏が、嘗て原稿により補充して持つて居られた、愛蔵本によつて之れを埋められ、漸く定本となつて陽の目をみた次第である、発行部数が僅少だったのか、五年後の今日此頃古本屋にも余りみかけない。

◎作品鑑賞——作品の仮名遣いは原文の儘——
（女学生時代から始まつた愛慾生活（老教師とのスキヤンダル）から若い男と同棲生活、生活の行き詰りから男と別れて芸者、間もなく吉三郎という役者と関係が出来、稼業に身が入らなくなつた頃）

「な、なんだつて、もう一度云つて見る、俺に損をかけねえと、どの口でいやあがつた。ゆうべだつて、おとゝひだつてどのくらい損をしているか、イーさんを失敗じつたら、てめえどうするつもりだ」
「しくじつたつてかまやしないわ、あんな爺さん、いくらだつてあるわ」
「ハ、あんな爺さんはいくらでも居て、天

上天下かへがたいのが、あの馬の脚か、おめにもつくづく愛想がつきたぞ、冗談じやない今日限り馬の脚と手を切れ、いゝか、わかつたか」

「そんなむりな……」

「わからなきや、今日からてめえ外出禁止だぞ、また何処で馬の脚に逢ふかも知れねえから、一切座敷へもやらねえ、二階の奥の部屋で、当分じつと考へて見る、一足でも外へ出たら承知しねえぞ」

「いやだわ、いやだわ、そんな無茶……」

「な、なにが無茶だ、そんなら手を切るか」

「あたし……あたし……手を切るくらゐなら死んでしまふわ」私は思はず涙ぐんだ。

「なに、なんだと、もう一度ぬかして見る、おれの前でろけやがつて、うむ、死んで見る、いくらでも死んで見る、そんな事でこの俺が驚くと思ふか、このしぶといあまめ」突然鉄拳はとんだ、私はふいをくらつて横たはしに倒れた、頬の辺が破けるばかり痛かつた。

「あれ、いたい」

「別れるか！」

「……………」

おやぢの手はやにはに私の髪にかゝつた。

「ヤイ、おゆき、これでも……これでも、てめえ、別れねえか」いひつゝ大きな手に島田の鬘をもつて引きつった。

「痛いわよう、かんにんして……かんにんして……」

「別れる」

「……………」

ピシリとまた鉄拳はとんだ。

（このおやぢ（芸者の主人）は、芸妓おゆきに惚れているので、余計やきもちをやいて責めたのである、其後も無理な首尾をして役者と逢引をつゞけている中、おやぢは客に化けて或る待合から、お雪を呼び無理無態に肉体の關係をつけてしまつた。それからのおやぢは愈々夢中になり、役者との逢瀬の帰りを待ち伏せ、いつかの待合へ連れ込んだ。そして）

「俺は今日あいつが自動車に乗るところからすつかり見たんだぞ。おめえは、どうして、どうしてさうだ、いくら云やあ性根がつくだ」いひながら私に近よつた。

「あれ、ごめんなさい」と私は思はず顔をそむけた。が、おやぢは躰らなかつた、その大きな手が私の帯にかゝると、帯はする／＼つと音してほどけた。

「なにをするの、おとうさん」私が驚いていうと、

「だまつてろ、おめえはたゞ、俺のするとほりになつてりや、そんでいゝんだ」

うむもいはさず、私の伊達巻や、扱帯までほどこうとする。

「いやよ……いやよ」私は身をもがいたが、「なにいやがるんだ、俺のするとほりしねえか」いひながらおやぢは無理やりに、私から着物も襦袢も一糸残さず、もぎとつてしまつた、もう寒いといふ頃でもなかつたが、私はさすがに堪えがたい羞恥にとまどひした。おやぢは私のぬぎすてた扱帯を持つて近よつた「何するの」私の声は恐怖に震へた。

「……」おやぢはいきなり私にとびかゝつた、赤い半反の扱帯が、私の手を、足をくるくると蛇のやうに巻いてゆく、渾身の力をこめて抵抗しても、もう甲斐はなかつた。

おやぢは私をぐる／＼巻きにすると、その紐のはしを柱に結びつけて、自分は酒をのみだした、私は身悶えした、驚きと恐怖と羞恥に全身を震はせながら……そして来るべき次の咎を予想した、私はおそろおそろ彼の方を見てゐた。

何かかう秘蔵の盆栽でも眺めて楽しんで居

るかのやうに……そして相変らずチビリ／＼酒をのみつゞけてゐる。

「ハ、ハ、まるで卵をむいたやうな、からだをしてやがるなあ」

彼の口からふとそんな言葉がもれた、彼は吉三郎と逢つた事を怒つて、こんな目に合はしてゐるのではないのかしら、私の心にそんな疑惑がわいた、しばらくして居るといひ条、絹の扱帯でぐる／＼まきにされてるだけだ。さして苦痛もないので、かへつて彼の私をみる異常な眼付き、歡喜にみち／＼た表情に気付く事が出来た。

おやぢは盃をおくと立上つて、また私に近づいた、そして柱に結わえた扱帯をほどくと、いきなりそれを持つて座敷のうちを引づりまわした、私のからだは小さな玩具の自動車が何かに、小供におもちやにでもされるやうに、くる／＼座敷の中をころげまわつた、何といふ事なしに悲鳴をあげた頭髪はこわれほうだい、こわれてベツトリと、頬や額にうるさく絡みついた、私は次第に苦しくなつてきた、眼がまわつてきた息が切れてきた。しばらくした扱帯はだんだん深く喰ひ入つてくる、それでもなほ、おやぢはそれをよさなかつた、私は何となし



に涙が流れてきた、悲しいのでもない、口惜しいのでもない、嬉しいのでもない、それらを一種超越した涙が。

おやぢはその時手を止めた、そして鞠でもとんでくるやうに、いきなり私にむしやぶり

ついて、軽々と抱きあげた、彼はそのまま、次の間迄歩いた、そしてそこにしかれた厚い蒲団の上に、私の身体はふりと投げられた裸体に柔く絹の感触がつたはつた。

彼は物狂はしく、私の体中にさけるばかりの接吻をした、そして肉体に深く喰ひ入つた紐をはしからほじ始めた。私はまだ、せいせいと息をきりながら、疲れた体を彼のなすまゝにまかせた、不思議と今迄の苦痛が、すっかり影を落して、例へば強烈な毒酒に酔ひしれたやうに、甘いつかれと、叫びたいほどの快感に、なやましく陶然となつていつた。それは丁度暖い春の日に、大空高くあるつたけの調子をはりあげて、鳴き狂ふ雲雀の声を、きく時の気持にも似通つてゐた。

筋肉の一すぢ一すぢ、骨の一節一節までがゆるく遅緩してしまつたやうに、次第次第に溶けるやうな睡さにおそはれた。

それから幾時たつたか、幾分たつたのか解らなかつた。

「痛い」と思つた瞬間ハツと目がさめた。

私は無意識にとび起きた。

その時おやぢはしやがみながら衣紋竹をふりあげた、ピシリと鳩尾のあたりが鳴つて、サツと痛さがひろがつた。

私は驚いて逃げようとしたが、その時にはもう、次の答が打ちおろされた。

「あれつ！」と思はず叫んだ。

が、それは堪えがたいほどの痛さでもなかつた、却つて不思議にも、ふつと、その滑べつこい冷い漆塗りの感触を快く思ふやうな心も涌いた、彼はまた強く答を打ちおろした、私は悲鳴をあげて身をすくめたが、その瞬間痛さとともに一種の性慾的な、いふにいへない快感が、より強く、おこつて来ることを感じた。

私はもう逃げる事をしなかつた、肉づきの好い骨細の体を、彼の前になげだして、そのさいなむまゝにまかせた。

私は次第次第に、不思議な快感を強く感じだした。それは魂をゆるがすやうな心の底をくつがえすやうな言語に絶した歓びであつたうつとり目をとちて、時々悲鳴をあげながらも、この肉体が破れて、赤い血が迸ばしるまで、彼が、せめてせめさいなむでくれればいゝと祈つた。

突然、彼は答をすてゝ近よつて来た、そしてもう抵抗する事を忘れてしまつた、私の手足をくくると、その紐を鴨居に引つかけた。私のからだは宙にぶら下つた、彼はなほも衣

紋竹を取つてなくつた、答をうけて私の体は時としてくるくると、軒の葱みたいにまわつた、紐はだん／＼手足に深く喰ひ入つてくるが、それさへ今はもう、何の苦痛でもなかつた、彼は時々答をなげだして、私の体中に、ところ構はず物狂はしい接吻と抱擁をつゞけた。そして私も彼もぐつたりと疲れはてたころ、私の体はまた蒲団の上になげだされた。まもなくふたたび死のやうな眠りにおそはれた。

(巻中唯一の悩しくも生々しい責め場の描写である、何んとなく晴雨さんの好みの様な責め場だ、然し今から二、三十年前に、こんな責めをしたのしんだおやぢも仲々相当なものだ、又この女もこれで満足してこれ文けの描写をしているからこれ又仲々相当なものだ、読んでいてうつとりとする彼女はそれからすつかりおやぢの虜になつてしまつた。)

おやぢのがむしやらな熱情が日に日につると共に、私もまた、彼がなくては生れられない人になつてしまつた、好き嫌ひを超越した慕はしさ、恋しさである、焼けつく思ひとは、かうした心をいうのであらうか。

強烈な彼の性慾のために、私の身体にはい

つも紫色をした、打ちのめされた痕が、かげを消す事はなかつた、私は一人かくれて、そつと湯にはいつた。そんなにしてゐながらも私の肉体は少しも衰へるといふ事はなかつた私の小さな身体には、何んと偉大な精力がこもつてゐるのだらう。

(彼女はお爺さんとは一日おきにあい、その他お客はお客。役者の恋人、おやじ等と

(読者通信)

(投稿歓迎)

十月号拝見、なんと立派な出来ばえでしょう。月毎に躍進される内容には全く胸がわく／＼する思いで次号が待たれてなりません。マゾヒズムの極致、女性の切腹、これは私の好きなもの、第一です貴誌にこの記事が続く限り私の貴誌に対する愛着は絶えないでしよう。

(豊岡、M・M)

愛読者の皆様、長らく御無沙汰いたしました。私は昨年の十二月号に4Sクラブ探訪記を発表させて頂いてより、ずっと筆を断つていました。今度物を書ける境遇になりましたので何か変つたものを書いてみようかと思ひます。東京在住の愛読者の諸姉、女性のグ

色慾の世界に日を送つていつた、おやじとの関係は遂に女将に知れ一悶着、とゞおやじと逃避行、つゞいておやじと芸妓屋をはじめたがこれは失敗に終り、又お爺さんの世話になつて落付いた生活がつゞいたかと思ふと、関東大震災で一切が夢と消えてしまつた。焼け出されて下宿生活をして、女記者になつて働く中、又若い男と関係し、

ループを作りませんか、若く健康なる、そして清純なる諸嬢の連絡をお待ちします。

(東京都在住 編集部気付)

御誌十月号を市内の書店にて買ひ求め熱狂して一気に読了しました。本当にすばらしい御本です。いろ／＼注文を書きますが若し実現して下さつたら嬉しいと思ひます。「瀕死の白鳥」をお描きになつた都築峯子様に斬罪や火焙り磔、引廻し、晒し者等のお仕置の絵を書いて貰つて下さい。すべて女の罪人として、私は目かくしされた女の絵が好きです。私、本当は縛られるのが好きです。けれどもパートナ―がいけません。悲しいけれど自分で自分を縛ります。上手にいかないので困つています。古い御本にある罪人の縛り方をモデルにして教えて下さつたら嬉しいのです。お願いします。さよ

うなら、(京都 高山英美子)

十月号の映画シナリオ「体操倉庫」の全文御紹介願えないでしようか？一寸無理かな、三谷二三子女史の「縛られ服」の裁ち方を図面に於て発表してほしいと思ひました。愛情の絆の北野由紀さん、森本、篠崎、どちらでも結構ですから貴女が責められた様子を続篇として発表してほしい。

(八尾の愛読者)

小生は奇く愛読者の一人ですが特に女闘に興味を持つて居ります。九月号に加茂氏の「女闘長詩」がのらう大変残念に思ひましたが、十月号の土俵四股平氏の闘相撲は面白く拝見しました。あの順子の言葉や一度負けた千球子が相手のスキに乗じ再び取組み格闘を演じた所など、意地になつた女同志の気持がよく現れてゐると思ひまし

雑誌社は経営不振で生活苦になり、遂に横浜のチャブ屋の女となつていつた一女性の記録である。最近、男が女の名前をつかつて、悦虐の部屋を書いたり、告白文を書いたりしているが、これは真正真銘女性が書いたもので、文中の悦虐の記録は、以て珍とするに足りるものであらうと、特に一番最初に発表したものである。

た。内気な女性が一たび女同志の喧嘩となると恥も外聞も忘れ果てて揉みあう場面を想像しただけでも愉快です。

(田村 生)

私も貴誌を愛読しており、特に男子同性愛に興味を持つて居ります。毎号色々豊富で同性愛の記事を拝見するにつけ、それが実話或は創作にかゝらず最も私の羨望と悩みを深くするものです。同性愛は一般にとにかく言われませんが、他人に迷惑をかけない限りには決して人々の非難を受けるべきでないと思ふのです。如何でしょう。〃考へる輩〃と云う程考へる故に悩みを持つてゐるでしょう。その人がどの様に成長して来たかを他人がどうか云う権利はない筈です。倒錯した性心理かも知れませんが、個人の悩みも救われて然るべき事と思ひます。

(広島 森井晃)

まぞひすと・さじすと

富岡陽夫

1

達夫はハツとした様に彼女の目を見上げた
「どう、これ？」

廻り縁の硝子戸の角から、表庭に廻つて、
彼の側まで来たみどりは、片手に鼠取の金網
籠をブラ下げて見せびらかすようにしながら
笑っている。

春播きルピナスの花の苗にしやがみ込んで
いた彼は一度、顔中一寸濡れたような感じ
のする彼女の顔と、籠の中でグツタリしてい
る黒い鼠とを等分に見比べた。

「ゆうべとうとう掛つたのよ、一寸アルコー
ルかけてやつたら、参つちやつたの、毎晩散
々暴れて、憎らしいつたらありやしない、こ

れから死刑よ」

彼女は注意深く籠の戸をあけて、尻尾を持
つて鼠を土の上へ引ずり出した。黒い小さい
生き物は体を動かしていたが、ひどく平均の
とれない恰好で少し歩き出した。肥つた両腕
を膝頭にあてて、屈み込み乍ら、ジツとその
動きを見つめていた彼女は、矢庭に白い運動
靴の蹠を、鼠の頭の上にのせて、一寸又達夫の
方を振返つた。笑はもう消えて、目は何か異
様に輝いている。軽く鼠の頭を抑えていた右
足にグツと力を入れると、微かな鈍い音がし
た。重心を完全に右足を移して、もう一度力
一杯踏みつけると、パツと飛び退いた。
鼠は四ツ這いの形で頭だけ平に潰されている
片目が少し飛び出して、口から赤い血が流れ

出している。

「まだ生きてるのよ」

彼女はさも憎らしげに云う。尻尾の先が少
しピクピクしているのが分る。暫くその苦し
む有様を楽しげに見ていたが、

「断末魔ね、面白いわ」

と云い乍ら、彼女は身を起し、両足の蹠が
丁度鼠の全身に乗るような位置に、踵をそろ
えて立つた。一寸足の位置を確かめ乍ら、足の
ひらに重みを移し、鼠の全身に全体重をかけ
た。そうして又静かに体重を踵に戻す、此運
動を四五回繰返した。五七疋の体重に潰され
た小さい生き物は、もう尻尾も動かさなかつ
た、彼女の顔は真面目そのもので、何もかも
忘れて、只一つの事に想念を集中する表情だ

つた。

「まだ死なないよ、足の下でピクピクしているわ、まあいい気持、今……今死ぬ所よ」

彼女は急に縁側まで、飛び下った。

縁に腰を下すや否や、グツタリとなつて仰向けに寝転んでもう動かない、太いけれど恰好のいいノオ・ストツキングの二本の白い脚が達夫の目の前に、威嚇するように立ちはだかつた。

茶の間の方から聞えて来る叔母を交えた一座の話し声が、急に気になり出した。

五月の柔かい陽ざしが、大して広くはないが、よく手入された花の畠を、暖かい光で包んでいる。

「ねえ、花のこやしにしてよ、お願い」

彼女はあお向けに寝こんだまゝ云う。

彼は死刑になつて、平につぶされた鼠の身体を改めてもう一度みた。腸位は出るかと思つたが案外きれいだつた。血も口から僅か流れ出しただけだつた、言い付けられた通り、小さな穴を花壇の隅に掘つた。

鼠の死骸を手シヤベルですくい上げようとしやがみ込んだ時、みどりは急に身を起した「もう埋めちやうの、惜しいわね、もう苦しめてやれないわね、でももう一度」

やおら庭に出た

彼女は、両足で代る代る死んだ小さい身体を踏みについた、靴でひっくり返して、反対側から又踏みについた。

「骨のくだけて行く感触つて、いいわね。」

彼女は中々やめなかつた。目の前で荒れ狂う二本の白い美しい脚を眺めているうち、死んだ鼠がむしろ

に羨しくなつた、そうして次には嫉ましくさえたつた。

鼠の身体は平たくなつたように感ぜられるだけで、血も出なければ、皮も破れなかつた「あたし達ちやんの上に乗りたくなつたわ」彼女はそう云い乍ら、急に達夫の後に廻つた、彼は彼女の片膝が背中中の真中に強く乗るのを感じた、危く鼠の死骸の上に倒れようと



するのを、両腕を地について支えた。彼女の全体重がかかつたように思つた時、腕が折れるのではないかと思う程の痛みを感じた。でも事は一瞬にして終つた。彼女は籠を下げて裏の方へ姿を消そうとしている。

達夫はあたりを見廻し乍ら、死骸をすくい上げた。

2

「自分の目の前に現れてくる女は、どうして皆こうなんだろう。」

達夫はよくそう思う、彼に初めて異性と云うものを強く教えてくれた、あの「ぼたん」の玉枝という女もそうだった。矢張白くて、肥つていて、それもブヨブヨしたような肥り方ではなくて、所謂堅肥りだった、腕や腿はパンパンと弾き返すような弾力があつた。其の点、今のみどりより遅い感じだった。目方も多分もつと重かつたのである、のしかゝつて来られる、彼女の重みは、まだ發育の終らぬ少年のせいもあつたらう、一寸耐え難い苦しみだった。

「ぼたん」は今から考えるとその小さい町の花街のあいまい屋だったのだらう、彼女はいつも十時すぎに起きているらしく、彼が三時頃学校の帰りにそこを通る頃は、掃除其他の準備がすんで、湯に入ったり、化粧をしたりしていた。いつの頃か、一度、「坊ちゃん、遊んでいらつしやい」と云われて、ついフラフラと上つてお菓子を御馳走になつたのが初まりだった。この「遊んでらつしやい」は、其時は明かに無邪気な意味のそれであつたが、

最近になつて、時々其時の其言葉を想い出して、一人で顔を赤らめる事もある。彼女が特にそんな事をしたのは、達夫が中学一年の可愛らしい少年であつたせいもあつたかもしれないが、彼の父がその町の一寸した有力者だったせいもあるだらう。

三駅先の中学に通う達夫にとつて、その花街は駅から自宅への近道だった。併し「あそこを通つてはいけないよ八幡様の横の森の側の道を通るんですよ」と母によく云われていたので、つい其道を通る時はいつも落付かずコソコソと少し小走りに通るのが常だった。

其日、彼女にそう云われた時、彼は何となしに立止つてしまい、何とはなしに笑顔になつてうなづいてしまった。其時どうしてうなづいてしまったのだらう、と彼は後でよく考える、名も、素性も知らない彼女の一声に、どうしてあの家へ上り込んでしまったのだらう。勿論顔はいつも通りがゝりに見て知つてはいたが、とに角あまりつき合つてはよくない人種だと感じていた筈である。

その頃彼の通つている中学と同じ市にある女学生でいつも、駅で顔を合す少女がいた、同じ位の年級であらう。大抵は両方共それぞれの友達と一しよだったし、こちらは妙に取

立てゝ印象に残つてはいたが、双方共無関心の態度で過していた、或夏其県の県庁所在地の街中でバツタリ其少女に出くわした。

其時、其瞬間、双方共期せずしてニツコリ笑つて、頭を下げて挨拶した。次の瞬間双方共ハツとして、行きすぎてしまった、一瞬の出来事であつた。長い顔みしりが、長い知己の錯覚を起させるものと彼は解釈した。あの時の玉枝に対する行動も、これで解釈出来るのだらうと彼はいつも思つてゐる。

とに角其日は上に上らされお茶やお菓子を出された。

「あたしね、坊ちゃんの行つてゐる中学に、甥がいるのよ、多分知つてゐるでしょ。死んだ姉の子で母親がいないので心配なのよ、あたしこんな所にゐるでしょ、だからあまり大つぱらに義兄の所へも行けないし、それで様子がききたかつたのよ」

彼女はそんな事を云つた。其子は組はちがつたが自分の級で、よく知つてゐた。精悍なよく出来る秀才だった、彼女はそれをきいて嬉しそうに喜んだ。達夫は其の嬉しそうな顔をみて、自分もスツカリ嬉しくなつた。

彼女が本当にそう云う理由で彼をよび込んだかどうかは明かでない。併しそう云う理由

もあつた事だけは確かだと、達夫は今でも思っている、ぼたんに出入した事が其後母に知れて、ひどく叱られた時も、其理由を強く云い立てた、母はそれでいくらか和いで呉れた事を覚えてゐる。

その時はそれから彼女はお湯で背中を流して上げようと云い出した。達夫は「うちにあるからいい」と云い張つたけれど、「坊ちゃんいつもはきつと鳥の行水よ、お姉さんがよく洗つたげるわ、ホラ首筋なんか真くろじやないの。」

彼女はとうとう、半ば無理矢理に着物を脱がして湯殿へつれていった、浴室は普通の木張だつたけれど割合にひろく、湯も



きれいだつた。彼女はスカートをまくり上げて、立つたまゝ背中をゴシゴシ洗つてくれたひどく力があつて、痛かつた。「サアも一度浸つて」彼女はザアと肩から桶に一杯の水を浴せた、湯槽にトツブリ浸つた時、今擦られた背中が少し泌みた。

湯殿の戸が突然カラカラとあいて、今行つた筈の玉枝が裸になつて入つて来た。「私も入るわ、おそくなるもん」

そんな事を云い乍らひどく平気で湯槽の中で片脚を突込んだ。「女なんかと入るのは嫌だな、それに誰かいるんじやない」達夫はドギマギしていた。「だつて坊ちゃんもう

上るんじやないの、お母さんもお父さんもさつき一寸出掛けちやつたの、わたし早く仕度をしなくつちや」

お父さん、お母さんと云うのは此家の主人夫婦の事しかつた。

彼女は達夫を一寸だき寄せて、お腹と両膝でグツと締め付けた、達夫は全身の血が奔流するよう感じた。逃れようとする気持で一杯だつたけれど、それは少しも行動にはならなかつた。あらゆる行動力を奪われて、此女の支配下に入つた、そんな感じだつた。

「まあきれいな肌ね、男には勿体ないわ、憎らしいみたい」

彼女は今度は両腕で強く抱きしめてくれた腕も脚も逞しさ其物だつた、抱きすくめられた達夫は、もうどうする事も出来ないと言う気持だつた。観念しているうちに少し気が落ついて来た、改めて見た彼女の体は美しかつた。殊にその白い肌はこれ以上の美しさがあるかとさえ思われた、幼い時母の胸をまさぐつた記憶に比べて、彼女の肌は何とも云えぬ張りがあつた。達夫はいつまでも此のまゝでいたいと思つた。

「のぼせちやうわね」

彼女が湯槽から出た時、達夫は大急ぎで上

つて、服を着けて、挨拶もせず飛び出してしまった。

3

其後達夫は彼女を訪れるようになった。併し帰りは毎日其街を通るのだけれど、時間がおそかつたり、先方の条件が悪いのだろう、目礼だけでやり過ぎたりして、中々よんでくれなかつた。淡い期待をそんな風に外されたりした時は、家に帰つても、中々勉強に身が入らなかつた。それでも少くも月に二度は必ずよばれて、お茶を出されたり、甥の話をしたりした。

回を重ねるに従つて、彼女の態度は段々露骨になつて来た、彼女としては羞恥心は最初からなかつたであろうが、純真、少くも外見的には純真其のものの達夫に対する遠慮があつたのであろう。併しそれは達夫の絶対服従的な態度、或場合には寧ろ喜んで受入れているとさえ見える其の態度と、彼女の側でも次第に麻痺して来る遠慮心とは、彼女の情熱を何のわだかまりもなく発露させる傾向を助長して行つた。

玉枝は次第に彼を自分の好みに合うように仕込んで行つた、要するにそれは達夫をおと

なし、完全に無抵抗な玩具にする事であつた。

「まるで猫扱いだな」達夫は時々そう思つた。事實は猫よりもつとおとなしかつたかもしれない。

初めの中は彼を俯伏にして、背中の上に座つて、膝でグイグイ肩を押したり、背中の上に馬乗りになつて、両腕を肘と太腿の間に挟み込んで腰をドスン、ドスンと背中に落したりした、腕が折れそうに痛い事もあつたけれどもあまり声は立てなかつた。幽かな呻き声位はあげた事もあつたが、少しでも声を洩らすと彼女は拳で彼の頬を殴り、後になつては猿轡をされてしまつた。

玉枝の部屋と云うのが四畳半の部屋で、彼女だけが住込みで、外に二人程通いの女がいて、暗くなると其部屋は彼女の部屋でもあり別の女が使う事もあるらしかつた。其外に数部屋あつて、泊り客に使うらしかつたが、達夫と玉枝が話をしたり、遊んだりするのは彼女の部屋に限られていた。其部屋は二階の主入達の部屋からは最も遠く、往来からも一番離れていて、其家として一番安心の出来る所でもあつた。

達夫はそうして段々仕込まれた、或は飼

馴らされた、其内に彼にとつて一生涯印象づけられるような事が起つた。其日の彼女の顔はいつもと違つていた。愛嬌を湛える笑もなく真面目その物のような顔だつた、何か想いはあらぬ方に馳せているという感じだつた、顔全体がひどく濡れているように見えた。

「坊っちゃん、いい子だわ」

そんな事を空ろに云つて黙つて彼を押倒し一寸膝で胸を押さえていたが矢庭に顔の上に飛び乗つて来た、スベスベした皮膚が強く両頬を締めつけると共に、顔が一べんに押つぶされた様に感じた、彼女は長い間重い体をあつちやこつちへ動かしていた、顔に上半身の体重がかゝつた時は、頬骨がへし折れそうだつた。息もつまりそうだつたが、時々身体を動かしてくれるので、どうやら助かつた、時々凄く瘰れんの様な締めつけが来るかと思うと、スツカリ静になつたりした。

三十分以上も責められていたように思われた。

「ね、口を大きくあけるのよ」やつと許された時、双方共黙つていた、濡れたタオルで、顔をふいてくれたり、頬ずりしてくれたりされる間、達夫は痴呆の様にボンヤリしていた、激しいシヨックが彼の頭からあらゆる思考力を奪い去つたようだつた。

The Sweet Surrender of Alice

甘美なるアリスの降伏

(第四回)

珍書紹介

寒川 緑・訳

第五章 羽根責め

坐る者の自由を奪う椅子の餌は今は外さな
いでおきました。アリスは蒙った打撃に氣も
そぞろになつてゐることですし、再び彼女を
拷問にかけるに當つても別に取り立てゝいう
程の面倒もあるまいと確信してゐたのです。
但し、勿論必要以上の休養は与えないという
条件付きの事です。ですが、今回は私が憧れ
た狂いじみた方法でアリスの美しい裸身を弄
ぶつもりはありませんでした。私は椅子の上
に顔を両手に埋めて丸くなつてゐる彼女が無
心に曝してゐるムツチリした尻の曲線に貪
欲な眼を細めながら、次の手段について思案
を重ねてゐました。

やがて私の心は決りました。両手は再び乙
女の肌を求めてムズ／＼と蠢き始めました。
アリスをどれか一つの柱に真直ぐ立たせて括
りつけることに決めたのです。そして椅子を
アリスの真前に据えて樂々と腰掛け、その乳
房や……を再度訪ねようというのです。

彼女はもう静かになつてゐました。呼吸は
常態に戻つて規則正しく、今迄、間歇的にア
リスの身体を走つた戦慄も今は収つてしまし
た。この時、私は或る事に気付きました。な

んと彼女はロープに結んだ絹の輪索から手首
をそつと抜こうとしてゐるのです。もう猶予
してゐることはありません。私は彼女が首尾
よく両手を自由にする前にロープを動かしま
した。

「さて、アリス、続けようかね」

とロープを操り乍ら申しました。狼狽した
彼女はハツと私を見上げて目を外らせますと
うろたえて悲鳴を挙げました。

「あゝ、嫌よ、ジャック！ もうしないで、
もうしないで！」

そして、ほん今受けたばかりの責苦を思い
起して慄然と身をふるわすのでした。

「宜ろしい、可愛いゝお嬢さん、同じ事なん
だが、やり方は全然違ふよ、今度はもつとお
氣にゐるだろう。さあアリス、もう一度立つ
んだ」

「嫌ッ！」

彼女は儚ない争いを続け乍ら叫びました。
ロープは早くも緊張して容赦なく彼女をキリ
／＼立たせ始めました。

「あゝ、ジャック、嫌！……やめて！」

哀れな叫び声を挙げて引き挙げようとする
力に逆うのでしたが、及ぶ事ではありません
私は革紐を拾い取りますと、非情の笑いを口

辺に浮べ乍ら彼女を手近かの柱に引張つてゆく機会を伺いました。やがて身体が椅子から引き放され中腰になりました。チャンスが来ました。私は飛びつくなり後退りに柱に押しつけ、素早く革紐を柱と腰に廻して尾錠を締め繋ぎとめてしまいました。

こうして身体を柱に固定させますと、次に滑車を弛めて両腕を下に下げさせ、其の腕を後手に引き廻して柱の向う側で一つにして括り合せました。縄尻を柱の鉄環に通して結びますとアリスは身動きならず、その正面向いた肉体は全く私の意のまゝになれとばかりキツチリと縛り上げられてしまつたのです。ですが、私は更に残酷味を添えるべく、両足首を括り合せて柱に繋ぎとめてしまいました。

そしてもう必要のなくなつた腰に廻した革紐の尾錠を外しますと隅に投げやりました。

肱掛椅子を前に置いて腰を下しました。椅子をずつと近寄せて据えましたので彼女の身体は私の開いた両足の間に近々と挟まれました。それは丁度、彼女が裸にされ

ない前に淫らな攻撃を受けた時の状態と全く同様でありました。たゞその時は二人乍らチヤンと着物をつけていたのですが、今は共に全く裸体なのです。

目くらめく様な混乱に頬を紅潮させ、ゾツとする恐怖に打たれ乍ら、アリスはブルブル震えて立ち竦んでいました。目の前の私を避けるように目は固く閉じ、胸は外からでも分る位大きく波を打つて乳房が揺れ騒いでいま

した。私は椅子を背にゆつたりと身をもたせ乍ら、その艶めかしくも美しい一幅の絵を惚々とゆつくり鑑賞致しました。これは次の愛撫に掛る前に幾分彼女の気分を落着かせようと僅かばかりの予猶を与えたものでした。待つ程もなく彼女の胸の波は風ぎ収まり息使いもずつと穏やかになつてきました。明らかに今被攻撃態勢は整つたのです。私は徒らに彼女を待たせてはおきませんでした。私は机の抽出から細長い箱を取り出すと再び彼女の前に腰を落ち着けました

彼女は痛ましい程の熱心さで私を見詰めていました。女性の直感が何か恐ろしいものがそこに待ち構えていることを告げているのでしよう。中味がアリスに見える様にして蓋を開けました。中には先の尖つた羽根が一ダース程入つていました。忽ちにアリスは自分の運命——そうです全身を操られる運命——を直覚しました。忽ち金切声を張り上げました。

「あゝ、許して！それは止めて！ジャック……しないで！……死んでしまふ、堪らないッ！」



私はニヤ／＼意地悪く笑い乍ら一本の羽根を摘み上げました。途端に彼女は死物狂いに縄目を引き、わけのわからぬ悲鳴を上げて慈悲を求めました。

「落着きなさい、お嬢さん！ もう大人しくするんだよ」

私は手のつけられない牝馬をなだめる様に優しく云いました。そして羽根の先を静かにアリスのドキ／＼する乳房に触れさせました「ジャツク！ やめて！」

気も狂いそうな緩慢な擦り責めの手を逃れようとして、無闇と体を柱に押しつけ、両足の縄目を引きちぎるばかりに跳き絶叫するのでしたが、返事として私は羽根の先を見事に張った乳房の下沿いに移し、軽くそこ／＼を間断なく小突いて乳首へと擦り始めました。一きわ甲高い叫声と共にアリスの身体は縄目の許す限り痙攣的に揺れ初め、一撫で、二撫で——その度に哀れな悲鳴と身悶えが起りました。

こうして若い女性が柱に縛りつけられて悶え苦しむ光景自体、それは素晴らしい又とない眺めでありましたが、加えて、私の拷問を受けて跳き泣き叫ぶ女性がアリス自身でアリス以外の如何なる女性でもないという考えが私

の仕事にゾク／＼とする様な歓びを加味したのでした。悲鳴には一切お構えなく、私は渴望久しい実験——即ち羽根を乙女の……用いた際の効果——を試みようとしたのでした。そして、何人と雖も、この多く論議された問題を試みるに当つて、現在私の眼前に怯えて立ち竦み、素裸にされ、身の自由を奪われた女性が捧げているもの以上に愛らしい実験材料を求めることは出来なかつた事でしよう。……

——戻しますと、一段と科学的且つ無残に擦り責めを続け重なる気の張りに彼女の気力が燃えつきてしまう迄、この拷問をやめようとはしませんでした。……絞め殺される様な悲鳴と共にアリスの全身がガツクリと虚脱した様になりました。頭は胸の上に垂れかゝり、その姿態からは今迄の硬張ったギコちなさが消えさり、柱に廻して縛られた両手首に支えられてずり落ちることもなくグツタリと吊り下つていました。

もうこれ以上拷問を継続しても得る所は何もなくなつたわけです。そこで直ぐと両手両足の縄目を解きますと彼女を大寝椅子へと運び、ソツとその上に横たえました。

第六章 拷問寝台

アリスを横たえた寝椅子は、私がアリスを獲捕した際に使用しようとして、もくろんで造つた巧妙な細工を施した家具の一つでした。それは通常のものとは異つて長く八フィートもありましょうか、幅は約三フィート五インチ程もあり、暗緑色の縞子で蔽われ気持よくスプリングがきいて、それでいて腰を下しても身体が沈んでしまわない様工合よく詰物がしてありました。

外観は褥附長椅子に似て居りますが、実際は一個の拷問台以外の何物でもなかつたのです。というのは四隅に丈夫な革紐を操る機械が隠されているのです。革紐のこの世の使命はといえば、アリスを長々と大の字なりに仰向けに、或いは俯向けに——気の向くまゝに——伸び拡げさせ、私が彼女の肉体を楽しみ或は非情の意志を加える間も、そのまゝの姿で縛りつけておくことにありました。各側面を半ば下つた所に、これ又機械仕掛の予備の革紐が一对づゝ取付けられていました。仮に彼女に没我の喜びを求めようと思えば、私はこの革紐で両足を大きく拡げたなりに固定してしまふ事が出来るのでした。

私は重なる無益な闘争で疲労を加える事を望みませんでした。そこで、彼女はまだ抵抗力を取り戻さない中に、その両手両足首に四隅の革紐を繋ぎました。自由に身動き出来る様に紐は極く弛くたるめておきました。此の仕事が終わるか終わらないかに、アリスの意識は呼び戻されて参りました。すぐ私は傍を離れて部屋の一隅の衡立の陰へ行きました。彼女の方からは見ることは出来ませんでした。其処からは鏡を介して彼女を見守ることが出来たのです。

彼女が深く息を吸いこむのが判りました。ポツカリ眼を開きますと戸惑いしたように身の廻りを眺めていましたが、殆んど機械的に一方の手はソツと恐ろしい攢り責苦の受難の痕を撫でては優しく慰撫していました。そうこうする中に、急に身体を起して坐りますと両手両足を縛った革紐を解こうと初めました。間違ひなく充分常態に戻つたと認めてよい状態でした。私はスイツチに手をかけ音もなく機械を発動させました。革紐は直ちに張りつめ始めました。アリスは仰天して跳び上り、今直ぐ逃げ終せない限り、恥しい身体は翼を張つた小鳥のような恰好にされてしまう自分の運命を察知するのでした。

「嫌！ 嫌！ 嫌！」

次第に張りつめられてゆく身の行く手に怯えて悲鳴を挙げました。躍起になつて縛しめから逃れようとするのでした。革紐は無情にもドン／＼緊張の度を加えてゆく、跪いてゐる中に身体のパランスを失つて後ろざまに転倒してしまいました。そして身を取り直す暇もなく抵抗不能の状態に引きずり込まれてしまつたのでした。狂気のような訴えなどどこ吹く風と、私は衡立の陰でほくそ笑み乍ら嗜虐の喜悦に浸り鏡の中を眺めるのでした。

彼女の肉体はシリ／＼平たく引き伸ばされてゆき遂に仰向けにされました。次いですんなりした両足は徐々に真二つに切り裂かれてゆき、遂に踵が寝椅子の縁に達しました。そこで私は機械を止めました。アリスは最早や身動き一つ出来なくなつていました。声のない歓喜を噛みしめ乍ら私は衡立の陰より出ると無益の闘争に喘いでゐる仰向けの美しい肉体をマジ／＼と見詰めました。

感情に起伏する胸や羞恥に彩られた頬のバラ、こよなく剥き出された麗しい乳房、淨らかな……何んという素晴らしい眺望——あゝ、これは生けるマルテーズの磔刑図ではありませんか！

目を十二分に楽しませ、そしてアリスのシヨックが九分通り静まつてきますと、私は彼女の足に面して腰近く静かに坐を取りました。アリスは斯くも余すところなく観覧に供して精緻な検査を受ける羞恥と恐怖に、又ソツとするようなその結果の予想とに、交々打ち震え怯えて横たえられたまゝになつてゐるのでした。

シエクスピアもヴィナスとアドニスの中です。

——あわれ、真の白さを白き敷布に教うらしき其の真の恋人の裸身を其の臥床の上に見し誰か、先ず其の貪婪なる目を飽饜せしめたらむ後に、他の器官どもにも同じ悦びを頒たむとせざるや——

私とてもその通りだつたのです。

そこに坐つたまゝ、身体を一廻転させますと、彼女の顔と向き合せました。そして見事な乳房の上に両手を置いて殆んど肌に触れる程顔を下げて囁きました。

「可愛い、別嬪さん、キスだよ」

同時に唇をアリスの唇に合せました。アリスは真紅になりました、が応答はありませんでした、私はこれ迄彼女に接吻したことも又



それを彼女から受けたこともありませんでした。私はキスを得るのに夢中になりました。

「アリス、キスするんだ！」

威嚇するように彼女を見て再び唇を合せると、淡々彼女は応じてきました。唇の開くのが感じられました。ソツと私にキスしました。甘いキス！

「もう一度！」

私は要求しました。そして右の頬をキスに都合のいい位置に置きました。彼女は要求をいれました。

「もう一つだ！」

再度甘美な挨拶

が参りました。私は激しい陶酔の裡に乳房を押えた手を離しますと両腕を頸に廻して顔を引き寄せ、燃えるような熱いキスの雨をその目、口、と注ぎかけました。その猛烈なキスに彼女は終いに顔をバラの花のように

紅潮させて息をきらせて喘いでしまうのでした。……

止むを得ず彼女を放しました。そこで再びクルリと方向を転換致しますと仰天する彼女の足の方向に身を屈めこみました。

「もう降参したらどう？ 可愛い、アリス。君はどうする事も出来ないのがよく判つたろうね」

彼女は顔を横にそらして小さな声で云いました。

「嫌、いやです。私、出来ません！……」

そんな事出来ません！あゝ帰らせて！……帰らせて！……

「駄目だ」

冷たく答えた私は彼女の腰のあたりに掛け直しました。

「駄目だね、お嬢さん、十分お仕置されて、いやという程弄れてからのことだよ、だけど前にも云つた通りもうじき、君の気持も変わってくると思うがね」

彼女は恐怖を目の内に漲らせ乍らも奇妙な表情で私を見詰めていました。私は立ち上りました。目が後を追っていました。そして私が先端の尖つた羽根を新に選り出して戻ってくるのを認めますと、忽ち意中を察して金切声を挙げ乍ら両足を開かせている縛しめを引きちぎろうと必死の努力をするのでした。

「あゝ、嫌、嫌、かんにんして、嫌、堪らないわ！……私死んでしまふ！」

「あゝ、いや、そんな事はしないね」

私は落着いて答えますと、彼女が跳き苦しむ姿態——私はそれがどんなにか美しく刺戟的な光景を描き出すか知っていました。——を一望、目の中は収められるよう膝元近くに腰を下しますと、やおら羽根を差しむけて操りを開始するのでした。

(未完)

らぶ・すれいぶ

(11)

LOVE SLAVE

鬼 山 絢 策
方 金 三 画

「ま、あがれよ」

玄関口では話も出来ないの、池崎を客間へ通しました。

「徹は今日出勤してるかね」

「イヤまだ来ない。これはまさか君がやつたんじやあるまいね」

「とんでもないことだ。僕にこんな芸当は出来ないよ」

「そうか。それで安心した。念のため聞いたんだから、悪く思わないでくれ給え。じや徹がやつたと推定して先ず誤りはないが、問題は昨夜の三人のうちに徹が混つて居たかどうかと言うことだ」

「恐らく其の三人の中には居ないだろう」

「僕もそう思う。あの陰險な徹の性格として、直接手を下すようなことはしない質だからね」

大槻が傷いた……これは私にとつて喜ぶべき事柄なのでしよう。いや確かに祝盃をあげてもよい事件に違いないのですが、私には其の時特別に「ざまを見る」とか「いゝ気味だ」とか言つた気持は起らず、

『又面倒な事件が持上つたな……』
と言うような、何かしら煩わしい感情が沸き上つて来たのみでした。

池崎は一応私がやつたのではないかとの疑念もあつたようですが、私の言葉を信じて、直ぐにそれは消えたようでした
「彼にヨタ者なんかとの交際があつたのかねえ」

「あつたかも知れん。彼奴は自分の身辺のことはこれっぽかりも喋らん秘密主義な男だからね」

「僕に復讐を誓つて居たが、こんな結果で現れるとは予期して居なかつた」



「彼らしいやり方だよ」

「ところで春美の居所は調べてくれたかね」

「イヤ今度の事件で分つたも同然だよ。春美が必らず病院に行くに違いないからね」

「なる程」

「どうだい、これから二人で大槻を見舞いに行つて見ないか
ことに依ると春美に会えるかも知れないぜ」

「サア……」

「大槻に会うのがイヤかね」

「別にそんなことはない。じや行つて見よう」

私一人では何だかウス気味が悪くて行けなかつたでしょう
が池崎と一緒に行つてくれるのなら安心して行けると思いま
した。

新聞に出て居た新橋の病院へ車をのりつけ、彼の病室の扉
をノックする時には、ことに依るとこの扉の向うに春美が居
るかも知れないと言う期待が急に起きて来ました。

が扉を開けて見ると期待は外れて、室内には、二つあるベ
ットのうち一つは空で、一方のベットに顔中繃帯した男が寝
て居ました。その傍に若い看護婦が、膝の上の雑誌を伏せて
目礼しました。室にはこの二人だけでした。

右の眼と、口だけを残して後は全部繃帯に包まれた顔は、
確かに大槻ではありましたが、意外の重傷に私はびっくりし
ました。

「ひどいめにあつたね」

大槻はドロンとした力のない片眼で私をジツと見上げまし

た。

「タツブリお礼を頂戴してありがとう」

「何だつて。君は僕がやつたとても思つてるのか。僕じやな
いぞ。僕はこんな惨酷なことはしない」

大槻は無言で唇を歪めて笑いました。その時池崎が後から
進み出て、

「大槻君、池崎だ。君は僕の社へ一度来たことがあるから覚
えてるだろう。此度はとんだ災難にあつて、ほんとにお気の
毒に思う。君は下条君を疑がつてるようだが、それは大きな
誤りだ。下条君は確かに君を怨んでは居るだろう。だが今日
は昔の友人としての礼を重んじてこうして見舞いに来てくれ
たんだ。その人に対して今の君の言葉はあまりひどいじやな
いか。取消し給え」

「下条がやらなくて他に誰がやる」

「それは君の胸に聞けば分ることだろう。君には敵が何人も
ある筈だ」

「ハ、ハ、俺がこんなさまになつた姿を君達はそれ程見たい
のか」

「だめだ、君は何んでも人の好意を悪くばかりとる。僕達は
そんなケチ臭い了簡で見舞いに来たんじやないぞ」

「じや、春美が来てやしないかと思つて来たんだらう」

「フ、ン、君は大分興奮しているようだ。もう少し気が鎮ま
つてから話をしよう」

池崎は看護婦の方へ向つて、

「どことどこをやられたんですか」



「あの顔を二ヶ所と、右腕と、おなかを二ヶ所ばかり刺されてるんです」

「そうですか。ずい分ひどいことをしたもんですな」

私は持つて来た花束を看護婦に渡しました。

「そんなものは窓から捨てちまえッ」

大槻がわめいたので、看護婦も当惑して、一たん受取った花束を私にかえそうとしました。池崎は

「いゝんですよ。病人は疑ぐり深くなつてゐるんです。どうしても捨てろと言つたら捨てゝ下さい。どうも折角見舞いに来てもこれじゃ話も出来ないね、下条君、行こう」

私も不愉快になつたので早く出ようと思ひました。

「大切にし給え」

「お大切に」

池崎は部屋を出しなに看護婦に向つて「一寸……」と呼びかけました。看護婦が私達の後について部屋を出ようとする

と

「おいッ、行くなッ」

と又大槻がどなりました。池崎は構わず看護婦を外へ呼び出して、

「あなたも御苦労さんですね、病人は興奮してるけどまあ辛抱して世話してやつて下さい。これ少しだけ……」

といくらかの札を握ませた後、で

「病人の看護に来るような人はありますか」

「ハア昨夜おそく、女の方が見えて始めは共同病室にいらしたのを今朝からこちらの単独病室に移されて、看護婦も、専

属として私が当ることになつたので御座います」

「その女の人は若い綺麗な人でしたか」

「ハア大変お美しい方で、奥様ではないかと思うような口のききかたをなさつてらつしやいました」

「そうですか。他には？」

「別にどなたもお見えにならないようで御座いました」

「その女の人は又来ると言つてましたか」

「サア、分りませんが、大変悲しんでいらつしやいましたから又お見えになると思います」

「そうですか、ありがとう、ま、よく面倒見てやつて下さい僕達も又来ますから……」

二

私はひろくとしたダブルベッドの片端に横になつて居ました。

いつも傍に私を待らしてベッド一ぱいにふんぞりかえつて寝て居る春美の姿のないことは、支柱を失つた家のように、私に限りない心細さと寂しさを感じしめました。

私は池崎が病院から別れ際の言葉を反省して見ました。

「やつぱり春美さんは来てるんだね。君はこれからチヨイチヨイ見舞いた方がいゝよ、そのうちに春美に会えるよ」

「春美に会つてどうすればいゝんだ」

「え？」

池崎はその時、私の顔を呆れたようにシゲ／＼と見つめました。

「君は春美さんのためには総べてのプライドも外聞も投げ捨



て、愛してるんだらう。だ
つたら家へ戻るように話せ
ばいいじゃないか。勿論大
槻の面倒は見てやることに
してさ。その費用は僕が負
担するからさ」

「春美は多分帰つては来ないだろ
う」

「そこは君の熱情如何にあるよ。女に一
番大切なものは押したよ。君は元来押し
が弱くていかんよ。春美さんはきつと君
の許に帰ると思うよ」

「そうかしら……」

「僕も春美さんに会つて極力すゝめて見るがね」

「大槻が怒るだらう」

「そんな事迄考えてたら春美さんを永久に失つてしまうよ。
命を賭けた恋なら、それらしい決心をしたらどうだ」

池崎は齒に衣着せず、直言してくれました。私は春美に会
つて見たところで、このような状態になつては却つて春美に
意地を張らせるばかりだと思いました。

それに大槻の弱い目につけこんで春美を奪うと言うことは
何だか卑法なような気さえたのでした。

然し今斯うして独り寝のベッドに寡夫の如き寂寥をしみじ
みと味つて見ると、私はもう何でも彼でも春美が欲しくなり
ました。



て済みませんけど……」

徹の顔は蒼ざめて居ました。

寝室へ通すと徹は

「お酒ありませんか」

・彼は何か怯えたようにソワ／＼して居ました。ウイスキー
の角壺を出してやると、グラスに立て続けに何杯もあふりま
した。

「とう／＼やつたんだね。ずい分思いきつたことをしたね」

「だから僕はやると言つたでしょう。僕は自分で言つたこと
は必らず実行するんです」

「君はそれを誇つて居るのか」

「Ⅱそうだ、池崎の言う通り
だ、どこまでも誠意と熱情
をもつて春美にぶつかつて
見よう。大槻がどう思おう
と、それは全く問題ではな
いのだ!Ⅱ」

と決心しました。

その時玄関の戸を叩く音
がしました。この夜更けに
誰だろうと思いましたが、
兎も角起きて行つて見まし
た。深夜の来訪者は徹でし
た。

「お願いがあつて、おそく



「誇つては悪いですか。僕はあなたのためにもと思つてやつたんですよ」

「僕は君にそんなことを頼んだ覚えはない」

「じゃあなたは僕のやつたことに対して不服なんですか」

「君は少し気が顛倒して居るようだね。物の考え方がおかしくないかね」

「僕はちつともおかしいとは思つて居ません。ところでお願いがあるんです。お金を貸して下さい」

「突然何を言うんだ」

「僕はもうアパートにも帰れないんです。恐らく手が廻つて居るでしょう。会社へも行けません。僕は暫らく故郷へ帰つて暮そうと思うんです。旅費もないし、これからの当座の生活費もないのです。僕の全財産をあの三人のヨタ者にくれてやつたのですからね」

「君の言い方はまるで僕から金を取る権利が当然あるような口振りだね」

「そう言う訳ではないが、僕のやつたことは少なくともあなたのマイナスになることではないと思つてゐるんですがね」

「ではそれを恩にさせて金をせびろうと言うのかね」

「まあね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、いけませんか」

「断わる。僕は君に決してあんなことをしてくれと頼んだ覚えはないからね」

「そうですか。僕はあなたが、多少の好意をしめしてくれてもいいと思つてたんですがね。あゝア、僕はとう／＼罪を作つてしまつた。少しヤケになつてゐるんです。そこへ来て又、

あなたには裏ぎられた」

「君は僕を脅喝しに来たのか」

「何と思つたつていゝ、お金を下さい。五万円でもいいんだ」

「帰り給え」

「僕には帰るところがない。今晚は止めて下さい」

「出て行き給え！」

三

私と徹は危うく格闘もしかねまじき形勢になつたのでしたが、そこで急に徹は態度を変えて、今度は「泣き落とし戦術」に出て来ました。

「もう僕をかばつてくれるものはこの世に一人も居ない、もう二度とこんなお願いには来ないし、東京へも出ずに一生田舎で暮すつもりです。どうか一生のお願いですから僕を助けてやつて下さい。」

と言う風に折れて来たのです。その晩は何と言つても承知せず、それでも泊めるだけはやりましたが、朝になつて見るとやつぱり可愛想になつて、銀行から金を出して与えました。彼はその時ほんとに喜んで何度も礼を言つて、それでも一沫の憂愁を瞳によどませて、家を出て行きました。

春美との情痴も彼にとつては一場の悪夢として忘れ去つて行くのでしよう。

私は直ぐ病院へ行きました。私はアツサリと諦めることのできる徹を羨やましく思いました。

大槻の室へ入ると若い医者が看護婦に手伝わして繃帯の巻き替えをして居ました。



その時に私は大槻の顔を見ました。

あゝ！そのむごたらしい傷！

一つの傷は、右頬から鼻の傍まで三日月形に抉られて居ましたが、今一つの傷は左の頬から左の眼にかけてパツクリと口をあき、薄桃色の肉が捲れ上つて、黄色いホルムガーゼがはみ出して居ました。下脛を縫つたあとが生々しく、眼の玉が半分とび出して見えました。繃帯をして右の眼と口だけを出して居た時の顔は大槻に違いありませんでしたが、今斯うして、全体の顔を見た時は、大槻とは似ても似つかぬ化物のような顔になつて居ました。

私はその顔を見た瞬間、理由のつけられぬ歓喜と快感が、身体中を走り廻りました。

私はマゾヒストであると同時に、この快感に痺れる程のシヨックを受けたことは、サディズムの片鱗をも併せ持った男なのでしょいか。

後から考えて見てもあの時の快感は、只「いゝ気味だ」と言う復讐的なものは少しもなかつたように思います。最初に会つた時の痛々しい繃帯に包まれた顔を見た時は、同情の念さえ起きた程だつたのですから。今更復讐的快感を感じる筈がありません。私のこのときの心理をどなたか専門の方に解釈してほしいと思つて居ります。

処置を終つた医者は、私を見ると急に不機嫌な顔つきで「失礼ですがあなたは患者さんとう言う関係の方ですか」「友人です」「そうですか。まさか患者さんを苦しめに來られたのではないでしようね」

「ハ？それはどう言う意味ですか。」

「この患者さんには大分敵が大勢居るようですね。あなたは友人なのでしょいか」

「どうしてそんなことをお聞きになるんですか。僕は昨日も來たのですよ。その看護婦さんが知つて居ます。患者に聞いても分る筈です」

「そうですか。イヤ失礼しました。実は昨夜、見舞いに來た男が、御病人の敵だつたと見えましてね。一寸看護婦の居ない間に又ひどいことをして行つたのですよ」

「え？どんな奴が來たのです？」

「患者さんは霧塚徹と言う男だと言つてました。そしてその男が直接手を下したのではないが今度の事件の張本人だと言つて居ます」

「徹が昨夜此処へ來たのですか」

「あなたはその犯人を知つて居るのですか」

「知つて居ます。そして昨夜どんなことをしたのですか」

「それは一寸申し上げにくいことなのですが……。まあそんなことがありましたので、病院としても責任上、見舞客は一切お断りしようかと思つて居る所なのです」

若い医者は大槻には迷惑して居るらしく、厄介者扱いにして、愚痴を言つて行きました。

大槻は傷が痛むのか私の顔を見ても何も言えずに唸つて居ました。私は看護婦に昨夜の出来ごとを問いたゞしました。

看護婦も始めは言いにくそうにして居ましたが、

「昨夜私がお風呂に行つて居る間に來たんですのよ。その人が



犯人だつて患者さんおつしやいましたわ。何でもベッドの上へ上つて患者さんのお顔を足で踏みつけたらしいんですの。そして、その上……」。

「どうしたんですか」

「私が帰つて見ましたら繃帯がグシヨ／＼に濡れて、お顔のまわりの敷布が一面に濡れてますの、くさくて／＼大変でしたわ」

「え？ 一体何をしたんですか」

「ずい分ひどいことをしたもんですわね。こんなになつてる患者さんにあんなむごい羞ずかしめを与えるなんて、余つ程ひどい怨みでもあるんでしようかしら。あんな汚ないこと迄

しなくともよさそうなもんですのにね。ほんとに惨酷なことするもんですわ」

「じや顔へ小便をかけたのですか」

「えゝそのために急に傷が悪化してしまいましたの。ほんとに私も責任上困つてしまいましたわ。先生にはひどく叱られるし、もうやめさせて貰おうかと思つてますの。このさき、どんな人が来てどんな事をするやら分りませんもの」



「昨日もあの女の人は見舞いに来ましたか」

「えゝあの方がお見舞いに見えて、お帰りになつたすぐ後ですの」

「ではあの女の方は、その事件をまだ知らないんですね」

「えゝ」

「あの女の方は患者の繃帯を取つた顔を見たことがありますか」

「いえまだ、御覧になりません」

大槻は首を捻じ向けて、細くあげた右の眼で、私をジツと見ながら看護婦と私の話を聞いて居した。

「大槻君、昨夜徹が来たそうだね」

「君を疑つて悪かつた。やつぱり彼奴だつた。然し下条君、君が斯うして見舞つてくれる好意は有難いが、もうこの病室へ来ないでくれ給え。浦川さん今度この男が来たら、病室へ入れないでくれ。もうどんな奴も面会謝絶だ。春美以外はこの病室へ通さないでくれ」

看護婦は「ハイ」と肯いたが、当惑そうに私の顔を見ました

「君のやさしい気持には感



謝するけれど、僕は、君に会いたくないんだ。帰つてくれ給え」

「そうか。じゃあもう来ない。大切にし給え」

大槻は私と春美の会うことを恐れて居るのでしよう。私は大槻や春美が、私がやつたのでないことを分つて貰えることに満足して一先ず引き退ろうと考えました。

扉を開いて出ようとする、向う側に黒百合の精のような春美が立つて居ました。

春美の服装は家に居た時とは変つて、思いきり胸を露わしたドルマンスリーブの黒いワンピースに胸元を蜘蛛のプローチで止め、口程も濃く、化粧もどぎつく変つて居ました。全体から受ける感じはダンサーか、キャバレーの女と言つたタイプでした。が彼女の美しさは益々妖しく匂い、私の胸をグツと押しつけるようなちからを発散して居ました。

春美の眼は「何しに来た！」と詰るように睨んで居ました。私は彼女の胸の痛くなるような美しさと、きびしい表情に、直ぐには言葉も出ず、もり上つた乳房の隆起の谷間にうずくまる銀色の蜘蛛を見ながら、彼女に言う言葉をもどかしく探して居ました。

「大変なことになつたね」

「フ、ン」

と春美は鼻の先で笑つて、

「帰るの？」

「ウン、大槻君が帰れと言うもんだからね」

「いゝじやないの。もう少し居なさいよ」

そう言つて私を押しつけるようにして室に入ると看護婦に「御苦労さまですわね。具合はどうですの」

「あの昨夜大変なことが御座いましたのです」

看護婦は手短かに徹のことを語り、自分の責任に対する弁明をくどくどとはじめました。

「そうでしたの。あの済みませんけど果物を買つて来て下さいませんか？それからこの人と一寸お話がありますから一時間ばかり散歩でもして下さいな」

看護婦に札を握らせて外へ出してしまふと

「ちき生ッ、徹の奴、覚えてやがれッ、妾あんたがやつたのかと思つてたけど、あんたにはこんなことする勇氣さえもない人だつたわね」

春美は大槻の首を抱えこむようにして

「御免なさいね。妾が昨夜帰らなければよかつたんだわ。妾お店へ行つちやつたもんだから、徹の奴にやられたのね。今夜はお店を休んでずつと居るわよ」

「春美、下条君に帰つて貰つてくれ」

「えゝ帰すわ。あんた心配してんのね。大丈夫よ、妾もうこんな奴のとこへなんか行きやしないから」

大槻は不自由な首をねじ向けて春美を見上げ

「ありがとう。俺にやア今お前一人が頼りだぜ」

大槻の片眼からホロリと一滴の涙が縋帯に滲んでゆきました。と、急に眼をつぶつて顔をしかめました。

「どうしたの。痛むの？」

「ウム、一寸、壘をとつてくれ」



「あゝお小用？」

春美はベッドの下の新新聞紙をかぶったしびんを取りあげました。蒲団の下から突込んで用を足させると、それを私の前に突き出して

「ちよいとこれ捨てゝ来て頂戴」

それは頭から命令する口調でした。私は仕方なくしびんを受取つて室の外へ出ました。

廊下を通る看護婦や、白衣の医員にジロ／＼見られると、非常に屈辱を感じました。

始末して部屋へ戻ると、春美はベッドの上においかぶさるようにして、繃帯から僅かに出て居る大槻の唇へ接吻して居ました。私の足音に首をあげると

「チャンと中をゆすいで来た？」

私は黙つてベッドの下へ用済みの品物をおきました。

「あんた帰つてもいゝわよ」

春美は表情一つ変えずに冷たく言い放ちました。

私はやつぱり来なければよかつたと思いました。大槻から帰れと言われた時は何とも思いませんでしたが、春美からそう言われた時には、私は絶望の淵へ突きおとされたような気がしました。

「あ、そうだ。あんたに頼みがあるわ」

「な、何だね」

彼女が急にニツコリ笑つて言つたので、私は暗夜に光明をみつけた如き思いがしました。

「お金持つて来て頂戴。此処の費用妾一人じや払いきれない

わ。あさつてが勘定日なのよ。だから明日持つて来て頂戴」
相変らず彼女の言葉は途中から命令的になりました。

「いくら持つてくればいゝんだ」

「手術料共で三万円もあつたらいゝでしよ」

姦夫の入院費を、姦婦に命令されて払う夫、世の中にこんな間の抜けた亭主があらましようか。

でも私は、今朝がた徹に出してやつた金よりも気持よく払つてやる決心がその場でついたのです。然も心のどこかで、喜びをさえ感じながら……

「いゝの、きつと持つて来るのよ」

「承知した」

「持つて来なかつたら、承知しないよ」

「持つてくるよ」

春美はスツクと立上ると私の前に立つて

「そこへお坐り！」

と命令しました。私の肩へ手をかけて跪まづかせると、いきなり手荒く私の髪を驚掴みにして、グイと顔を上に向け、「いゝか。もしも持つて来なかつたら、お前を殺しちやうぞいゝか！お前だつてこの人の病院費を払う責任があるんだから！」

「僕になんで責任があるんだ」

「あるじやないか。バカツ！」

春美はいきなり私の頬をなぐりました。

「どうしてだろう？」

「しらばくれるない。お前が徹をそゝのかして、こんな目に



あわしたんじやないか」

「そりや違う！」

「うるさいツ！バカくくくツ」

春美は両手で私の頬に往復ピンタをくれて喋らせぬようにしました。

「いゝか、きつと持つてくるんだよツ」

「分った」

「その代りタダでは可哀想だから、それだけの報酬はしてやるよ」

春美は私を見下して微笑を浮べると、私の眼の前でスカートを捲りあげました。

「フム、これを脱がさしてやる」

春美はベッドの大槻の方を見てにっこり笑いました。

まつ白い短かいパンティ！

その上にいつも私を見つめて居る可愛らしいお臍が乗つて居ました。

「さ、早くおしよ」

私は恐る／＼、春美の腰の両脇へ手をかけて、白い布を、足もとにひきさげました。

「必らずお前が持つてくるようにしてやるよ」

さんざん私を悩ませた武器、歓喜と苦痛の коктейルを堪能したおそろしい責道具を、春美は私の眼のまえにひけらかして私を脅すのです。

彼女の太い円柱の一本が上つて、私の肩にズツシリと重味を加えると、私は餓えて居た者がおいしい果実を与えられた

ように、夢中でカブリついて行きました。

「フ、だめ！、今日はこれだけ。持つて来たら、後をタツブリお礼してやるよ。サアお帰り」

私は離れがたく、これから得難い果汁を吸おうと思つて居るところを、春美は、

「帰れと言つたら帰れツ！」

春美は足をあげて、私の頭を蹴あげました

「帰れ、出て行けツ！」

私は野良犬のように、扉の傍まで蹴転がされました。

春美は自分で扉を開けました。

これ以上まご／＼して居ると、春美は扉の外にまで、狂暴な脚をあげてくるでしょう。

私はそこで立つて扉の外へ出ました。

瞬間春美は私を見て微笑しました。

あゝこの微笑

これこそ、私が何年もの間迷わされ続けた謎の微笑なのです。この微笑のために私は、殴られ、蹴られ、あらゆる恥辱を受けても春美について来てしまつたのです。

ことに依ると……

何かその時、私は春美の肉体のどこかにまだ私に対する愛情の残滓がかくされて居るのを覗いたような気がしました。然しそれも一瞬で、ボタン！と扉は無情な音をたてて閉つてしまいました。

(次号完結)



女のズボン・最後の回答

——沼 正三氏に——

吾 妻

新

前号の沼正三氏「再びストラックスについて」をよんで、正直のところ困つたものだと思つた。というのは、論ずべき点が更に増えてこれでは編集者および読者にご迷惑をかける外ないからである。私は「女のズボンについて」を書くときもその点を考慮して、理窟一点張りをなるべく避け、読物風に苦心したつもりだが、氏のようにムキになられるとそれもいかなくなる。といつて本誌は全読者の共有物だから、一般的興味をはなれた問題でいい気持になつて口角泡をとばすことも許されまい。そこで、沼氏の再反駁があるうとはなからうと、私はこれ以上本誌を利用することは打切る。但し、議論は私も好きだから、ご希望なら手紙でも、直接お会いしても応じます（住所は編集部にあります）。ここではできるだけ簡単に要約するから、非礼な言葉があつたら許して頂きたい。

第一に、氏は「衣服研究二十五年」という言葉を幾度も引用して皮肉つておられる。だ

いぶかんにさわつたようだが、事実だからしかたない。したがつて、氏の衣服論が根本的に狂つてゐるように見えるのもやむをえないたとえばストラックスという言葉であるが、それが日本の洋服界共通の用語だとか、「婦人服装に関するWPB規定……」などというこ

らではないからだ。また氏が独断してゐるようなマゾヒズムともならん関係がないからその原因は八月号に略述したから繰り返さないが、重要なのは女が経済的地位を高めるにつれて「合理的な服装」を採用するようになることだ。だから、衣服としての根本問題は、貞淑、羞恥、謙遜、女らしさの、一切の道徳的象徴と化したスカートから、別箇に動く二本の脚を別箇に包む機能的形態に進んだという点にあるので、折り返しの有無だとかベルトの有無などは問題ではない。この形態の革命的变化は、その背景の歴史的、社会的な巨大な現実と結びついて、はじめて理解される。私たちが服飾の専門的な分類をするときには、もちろんスカートにしても時代的にそれぞれの名称をつけたりする。だがスカートとズボンを対立させるときは、一枚の布で両脚を包むか別に包むかが問題なので、この形式によつてスカート、あるいはズボンと総称で呼ぶのが正しい。王制復古期の女槍騎兵

の足首をくくつたダブダブのズボン、一八七一年の英国国衛隊女兵士の細長いズボン、サラ・ベルナールが部屋着にしたパジャマ様のズボン、ブルトンヌの「乙女ボーイ」にビネの描いた肉感的なズボン、一八九三年以後アメリカに流行した青踏派の長短さまざまなズボン、——ジョン・グラン・カルトレがこれらをも一つの言葉で表わしたのは正しい。さもないければ、女がズボンをはくことについての一切の問題から歴史的な意味が失われ、それとセックスの関係にしても現象に囚われた独断的解釈に陥りやすいからだ。沼氏のように「紳士ズボン」と「婦人ズボン」と区別することがその一例である。沼氏および多くのデザイナ―がそういう言葉を使いたがることも、そもそも現代の過渡的現象としてわれわれの研究対象になつていたので、非歴史的なみかた（言葉をかえると女のズボンをはく現象を少しも理解できない）の興味ふかい特徴なのだ。ロウ・ヒールの靴、無帽、Mボタンの所が割れていることなどは、女がズボンを採用した本質とは関係ない（因みにエスキモーのズボンは男女共前が割れていない）。

序でにギルの「衣裳論」は一言で片付けた。あれを面白がるのは花森安治のようにスカートをはくジャーナリストか興味本位の読者で専門の衣服研究家は問題にしていない。衣服における威厳の要素は未開時代にのみ意味があるので、ギルは宗教とそれとの結婚をもくろんであの非歴史的な随筆をかいたのである。

次に女のズボンとマゾヒズムだが、私の主張は大体八月号で尽きている。ところが氏によるとアメリカはマゾヒスティックな国で、その風俗を輸入したスラツクスもマゾヒスティックといふことになる。そのために外国人の書物や言葉を引用しているが、引用癖はおよしなさい。一国、一社会をある傾向で片付ける安易なやりかたは、反対の場合もいくらか成り立つのだから。第一、その分類にサディズムだとかマゾヒズムだとかいうのは滑稽である。もし女尊男卑といふことを言われるなら、母権制社会はマゾヒスティックと言わねばならず、女が独立の地位と財産をもち招婚婚を行つていた日本の平安朝中期までの社会もマゾヒスティックといふことになる。

アメリカを女尊男卑といふのは皮相な見方である。アメリカの婦人解放はスカンヂナヴィアよりずつとおくられていくし、アンソニーからウッドハルに至るまでの婦人運動家は文字どおり血と牢獄の道を辿つた。今日のアメリカ文学や劇や映画は、女は同等でなく「かわき性」なるが故に保護せんとする中世騎士道の偽善道徳をさらに露骨に強化しており男女平等は達せられるどころか、まだ理想の段階にある。ただその部分的実現が、封建的な男たちの批難や愚痴となつて現われているにすぎない。この事実はアメリカの女の経済的地位や生活様式や感情生活を分析すればいっそうハッキリする。

最後に、私にマゾヒスティックな傾向がなにかとのお疑いだ、サディズムそのものの

心理機構を問題にされるなら別として、女のズボンとの関係から推測されるのは見当違いである。そして私自身を別にしても、おそれくその推測は当たらない。なぜなら、女のズボンは女の解放と共に風俗化するが、女の解放はけつして男をマゾヒスティックにしないからである（氏の議論は終始この点を誤解している）。男女平等は男をマゾヒスティックに女をサディスティックにしない。それをそう思うのは、氏が多くの男性と同様に、従来の不平等な男女関係を基礎において眺めているからだ。だがこの点は、氏が頑張れば水掛論となる。ただ、謙虚な眼で革命後のロシアや中国の男女関係を研究されれば見方が変わるかもしれない。

氏の「手帖」の中にある「白人崇拜症」その他、反駁したい点はまだある。しかし、すべての現象をマゾヒスティックにみると如何に解釈されるかを、私は興味をもつてよんでいる。サディズムの立場から見ると、もつと沢山の手帖が書けるかもしれない。ただ私はそうした概念的な分類を嫌うのである。私は女のズボンをサディズムに「利用」するだろう。が、他の人がそうすべきだとは思わないし、妻にも娘にも、そういう意味をはなれて穿いてももらいたいのである。私が怒つて茶碗を相手に投げつけても、それは武器でなく、本来は飯を食う道具なのだから。

奇譚クラブ最近号 主要目次

昭和二十七年

○九月号特集倒錯の告白○

口絵 倒錯の告白画集……………竹中英一郎

玲子習作二十題……………喜多 玲子

縛られた女の写真集……………美の 緊縛

狂い咲くカンナ……………羽村 京子

白い腋窩の幻想……………三富 浩生

妖しい花びら……………寺尾 修治

サディストの悲哀……………天野 一郎

足部償償の悲願……………山本 貞輔

変態心理を衝く……………波多野 新

記録係……………岡田 咲子

邪恋の焰……………松井 籟子

洋パンを囲む座談会……………辻村 隆

加虐症の種々相……………仁比山 等

吉原の淫虐魔……………緑 猛比古

○十月号 特集切支丹迫害史○

口絵 責め場面挿絵集……………喜多玲子・構成

切支丹迫害史画集……………五井野弘・画

縛られた女写真集……………辻村隆・構成

切支丹迫害史……………漆島 迫平

或る医師の告白……………亀岡 恭二

大衆文学に現れた「女の責め場」……………高月 大三

愛と苦痛の交錯……………鳥上 源一

恋の烙印……………松井 籟子

男色の海……………井口 正憲

アブニストの記へばきうり……………鬼山 絢策

夫婦愛と緊縛の考察……………辻村 隆

宿命に哭く……………浅田 正人

悪女……………岡田 咲子

縛られた妻……………早川新一郎

狼狽五態……………喜多 玲子

○十一月号 宗教刑罰戦慄画譜

口絵 宗教刑罰戦慄画集……………

風俗便所考……………淫書開好記

緊縛の受難(縛られた女の写真)……………

悲恋の管刑……………松井 籟子

続・へばきうり……………鬼山 絢策

ストリップ変態記……………朝見 速夫

続・変態艶書……………岡田 咲子

小年矯正院体験記……………獄 収一

桃色の地獄……………藤安 節子

夢性の美少年……………三村 幾夫

都会の異態交響楽……………中河津規男

悪魔と口紅……………桂 牧次郎

発狂文学者の研究……………杉山 清詩

男色魔の虜……………井口 正憲

性愛描写の文学……………紀市 郁榮

切支丹迫害史……………漆島 迫平

○十二月号 惑溺の愉悅特集号

口絵 フランス貴婦人の変態性生活……………

耽美派小説名場面集……………潤一郎の巻

折込口繪写真縛つた女を写す……………辻村 隆

濁れる愛執……………松井 籟子

奴隷妻……………片矢 薫

男装麗姫伝……………亀岡絳七郎

孤獨なファンタジー……………芳野 眉美

糊と泥と砂……………長岡愛一郎

4Sクラブ探訪記……………一俣志津子

非公開映画世界の闇房……………藤安 節子

囚衣或る人妻の生活記録……………古川 裕子

ロマンチックなサディズム……………森山 美歌

女囚私刑体験記……………小坂多美枝

セックスの記憶……………綾 久江

錯乱の倫理……………近東規矩也

狂い咲くカンナ其の後の告白……………羽村 京子

昭和二十八年

○新年号 縛つた女を描く○

口絵 吊り下げられる女……………喜多 玲子

中世紀の宗教刑罰画集……………

扉 愛の使徒……………色刷口繪 椋鳥

口繪写真 縛つた女を描く……………

アブニストの記……………鬼山 絢策

淫火(みだらび)……………松井 籟子

桃色のベールに包まれて……………川端多奈子

読者座談会交悦に伴う責めの衝動心理……………

マゾヒストの果て……………福田 英一

糊の執著……………長岡愛一郎

鼻腔礼讃……………升岡 金吉

告白記 僕の記録……………黒井 珍平

女の責めを描く時の心境……………伊藤 晴雨

あなたのムチの下に……………角田 平八

赤につかれた男……………上村秀久雄

男色の花道……………堤 行房

○二月号 責めの小説特集号○

口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)……………

口繪写真 恋に狂つたワン・カット……………

スペインの宗教裁判……………

妖 花(心の悪魔)……………羽村 京子

夜開く孤島……………岡 真史郎

若衆散華(同性愛欲史譚)……………戸崎 平馬

変の字問答(第二話)……………浮家 鷹三

らぶ・すれいぶ(第二回)……………鬼山 絢策

燐 光……………久留木 栄

女嫌いの種々相……………仁比山 等

悩ましのサディズム……………森山 美歌

切支丹迫害史……………漆島 迫平

しいたげられるよろこび……………林田 澄子

硝子便所……………芳野 眉美

映と画サディズム……………雲井 彰

○三月号 東西拷問くらべ○

口絵 柱に縛られた女……………喜多 玲子

口繪写真 東西拷問くらべ……………

サディズムの精髄……………吾妻 新

切腹史談……………中康 弘通

同性的男性愛の謎……………染田 玄

受難記(ある女の告白)……………岡田 咲子

女囚私刑体験記(其の二)……………小坂多美枝

艶書通信(喜多玲子さまへ)……………高野すみ子

文学歴史サディズム……………仁比山 等

腹 糞 雑 考……………千葉 三郎

白い便器の幻想……………芳野 眉美

緊縛女優列伝縛られた女優たち……………升岡金吉

アドニスの灯……………鷺巢 千芳

第七天国の夢想……………梅井 清

〇四月号 錯倒の告白特集〇

口絵 くらすくられる女 喜多 玲子
 口絵 写真 緊縛美の考察後手と高子 小
 口絵 写真 少年矯正院体験記 沼 取一
 神の酒を手に入れる方法 沼 正三
 肥満体への郷愁 麻生 津和夫
 乗馬服と長靴と鞭 森本 愛造
 不思議な拷問 有馬 稲高
 私の新婚生活 島村 康雄
 開花の契機 信太 葵子
 キヤメラ愛好会 岡田 咲子
 責めの美的表現 小此木 蘭一
 新裸体狂祭論 七条 美樹子
 続・囚衣 古川 裕子
 地獄繪行脚 長岡 愛一郎
 美少年の死 岡 真史郎
 縛られた女優たち(一) 升岡 金吉
 風流繪巻 吾妻 新

〇五月号 特集男性 MASO 〇

口絵 戦後の挿繪に現れた女の責め場
 口絵 写真 荒縄による緊縛感のスポット
 怪奇画集(ドイツのグロテスク画集)
 マゾヒストの会 沼 正三・訳
 風流責各態 吾妻 新
 捕縛難考 獄 取一
 僕の手記(完結篇) 黒井 珍平
 雌獣の手記 近見 良二
 女王様ごっこ 飛田 良二
 続・硝子便所 芳野 眉美
 私のおび 瓜生 珠子
 少年及び女性の切腹 中康 弘通
 吊られた白鳥 川端 多奈子
 魔都上海の思い出から 姫宮 四郎
 奴隷の安の記 中野 安太郎
 縛られた妻以前 早川 新一郎
 暴帝イワン罪悪史 高取 辰治

〇六月号

口絵 お小夜嵐 喜多 玲子・画

緊縛による一表情 塚本鉄三撮影

口絵 地獄物語(往生要集) 吾妻 新・訳
 クリスチーナの受難 朝見 速夫
 ヴァンブ女優列伝 岡田 咲子
 アブノーマル・ファンタジー 竹谷 十三
 責 苦 片矢 一
 廓の灯影 大川 由紀子
 出獄(少年矯正院体験記) 戸崎 平馬
 由紀子のお仕置 沼 正三
 若衆武士道 須藤 弘通
 あるマゾヒストの手帖から 須藤 弘通
 其頃を語る(一) 新派劇の責め場 須藤 弘通
 文芸に於ける切腹描写 須藤 弘通
 我が告白の断章 須藤 弘通
 第一回読者座談会 松井 簫子 女史を囲んで

〇七月号

口絵 百鬼夜行の凶
 口絵 写真 懐くつわ五郎
 クリスチーナの受難(二) 吾妻 新・訳
 妻は縛らす 岡田 主介
 切腹本願 亀岡 絃七郎
 祭壇に君臨する脚 馬族 弘保
 片耳伝奇 窪村 三郎
 女性緊縛美について 千葉 弘
 囚獄の思い出 獄 取一
 歌舞伎とサジズム 宮内 義雄
 辻番附の話 伊藤 晴雨
 切腹願望 水内 武郎
 変の字問答(第三話) 浮家 鷹三
 礫になつたお姫様 毛利 綾子
 くすくすられるよろこび 山本 百合子
 女囚私刑体験記(二) 小坂 多美枝
 私の主眼 岡田 咲子
 新しいサディズム 吾妻 新

〇八月号

口絵 戦前戦後の挿繪に現れたる責め
 及縛り繪 村田 誠一
 鞭打たれる外国の少女たち

口絵 写真 被縛女体の研究 辻村 隆

色狼 児島 晴光
 明治期の被縛画家 伊藤 雨
 アーヌスへの讃歌 住田 英一
 苦悶する裸像 福田 志
 悦慮秘帖 信太 葵子
 クリスチーナの受難(三) 吾妻 新・訳
 公妃の復讐 沼 正三・訳
 被虐の愛情 若林 啓子
 甘美なるアリスの降伏 寒川 緑
 アブノーマル・プレイ 獄 取一
 手記妻は縛らす(二) 岡田 主介
 らぶ・すれいぶ(第八回) 鬼山 紬策
 女のズボンについて 吾妻 新
 古川裕子さんへ与える 佐治 須十
 ある被虐性愛者の手記より 天泥 盛栄
 夫婦愛の表現法と裸女緊縛 西沢 芳造

〇九月号 特集倒錯の告白〇

口絵 本紙の旧号に現れた責め 辻村 隆
 炙をすえられる女 南川 和子
 口絵 写真 縛られた女の美しさ 辻村 隆
 折込写真 緊縛美のオンパレード
 鞭うたれる外国の少女達 吾妻 新
 切腹願望と女性心理 中康 弘通
 繪巻板の咄 伊藤 晴雨
 淫火(第九回) 松井 簫子
 京子の生活と意見から 羽村 京子
 両棲動物(男色夜話) 岡真 史郎
 あるマゾヒストの手帖から(四) 沼 正三

神風連と大東塾 中康 弘通
 縛られた女ばかりの座談会 川端 多奈子
 幸福なる隷属の告白 鐘坊 巡
 黒のハイヒール 須野 眉美
 我が告白の断章(四) 須藤 弘通
 私は何故責め繪を描くか 鬼山 紬策
 らぶ・すれいぶ(第九回) 鬼山 紬策

燃ゆる緋華栗 川合伊都子

められた記
 秘手 愛と憎しみ 中川 秀夫
 邦人女性受難事件 越宮 四郎
 責めの自画像 森山 美歌
 続・悩ましのサディズム 寒川 緑
 甘美なるアリスの降伏(2) 寒川 緑

〇十月号

口絵 安達ヶ原一つ家の凶 月岡 芳年
 針に刺された女 南川 和子
 戦前に現れた責め繪 情女地獄 繪
 東西風俗画報襲う男と襲われる女
 体操倉庫 瀧野 子
 瀕死の白鳥 塚本 鉄三・撮影
 写真 野外的責め場 塚本 鉄三・撮影
 現代のサジズム 久留木 栄
 私のおび 近岡 咲子
 聖画の誘惑 鬼山 紬策
 らぶ・すれいぶ(第十回) 鬼山 紬策
 る記 愛情の絆 北野 由紀
 るの記 孤獨な放浪記 小島 達也
 るの記 奇妙な告白 水上 流太郎
 偽告白 サジズムの芽生え 白石 模夫
 大阪陸軍幼年学校 白石 模夫
 或る被虐性愛者の手記より(二) 天泥 盛栄
 呪縛動物(二) 辻村 隆
 両棲動物(二) 岡真 史郎
 蜘蛛と蝶々 飛田 良二
 哀艶責め場繪 岩村 恵子
 マダム紅鶴 前島 芳雄
 虐待の記録 松井 簫子
 淫火(第十回) 伊藤 晴雨
 責め場の舞台装置法 寒川 緑
 あるマゾヒストの手帖から(五) 沼 正三
 甘美なるアリスの降伏(三) 寒川 緑
 悦慮に哭く 川端 多奈子
 痴者の悲願 河真 田子路

美 姫 情 史

亀 岡 絃 七 郎

サディズムとマゾヒズムは往々にして、一人の人間の中に併存する事がある。それは事新しく述べる迄もなく、歴史の上に存在した事を、一日古本屋で見付けた写本が物語っている。縁がよれ題箋もさだかでない反故同然の其の写本を、こゝにお伝えしたい。美しい姫への慕情故に欣然と死に就く少年達のマゾヒスチックな陶醉と、流血に嬌羞するサディスチックな美姫の艶姿は妖麗な絵巻物であるし、その姫の最後も亦哀れに美しい。語り手は、ヒロイン昌姫の側近く仕えた侍女深雪、ということになっている。

弱いものが強いものに攻め滅され、血縁姻戚何のその、何んな手だてを廻らしても、勝

ち抜き生き抜くのが戦国の世の男の道、とは妾も存じて居ります。なれど、殺し殺される殿方は何れ納得づくしうけれど、その度に泣きを見る女の身は、何と儚ないものでしようか。妾が頼うだお方の昌姫さまにしてもこうも人の心の荒み果てた世の中でさえなくば、短かくとも幸多い生涯をお送り遊ばしたであらうものを、憂い一生に淫奔者よと名を辱かしめなされたものとは云えば、皆お父君お兄君の浅慮ゆえと存じます。

お家御一統の内でも一と際目立つ器量者の修理様が、再従妹に当る昌姫さまとのお芽出度は、是ほど似合いの御縁は無かろうと、下々までお歡び申上ぐぬ者として無い程で。

白哲長身と云う言葉は、まこと修理様の為

にあるのかと思える美丈夫ぶり、家老のなにかし殿が御子息も、姫に御執心と聞かぬでもなかつたのですが、何んな殿方でも修理様に及ぶく方は有りませぬ。戦にお強く情にお優しい殿御の中殿御とも、……昌姫さまが亦、牡丹の高貴と百合の清浄とを兼ねられたような、本当にお側仕えの妾まで仄々と心楽しい御盛儀でござりましたものを……

お閨のお次に控えて居りますと、お慎みなさる中にも、

「戦なら誰にも遅れぬわしも、其方には……」殿のお言葉です。姫もお声を忍ばせて、「世の中に女と生れた甲斐は、此の殿御を、と年月思うて居りました」

やがて暫しの後、含み笑う姫のみ声も微か

に聞えます。妾ども、思わず汗ばんだ膝を崩し、よかつた、と心中にくり返しました。

けれど、花に嵐とかの譬え、一年経つや、経たずに西の国との戦が始まり、最初は威勢よかつたお味方も、北の国から攻め寄せて来るに及んで、何うにも勝つ目算が無うなりました。後で判つた事です、姫を賜れぬ口惜しさに、家老なにがし殿が密かに内通していた故、する事なす事皆が敵に知れていたという訳、半年後には止むなく和睦と極まりました。その条件には、お味方数多部将の有る中で最も器量秀れた修理様に、腹切らせよ、との使者が参りました。是もなにがし殿の策略で恋の怨みと、お家乗取りを狙う心から、敵將に進言したのでしよう。

部将の概ねは反対でしたが、何分大殿様御父子が既に戦う氣も失くされた事とて、翌日催促に來た使者に、修理様も御列座の上でお受けになりました。其の夜、此方のお館では老女の高枝様始め憂いに沈み涙がちの中にも姫のお歎きはまた一入、当の修理様お一人が平常に変わぬ御物腰は、流石と一層惜しまれるのでした。

最後のお睦みも、姫は泣いてお出での氣配と、修理様のお声でした。

「さ、此方をお向き、此の家の武運も一兩年の内と見えた。なまじ乱軍に雑兵の手にかゝるより、明日の晴れが好ましいわ。首化粧は其方に頼んだぞ」

首化粧と申しますのは、城中の女の役目です。いつもは敵の首を美しく整えて、首実檢に備えるのですが、我が首の化粧を姫に言い付けなされる修理様の深い覚悟のお言葉に、姫の咽びながらのお応えは、聞き取れませんでした。然し、

「ならぬ」

と一言、殿のお声がしましたのは、姫が「お供を」とおつしやつたのではないかと、妾は、姫いたわしさに泣きました。

「明日は見事切つて見せる此の腹も、今宵一夜は其方を楽しませるためのもの、さ」

低い殿のお声は、優しいお誘いと覚えて今はたゞ夜明けの一時も遅かれとお祈り申し上げたのでした。

明くれば天正壬午の年、八月二十二日辰の刻、城内大広間に敵方検使を迎えて、修理様はお腹を召されました。姫は、強つてお見送りしたいと、大殿様の下座にお着きです。

万一御自害もと、高枝様は若侍二人をお側にお付けして、その背後でお見送りなさいま

したが、妾は恐ろしさと、お傷わしさに、お館に引きこもつて居りました。

修理様は切先三寸許り残して布で巻いた脇差を右手に、しばし寛げたお腹を左手に撫でつゝ瞑目なさいましたが、やがて、くわツと開いた瞳を、ひたと姫にお付けなされたまゝ刃を左の脇深く突刺し、一文字に掻切りなさいました。見る／＼血が噴き出し、流石に、端麗なお顔にも苦しげな青筋が見えましたとか。それでも一旦引抜いた刀を鳩尾に突込み一息に臍の下まで切下げ、お見事な御最期だつたと申します。

姫は蒼ざめながらも氣丈に、最後迄嘖めてお出でになりましたが、首化粧の時、始めて御落涙なされたとの事でした。

こうして姫は一年ほどでお独りにおなりでした。修理様お側仕えの人々は概ね他の御兄弟の許に参られました。然し姫の万一の御覚悟を慮り、一切の刃物を女どもから取上げられましたので、修理様乳人子の藤若と申す者の外、小姓など数人が御守護を兼ねて御館に残ることになったのです。

藤若は未だ元服前、十四才の美童でした。亡き殿由縁の者でもあり、姫は、御寝所の向

うの小間に藤若を夜の番におかれました。

妾どもお次の間に控える者は何も存じ上げなかつたのですが、姫が可愛さの余り藤若を添い臥しさせなされたのは、それから間もなくの事だつたようです。始めて気付きましたのは、ある晩秋の夜更け、姫のすゝり泣きの他に、忍びに忍んで細い声ながら、男の声が聞えたからです。思わず怪しからぬことでもと襖越しに

「何かお障りでござりましょうか」

とお呼びかけすると、びたと静かになり、衣ずれと確かに襖の動く音して、

「深雪か何故やら胸が詰つて、うなされていたような」

いつに変わぬお声でした。まさか、と思うものの一方、藤若をお可愛いがりになろうとも、それは修理様をお慕いなさる御一心からで貴いお肌を賜わるようなことは、よも有るまい。弟御を持たれたようなお氣持故と解して居りました。あとから考えますとそれは半ば當つていたような、外れていたような。

それから三日目、また妾は夜中に目覚めました。同じことです。妾はいよゝゝ妾の想像に確信を持ち、妾一人の秘密にしておこうと心の中でお誓いしたのです。

ところで妙なもので、そうと気付くと、どういうものか、それから毎夜、同じ刻限になると眼が覚めます。静まり返つた城内のことですから、お館内の何んなに微かな物音でも

夜更の耳には伝わるのでした。姫のすゝり泣きと聞いたのは、絶え／＼にあゝ、と呻かれるお声でした。

「お方さま」
そう時折呟くように口にしながら、荒い息づかいが洩れ聞えるのは、藤若のようでした

姫と修理様との、浅かつた契りを思い、妾は無理からぬことと思うだけに一層、誰にも知れねばよいが、とお案じ申しました。

然し、一と月二た月と経つ内に、姫は、お物語や琴、三絃のお遊びなどに興じられる昼の間も、藤若をお側からお離しにはなりません。藤若の美貌にも、氣のせいか少しづつ窠れが見え、姫をお見上げる其の瞳にも、なつかしさとも苦しさとも付かない、何か切なげな翳が射すのです。

何と言つても未だ十四才の少年のことですから、人前だとして感情を隠し切れないのでしよう。高枝様もお二人のただならぬ御様子に氣付かれた風でしたが、悪いことに侍女の中でも、家老なにがし殿の縁者が有りました。

いわば其の女は隠し目付のような役割だつたのでしよう。

其の夜、妾は珍らしく睡り込んで、何も氣付かなかつたのですが、不意に姫の御寝所から廊下の方へ踏み出す足音、慌てゝ逃げ走るらしい氣配、続いて、今は跳び起きた妾の耳に、突かれるか斬られるかしたらしい悲鳴。

妾が廊下へ出た時は、もう、楓といった其の侍女は、藤若に脇腹深く剝られて、息絶えて居りました。

何うすると云う考えもまとまらぬ内に、夜が明けるなり、お城の本丸から侍が参りました。高枝様がお会いになりましたが、話は意外に重大だつたのです。

楓の報告で、姫と藤若のお戯れは既に知れ渡つている模様、その上楓を大奥にて召使われるから即時ひまを貰いたい、ということでした。

高枝様は御使者を待たせて姫に言上なさいました。忽ち姫のみ氣色は変わり、

「わたしが何をしたと云うのであろう。たゞ可愛ゆいばかりに添い臥させたばかり、未だ子供では無いか」

ひどいお腹立ちでした。然し楓の件は、生き返らせでもせぬ限り、何うにもなりません。するとお側の藤若が、蒼ざめた顔を姫に向け

ました。

「お方さま、わたくし一人死ねば万事収まります。何卒今生のおいとま賜わりませ」

血を吐くような悲痛な声音でした。

此の一言を聞いた時、妾は早合点してしまいました。藤若が、

自身姫のお戯れに誘われるまゝ、道ならぬ振舞を仕出かした悔いに、身を責めているのだと思つたのです。

高枝様にもよい思案はなく、姫はと見れば、やはり蒼ざめたお顔にお涙さえ浮かべられじつと藤若を見つめて居られました

結局、藤若が邪

恋に狂い、なびかぬ楓を斬殺して切腹を仰付かった。ということにして万事を収めること

になりました。

使者の侍も一応それで事を収めたかつたのでしよう。役目から藤若の切腹に立会うことになりました。

早速湯浴みした藤若は、

姫のお望みで、姫のお居間に面した庭先で、切腹しました。立会いの侍を招く前に、藤若はお別れにお居間に参りました。妾の居るのにも、もう気にならぬ様子で、

「お方さま、殿のお供致すべきを、生き永えたがよかつたか悪かつたか藤若は苦しいござりました。もう少し生きていたら、お方さまに何んなことをしたろうかと、恐ろしいのでござりまする。今

一度、お手を……」

無言で姫の差出されたお手を、両掌の内に握り込めて身悶えする藤若の頬には、羞恥と歎きの血が仄々と射していました。

姫を最後までお慕いする藤若の、哀れな心根に、妾は涙を止められませんでした。

姫も頬を微かに染めていなさいます。

やがて庭に下りた藤若の表情には、目前に死を招きよせる人のようでない、明るい寧ろ快よげなものがありました。

藤若が雪のように白い腹を切り裂いて行く間、妾は傷ましさに正視出来ませんでした。が姫はと見ると、美しい瞳を瞬きもせず藤若の手もとにお向けになり、白桃のような頬が次第に紅潮して行くではありませんか。

極く短かい時間なのですが。然し、脂汗が額や、背、腋に滲むほど苦しい時間が経ち藤若が息絶えても、姫は、酔うような、幻を追うような瞳を据えて、芝草に漣ぎ流れる血の色を、瞞めておいでになりました。

その夜、姫は妾をお呼びになり、「其方は早うから疑つていたであらう」と仰せです。妾は黙つて差し俯向いて居りました。



「哀れなは藤若、わたしは最後まで肌を許しはせなんだ、あれの指がわたしを慰めていてくれただけのこと、わたしはあれを慰めてやろうともせなんだ。それをまるで不義のように見る。わたしを思う男は皆、死なねばならぬ定めであるうか。あの時わたしに、修理様のお供をさせておいたなら、父上も兄上もこんな心配は無かつたであらう。」

沈痛なお言葉の末に、お返りごとも出来ずにいる妾の耳に、氷のような鋭く冷たいお笑い声が、ひびいて参つたのです。

「ほほほ、ほゝゝゝ、わたしが死ぬ迄、安心は出来ぬであらう、ほゝゝゝ」

驚きと恐れに、妾は身内が震えて居りました。そして、藤若への哀れも、一段と増さる思いでした。

漸く蕾の年頃で、藤若は奥深い陶醉に浸りなされる、お美しい姫のお体を眼に見ながら恐れ多さに体をお合せすることならず、じりじりと兆して来る慾情を、独り処理していたのでしよう。あの毎夜の荒い息づかいは、己れを抑える苦しさ、不自然な歓びの切なさ故の哀しい喘ぎだつたのです。

姫の御乱行はそれから始まりました。藤若の次には、お小姓だつた市之丞、未だ

十六になつたばかりの少年がお閨に召されたのです。

夜毎、激しい痛みに耐えるような市之丞の呻き、微かな姫の含み笑いのお声、そして、一刻も続いた頃には、

「一そ、一と思ひにお殺しなされませ、何とむごい」

と市之丞が、それでも深夜なれば辺りを憚る低声で訴えるのです。

然しそれも半ばで、強くお抱き遊ばすのか、または、お責め遊ばすのか、

「むツ」

と口ごもり、やがて静かになります。

妾は、また仮睡に入るのでした。

少年の、ふつくらと若々しい、というより何処か稚い頬に、次第に翳が射し、眉根には淡青く静脈が透けて、生々しい唇の赤さが、女にも見られないほどの妖しい艶めかしさです。

姫は亦、一層お美しく豊かな表情で、夜毎あんなに、何をなさつてかは存じませんが、少年を虐めてお戯れのお方とは思ひもよりません。

一と月ほど続きました。ひし／＼と夜寒の衾に迫る夜更けでした。

例のように市之丞の呻きが聞えて参りますすると突然

「お方さま」

と何時にない、はつきりした市之丞の声です。

「一生の思い出に、たゞ一度……、此の苦しき切なさには、明日にも命をお召し下されましても、悔は無い一期の願ひ」

しんとした部屋から姫の艶やかなお声で、

「其方、まこと死にやるか」

「はい、喜んで……」

妾は恐ろしさに衾を引つ被りました。姫のお氣持も計り兼ね、襖一重向うでの御所行も是以上は耳にしたくないのです。

翌朝、びつしり降りた霜の庭に、市之丞は端座しました。

冥げた市之丞の肌には、まあ何うでしょうさゝらのような掻き傷が、脇から腹にかけて一面の血腫れです。刃を腹に突き刺した苦痛を詠えつゝ、市之丞が姫に送つた微笑は、妾の眼に今も焼き付いて居ります。姫は、憑かれたような瞳を、市之丞から最後までお逸らしにはなりませんでした。

こうして次々と、美しいお小姓達は、夜毎姫のお慰みの末に、自分を抑え兼ねて、やが

て一夜のお肌を命がけで味つては、快く死んで行くのでした。そして姫は其の度に、苦痛に耐えて血を迸らす少年達の悲愴な姿に、酔うような御眼差をお向けになるのでした。

妾どもは、最早や、揖を失つて急流を矢のように奔る舟に乗っているような、恐怖と戦慄の毎日でした。大殿様のお耳に何れ入っていることでしょうか、どんな災いが姫に振りかゝるか、予想出来ないでは無かつたのです。皆が深い憂いに沈む中で、姫お一人が、惨い亡びにお耽りだつたのです。

年が明けて、いよいよ最後の一人、妾女と云う是も十六の少年が召されました。他の少年同様、何れは死なねばならぬと知つていながら、お召しを受けた時の妾女の悦びは何うだつたでしょう。むしろ一番お了いだつたことが不服だつたような氣配さえ見えました。

姫には、そんなにも妖しく少年達の心を捉える、お美しさがあつたのでしょね。

然し正月の二十二日、月こそ変れ修理様の御命日、遂に破滅の使者が参つたのです。

姫の御許に、黒塗の箱が届けられたのは其の早朝、そして御引見なされた使者の口上は妾どもの顔色を失わせました。

「中身をお改めの上は、今日中に、とのおい

つけでござりました」

然し、姫は待ち兼ねていた贈物のように、平然と紐を解き蓋をお払いになりました。一口の懷劍が入つていたのです。再度蓋をな

さつた姫は、快よげに微笑まれて、
「待つて居りました。必ず、とお返りでと、
伝えるように、御苦勞でした」

その言葉には、却つて使いの者が蒼ざめた程の、厳しさと明るさが有りました。

間もなくお湯殿で、姫のお体を清めて差上げながら、涙が溢れて仕方がありませんでした。今も、牡丹の高貴と百合の清純を兼ね具えていらつしやる姫が、お自ら刃に伏してお果てなさねばならぬ、運命の酷さに泣けるのです。悲しみに心も漫な妾に、

「何を泣くの、こんな嬉しい日に」

と優しいお言葉です。内心、夜な／＼美童を責め苛んで居られた姫と、同じお方とは思えぬ御様子に、何方が姫の本心か計り兼ねつゝも、妾は、

「お供お許し下さりませ」

と、おみ足に縋つたまゝお願い致しました

「いゝえ、なりますぬ。高枝にも申付けましたが、左様な者は主従の縁を切ります。修理

様と二人になりたい」

あとは冗談めかしてお笑ひでしたが、妾は耐え切れず、お湯殿の床に泣き伏してしまいました。

やがて黒髪を梳り、薄化粧に襦袢姿も優雅な姫は、懷劍を胸に、独りお仏間へ入つて行かれました。しばし墨を磨り流し何かお認めのような氣配、間もなくお次で耳をすます妾共の耳に、お声がしめやかに聞えて参りました。

「修理様、今日たゞ今、昌もおそばへ参れま

する」
妾は身も心も消え入るばかりのお傷わしさに固くなりました。

微かな衣ずれの音が止み、

「うつ」

低い呻きのお声、苦しげな吐息。身も世もあらぬ思いの数瞬がすぎ、また静かになりました。

お亡骸を納めまつらうと、お仏間へ入つた時、襦袢を傍らの文机に脱ぎかけ、白綾の小袖一つで、姫は俯伏して居られました。血汐がお体の下に溢れるばかりです。

お抱き起し申上げたとき、高枝様も妾も思わず「あッ」と驚きの声を止められませんでした

した。

あの、修理様の晴れの御最期そのまゝに、
姫は懐剣で、雪のように白いお腹を一面の血
に染めて、流石女の身だしなみ、浅くはあり
ましたが見事十文字にお切り遊ばしていたの
です。

御遺書にも、「一つには修理さまをお慕い
するよすが、一つには罪亡ぼし」と、女性の
身で御切腹なさいました理由を、お書きにな

つていられたとか。

姫にふさわしい御最期でござりました。

妾は其の夜お暇を頂き、その足で仏門に入
りました。星の美しい夜で、城のお天守を仰
ぎつゝ今ごろは修理様も昌姫様も、数多い星
の一つにおなり遊ばして、術策も野望も無い
平和な御境地であろうと、お思い申上げたの
でござります。

お城が亡び失せますまで、半年も経たなか
つた、と覚えて居ります。

何も彼も興つては亡び、亡びては興る人の
世に、ただ一つ変らぬものは美しい思出、そ
の思出の中にも美しい、姫の面影は、御最期
の模様に至るまで、妾は忘れることがござり
ますまい。

あるマゾヒストの手帖から

沼

正 三

第三十五 犬にされた將軍

本誌の読者たるマゾヒストであれば、少くとも既刊のマゾツホ小
説はとうに目を通しておられるであらう。とすれば、ここに書く丈
無駄になるかも知れないが、前項でマリアンスがエドモンに犬の芸

をさせようとする所を写した時思い出したマゾツホ小説中の情景を
次に摘録しよう。本邦に未紹介のものなら別に訳出するが、そうで
ないから、「手帖」の一項目にする位が丁度適当であらう。三冊あ
るロシア宮廷譚中の一編で、木村毅氏が英訳から重訳して、戦前には
「求愛術」、戦後は「マゾツホ情艶小説集」として刊行された小説

集の中に「前哨に立つ女」と題されて載っている作品中の場面である。

エカテリナ二世の治下、トルコとの戦争中、ポテムキン元帥麾下の女連隊長として活躍したイワン・サルチコフ伯爵夫人の話である。彼女は緑の乗馬服を着、すらりとした背の高い、なやかな肉感的な体つきの明るい金髪の捲毛の麗人で、猛獣をならしつけ、男性を駕御するタイプの女性である。

ある時トルコ軍から軍使として、貴族にして部隊長であるサカルドチパシヤがやつてくる。そして彼女と交渉するが、彼女の美しさに、「あ

なたを捕虜にして自分の後宮に入れ手活の花としたい。」という。彼女はこれに対して、「私もあなたを捕虜にしたいわ、捕虜にしたら犬にして鎖で繋いでやるわよ!」と答える。そしてその夜部下をして偽ってパシヤに降参させ、伯爵夫人の軍は今夜酒に酔って寝込んでいるから、夜襲すれば彼女を生捕りに出来るとそそのかさせる。パシヤは好き心を起してロシヤ陣地に入り、逆に捕虜にされてしまう。夫人は「今晚たとえ吠える稽古をおし、明日は約束通り鎖に繋いでやるから。」と嘲弄する。

「私はあなたの奴隷です。」とパシヤは地べたに顔をつけてドレスの裾に接吻するが、夫人は憐れみの色を見せない、夜が明けると彼女は自分の幕舎の前に犬小舎を作らせ、パシヤは鎖でそこに繋がれる



その夜、彼女はポテムキン元帥の愛妾達や自分の部下の士官達を幕舎に招いて宴会をする。その中夫人は余興に彼女の犬即ち囚われのパシヤを吠えさせてみようと思いつく。従卒をやつて命じたがパシヤは吠えようとしない。そこで「彼奴とわたしとどちらが主人か思い知らせてやるわ、」と夫人は立上る。美人達も、「それがいいわ、無理にも吠えさせようじゃありませんか。」と笑いさざめきながら、幕舎の外にぞろぞろと出て来て、パシヤの犬小舎の周りに、慎しみを忘れてよりたかる。

パシヤの黒い眼は先ずか細くわかやかなポトツキ家令嬢に、次に品がよくてそれでいて情の濃やかそうなギリシヤ美人ツエネイデコロコトニスに、更に粹で優美なモンシグニイに、肉感のこぼれるようなミユンニヒに、候爵夫人ブラニツカに、と転々移つて最後に伯爵夫人ソルチコフの顔に止つた。彼女の表情はひどく残酷そうであつたが、その残酷なところが、いうにいわれぬ位美しくもあり、濃艶でもあつた。

「お前は吠えるかい、わたしのわんわん?」こう伯爵夫人が静かにきくと、他の美人達は声高に笑い出した。パシヤは首を振つた。「わたしだつたら」とポトツカが、その眼に一種の悪魔的な表情を浮べていつた。「うんと鞭つてやるわ。いうことをきくまでぶちの

めしてやるわ。」

「ほんとにそれがよさそうね。」と伯爵夫人は答えて、すぐに彼女の鞭を持つて来た。鞭の用意というものは、実に十八世紀のロシアの上流夫人にはなくてはかなわぬ身だしなみの一つでさえあった。

「わたしのわんわん、どうしても吠えないのなら、死ぬ迄これでぶつわよ！」伯爵夫人は無慈悲な顔でこう叫んだ。そこでサカルドチパシヤは遂に彼の忌わしき運命に屈服した。

原文は、このあとすぐに、「残忍にして美しき女達は犬吠えを真似るトルコ人を繞つて笑い興じた。」と続けて、この場面を終つてゐる。だが、残酷な貴婦人達が、囚われのパシヤを凌辱して快とするにあつて、犬吠えをさせる丈に止まつたとは到底思えない。彼女達を制肘するものは何もなかつたのだから。そこで、右の文章のあとに次の数節が続く海賊版を紹介しても誰も不自然を感じはしないであらう。

一しきり犬吠えの真似が続いた。

「もつと外の芸もさせてごらんよ。」とツエネイデ・コロコトニス伯爵夫人に云つた。

「そうね。」と彼女は答え、直ちにパシヤに向つて、きびしい口調で命じた。「わんわん、この貴婦人の靴をお舐め！」

ギリシヤ美人は心得て一歩進むと、腹這つてゐるパシヤの眼の前に、怖れ気もなく片足を突き出した。然しこの度もパシヤは先ず抵抗した。彼は動かかなかつた。夫人はもう一度命じたが無駄だつた。「わたしに恥をかかせる気だね！」鞭でビュツと空気を切りさきながら伯爵夫人は焦立つて叫んだ。「ぶちころされたいのかい！」

無慈悲な一撃がうなじに加えられた。生れてから本当の鞭の味を味わつたことのないパシヤに対しては、それはあらゆる躊躇を抛たせるに足る怖ろしい痛さであつた。彼は慌てて差しのべられた片足に顔を寄せてべろべろと靴を舐め初めた。その突然の卑屈さに美女達は思わず笑い出した。

「一発で馴らしつけちやつたわね。」とブラニツカが楽しそうに叫んだ。がすぐいうことをきかず鞭を使わねばならなかつたことで誇りを傷けられたように感じて、パシヤに対して憤つた伯爵夫人は、ツエネイデの靴を舐めてゐるパシヤを見ながら、彼が本当に馴らしつけられたかどうかをテストする必要を感じた。彼女は従卒を呼んで、彼女が昼間戦場で穿いていて帰營後脱ぎ棄てた乗馬靴がまだ手入れされてないことを確かめてからこれを取寄せた。丁度その時ツエネイデが片足を引いた。

「靴の味はどう、わんわん？」と伯爵夫人は嘲つた。「これからお客様の前でお前から恥をかかされないようにするために、お前にもつとよく靴の味を教えて置くことにしようね。そこで」彼女は言葉を切ると、従卒に向つて顎で差図して彼女の靴をパシヤの前に置かせた。磨き立てられたツエネイデの婦人靴と異り、戦場の埃にまみれ、底は泥だらけの乗馬靴であつた。

「今日からお前をわたしの靴係りに任命しよう」夫人に嘲弄たつぷりの皮肉な微笑を見せて言葉を続けた。「尤も靴墨で磨くのは従卒がする、お前は泥を落すのよ。ブラシで埃を払うところを舌で舐めてお取り。底の泥をへずり落す篋の代りにお前の歯をお使い。分つたかい。わたしのわんわん。口丈しか使えないんだよ。手は靴が動かないようにおさえることのほか使つちやいけないよ。犬は犬らし



くしなけりや。そうやつて毎日仕込まれればじきに、靴を見たらとびついてゆく位好きになつて、二度と私に恥をかかさないうさあ、早速やつてごらん……お舐め！」

今は全く征服せられたパシヤは、この度は鞭をまたずに、命ぜられた作業を始めた。残忍にして美しい女たちは、長靴の底の泥を噛る男の姿に又暫らくは笑いこけたが、そろ／＼飽きて来た。伯爵夫人は従卒に鞭を渡して、彼女の犬が手を使わないように監視を命ずると、幕舎の中へ皆で揃つて姿を消した。

やがて中からは貴婦人達の嬌声が洩れて来た。カルタ遊びやダンスに興ずる彼女達は、もう幕舎の外での余興は忘れていた。犬吠えさせたのはもともと退屈凌ぎの慰みに過ぎなかつたのだし、そして

たとえ動物愛護会の婦人会長であつても、煖炉の傍でカルタ遊びをする時、外の犬小屋に愛犬のいることを念頭に置いているものではないのだ。パシヤに作業を命じた当のソルチコフ伯爵夫人すらも彼のことをすっかり忘れて、士官の一人と踊つていた。外では、忘れられた犬、この東洋人の将軍が、従卒に鞭で見張られつつ、黙々として、彼女の靴を舐めていた。戦場の夜は静かに更けていった。

第三十六 返事(その一)

熊よ！お前は服従を誓うのだね、そして高貴な女主人に懇願するのだね、どうか私奴を卑しめ隷属させて下さいませ、意志というものを持たぬ道具にまで、獣にまで私奴を卑しめて下さいませ！とあゝ、お前そんなことを頼む必要はなかつたのだよ、何故つて私がお前を初めて見た時に、もう私には、お前をどんなことに使つてやるのがよいか分つたのだもの。私が望むことはそのまゝ、お前にとつては命令でなけりやならないのよ。私の望みに従うことをお前が拒んだつて、私はお前の意志を無視して強制的にお前を私の望み通りのものにしてしまふわ。お前の体格は肩が広くてかつちりしているし、歩きぶりものつしのつしと力がありそうね！私はお前が熊の毛皮を着て、頸に鎖をつけて、私の前に出て来るのを見たいわ。そうすりや全く堂々たる獣だわ！

まあ、私の手からお砂糖を食べる様の何てよく懐いて馴れてることね。女主人の手で撫でられて何て心地よさそうに逆毛を立ててることね。けれども又女主人の怒りに遇つて、その目差に頼またさしえ出し、怖がつて這い縮こまつた様子たらないわね。私の見物して

る前で、私達の慰みに、ハモニカの音に合せながら優美に身体を揺つたり踊つたりしようとして、何と苦勞してることだろう。そして又一生懸命唸つたり吠えたりして歌の節廻しを真似しようとする様（さま）つたら！

おゝ、熊よ。お前を飼つてることを私が人に自慢するほどのそんな動物にお前おなりよ。何時でも私が命ずる時に、何んな風にも私の命じた通りになるのだよ。夜は私の寝台の足許で、寝台の柱に鎖で繋がれてお休み、そしてお前の主人の夢を守つて番をおしよ。お前忠実な見張番になるわね、そうすればお前が見張つてゐる間誰も私の所によろ近ずいて来ないものね。ほら、あの女丈夫ヒヨルデイスの話でも、熊が一匹忠実に仕えて女主人を命がけで守るじやないか。私がお前に飽き／＼して不機嫌になつてお前を蹴るとお前がその足を舐めたり、私が生きた熊の毛皮の上で一休みしようかなと思えば、お前が地面に身を横えたり、そんな風な仕え方を私はして欲しいのよ。

熊よ。お前が私の家に足を踏み入れた瞬間から、お前は私の所有物なのだよ、そして何事が起つても私の力からお前を解放することはできないんだよ。

「マゾヒストの手紙」を既に二通紹介したので、今度はその相手の女主人からマゾヒストへの手紙（今後は便宜上これを「返事」と称して両者を区別してゆこう）を訳して見た「人にして畜生」なるマゾヒズム理想を前項、前々項に扱つたので、この「返事」も調子を合せて、マゾヒストを熊扱いする内容のものを選んだ。

この訳は実をいうと失敗である。原文はもつとずつと激しい口調

であつて、「熊よ！」という呼掛けとマツチしているのであるが、これはどうしても男の口調でないと訳せない。女の口調にすると、ここに示したような優しい言方になつてしまふ。これでは「熊さん！」でないマツチしないようである。（がこの程度でも、今迄の「手紙」に比して、ずつと文脈文法を無視した意識をやつてゐるのである）

「手紙」ではすべて「貴女」Sie と呼びかけられたのに反し、「返事」ではすべて「お前」Du と呼びかけられるのがはつきりした特徴である。拝啓や敬具にあたる語もなく、文全体も短いのが多い本例では相手を熊として語りかけてゐる。こういう女性のいる西欧の性的風土を羨ましく思うマゾヒスト諸君は少くないであらう。ヒヨルデイス（Hjordis）という女性については私は知らない。御存じの方は教示されたい。尚前にドミナ（第五）の項で紹介した Hoc volo, sic inbec. を踏まえた文句があるのに気づかれただらうか。

（未完）

〔読者通信〕

岐阜のHN兄、小生と完全に同じ傾向の方が身近におられる事を知り非常に嬉しく思つてゐます。小生も嶽取一氏の作品を最も好む一人です。小生は当年二十五才、独身のサラリーマンです。是非貴兄とお近付きになりたいと思ひます。お便りお待ちしております。（名古屋 加藤）

○西成局区の白井氏へ、是非習作を送り下さい。
○岡田芳夫、アイディア及び御意見有難く参考になりました。
○橋芳子様、愛川晃子様、お二人へ中康弘道氏のお呼び掛けがありますから御連絡下さいませ
○妾へのお便り有難うございました。

（編集部 家原文子）

四月号の告白で何んとなく切腹の事を多く書いてしまいましたので遂に切腹願望の女になつてしまつたようですが、わたしはむしろ縛られる方により強く惹かれるようです。磔になつてみたいアとも思います。が、八月号の告白記を書いた頃までは自身を極度の現実的マゾヒストであると思ひ込んでいたんですけど、中康様の心理分析によつて私はむしろナルチストであり、自分で深く悩んでいるような現実的嗜被虐症のものではなく、単なる空想マゾヒズムを愛する型であることを自覚したのです。

これはわたしにとつて驚くべきことでした。そういえばわたしはこれまで自分の身体を傷つけるほどのひどいことをしたことは一度もなく、只幻想の世界にのみ遊んでいたのです。私は何も知らずに自分は救いがたい変態性の女なのだと独り悩み続けていたことになりました。自分の本当の性質を自覚した時、わたしはなんて馬鹿な女なのかと呆れてしまいました。

私の自己分析

羽村京子さんの告白に刺戟されて、無我

夢中で女だてらに自分の性格の底の底まで恥しいことを打明けてしまつた、なんてことをしてしまつたのだろうと痛切に後悔しました。そうしてその時はもうこれ限り心身共に健康な日々を送ろうと決心したのです。もうどなたにもお手紙も出さまい。これまでたまつていた雑誌も全部お風呂のた

ながら。

然し、自分の性格をあからさまにしたことに対しては深い悔を持つて居ります。私は空想の花園の中に跳び廻つていた方が無難なのかも知れませんが、現在の私の氣持つてどう説明したらいいのでしょうか。奇クを見たりお手紙を貰つたりする度に此の頃のわたしの心には精神的な負担さえ生じてくるのですが、又一方に於ては

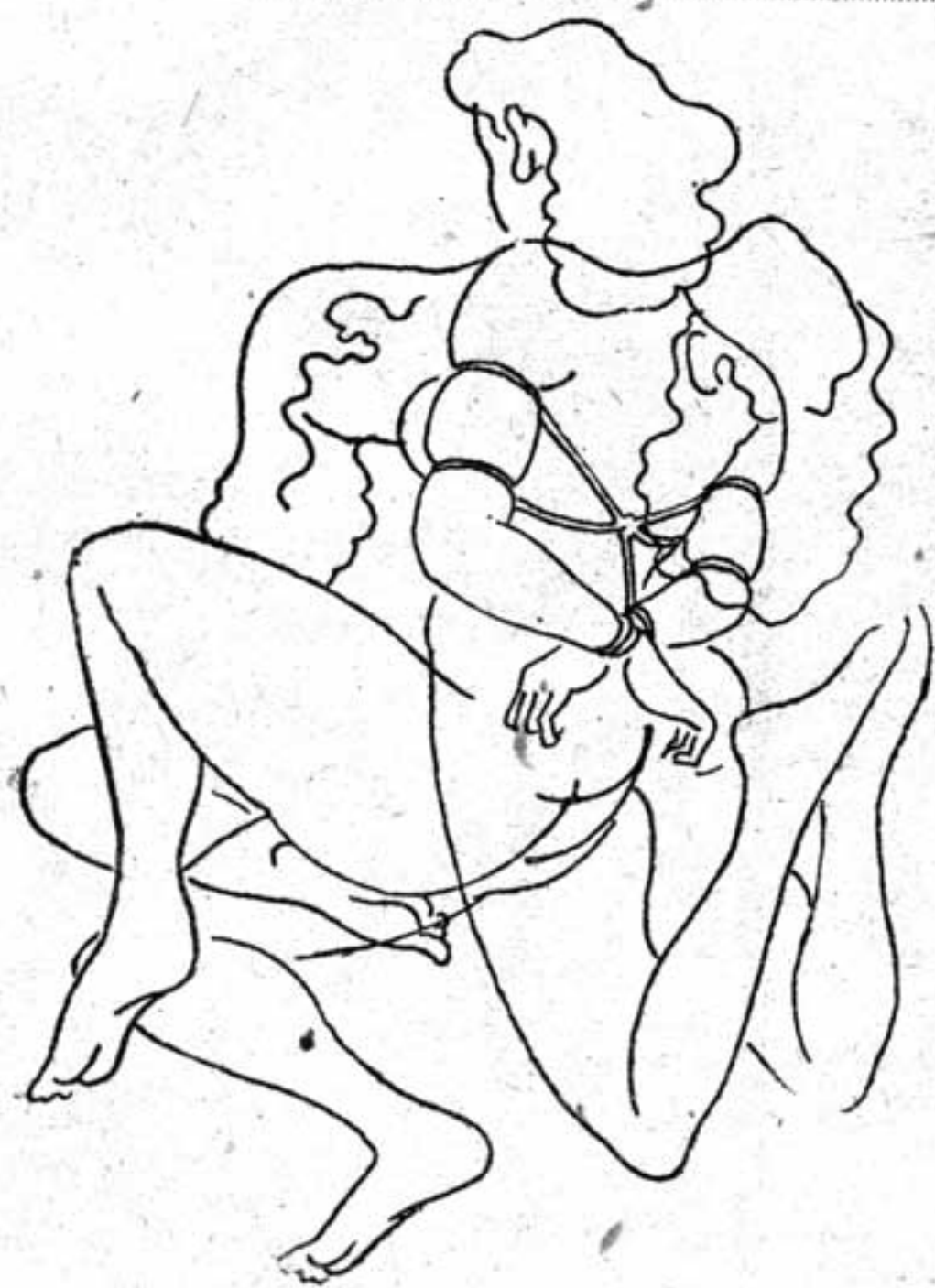
アブノーマルな面に更に強く惹きつけられてゆくのをどうすることも出来ません。平凡な幸福を掴むべきか、それとも美しい悪の華を求むべきか、わたしは一つの分岐点に立つております。

そうして毎夜、わたしの心の隅では、お前の好む妖酒にたつぷり浸つて、心ゆくまでその甘美な味を体験したらいゝじやないか。誰に遠慮することないのだヨ、責めのモデルでも切腹のモデルでも、お前のその立派な身体だつたらすぐにでもなれるじやないか。とそゝのかすのです。

きつけにしていまいました。そうして今迄親しんでいた奇クも八月号限り見ないことに心に固くきめてしまつたのですが、でも、これ程までの決意も日の経つにつれてだん／＼ぐらついて来たのです。そしてこの間、とう／＼浅草の書店で九月号を買つてしまいましたの、理性さえ常に強く持つていれたいんだと自分自身に言いかけ

縛った経験を語る

★ 第四回讀者座談會 ★



日 時 八月二日(日)午後六時
場 所 料亭 カドヤの二階

司會者 辻村 隆

出席者

(敬称略)

垣内 豊三(42) 会社員
木南 要(38) 商店主
川岸 守(30) 工員

本誌側家原文子

司會 今晚はベテランの皆様のお集りを願いましたので、一つ取っておきの秘話を公開して頂きたいものです。

垣内 いや、これは恐れいりました木、私は専ら辻村さんの経験談の聞き役に廻ろうと思つて楽しみにしてきましたのですが。(笑声)

司會 そりやいけませんヨ、特に今日は来て頂く時刻を夕方にしたのも、暑いせいもあります、昼日中ではどうも雰囲気が出たりしないという所から選んだんですから、ビールでも飲みながら忌憚ない所を出して下さい。私も司會者というより一サディスト辻村として打明話を出しますから雑談という恰好でザツクバラに話し合ひましょう。

木南 最近奇譚クラブのやり方をそっくりそのまゝ真似たニセ物が出ていますが、やはり女の責めに興味を持つている人も相当増えてきたんでしょうかね。

辻村 奇譚クラブは昨年の六月号からA判に変えて、こういったアブノーマル傾向の雑誌の先鞭をつけたわけですが、こゝ一年か二年でそう読者が増えたというわけでもないと思います。

垣内 今迄のエロ雑誌が奇譚クラブをそつこく



り真似するという事については何か原因があるんじゃないんですか？

辻村 原因といえば読者対象の関係ではなく御承知の昨年末以来の当局の弾圧ですネ、あれで殆どの軟かい雑誌は潰れたんですが、それらの残党が残つて頑張っている奇譚クラブに活路を求めて、真似をしてきたというのが本当のところでしょう。

木南 すると一概にアブノーマルの傾向を持つ読者が増えたということは云えないわけですか。

辻村 まあそうでしょう。然し一般の軟かい雑誌を好む読者も他の雑誌がなくなつた関係でこちらへ移つてきたという事にあるでしょうね。浮動的な層として——。それにマンネリズムに陥つた編集内容をなんとか打解したいという焦り、それが本誌の好評に便乗して形を真似てきたというわけでしょう。

木南 そういえば他の雑誌でも縛り絵とか責絵を口絵等にぼち／＼載せていますね、私達としては大して興味をそゝられるものでもな

いのですが、やはり自主性の欠除というところですかね。

辻村 本誌を変態雑誌と笑つていた連中が慌て、一夜潰の模倣をするというのは面白い現象です。

垣内 なんと弁解してもその点は争えませんか。一時的な流行といった性質もあるでしょうが、責めの大家の伊藤晴雨さんあたりが見れば却つて苦笑ものでしょうね。

川岸 女の縛りが流行といつてはおかしいですが、比較的一般化してきたということについて奇クあたりの影響も預つて力あることは勿論ですが、その下地としての世相も考える必要があると思いますが。

辻村 それは大いにあります。

川岸 私は戦争中、警務要員として南方へ派遣されていまして相当／＼の拷問等を見てきました。が戦中戦後を通じて現在はそのいつた傾向を持つ温床としての世相だともいえますね。

辻村 確かに戦争は人間の精神生活に物質以上の大きな変化をもたらしました。私も従軍四年の経験ではそういった場面に度々出くわしましたが、捕虜を銃の台尻をなぐつた兵隊も復員すれば平和で善良な農夫なのですから

総て戦争のもたらす悪だとの見方も出来そうです
川岸 私も若気の至りとは云い乍らスパイ事件で十数名の男女の華僑を取調べた時は相当ヒドイ事をしたものです。

辻村 それはどういつた事件で？

川岸 なんでもピストルの密輸から足がついた日本政府顛覆の陰謀事件というので現地の憲兵隊が相当派手に活躍したんです。私は通訳といつた形で手伝わされるのですが、関係者の殆どが戦犯で処刑され、絞首刑になつた人もあります。

木南 拷問なんかどんな方法で？

川岸 私は只単に手伝わされたので主になつてやつたわけではありませんが、若い女には特に興味を持ちますね。純粋なサディストチックな気持が、敵愾心の外に異国の女という点それに職務上やるという気軽さ、そんな点で無茶なこともやれたわけです。縛るとか叩く吊るといふのはまあ序の口です。石鹼水を飲ませたり、塩水を飲ませたり、とにかく死の寸前まで責め立てるのです。然しこれは女を縛るといふことゝは話は脱線しますが。

辻村 男が男ということであれば、終戦後大分日本人もやられましたね。日本内地でこそ終戦とか進駐軍とか云つていましたが、無茶

件降伏というものを身を以て知らされたのは
第一線の兵士ですからね。

垣内 私なんかずっと内地ばかりですから一向にそういつた事はわかりません。

辻村 垣内さん、どういつたきつかけで女を縛ることに興味をお持ちになりました？

垣内 小さい時から持っていたようにも思いますがはつきりしません。直接きつかけになつたのは二十才の時、高等学校の学生でした。が、失恋の結果すべての女に失望を感じてヒドイ神経衰弱で一年間休学したことがあります。まア、それがきつかけといえはいえます。辻村 神経衰弱というかどうかという症状？

垣内 女にすっかり嫌悪を感じて普通ではインボになつてしまつたんです。精神的な打撃は恐ろしいと思います。

辻村 神経衰弱というかどうかという症状？

垣内 女にすっかり嫌悪を感じて普通ではインポになつてしまつたんです。精神的な打撃は恐ろしいと思います。

辻村 失恋の打撃が原因で、女に復讐する
という気持ちが起きてきた？

垣内 復讐といった大げさな考えじゃないんですが、不思議と女を責めている時にだけリビドを感じるのです。シヨツクが余りにもきつかったからだと思います。

川岸 只単に女を責めるといつても主として縛るわけでしょう。又どんな女の相手でも選り好みしないという事もないんでしょう。

垣内　まア縛ることが主ですね。附帯して外の事もやりますが、――（間）――私は私なりに相手にする女に或る条件を持っています。がそれは一寸恥しくて……。

辻村　そりや又後で話して頂くとして、私自身、夏なんか電車で、特に今年は袖のない洋服がはやつて腋の下を露わに出している娘さんが多いですが、どちらかといえはやはり毛深いのにひかれますね。

垣内 私は辻村さんの反対なんです。毛の点
については――。

川岸 私は特にそういつた強い好みはないですが、やはり若いピチピチと張りきつた豊満な女性がいゝですね。取り立てゝ云えば下腹部のお臍を中心とした膨らみですか。

木南 私は小学校の上級生の時、隣の家にも親と二人きりの生活で痩せ形の寂しそうな感じの私と同じ年の初子という子がいました。が、その子をよく虐めたものです。そんなところから今でもどうしても弱々しい感じの女にひかれますね。

辻村　女でさえあつたら誰でもいゝ、縛らせ
てくれゝば縛りたいという人もよくあります
がどんなものでしょうね。

川岸 相手が許すならばいろいろの方法を用

いて責めてみたいという気持は起りますね。
単純に興味本位からいつても――。

垣内　私は二人の間に何か精神的なつながりと云いますか、この人ならどんな事をさせてもいゝという親頼感の上に立たなければ誰でもいゝという気持は起りませんね。齡のせいかもしれません。

辻村 相手が嫌というのを無理に縛るのを好む人と合意で、まア云えば前戯的に楽しみたいという人とありますが、垣内さんはさしあたり前戯派といったところですか。

垣内　そうですね。私が今親しくしている須美香という芸妓なんかも、だんだんに慣らして少しも無理はしませんでした。そして相手が少しでも嫌な顔をするとか気分がこわれてしまふんです。

辻村 モデルでもヌードを承知する人なら十人が十人縛ることも承知しますね。そして徐々に最初はゆるく次第に強度を増して根気よく馴らしてゆけば殆どの女の人は相当程度の責めもやらせるようになります。

川岸　その中特に縛られることを喜ぶ人も出てくるわけですね。

辻村・殆んどの女の人には或る程度の反能をします。殊更はつきり証拠を残す人もあ

りますが、中々そういった事は直接言ってくれませんが、しかし態度で嫌でないという事はすぐわかります。

木南 モデルを沢山扱っておられるといういろ変った人にも出喰わすでしょうね。

辻村 古川裕子さんはサドの人が完全なる自分の所有物を欲しいと思うならば、思いきつて女の一切の自由を奪い、出来るだけ苦しませ、もがく力もなくなるまで責め立てること、たゞこれはマゾの傾向を持った人でなければ適用出来ませんが、なまじ遊び事のような折檻では駄目なのです。と言つて来ておられますが、本当に真理をうがつています。

木南 すると辻村さんなんか遠慮会釈なしにビシ／＼やられるわけですか。

辻村 勿論それは時と場合によります。今迄伺つたところでは女を縛ることについての罪悪感を持たれる方が多いようですが、女を前にして逡巡は禁物ですよ。断然強引に縛つてゆくことです。これが却つて相手を安心させることになります。

木南 マゾに女を仕込むコツのようなものがありますか。

辻村 相手がイヤだといつて逃げるのを無理に縛りたいという人には、なんでもさす女と

いうものには興味を持たなくなります。私はどちらかと云えば無理にというのは好かないので、その点相手がマゾであれば本当は都合がいゝんです。仕込むといつても、安心感と信頼感を持たしながら気永に馴らしてゆくわけです。一見矛盾したようですが、単刀直入と逡巡はいけませんね。それと、そういった素質の全然ない人には最初から手を出さない事です。

川岸 素質は一見してわかりますか。

辻村 ちよつとつきあつて居れば大体わかりますね。概して内気で大人しい人を選べば十中八九間違ひはないようです。サドの男としてマゾ的な女性に接すると、或る種の直感というものがありますね、変つた人つて云えば川端さんなんかは典型的なマゾといつていゝでしょうね。

川岸 私は拷問にのたうつ若い女の姿というものが臉の底に焼きついてからはもう普通の事には興味を持たなくなつてきました。奇譚



クラブは昨年の六月号から毎月欠かさず見ていますが、拷問によつて目覚めた私の気持ちを本当によく慰めてくれます。

辻村 川岸さんはまだおひとり？

川岸 えゝ、そんなわけで私は自分の性向を知つていますから簡単に結婚しないのです。

木南 私は私の母がお茶屋をしていまして、私がまだ十八九の頃でしたが森安という船成金のお客がありました、その人が又滅法女を縛ることが好きで、金にあかして、芸者は勿論女中や出入りの素人娘を片つ端から縛つて楽しんでいましたが、その助手が専ら私の役目でした。赤い扱帯が真白な肌を喰い込む様子は今でも目の前にちらつきます。

辻村 すると木南さんの女体緊縛の夢はその御手伝いから初つたわけですね。

木南 そうなんです。その時分は私も若いので、家にとつては大事なお客というので、

道具を運んだり後片づけをしたり中々楽しいものでした。雪見の時なんか三十帖の広間の三方の障子を開け放つて縁側の柱へ長襦袢一枚の女を縛り上げてそれを肴に眺めながら酒を飲むのです。

川岸 伊藤晴両氏がよくやられる雪責めなんかは？

木南 森安さんは、特に変わったひどい事はされなかつたようです。只後手の高小手に縛り上げて長い間ほつて置く

然し沢山の朋輩の
見ている所では、
これだけで大抵の
女は真赤になつて
羞恥にのたうつて
いたものです。



辻村 只女を縛つて眺めて楽しむというだけ？

木南 いや、お座敷がすんで、さて別室へという時は嫉しいような羨ましいような気で、後片づけもしないでぼんやりしていた事もあります。別室の二人きりで彼がどんな事をしたかという事は知りませんが、色街では金が

すべてを解決するものですから、相当いろいろな女たちが可愛がつて貰つていたようですが、変な噂のようなものは立ちませんでした。辻村 木南さんもそういった遊びを試みたという希望が潜在的な嗜好と合致したつていうわけですね。

木南 そりや、男である以上美しい女を周囲に侍らせて自分の気まゝに愛玩したいという

欲望は今でもあります。然し現在のように税金に追われてる身分では高嶺の花というところでは。

辻村 私は時折新地を素見して接客婦に当つてみるんですが、案外喜ん

で縛らせるといふ女もいますよ。

川岸 最初からですか？

辻村 え、京都から来て間のないという女でしたが、大変大人しくつて易々として縛らせました。少し痩せているのが難点でしたが帰りにチツプをやろうと言つてもどうしても取らないんです。そんな女もいるんですね。

垣内 この前の座談会の時も誰か云つておられたようですが、結婚媒介所を利用すれば一月いくらという契約で、うまくゆくと初心な娘に当ることもあります。尤も渡り歩きのすれつからしも多いことは多いようですが。

川岸 私は通勤の電車の中で知り合つた二十才になる市役所に勤めているという娘さんと映画へ行つた帰り、若しも貴女を縛らせて呉れと僕が言つたらどうする？ときいてみたんですが、一向に驚く気配もなく、以前に見た映画で支那の夜の李紅蘭が縛られた所なんか美しかつたと云つています。

垣内 今の娘さんはさばけていますね、それで縛つてみましたか？

川岸 それが駄目なんです。ホテルへ行つた事もあるんですが、まるでクラゲのようにくた／＼でなんでも嫌と云わない女なのです。

途端に私の興味がなくなりまして。今度八月号で完結した「クリスチーナの受難」あゝいつた清純で高貴な良家の娘を無理に凌辱する實際あれは近來にない傑作だつた。

辻村 は、あん、すると垣内さんと正反對ですナ、それでその娘さんには興味を失つたつてわけ？

川岸 前に勤めていた会社では課長と仲がよかつたと云つていましたら、どうせ処女じゃないでしようが、現在ではそういう中途半端な娘さんが多いですね、贅沢な考えか知りませんが着物を着た田舎の娘さんで何も知らない純真な人を自分の思うまゝに教育してみたという気持がありますね。

木南 そんな女に逢つた時も〃私に貴女を縛らせて下さい〃つて口説きますか。(笑声)

辻村 これからは貴女を縛らせて下さいという愛の告白がはやるかも知れませんね。

木南 女が特に未婚の人が男に自分の身体を縛らせるという事はよく〃〃の事じやないんですかねえ。

辻村 合意でも縛られるということは不安なものです。先日川端さんがいつも貴方ばかり縛られてゐるから一度私にも縛らせて、というので冗談に縛らせたんですが、若し平常の仕返しだといつてひどい事をされないかと思つてビクビクしましたヨ。(笑声)

川岸 本誌では毎号大分いろ〃〃の縛り方が出ていますね、辻村さん、どんな縛り方が一番いゝんでしようね。

辻村 後手の高手小手というのが定石ですが縄は余り沢山使わず二巻きか三巻き、ぎつち

りと胸から二の腕に廻して縛ることですね。美観から云つても女体に与える影響からいつてもいゝ方法だと思います。

川岸 馴れるまでは縛られるのを嫌がる人があるのと同じように猿ぐつわを大変嫌がる人がありますね。

辻村 女体の悦虐にはやはり猿ぐつわは欠すことの出来ないものです。これを活用すれば知る人ぞ知るの醍醐味を味うことが出来ます縛ることが痛さを与えることより自由を奪うことであり、猿ぐつわも苦しさを与えることより発声の自由を奪うということに主眼を置く必要があります。

木南 私は自分でいろ〃〃研究したり雑誌の記事を参考にしたりして縛つたりしています、吾妻さんの提唱される股間の縦縛り確かにいゝですよ。

辻村 木南さんの専ら縛つておられるという女の方は？

木南 〃妻は縛らず〃という文章がありました、私が私も丁度あゝいつた気持なのです。妻には愛情は感じていますが、縛るのは外の女々というわけで、只今十ばかり下の未亡人の方を縛らせて貰つています。

川岸 私なんか若し妻を貰うとすればどうし

てもマゾ的傾向の人じやないとうまくゆかないと思います。然しマゾとして完成されゝば興味を失つてしまうという予感を持つていますが。

辻村 中々複雑でムツカシイですね。自覚しているんでしたらこういつた条件で探されることはないことです。軽いサド傾向の男性に軽いマゾ傾向の女性の取り合せが一番しつくりゆくと云われます。それから読者から沢山縛り方やポーズ等について責めのアイデアを寄せられますが、各人各様、いろいろな方法で楽しんでゐるという事が伺えます。

垣内 その中で卓抜したものというと？

辻村 完成されたマゾの女性をモデルとしてその人の好みに従つて縛つてみよ、というのなんかいゝ意見でした。川端さんをモデルに川端多奈子悦虐写真集というのを考えています。マゾの女性の好む縛り方というわけで垣内 この前五月号に載つた松井さんを囲む座談会の際には川端さんも出席されておりましたし、九月号の縛られた女ばかりの座談会では司会をしてもらいましたが、今晚あたり顔を出して貰つたらお伺いしたいことも大分ありましたのですが――。

辻村 今丁度国へ帰つていられるので残念で

した。貴方がたベテランとして雑誌についての御意見は？

川岸 手にとつてベラ／＼とめくつた時一番強い感銘を受けます。私は何度も読みかえしますが時が経つにつれて刺戟がうすれてゆくようです。だから毎月新しい月号が出るのが楽しみです。

木南 私は最初開いた時、一番ドキツとします。然し同じ刺戟を繰り返えされると感覚がにぶります。特にあくどい本は飽きが早いようです。其の点奇クの内容がグ／＼変つてゆくのでいつも新鮮さを感じさせてくれますよくまア毎号これだけ変つたやり方で読者を倦きさせず盛沢山に編集してゆけるものだとひそかに感服しています。

辻村 最近は載せたい原稿が沢山幅轆して選択に困っているようですが、幸い読者の方々から貴重な御意見を多数寄せられますので、十分飽かさせないだけの自信はあります。

垣内 まあ此れからどう情勢が変化するかわかりませんが、その時々の場合じやなしにじつくり腰を落ち着けて永読させてほしいですね、私達マニアは一冊抜けても気持ちが悪いですといった熱心さで執著しているのですからね木南 そう、或る雑誌に広告してあつて申込

んだパンブレット式の出版物なんか、二三回でもう送つて来ないものがありまして、こちらが熱を挙げているだけに腹立たしくなります。

辻村 それじや話を変えまして、女を縛つた経験として肉体的に責めるといふのと精神的な責めですね、これはどう使い分けして居られます？

木南 単純な肉体的な刺戟は慣性となつて次第に刺戟を増さなければ駄目だということ、これは私、ヴァンデヴルデの完全なる結婚が精神的なものを忘れて肉体的な技巧にばかり走っているのと同じように下手な方法だと思います。

垣内 それは一概に言えないと思います。能に楽しみを感じる人と、パチンコに興ずる人、沼正三さんが言つて居られるように、言葉だけの皮肉で相手を傷つけられる人もいるかわり、一杯気嫌で食膳を足蹴にしなければおさまらん人もいるんです



よ。

辻村 そう、それでサディズム、マゾヒズムの遊戯としては――

川岸 精神的なものの必ずしも深奥とは限らんでしようね、若しマゾの女性から精神的な被虐態勢をとられ、ば神経衰弱になりますヨ。

木南 私も精神的一本槍というわけじやないんです。肉体的な刺戟に慣れさせないという事ですね、マゾの女性にしたつて苦痛そのものが快感ということはない筈ですよ。

辻村 痛いけれどもいゝという感覚ですね、夫に虐めてほしい為に虚偽の姦通をするといった女性、それに妻の過去の不義を根掘り葉

掘り聞き出してサド的感情をあふり立てる男そんな経験はございますか。

木南 サドマゾの関連は知りませんが、商売女なんかで相手の男をひきつけるのに男の嫉妬心を利用するという事は行われていますね川岸 そりや私の工場には寄宿舎があります

が若い寮生恋愛なんかでも、競争心にかかられて意外な結婚をしている人達もあります。ライヴアルに勝ったというサド的気持の満足といえますか。

垣内 人々がはつきり意識していなくて倒錯的な行動、あながちセックスに関してばかりではありませんが、していることがありますね強い者には弱く、弱い者には強いという日本人にあり勝ちの性質なんか。

辻村 そういう見方をしてみるのも面白い。

川岸 私が少年時代に苛めた初子という女の子なんか、環境とか雰囲気があるとなく私が苛めなくてはならないように出来ているんです。今から考えても不思議ですが当時私は他の女の子にはそんな気持は起らなかったのですのに――。

木南 好きだから苛めたいという、貴方の潜在的な嗜虐性が偶然思春期を前にして芽を出したというわけじゃないんですか。

川岸 そうかも知れません。

辻村 少年期から青年期に至る過渡期にはあらゆる仮性的倒錯症状があらわれるものですね、私なんかも今ではネオ・サディストの一人にされていますが、やはり最初の洗礼は小学校時代の教師からと中学生時代の上級生か

らの受身的影響、それが自分が上級生になると逆に下級生の美しい少年に好意を持つようになりましたが然しそれも異性に興味を持つようになると思散しましたよ。

垣内 責めに興味を持つようになられたのはその頃からですか。

辻村 はつきり何時からというような画期的なものはないなかつたようです。只、月並のようですが小説なんかで女の被虐場面があると特に熱心に読みました。美しい女を見た時、このお上品にすましたお嬢さんを身動き出来ないようにして苛めたらなあという淡い感情は思春期の末期には起つた事を覚えています。

川岸 私は今でも電車の中なんかで、好みの女の人を見ると縛つてみたいなあという欲望は起ります。勿論観念的なものですが……

それで辻村さん、最初にお縛りになつたのは辻村 それからずっと潤一郎のものや乱歩のものを耽読しまして結婚するまでは直接そういう機会もないし、強いてやつてみようという程強い衝動も起らなかつたんですが初めて縛つた女といえは妻なんです。垣内さんはお馴染の芸妓さん以外に奥さんは縛らない？

垣内 それが申し上げにくいんですが、家内は家内なりに私の気持に合うよう努力はしてくれているんですが、さつき申し上げた私の好みもありまして、専ら写真とか絵画の蒐集といった方向へ走つてしまいました。

辻村 すると昔からの相当のコレクションもお持ちなんですね、一度見せて頂きたいものですナ。

垣内 ええ、いつでもお見せします。以前は伊藤晴雨氏のを殆ど集めましたし、又特別に画家に頼んで自分の好みのものを描いて貰つたこともあります。なんといつても以前はそういったものが中々手に入らなかつたのですが現在のような書店へ行けばすぐ絵でも写真でも見られる時代の事を思えば感慨無量です。嬉しいことは嬉しいですが何んだか自分のコレクションの価値が下るような気がしても一つ割りきれん気持です。

木南 そうです。昔だつたらこんな写真一枚手に入れるのにどれだけ苦労しなきゃいけないかと思つたりしますとね。

川岸 それだけ今は人は幸福といえ言えるわけですね。

辻村 女を縛った経験を語るという話題が大分横道へそれましたし、それにまだ〳〵沢山お伺いしたい事もあります。が予定の時間も参りましたので、一応こゝで速記を打ち切ります

サディズム小説

感かん情じよう教きよう育いく

吾

妻

新

栗原

伸画

プロローグ

1

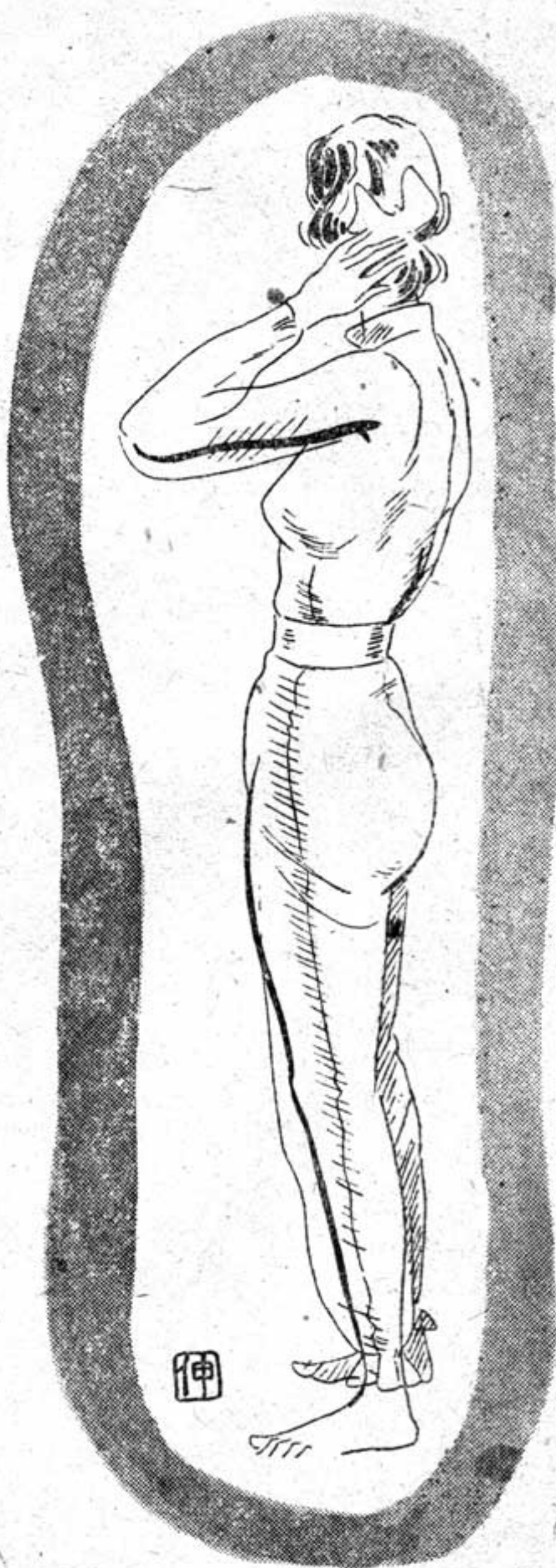
結城章三郎はフェミニストとして知られている。なぜなら彼は、一年ほどある新聞に女性問題をかきつづけたし、古谷綱武流の女性論に腹を立てて論争したり本をかいたりしたからだ。だがジャーナリズムは彼の論旨そのものよりも、論じかたに興味をもっている。だからヨーロッパの騎士道が女の地位を高めたと信じたり、女の解放がいちばん早く行われたのはアメリカだと主張したりする人たちと一緒にして、とにかく女に味方するのだからフェミニストだとレッテルを貼ってしまうのである。彼が永い間声をからして叫んできたのは、女を女なるが故に甘やかしたり尊敬したり優しくしたりすることではなく、男と同じように採点するために同じような取り扱いをすることだった。性愛は人生の全部ではなくて一部であること、性愛以外の面では性別の観念を駆逐すること、もつと端的に言えば

女は二つの性のひとつであるまえに、まず人間だということだった。今日一般に通用しているいわゆる「女らしさ」は女の属性ではなくて、歴史的に絞り出されたのだという点であつた。だが、ジャーナリズムはそれがどんなに重大なことを認めようとはしないで、彼を甘つたるいフェミニストと一緒にして分類している。

だから、その章三郎が女を縛つたり猿轡をはめたりすることが好きだと知つたら、世間はどんなにびつくりするであろう。今度は、あいつはサディストだと言つて騒ぎ立てるにそういない。そして、表面は慈善家を装い、裏面では悪徳のかぎりをつくす、醜惡な二重人格者だと思ひこむだろう。彼の著書をよんだり話をきいたりして感動した娘たちや、その影響をうけてすばらしい成長をとげた女性たちを、私も若干知っている。彼女たちは幻滅し、絶望し、偽善者だと彼をののしるかもしれない。ことによると、彼の社会的信用は失墜してしまうかもしれない。男色が刑法にふれた英国では、オスカ・ワイルドほどの人間でも入獄と同時に未来を失つてしまった。

輿論というものはそういうものなのだ。

幸いにして、同性愛はこの国では昔から寛大だった。それでもセックスと無知とはつきものであり、それに乗ずる売文学者が大衆の恐怖をかりたて、手淫や同性愛を病癖のように書き立てて、その治療法まで述べた本がいくつも出た位だから、やましい気持や罪の意識に責められている人々はまだ沢山いるにそういない。大体、結城章三郎が性問題に首をつっこむようになったのは、持前の反抗心とじぶんの体験とが結びついたからである。中学時代に手淫癖になやんだ彼は、ハヴエロツク・エリスの「性の心理」廿巻の訳書のなかで、その部分にあたる第三巻が発禁になったのでふしぎでたまらず上野図書館に通つて原書をよみ、はじめて解放された気持になった同性愛についても、たくさんある実例の伏字の箇所（それは原書の第二巻にあたる）を全部埋めた。そして、そのとき感じたことは、日本政府はこと性に関しては、無害だと言うことを恐れ嫌い、有害



だと言うことを歓迎するといふ事実だった。それ以来かれは、政府の語ることを信用しなくなつたのである。

2

こういうと、結城章三郎の意見は極端だと思ふ読者があるかもしれないが、いまから二十五年も前には、同性愛を肯定的に語る人はむしろ珍らしかつたので「いまだ夜とな

らざる夕ぐれのためたい、酒とならざる麦の穂の青き豪奢」と美少年を礼讃したイナガキ・タルホの「天体嗜好症」などは忘れられない貴重な書物の一つだった。また、陸軍将校の綿貫六助が同性愛の体験をかいた「黒い花」などは、いまからみればなんの変哲もないものだが、それをのせた「変態心理」の号は発禁となつた。のちにその雑誌の主幹の中村古峽と知るようになってからその話をしたがあの記事は削除した上に伏字を加えてもダメだったという。しかも中村古峽は警視庁の精神監定医だったのだ。

章三郎の経験した同性愛はなんら肉体的のものでなく、精神的な熱烈なものであり、かれの愛した美少年はいま学者になつてゐる。その思い出は清らかで美しく、共同研究や思想の交換であふれており、お互いの人生にどれほど役立ったかしのれないのだが、それでも死ぬほど苦悶したのだ。だが、官製性教育の犠牲は彼だけではないそれからずっと後でも、検事で作家だった浜尾四郎が「モダン日

本」に同性愛を弁護する文章をのせたとき、全国から悩める人たちの手紙がどツと押しよせたそうである。つまり、同性愛は「黒い花」隠花植物、日の当たらない場所にコツソリ咲く花だった。浜尾は章三郎にも共同戦線を張つて書くようにすすめてくれたが、ジャーナリズムのきらいな彼はペンをとらなかつた。その手紙は、ある因縁で菊池寛のところにあるはずだ。

官製性教育の偏見は、もちろん同性愛ばかりではない。ノーマルな面だつて、おなじことである。結城章三郎はやはり体験からそれを学んだ。労働党の代議士山本宣治は暗殺される直前に、代議士を啓蒙するのだといつて Long, の *Same Sex Life and Same Sex Living* を訳した。ところが死んでしまつたので、その原稿はオクラになつた。いまだからしやべつてもかまわないだろうが、それがある無政府主義者に託されて、かれはガリ版制にして配布した。彼がおぼえている範囲だけでも、それをよんで結婚生活が幸福になつたとよろこんだ人がどの位あるかわからない。これはマリイ・ストーブスやキンゼイなどよりもずっとすぐれた、簡単な、具体的な、テクニクの指導書で、精神分析学者ウィルフレッド・レイの *A Plea for monogamy* のいちばん終りに、推賞する五つの書物の中のひとつにあげられているほどである。それが、ストリップの許されている今日でも、いまだに公刊されないのだ。

こうした性的中世紀にわれわれは住んでいる。結城章三郎のサディズムがどうして正しく理解されようか！ いや、サディズムそのものが、いまわしい変態性欲のなかでもっとも罪深いものとされているではないか。オハイオ州立大学の図書館には、アメリカでも性科学の本をまだしも揃えているほうだが、サディズムにかんしては

たつた二冊しかなく、それも一つはブラインの「ボードレールのサディズム」という、名前ばかりは食欲をそそるが内容は偏見だらけのもの。もう一つはシュテツケルの「サディズムとマゾヒズム」で、ごていねいに *The psychology of hatred and cruelty* (憎悪と狂暴の心理学) と傍題がついている。ところが結城は、「愛情と平和の心理」としてのサディズムを信じ、実行している男である。心の底から男女平等を求め、女の不幸をみると血が湧いて、だまつていられない人間なのである。どうして世間はそれを信ずるだろうか？ フェミニストとサディスト！ あわれな友よ、なぜ彼は誤解されやすい性質に生れつき、理解されがたいテーマに取組んだのであろう！

3

むかしは、社会主義者といえば火つけか強盗のように思われていた。現在、文学者といえは放縦遊蕩の徒とされているようである。予盾のかたまりのような結城にとつて、これはきわめて象徴的である。なぜなら彼は、社会主義者でしかも文士のはしくれであるからだ。

この男は少しませていたから、中学三年のときに大杉栄の追悼会に出席して、あやうく検挙されそうになり、労働者に助けられた。それからいろんなアナキストの団体を知るようになって、学校で秘密の回覧雑誌を出しはじめ、それがわかつて教師と大立廻りを演じたりした。授業時間中に教壇へかけあがつて演説したのもそのころである。五年生のときには友人をかたraftて、ロンドンのフリーダム社からクロボトキンの「パンの掠取」を取りよせ、訳して雑誌にのせたのがたつたつて、学校と警察の問題になつた。これは啄木の歌

にある国禁の書物で、日本には幾冊もなく、幼稚なかれのヒロイズムをみたしてくれたものである。

W大学にはいつて経済学を専攻するようになってから、彼の思想はアナキズムからマルキシズムに移つていったが、ストライキで退学し、家のちかくに下宿をもつて本の虫のような生活をはじめた。そこでいまの妻を知り、結婚することになったのだが、あかるい平和な明日の社会を信ずる点では、昔も今も変りがない。

社会主義者であるかれは平和と友愛をこのみ、文士のはしくれであるかれはキヤバレエにも遊ばず家庭的な夫であり、フェミニストであるかれは女の自由と解放を尊重している。もしもサディズムが残忍狂暴でなければならぬなら、結城の生活のどこに入りこむ隙があるだろう？ またそれは彼の思想と衝突し、思想か生活を破壊してしまつたにそういない。

なるほど、かれはいささか闘争癖はある。不良と果し合いをやつたり、ケンカも幾度かした。が、それはみんな正当防衛か、さもないければ人を救うためだつた。もともと争つたことは一度もないと言つてよい。根は善良で、つきあつてみても少しも粗暴でない。

結城に言わせると、サディズムという言葉がわるいのだ。サードなどという気狂いが勝手な空想をかきちらし、しかもそれに尤もらしい理窟をつけて説教したものだから、まるで犯罪の代名詞みたいになつてしまつた。性愛の世界で、一人が楽しむのとお互いが楽しむのとは、動機において根本的にちがうはずである。だが、表現が似ているために一緒にされてしまうのだ。ちようど、衣服の場合に女がズボンをはくのを男装と呼ぶようなものだ。男装とは、男のなりをするものである。しかしそれは、ズボンは男のはくものなりと

きめてかかつた社会の観念で、男女平等の立場から言えば、合理的な服装を女もするようになったということである。

女を縛つたり、猿轡をはめたり、その他いろいろのことをするのが、あくまで自分一箇の満足のために行われるなら、それはサード型サディズムだろう。だが、相手の共感の上に立つてやるなら、表現はなんだろうと、残忍でも狂暴でもない。お互いの愛情の発露にすぎない。

動物は種属維持のために交尾をやる。人間も動物だから、無意識のうちに生物学的原則にしたがつている。思春期の美しさも、ホルモンの分泌も羞恥心も衝動も、みんなそうだ。ただちがうのは、人間は意識的にそれを利用したり、拒絶したりできるということだ。独身や自殺は、種族保存にしたがわない権利を示すことである。封建制社会は、家という制度を通してそれを利用した。現在では、多くのひとが子孫のためよりも、じぶんたちの愛情のために結婚している。

かりに結婚が子孫のためだとしても、愛しあう方法は無限にあつていいし、げんにあるのだ。食事が生命の維持に必要なことはだれでも知つている。しかし、百人中百人までが、栄養だけとればいいと思つていない。料理し、味をつけ、できるだけおいしく食べたがる。つまり、感覚の享樂を求めているわけである。だとしたら、愛し合う方法だけになぜ道徳的と不道徳的とに分けるのか？ スキヤキが道徳的で、ピフテキは不道徳的だろうか？

紐をつかつたり鞭を用いたりするのが不純だというなら、なぜ人々は必要以上に料理皿を用い、食卓に花を飾るのだろうか？ もちろん、ライスカレーのように一枚の皿に盛り上げることもできるし、

いとも単純に抱き合うこともできる。が、それだけでは満足しない人々もいるとすれば、それは趣味の問題である。そしてこと趣味にかんするかぎり、その共鳴者が少いからといってアブノーマルと呼ぶことは、本来は正しくないのである。

結城章三郎は、真剣にそう考えてきた。だから、かれは自分の趣味に悩んだりはしない。逆に、こうした趣味をもつ権利があると主張したいのだ。しかし、一度ひろがつてしまった偏見がどんなに根づよいかを、かれは経験で知りぬいている。その偏見は、かれが全力をつくして斗おうとするまえに彼を打ち倒してしまうかもしれないのだ。だから彼は、いまのところ私のような友人にしか打明けたがらないのである。

そこで私は、あわれな友人のために代弁してやろうと決心した。結城章三郎という仮空の名前で、かれの私生活をお伝えしてみたいのだ。それなら彼も世間から攻撃されまいし、一方で彼のサディズムがサード型と本質的にちがうことを示せるわけである。残忍苛烈な責め苦を連想する人にはまことに物足りないだろうが、結婚生活の愛情を損うまいとして一步一步すすんでいった感情教育の過程は、ある種の読者には多少興味があるかもしれない。



一、結婚の設計

章三郎が由紀と会ったとき、彼は二十四才、彼女は十八才だった。そのころの彼の生活は午後にはじまり、朝に終った。両親の家は近くにあるのだが、ラジオがうるさいので二階借りをした彼は、午ごろ起きると机にむかい、翌朝、新聞配達が下の格子戸からバサリと朝刊を投げこむのを合図に寝ることにしていた。よく身体がつづいたものだと思うが、若さのせいであろう。散歩もろくにせず、なんの道楽も望まず、酒もほとんど飲まなかった。

結婚する気はなかった。その理由は二つある。一つは、将来政治運動をやるつもりだったから、そんな茨の道に女をつれこんで苦労させるのは罪悪だと信じていたのだ。もう一つは、漠然とじぶんの性向を意識していたので、それをみたまうような女はあるまいという諦めである。

だから、下宿には大学時代の友人の他に、女の友達もかなりきたが、恋愛におちいるようなことは極力避けていたL・D・Sという脚本朗読会をつくったときは、男八人に女十人も参加したが、彼は固苦しい議論ばかりして通した。

ある娘が家出してきて、結婚してく

れなければ髪を切るといつて騒いだとき、章三郎は大きな西洋鋏を持ちだしてきて、その前の投げてやつた。

「きるなら根元から切るといい。お芝居はきらいだ」

その娘が家出したのは彼が誘惑したからだという噂がひろまると、章三郎は噂のもとをつきとめて、地廻りの不良と労働者を丁重に下宿へ招きよせ、内部から鍵をかけ、決斗をせまつた。卑怯と思われるのがいやなので、相手には短刀を与え、じぶんは親譲りの鉄の十手をもつた。二人がその噂を打ち消したので、決斗はせずすんだ。

こういう安価なヒロイズムは少年のころからつきまとつてまだ脱けきらず

あとではいつもたまらない自己嫌悪におそわれた。しかし、なぜ彼がそんなことをしたかといえ、恋愛関係をひどく恐れていたからだ。結婚は墓場だ。結婚したら自由を奪われて、大きな仕事はできなくなる」と、友人に公言していた。

だが、章三郎の同性愛はロマンティックな経験にすぎず、そのころはとつくに友情に昇華していたから、有り余る青春のエネルギーははけ口を求めてうづいた。勉強でごまかそうとすればするほど、爆発しそうになつた。そのころ、由紀が姿を現わしたのだ。

なぜあれほど美しい娘が、容貌に自信のない自分にあれだけ近づ



いたのか、いまでも章三郎は分らないでいる。彼女は、章三郎のあまり好きでないキモノを着、胸高に帯をしめていたが、その和服が引き立つてみえるほど魅力があつた。顔はヨーロッパ人の好む整つた卵形で、睫毛は長く、大きな眼は生き生きと輝いていた。特にかれが惹かれたのは口元だつた。やや大きい端正な口唇がほころびると、日本人にはめずらしい純白で美しい齒列があふれた。背は五尺二寸ほどだが、延び延びとした四肢は実に均整がとれていた。

由紀が下宿を訪れる回数がだんだん増すにつれて、さすがに鈍感な章三郎も、この娘の気持が分りはじめた。分りもしないニーチエの本を借りていつては、三日にあげずやつてきて、それを返し、次の本を持つてゆく。皮肉にもニーチエやストリンドベリのような女にたいして辛辣な思想家が、無邪気で快活な娘の口実に使われているのだ。だが、それを暴露して彼女を羞しめる勇気がなかつた。すでに彼のほうが、由紀を忘れかねるようになっていたからだ。

（一体これはどうなるのだろうか。このまゝズルズルにほつておけば、お互に悩むばかりだ。交際を断つか、結婚するしかない……）だが、交際を断つことはできなかった。彼は今までにこれほど美

しい娘を見たことがなかった。それが俺を愛している！信じられないような幸福感に彼は酔った。しかしその陶醉には刺すような苦痛が入れ混つていた。書物をひらいても頭に入らず、不眠の日がつづき、とうとう彼は親友のAに打ちあけた。

由紀の出現は友人仲間の評判になつていたので、Aはもちろん知つていた。

「そんなに思いつめたのなら、結婚する外ないじゃないか」

「それができる位なら苦しみはしない。僕には大望があるんだ。灰色の生活に甘んじて、機械みたいに働こうと思つてゐるんだ」

「マルクスだつてレーニンだつて、結婚したよ」と、Aは笑つて言つた。「機械にだつて、油が要るんだ」

マルクスやレーニンには恐れ入つたが、機械にも油が要ると言う言葉はびんときた。たしかにそうだ。

「第一、人間は機械になれるものじゃない」と友人はつづけて言つた。「それは形容詞だよ、きわめて不完全なね。君は健康な男だ。人間を廃業しないかぎり、その旺盛な性欲をどうするつもりだい？まさか金で女を買つて満足する君じゃないだろう。だとすれば、正常な結婚生活をするしかないんだ。……しかもあんなすばらしい相手は二度とみつきつこないよ」

それも事実だつた。由紀は美貌だつたばかりでなく、優しく、しつかりしていた。どんな貧乏生活でもやれそうだつた。そして、進歩的な思想を理解していた。

「それに、これは、僕の考えだがね、妻をもつたから大事を成せないような人間なら、妻を持たなくつても大したことはできやしないんだ」

Aは止めをさすように言つた。

章三郎は結婚の肚をきめた。

だが、そうなると今度は、自分の性向が気になりだした。その頃までにエリスやヒルシユフェルトやモルなどをよんでいたのも、彼は自分の心に巢喰つてゐる悪魔がどんなものか、十分に知つてゐる。それはサディズムと名づけられ、忌むべく恥づかしいものだつた。サディズムの真に深い機制はわからないが（フロイド）一般的な通念では、それは不完全な、または歪められた性欲から生れるとされている。真に健康なリビドの所有者はそんな手続きを要しないというのだ。

だが、これには疑問があつた。章三郎は自分をいろいろに分析してみても、自分がエネルギーシユな、完全に健康な人間だと思わないわけにはいかなかった。たとえば同性愛の時代をふりかへつてみても、それは純粹に熱烈な友情で貫かれ、肉体関係をのぞんだことは一度もない。古代ギリシヤ人は若いときに美少年を愛し、悟性の発達するにしたがつて理想的な友情を結ぶのだが、かれは終始一貫して単なる美少年では満足せず、相手が高い教養や芸術的感覚をもつていなければ惹かれなかった。フロイド流に言えば異性愛にいたるまでのいわゆる肛門性感期で、しかも最初から友情に昇華しやすい要素をもつていた。だから、W大学に入つたころは、もはや美少年にはなんの刺激もかんぜず、かつて熱愛した相手と交際してゐたのは、彼がすばらしい学者で詩人だつたからだ。反対に、異性の魅力は百パーセントに感じた。わかい娘をみると片っぱしから惚れそうな気がした。ただ由紀と知るまではむりに押えつけていたにすぎない。もしも自分が同性を愛したことがあるというだけでリビドを歪

められたとしたら、古代ギリシヤ人やルネッサンスの巨匠たちからはもつとサディストが生れてもいい筈である。

自分の性能力が弱いということも、彼は信じなかつた。もつともこれは結婚してみなければ分らないことだつたが、なんとなくそう思いこんでいた。やがて結婚生活に入つてからその信念は実証された。彼は父親のエネルギーシユな體質を受けて、その点では常人以上だつた（父親は七十を越してまだ十分に能力をもつていた）。

次に彼が考えたのは、じぶんの空想はだれに対しても働くものではないということだつた。自分をほんとうに愛し、理解してくれるものにだけ。その欲望を感じるのだ。してみるとそれは残酷だろうか？ 自分は女を苦しめてよろこぶ人間だろうか？……反対だ。彼は下宿へくる女友達の一人が、剣道何段とかいう無頼漢につきまといわれ、日比谷公園に來いと脅迫されているのを知つて、義憤で全身の血が燃え立つたのをおぼえている。すぐにその相手に手紙で手を引くように書き、不服ならいつでも相手になる旨を書き添えて片づけた。その自分がどうしてかわい女を苦しめられよう！ してみると、これは少くとも愛したい欲望の現われであつて、憎悪や復讐心ではない。

かれはそれを前戯の一つだと解釈した。もちろん前戯なしでも目的は達することができ。が、章三郎は愛情にかんずるかぎり、徹底的な享樂主義者だつた。ハンコで押したような、つつましやかな世間を気兼ねする生活はがまんがならない。思うがままに自由に、大胆に二人きりの生活を味いつくしたかつた。それにはどんな方法だつて考え出し、利用すればいい。これだけが夫婦生活ですというような限界のあるべき筈がない。

それから一カ月ほどして、章三郎は由紀に結婚を申しこんだ。そのプロポーズのやりかたは全く彼らしいものだつた。下宿のせまい二階の一室で、机をはさんで、まるで議論でもはじめるように慎重に言葉をえらびながら言つた。

——僕は君が好きだ。たまらないほど好きだ。だから、もし君が許してくれるなら結婚したい。

——だが君は一時の気持で答えてはいけない。たとえ僕を好きでも、結婚するのはいやだという場合はいくらもある。そのときは卒直に言つてほしい。どんな苦しくても僕は耐える。

——もし結婚してくれるとしたら。貧乏は覚悟してもらおう。僕は親から援助を受けるのはきらいだから、自分で働いてゆく。それもサラリーマンでなく、雑文生活だから、定収入はないのだ。

——結婚したら親兄弟よりも僕等の生活を第一主義におくこと。われわれの間のどんな問題も、僕等だけで解決すること。

——世間体や常識などに囚われず、お互いが幸福になるためにはどんなことでもやる勇氣をもつこと。

「ええ、いいわ」

と、由紀はハツキリ答えた。

「そんな即答して、後悔しないか？」

「絶対にしません。だつて私、ずつとまえから……」

とたんに頬が火のように燃え上つた。無理にはほえもうとするかのように白い歯を輝やかせたが、長い睫毛をしばたくと、大粒の涙がしたたりおちた。

章三郎はおどろいて、机を廻ると、彼女の肩を抱いた。

「どうしたんだ？」

「ううん、何でもないの。ただ、幸福なの、うれしくつて、夢のようで……。どんなことでもがまんするから、章三郎さん、私を棄てないでね。いつまでも愛して……」

「棄てるものか。生涯、君を幸福にすることを誓うよ」

かれは首に片手をかけると、顔を仰向かせて、はじめて熱烈なキッスをした。かんばしい香りは口いつばいにひろがり、抑えに抑えていた激情は堰を切つて流れた。しかし、章三郎は信じられないほどの力で、女のからだを引きはなした。

……昭和九年五月十四日、二人はささやかな結婚式をあげた。

二、新らしさに慣れさせる

ステイルネルが在来の結婚式に反対したように、少年時代からアナキズムや社会主義の洗礼をうけてきた章三郎は、ありきたりの結婚式に満足しなかつた。いや、そんな式さえ無視したかつたのだが両方の親の希望もあり、いちおうの型だけはやつてのけた。しかし出席者は結婚当事者と親兄弟だけで、親類も友人もよばず、服装は普段着、酒も料理もなく親子丼をとつて夕食をすませ、雑談して終りである。もちろん神主もなく、怪しげなノリトもなく、写真もとらない。それらの費用一切は、あたらしい生活に役立てることにし



た。もちろん親兄弟は呆れたにそういないが、章三郎の性格を知つていたから、あえて反対するものはなかつた。

新居は中野区鷺宮、西武線鷺宮駅から五丁ばかりの借家で、洋間を入れて部屋は四つ、ひろい庭がつき、家賃は十八円だつた。いまでもこそ鷺宮はりつばな町になっているが、そのころは林の影や畠の間に家が点在し、縁側から富士山がみえるほど寂しい郊外で、借家などいくらあつた当時にサラリーマンなどの住むところではなかつた。章三郎がわざとそんな場所を探したのは、出勤生活ではなかつたからでもあるが、何よりも自由な孤立した世界が欲しかつたからだ。そこなら人目につかないで、どんな変つたことでも実行できる。

彼がまず由紀に慣れさせようとしたのは、常識への挑戦ということだつた。それまでに由紀は、この男が変つた経歴を踏んできたこ

とを聞かされて知っている。中学生のころから教師と論争し、親と争つて家をとびだし、危険思想の持主としていくども警察にひつばられたこともわかつている。おかしい結婚式をやつたり、親が出してくれるという生活費を拒絶したりしたことも知っている。だからふつうの女が囚われているような因習からはかなり脱け出している筈なのである。だが、章三郎はそれを、こんどは結婚生活にあてはめようとした。

「君は、セックスの知識をどの程度もっている？」

式が終つて、二人きりで自動車でこの家に戻りつけ、はじめて茶の間に向ひ合つたとき、いきなり章三郎はこんなことを言い出したので、由紀はすつかり面喰つた。

「いいえ、なんにも……」

と、小さい声で答えた。

「うん、じゃあ説明しよう。……結婚生活は一生つづくんだ。あせることはない。それよりも最初の一步が大切だからね」

こうして彼は、まるで大学の講義みたいに、まじめくさつて説明しはじめた。

二日目には、由紀は裸になるように言われた。

「ズロースも、みんなとつて、すつ裸になるんだ」

「いや、いや、こんな昼間から……」

「バカだねえ。そんな意味じゃないよ。身体検査をするんだよ」

「どんなこと？」

「胴や、脚の長を計るんだ」

「どうしてそんなことをするの？」

「なんでもいいから、だまつて！」

それでも羞かしがるのを、なだめたりすかしたりして、やつと裸にすると、柱の前に立たせ、紐を持つてきて寸法を取つた。

均整のとれた若い娘の裸体を觀賞したのは、これがはじめてだ。

彼はその美しさに酔つた。そして、いろいろに姿勢を代え、むさぼるように眺めた。

なぜ結婚早々そんなことをしたかといえ、彼は美しい妻の裸体を濫用すまいと決心していたからだ。いまはこれほど頬を紅くし、男の視線に泣き出しそうになっている由紀も、もし平凡な夫婦生活をつづけていれば半年で平気になつてしまふだろう。彼はそれがいやなのだ。羞恥の魅力は幾年も色褪せないように保つておきたいのだ。だが新婚勿々この現在は、どんなに眺めたつてそれですぐ平気になれつこない。

「すばらしい身体だねえ。君は胴よりも脚の方が少し長いんだ。これは珍らしいことだよ。さあ、ズロースをはいて。……あ、キモノは着ちやいけない！」

彼は次の間から、じぶんのワイシャツとズボンをもつてきて、彼女に渡した。

「これを着てみたまえ」

「あたしにズボンを穿かせるの？」

「そうだよ」

「なぜ？」

「理由はあとで説明する。まあ、早く着てみせてくれよ」

由紀は妙な顔をしたが、だまつて素肌にワイシャツを着、ズボンをはいた。章三郎は背が少し高いが胴長だから、ズボンを穿いた由紀の姿は少しもおかしくなかつた。洗い立ての果物のように新鮮な

顔が、やや上気して、純白のワイシャツと美しいコントラストをつくっている。膨らんだ胸から影を落して、男物のバンドが腰を締めつけ、ヒップから腿にかけての線がくつきり浮び上つて「肉体」をまざまざと感じさせるのだ。

こんなすばらしい服装があるだろうか。常に肉体を感じさせ、しかも裸体でないがゆえに肉体の魅力を永く保存しておくことができるのだ。

「あなた、男装が好きなのね」

と由紀は言つた。

「いいや。僕は宝塚のいわゆる男装の麗人なんか、ぞつとして虫唾が走るよ」

「だつて、ズボンが好きじゃないの」

「それとこれとはちがうんだ……」

そこで、これをいい機会に、彼は自分の服装研究の話をした。由紀がどこまで分つたかは疑問だつたが、とにかく耳を傾けていた。

「でも、いつもズボンを穿いているなんて言われちゃ困るは。人に見られたら羞かしいんですもの」

「かまうものか。世間なんか気にすることはないよ。その恰好で、買物に出かけようと銀座を歩こうと一向かまやしないんだ。……なあに、いまに女がズボンを穿く時代がきつとくる」

「そのときは私だつて穿くは。いまはいや！」

「勇気を出せ勇気を出せ！ 君は僕の妻になつたんだらう？」

その後、章三郎は写真屋をよんで、ズボンをはいた妻を抱きしめている写真をとらせた。若い写真屋だつたので、すっかり気をのまれて指が震え、幾度も撮り直したのは滑稽だつた。章三郎はそれを

沢山焼増して、結婚通知とともに友人や親戚にくばつた。

また、その姿のまま島にひっぱりだし、百姓が見ているまえでキスしようとして、逃げる由紀を追いかけたこともあつた。

太平洋戦争よりはるかに以前のそのころに、女がズボンを穿く風俗は全くなかつた。それを平生着ることは、今日では想像もおよばない革命だつた。だが章三郎は貧しい生活の中から金を裂いて、妻のからだに合せて背広とビシヤマをつくつた。キモノもスカートもつくらなかつた。

「勇気を出せ。世間をおそれるな」

「僕らが幸福を感じるなら、なにをしたつていいんだ」
口癖のように言つた。

このようにし、章三郎は結婚の第一日めから、用意周到に、計劃的に、あたらしい大胆な試みに妻を慣らせようとつとめた。世間並みの、おどおどした。常識的な生活軌道からひっぱりだし、未知の快楽に誘惑する地固めをつくつた。やがて、世間がサディズムと名づける遊びをはじめてもいい日がくるであろう。

その日は意外に早くきた。結婚して一ヶ月ほどした六月中旬の晩だつた。

(未完)

KK通信 次号(第十五号)予告

KK通信第十五号は読物特集号として珍記事満載、尚最近撮映の新感覚の写真多数紹介の豪華版として十月上旬、皆のお手元へお届けする予定であります。まだ御覧下さらないお方もこの際是非お申込み下さい。

本誌愛読者を中心にした

楽しいグループ機関誌

◇ K K 通信 第十四号 完成 ◇

B6判十六頁に新聞用扁平活字にて記事挿絵、写真等満載の特別会員の機関誌です。本誌の削除部分の補遺やその他得難い記事を毎号無駄なく盛り上げています。本誌を御覧下さった方々は是非KK通信も併せて御愛読下さい。絶対他の追隨を許さぬ充実した内容と低廉なる誌代を誇っております。見本一部二十円（内容の一部）女性拷問を見る。男体頌。マゾヒスト誕生。伊呂波仁保遺抄。羞恥のペールをぬいで、責めを扱った軽演劇、変態という言葉に悩む人達に。自縄自縛の新考案、責めの小道具としての針。会友通信。特別会員規程、短信往来、写真（棒責めながしめ）編集部便り、代理部便り挿絵通信多数

臨時増刊号 The gloomy Experience.

（汚辱の体験）

折檻と凌辱の世界を描く

サディ・フラツケイズ「アリスの人生学校」

吾妻

新・訳

第一部 純潔教育

第二部 貞操教育

吾妻新氏の麗筆によつて心にくき迄に描写された堂々五百枚に近い長篇サディズム小説！一挙に全部登載！口絵、挿絵多数挿入

（内容）孤児となつた美少女アリスが富裕な伯父の邸に引きとられ、継母のために奴隷のように教育される、ヴォルテールの「カンディッド」をこつそり読んで次々と貸したのが発覚して四人の娘が折檻を受ける。特にアリスはこれを契機に徹底的に責められる。やがて、サディストの手に落ちたアリスは……

躍進十二月号の主なる讀物

凌辱の幻想と期待……古川裕子
女奴隷の手記……北山カオル
縄とマゾヒズム……那須不二夫
怪奇曼陀羅教……緑猛比古
責め場の挿絵……伊藤晴雨
MSバンド……嶽収一
新倒錯耽美論……成瀬亮
虐待の記録（三）女腹切八景（三）
映画に現れた猿くつわ、股間縛りについて
現代文芸に現れた責め、元憲兵の手記
らぶ・すれいぶ（鬼山絢策）……愈々最終回
淫火（松井籟子）……本号で完結
評載 蜘蛛と蝶々……飛田良二
好ムサディズ感情教育……吾妻新
大連悦虐の旅役者……青山三枝吉

甘美なる倒錯の花園

女のリンチ……沼田扶二世
野薊（紅花草紙）……川合伊都子
三つの色の交錯……芳野眉美
不見転芸妓……若杉早苗
臍の魅力……多山皓
剥玉子……住田弘志
移り気遊戯……桜井美知子

【豪華口絵陣】

滝麗子悦虐画集
美女折檻図……南川和子
女囚処刑図……都築峰子
杉原虹児習作集
組写真——（断然増頁）——
責め写真のアルバム
捧責めの各姿態
三人の女の縛られ
その他、写真満載！

群誌を圧して独走の本誌が口絵本文に又々増頁

特別会員募集

本誌並にKK通信直接購読者を以つて組織しております特別会員は漸増して三千名に近くなりました。その連絡誌として発展して参りましたKK通信もこゝに第十四号を迎え益々その充実を期待されて居ります。会則並に申込用紙は郵券二十円を添えて御申込下さい。皆様の御入会をお待ち致しております。

原稿募集

- 一、本誌の編集内容に適當した興味あるあらゆる種類の作品を募ります。
- 一、すべて未発表の作品に限ります。
- 一、作品の形式、長短は問いません。
- 一、誌上匿名は御自由ですし筆者の個人的秘密は厳守いたします。
- 一、応募原稿は原則として御返戻申し上げませんが、なるべく早く採否或は批評を御返事する筈です。
- 一、発表作品には掲載後、作品に応じて相当の謝礼を差し上げます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、責絵、写真等についてもドシ／＼御応募下さるようお願い致します。
- 一、読者の方々の体験記、告白記についても毎号多くのスペースをさいておりますから、奮つて御遠慮なく御寄せ下さるようお願い致します。

(奇譚クラブ編集部)

◎本誌並にK通の旧号在庫につきましては◎

左記の通り在庫いたして居りますから御買ひ洩れの方々はすぐ御申込み下さい。本誌昨年九月号僅少在庫、昨年十月号より本年十月号まで若干在庫、昨年度の分は一部送共九十円、本年度の分は一部送共百円にて急送申し上げます。KK通信は第五号僅少在庫、第六号より第十三号まで若干在庫、一部送共二十円、六回分百円にてお送り致します。

先ず最寄り書店へ御予約下さい

熱狂的な本誌ファンの激増によつて各地で本誌の入手難を伝えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。毎号確実に御入手される一方法であります。

◎御願ひ◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料同封の上お願い致します。尚理由の如何に拘らず直接の御訪問は固く御断り申し上げます故悪しからず御諒承の程御願ひ致します。

◇代理部より◇

迅速確実をモットーにして誠実なる事務処理は万天下の絶大なる信用を博して居ります。何卒御安心の上多少に拘らず御用命のほどお待ち致します。御送金は振替、小為替、現金書留切手代用一割増又は現金の何れにても結構でございます。着金次第即時発送の手続をとらして頂きます。代金引替は送料が高くなりますのでお許し願ひします。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文獻的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御買洩れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービスピス品として贈呈申し上げます。

奇譚クラブ

第七巻 第十一号
毎月一回一日発行

十一月号

定価 百円

昭和二十八年十月三十日印刷
昭和二十八年十一月一日発行

編集人

箕田 京二

印刷人

上田 庄之助

発行人

吉田 稔

発行所

曙

書房

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。